

平成 25 年度

博士論文（指導教員 瀬戸口律子）

近代日本における中国語教育に関する総合研究

—宮島大八の中国語教育を中心に—

大東文化大学大学院外国語学研究科

中国言語文化専攻博士後期課程

学籍番号 11231101

古市友子

目次

序論	5
1 研究の目的と意義	5
2 研究の範囲と方法	6
3 先行研究	6
(1) 六角恒廣氏の研究	
(2) 安藤彦太郎氏の研究	
(3) 倉石武四郎氏の研究	
(4) 那須清氏の研究	
(5) 朱全安氏の研究	
(6) 姚偉嘉氏の研究	
第一章 明治期の中国語教育	10
第一節 漢語学所とその教育	10
1.1 漢語学所の設立	10
1.2 長崎唐通事出身の教師	11
1.2.1 唐通事の中国語	12
1.2.2 鄭永寧	13
1.2.3 穎川重寛	13
1.3 漢語学所の教育	13
1.4 外国語学所	14
第二節 東京外国語学校の設立と漢語学科	15
2.1 東京外国語学校の教育	15
2.2 北京官話教育	16
2.2.1 北京官話教育への移行	16
2.2.2 北京官話教育の内容	17
2.3 東京外国語学校の閉校	19
2.3.1 閉校の理由	19
2.3.2 森有礼	20
第三節 民間の中国語教育	20
3.1 日清社	21
3.1.1 廣部精	21
3.1.2 日清社の中国語教育	22
3.2 興亜会支那語学校	22
3.2.1 興亜会	22

3.2.2	支那語学校	23
3.3	清韓語学校	25
3.4	その他の民間の学校	26
3.5	私立大学における中国語教育	27
3.6	中国における民間中国語教育	27
3.6.1	東洋学館	27
3.6.2	日清貿易研究所	28
3.6.3	東亜同文書院	30
(1)	東亜同文書院の教育	31
(2)	東亜同文書院の教本	32
第四節	宮島大八が受けた中国語教育	33
4.1	黄遵楷の個人指導	34
4.2	興亜会支那語学校	35
4.3	東京外国語学校時代	36
4.4	清国留学	36
4.4.1	張裕釗	36
4.4.2	蓮池書院	37
4.4.3	江漢書院	38
4.4.4	一時帰国から西安へ	39
第五節	明治期の中国語教育の目的	40
第二章	宮島大八の中国語教育	44
第一節	学校教育	44
1.1	帝国大学	44
1.1.1	帝国大学の歴史	44
1.1.2	帝国大学の清語教育	45
1.2	東京外国語学校	46
1.2.1	東京外国語学校の再開	46
1.2.2	東京外国語学校と宮島大八	48
1.2.3	東京外国語学校の中国人教師	50
1.3	大東文化学院	52
1.4	詠帰舎・善隣書院	53
1.4.1	詠帰舎の教育	55
1.4.2	善隣書院の教育	55
1.4.3	支那語学校	57
1.4.4	善隣書院の授業	58

1.4.5	出版助成金の給付	60
第二節	同時代の中国語教本	61
2.1	『語言自邇集』と廣部精の教本	61
2.2	宮島大八が使用した教本	67
2.2.1	『日漢英語言合璧』	67
2.2.2	『生財大道』	68
2.2.3	『談論新編』	69
2.3	『官話指南』	69
第三節	宮島大八の中国語教本	71
3.1	各教本の構成	71
3.2	『官話急就篇』の初版と増訂四版との比較	75
3.2.1	『官話急就篇』の初版	76
3.2.2	語彙・文法の「初級ガイドライン」との比較	77
3.2.3	『官話急就篇』における北京語	79
3.2.4	構成の相違	81
3.2.5	各パートの比較	82
3.2.6	増訂の理由	86
3.2.7	ベストセラー『官話急就篇』	87
3.3	『官話急就篇』と『急就篇』との比較	88
3.3.1	「単語」の比較	88
3.3.2	「問答」の比較	94
3.3.3	北京語の比較	104
3.3.4	『官話急就篇』と『急就篇』の語彙比較	111
3.3.5	改訂の目的	113
3.4	その他の教本について	114
(1)	『官話輯要』	114
(2)	『支那語独習書』	117
(3)	『官話篇』	119
(4)	『支那語会話篇』	120
3.5	宮島が編纂した教本の特徴	128
第三章	宮島大八の思想背景	131
第一節	宮島大八に影響を与えた人びと	131
1.1	父・宮島誠一郎	131
1.1.1	興亜会とアジア主義	133
1.1.2	曾根俊虎	135

1.2	勝海舟	136
1.3	張裕釗	138
1.4	交友関係	139
第二節	宮島大八の中国観と政治活動	142
2.1	激動する日中関係の中で	142
2.1.1	乙未同志会	144
2.1.2	一水会	144
2.1.3	老壮会	146
2.1.4	「人種差別撤廃案」	146
2.1.5	満州国	147
2.1.6	中国人との交友	148
2.2	宮島の中国観	149
2.2.1	日本人の中国認識の歴史	149
2.2.2	宮島とアジア主義	149
第四章	結論	154
1	宮島大八が果たした役割	154
2	今後の中国語教育	163
	参考文献	171

序論

1 研究の目的と意義

1.1 研究の目的

博士前期課程では教材開発の分野を主に研究したが、後期課程では中国語教材として稀代のベストセラーとなった『急就篇』シリーズを研究対象として取り上げ、さらに編著者である宮島大八の行った中国語教育について詳細にその足跡を辿ってきた。

近代日本の中国語教育は時代の要請によって生まれ、行われてきた。中国語教育の意義と役割を歴史から読み取るにあたり、民間の中国語教育の中心的存在であった宮島大八の教本と教育、思想などの面から全面的に詳細な分析を加え、中国語教育におけるその意義と役割を究明し、宮島大八の中国語教育を近代の歴史のなかで再検証し、新しい視点で再評価することが本研究の第一の目的である。さらに中国語教育、教材の歴史的研究を通じてあるべき中国語教育について考え、今後の自身の中国語教育、教材作成のための理論的基盤となる結論を導き出すことが第二の目的である。

1.2 研究の意義

中国は日本にとって歴史的に最も関係の深い国である。古代日本では中国から漢字を取り入れ、また政治制度、仏教など、当時の日本の国の根幹となる部分を中国から輸入している。遣隋使、遣唐使を送り込んで進んだ中国の文化を学んだ時代、また貿易の相手国として交流が盛んだった時代、鎖国中にも中国とは交易を続け、世界情勢の情報も中国経由で取り入れていた。明治以降、日本が中国を侵略した時代もあったが、1972年の国交回復後は経済関係を強化し、両国ともに発展してきた。そのような隣国として二千年以上の交流の歴史があるからには、そこには数えきれないほど中国語を学んだ人々が存在したし、その中国語教育の系譜は脈々と今に受け継がれている。

しかし、近代日本の中国語教育は、英語や独仏語教育とは明らかにスタートが異なっていた。高等教育機関への進学のために必要な英語、また西欧の文明を取り入れるために必要な英独仏語とは違い、中国語は明治初頭から第二次世界大戦中までの期間、貿易や中国進出のための実用的な側面が強かった。その反省に立って戦後からは「中国語学」としてさまざまな科学的研究も進み、日中国交正常化以降は教育の場も広がり、中国語教育は教養教育の一面を強めた。しかし、六角恒廣が『中国語教育史の研究』（1988年）のなかで行った、戦後の中国語教育は「何のために、何を教えるかの問題が十分解決されていない」という指摘は、四半世紀が過ぎた現在にも当てはまるのではないか。

日中両国では、宮島が生きた時代とは異なる社会が出現している。中国は共産党政権による社会主義国家となり、すでに欧米列強の植民地とはなっていないどころか、近年は世界第二の経済大国へ、軍事大国へと変身した。日本は戦後、民主主義国家となり世界第三位の経済大国となった。表層的には戦前とはまったく異なる両国であるが、日中関係は宮

島が生きた時代と大きく変化したといえるだろうか。日本で中国語教育がこれほど盛んであるのに、相互の国民感情が悪化している状況は戦前と共通している。

本論文では宮島大八の中国語教育とともに同時代の中国語教育を再検証し、今後の中国語教育について、歴史に学んだ結果を踏まえて、その社会的な意義・役割を明確にしたい。それが今回の研究を行う意義と考える。

2 研究の範囲と方法

明治初期から戦中(昭和前期)の日本における、宮島大八を中心とした、中国語教本と中国語教育の具体的な内容および宮島の思想背景を研究の範囲とする。

研究は以下のように進めた。

1. 明治期の中国語教育について、公的教育である漢語学所から東京外国語学校に至る政策とその教育内容、民間の中国語教育機関の教育、中国大陸で行われた日本人による中国語教育機関の教育、宮島が受けた中国語教育を中心に整理する。
2. 宮島が行った中国語教育について、学校教育と善隣書院での教育、同時代の教本、宮島大八が編纂した教本を詳細に分析する。
3. 使用する原資料は、宮島の編纂した教本および同時代に刊行された代表的教本類。また、外務省や文部省の公開資料、先達の語った中国語教育についての体験談を使用する。宮島の教本を詳細に分析すると同時に他の教本との比較及び資料から当時の中国語教育の実態を明らかにする。
4. 宮島の思想や政治活動に関する部分は、同時代に宮島と交流があった人びとの回顧録や日記、当時の新聞記事や残された資料を主に使用し、勝海舟や宮島誠一郎、張裕釗などの人物についての伝記や先行研究を用いる。
5. 結論の部分では宮島の中国語教育についてその意義と役割について、さらに近年の論説や新聞、雑誌の記事も参考にし、今後の中国語教育について論じる。

3 先行研究

代表的な先行研究は以下のとおりである。六角、安藤は中国語教育史を対象とした研究に大きな功績があり、倉石は戦前の中国語教育について論じている。那須、姚ともに『官話急就篇』と『急就篇』の語彙分析についての研究を発表している。

(1) 六角恒廣氏の研究

六角恒廣氏は中国語教育史研究の第一人者であり、多くの著作がある。

本論文の先行研究となる著作は以下のとおりである。

1961年	『近代日本の中国語教育』(播磨書房)
1988年	『中国語教育史の研究』(東方書店)
1994年	『中国語書誌』不二出版

1999年	『漢語師家伝---中国語教育の先人たち』 東方書店
-------	---------------------------

六角氏は、「中国語教育史」という研究分野の創始者である。『近代日本の中国語教育』は、明治時代を中心とした官民の中国語教育の歴史を資料によって紹介し、その意義をまとめている。さらにウェイドの『語言自邇集』を取り上げて日本の教本への影響を考察し、井沢修二の中国語研究も発掘している。さらに、それに資料を加えて書き直したものが『中国語教育史の研究』である。前著の内容に加え上海での中国語教育、長崎唐通事に関する論考も加えられている。この著作では、従来の中国語教育が実用中国語に終始して、なぜ文化的内容の文化語学や科学的教育法が生まれなかったか、という課題を究明する必要があるとしている。また、この点を明確にすることにより、文化語学としての内容と科学的教育法をどのように打ち出すことができるかという課題を解決する道が開かれ、それを究明することにより、中国語の教育と中国認識がどのようにかわるかの問題に帰結する、との見解が出された。

さらに六角は『漢語師家伝---中国語教育の先人たち』で詳しく宮島大八の一生とその中国語教育を紹介し、『中国語書誌』では明治以降から、終戦までの代表的教本を紹介、解説している。これらは、中国語教育の歴史を知るための資料である。このほか、六角は『中国語教本類集成』(1991~1998年 不二出版)全10集を刊行し、教本を復刻、解題もしており、これは中国語教育史の研究に不可欠の資料集となっている。

(2) 安藤彦太郎氏の研究

1988年	『中国語と近代日本』 岩波新書
-------	-----------------

安藤も六角とともに、大戦終了後から、近代の中国語教育についての多くの論考を発表しており、それらをまとめ、加筆訂正した『中国語と近代日本』は、中国語教育という窓口から近代日中関係の全体と日本人の中国認識を解明しようとしている。近代史というフィルターを通す研究方法を採用した。また『急就篇』に代表される「問答体」教本について、その功罪など詳しい分析もなされている。

安藤はこの著書のなかで、「中国語をつうじて青年時代の精神の糧を得る人びとが多くなっていけば、中国についてだけでなく、世界についての認識も変わっていくにちがいない。そうなったとき、日本と中国語のあいだには真の『対話』が成立し、世界平和の重要な柱としての、日本と中国の恒久的な平和が確立されることになるだろう。中国語教育の内容の充実は、そのような展望のもとにころみられるべきだ、と私は考えている」と、中国語教育の展望を述べている。新書という形をとっており一般向けの内容であるが、中国語教育に投げかけられた課題は重い。

(3) 倉石武四郎氏の研究

1941年	『支那語教育の理論と実際』 岩波書店
-------	--------------------

「わが国で一番遅れている語学は支那語とロシア語であると云う」からはじまる「序」で、「わが国の支那語教育の方法が幼稚であり、自然、国民が支那に関する知識を欠き、その認識に乏しいことが、ただ今の事態に如何に深刻な結果を生じているか」と、日中戦争期の中国語教育の方法に対して異議を唱えている。「漢文の訓読」は時代に適合しないと、**「漢文」と「支那語」とを融合させた新しい支那語教育を提言している。**戦争勃発により、中国語がさらに戦争語学としてその学問的地位が下がったことを憂慮し、研究者を育てるために高等教育機関で専門の学科を置くべきだとしている。倉石は支那語学を学問としての極みまで高めようとし、公的な高等教育機関ではそれがあつた程度成功した。

(4) 那須清氏の研究

1972年	「急就篇の語彙」『文学論輯』第19号 北九州大学 文学研究会
-------	--------------------------------

この論文で、那須は『官話急就篇』、『急就篇』、『改訂急就篇』、『続急就篇』の語彙を詳細に比較している。特に、『官話急就篇』と『急就篇』は、「名辞」と「問答」にわけてそれぞれ語の入れ替えや変更を整理している。そこで、北京官話を一般的な用語に改めたものが多いこと、「名辞」から「単語」への削除と増補は基本的には極めて恣意的であり、たいした意味がないと結論づけている。「問答」では、全般的に表現を複雑にして程度を高めているとし、時代の進展に応じた語の入れ替えもあるが、意味が多少異なる語に入れ替えただけのものもあり、「問答之下」では、典故に基づく会話が補充されていると指摘している。『改訂急就篇』は大八の長子である宮島貞亮の編纂によるもので1962年に刊行され、単語の削除、中国語の進展に合わせた入れ替えが目立つとしている。

本論文は『官話急就篇』と『急就篇』との違いに注目し、詳細に分析した最初の論考である。

(5) 朱全安氏の研究

1997年	『近代教育草創期の中国語教育』白帝社
-------	--------------------

日本の明治期における教育制度改革の中で中国語教育がどのように取り扱われたか、教育学上の立場から近代中国語教育をとらえた著作である。漢語学所の成り立ちを外務省資料などの政府文書から詳細に読み取り、さらに東京外国語学校の成立についても原資料を活用して明治政府の政策を明らかにした。現在の中国語教育の持つ問題点を考えるにあたって、先ずその歴史的経緯を明らかにする必要があるというのが著者の立場であり、その点については本論文と問題意識と手法の面で共通している。

(6) 姚偉嘉氏の研究

2013年	「《官話急就篇》《急就篇》語彙比較研究」 日本中国語学会関東支部会発表
-------	-------------------------------------

ネイティブの立場から2冊の教本を比較した論考である。その改訂の特徴として、以下

の3点にまとめている。①歴史の舞台から退場した文化語を削除し、新興の文化語を加えている。②同一名のもを書き換えたり違う詞形にして表している。③一部の「非常用語」を削除、常用語やフレーズを加えている。

さらに、姚は全体に改訂が不徹底で恣意的だとしているが、それに関してはその後の未発表論考の中で、『官話急就篇』から『急就篇』へ北京語から南北中国の「通語」に書き換えているものがあるが、これは当時の社会状況、特に日本の大陸進出政策によるものではないかと推測している。

第一章 明治期の中国語教育

宮島大八が米沢藩（現在の山形県米沢市）に生まれたのは、幕末の1867年（慶応3年）、まさに明治維新の直前であった。1943年（昭和18年）に亡くなるまで、宮島は日本における中国語教育者として第一線で活躍し続けた。この章では、宮島が生まれ育った時代の中国語教育について概観し、宮島という教育者が誕生した社会的背景を考察する。

第一節 漢語学所とその教育

明治政府は、欧米列強に追いつき追い越こさんとして「文明開化」と「富国強兵」を基本的国策とした。したがって、その国策を実現するための政策として西洋の先進的思想や学術、技術を身につけたリーダーを育成するための近代的教育を重視した。

明治政府は1870年（明治2年）、漢学中心の昌平学校、洋学の開成学校、そして医学所の三校を「大学」の名のもとに併合した。しかし、江戸時代までの学問といえば国学であり、その源流は漢学であったため、洋学が中心となることへの抵抗も大きかった。さまざまな問題が生じ、1872年には閉校することになったが、開成学校は大学南校として生き残り、大学を廃して新設された文部省の管轄下に入り帝国大学へと変わる。

明治維新後、中国語が初めて公立の学校で正規の教科となったのは1871年に創設された漢語学所からである。1871年の大日本大清国修好条規（以下、日清修好条規）締結後、外務省内に漢語学所が設けられた。漢語学所では通訳養成のための教育機関として中国語教育が行われた。

1.1 漢語学所の設立

徳川幕府が、清国に対し欧米諸国と同等の処遇を求めて交渉をしていたのを引き継ぎ、明治政府は1870年に柳原前光を予備交渉のために清国に派遣、1871年には伊達宗城が全権大使として清国に赴き、直隸総督・李鴻章¹との間に日清修好条規を締結した（1873年批准）。この条規は両国の友好、平和を第一条に掲げた平等条約であり、明治政府が目論んでいた不平等条約は清国側が受け入れなかった。「日清修好通商条約締結一件／修好条規通商章程締結問題 第一巻」²の資料によると、同条約第六条には、「此後両国往復する公文、大清は漢文を用い、大日本は日本文を用い漢訳文を副うべし。或は只漢文のみを用い其便に従う」とあることから、明治初期の政府の官僚は江戸時代の教育を受けており、漢文に通じていたものと思われる。しかし、実際の交渉では筆談ではなく通訳（通弁）が必要だった。外務省は1870年に「支那語学生徒官費支給伺」³を太政官⁴に向けて提出している。

この「支那語学生徒官費支給伺」の中では「中国との外交が日々盛んになっているのに、通弁がおらず困っている。長崎には支那語ができる者もいたが、通弁も英仏語に転向してしまっており、これでは通商も発展しないので、大学（のちの文部省）に掛け合ったが無理

であった。よって外務省内で支那語に詳しい者や長崎唐通事も教員として学校を作ろうとしたが、支那語を学ぼうという者がいない。仕方がないので給付生（奨学生）を募集し、省内の敷地に小さい塾を作りたい。1、2年後には支那に派遣し事務職や通訳にする。通訳の人材が多く輩出すれば、貿易は盛んになり富国につながる。1カ月二千両が必要だ」と太政官に訴え、太政官は大蔵省へ調査するように指示している。2カ月後には大蔵省から費用を認めるという返答があった。

この結果を受けて、外務省が通訳不足に対応するため自前で養成を行うために開設したのが漢語学所である。同様に外務省は英仏独語の通訳人材の養成のための洋語学所の開設も太政官に訴え、大蔵省に掛け合って許可を得ている。この段階では「語学稽古所」という名称であり、生徒募集の文書を太政官と諸官庁に送付した時も、「唐訳通弁之稽古」する12、3歳から15、6歳で、漢学の基礎がある者という条件となっている。⁵

1870年12月には洋語学所・漢語学所の採用人事も発表され、1871年2月には両学所が外務省の敷地内に開校された。しかし、まだこの段階では「清国語学所」として大蔵省に経費を申請しており(国立公文文書館「太政類典」第117巻)、名称は一貫していなかったが、1871年に学所が開設された後、外務省では文書に「漢語学所」という名称を使っている。⁶

当時の督長（責任者）は鄭永寧、督長兼教導・潁川重寛、教導・蔡祐良など、漢語学所の設立当時の教員は江戸時代の官職であった長崎唐通事の出身である。漢語学所は1873年に文部省に移管されるまでの3年余り存続した。

1.2 長崎唐通事出身の教師

漢語学所で教師を務めたのは、すべて長崎唐通事の出身者であった。長崎唐通事とは、江戸幕府の官職である。

林睦朗『長崎唐通事』（2000年 吉川弘文館）によると、江戸時代の日本では、中国・オランダとの窓口として幕府直轄地である長崎だけが開港しており、その貿易港としての繁栄を支えたのが唐通事と蘭通詞であった。長崎に最初に唐通事が設けられたのは1604年、長崎在留の中国人である馮六（後に平野姓）を起用し、世襲制によって受け継がれ、延べ1644人の唐通事がいたという。また、唐通事は幕府の一部門である長崎奉行所の地役人であり、1672年に大通事4名、小通事5名と定められ、「訳詞九家」として固定化した。1751年には唐通事会所が設置された。唐通事の任務は通訳業務だけではなく、来航唐船の管理、税関業務、唐人や唐館の秩序維持、海外情報（唐船風説）の収集、貿易許可証の発給なども担っていた。唐通事にもランクがあり、上から本通事（大通事、小通事、稽古通事）、唐年行司系（唐年行司、同見習い）、内通事系（内通事、同小頭、唐船請負人）などに分かれていた。⁷

このうち、本通事は日本に帰化した中国人の家系で世襲されていたが、雑務が中心の内通事は日本人でもなることができた下級の職で、1716年に出版された江戸時代初の中国語

教本である『唐話纂要』を著した岡島冠山はこの内通事であった。⁸

1867年に唐通事制度は廃止されたが、最後の唐通事73名のうち多くは明治政府にも登用され、さまざまな分野で活躍した。以下に紹介する鄭永寧、潁川重寛のほかにも、外交の分野では外務省の通訳から後にニューヨーク領事となった潁川君平(1852-1898)、長崎府の英語通弁からサンフランシスコ領事となった柳谷謙太郎(1847-1923)、初代香港領事となった林道三郎(1843-1873)、大久保利通の通訳を務めた太田資政(1835-1891)、東京外国語学校教授となった神代時次(1831-1894)、外務省の上等訳官から長崎裁判所訳官となった清河磯次郎(1823-1900)、台湾総督府通訳官となった彭城邦貞(1853-1914)などがいた。

また教育の分野では、鄭永寧の養父である大通事・鄭幹輔が通事仲間を引き連れて長崎港に停泊中の米国船を訪ねて英語を学び、後進の人材育成に努めた。もちろん中国語教育の分野でも唐通事出身者が活躍した。

1.2.1 唐通事の中国語

唐通事が江戸時代に使っていた口語の中国語は、中国人の貿易商や船員が使う中国語であった。当時長崎に寄港する唐船は出港地が中国南部であったため、多くの船主の出身地である南京の南京口(南京官話)、船員たちが使う福州口(福州方言)、福建省南部の漳州口(閩南語の一種)の三つの言語が世襲で代々伝えられていた。琉球では清代には直接北京に朝貢をしていたため、長年琉球では北京官話を学ぶ伝統があり、さらに「官生」(国費留学生)を北京の国子監に長期に派遣して北京官話を学ばせた⁹のに対して、長崎では建前上、経済的交流のみであったことから、学習すべき言語は長崎に寄港する商人や船乗りたちの使う言葉であった。

唐通事の家の子弟は幼い頃から中国語の稽古を始めた。7、8歳では遅いともいわれ、『三字経』、『大学』、『論語』、『孟子』などを唐音で読んで発音を学び、続いて『訳詞長短話』で二字話、三字話から長いものを学び、『訳家必備』、『養兒子』などの教本、続いて『今古奇観』、『三国志』、『水滸伝』を師について学ぶというものだった。

幕末になると、前述したように中国語以外の言語も学ぼうという動きが盛んになり、長崎には1858年に英語伝習所が設立され、英語稽古所と改称した後、その学頭となったのは唐通事であった。さらに1864年には英語に加え、フランス語、ロシア語も教える語学所が設立され、翌年済美館と改称、唐通事出身の英語の教員も複数いた。さらに1862年には唐通事たちが自ら訳家学校を設立、唐話と英語を子弟に教育したという。英語に通暁した平井希昌(のちの米国派遣弁理公使、1839-1896)や何礼之(洋学者、貴族院議員1840-1923)など中国語以外の世界で活躍した唐通事もいたが、多くの唐通事は中国語で生きていくしかなかった。外務省が設立した漢語学所の教師として唐通事が招かれたが、生徒たちも唐通事の子弟が多かった。それは家業としての中国語を継承していくためでもあった。

1.2.2 鄭永寧

漢語学所の督長となった鄭永寧（1829-1897）は鄭家の在日八世、明朝の遺臣であり、平戸生まれの鄭成功の子孫である。¹⁰ 鄭永寧は鄭家に同じ唐通事の家系である呉家から養子に来て家督を相続し、唐通事となった。彼は非常に格の高い大通事であったため、明治維新政府に東京に呼ばれ外国官（外務省の前身）一等訳官となった。1869年には伊達宗城について清国に赴き、「日清修好条規」締結に際して随行通訳として功績があったという。

外務省が漢語稽古所を作るにあたって、鄭永寧は真っ先に招聘されたようだ。最後の唐通事である鄭永寧はその後、60歳まで外務省に勤務していた。その後は渋沢栄一らが設立した東京・銀座にあった夜間の清韓語学校で中国語を教授していた。のちの外交官、岩村成充によると、白い髭を二尺もたらししていた立派な風采であり、和服であったという。この学校で中国語を学んでいた岩村成充は学校が閉校となったため、詠帰舎に移って夜間は宮島大八について学んだ（「外交と支那語」『中国文学』第83号 1942年 中国文学研究会）。

鄭永寧の実家を相続した養子・呉啓太は外務省秘書官となり、『官話指南』を編纂した。長男である鄭永昌は鄭永寧の後を継いで鄭家の九世となり、東京外国語学校を経て外務省入りし天津領事を務めた。一方、鄭永寧の養父・鄭幹輔の庶子として生まれ、鄭永寧の次男として養子に入った鄭永慶は北京で中国語を学び、1872年には京都でフランス語を学び、1874年16歳で渡米してエール大学に留学し、帰国後は岡山師範学校で教鞭を執り、さらに外務省に入省したという、英仏中の三カ国語に通じた秀才であった。鄭永慶は外務省を辞職した後、上野に日本初の喫茶店である可否茶館を開いた人物として知られている。¹¹ 三男の鄭永邦は東京外国語学校出身で北京公使館書記官となり、1895年の下関条約締結に際しても伊藤博文の通訳を務めた。鄭永邦は『官話指南』を呉啓太とともに編纂している。唐通事の名門であった鄭家の九世の代は家伝とされてきた南京官話を捨て、北京官話を習得し、明治維新後の外交の場で活躍した。

1.2.3 穎川重寛

穎川重寛（1831-1891）はもともと葉姓であつた唐通事の家系の八代目である。1862年には唐通事の養成所ともいべき訳家学校の教師となる。1870年に漢語学所の設立にあたり外務省三等書記官に任じられ、漢語学所の教導となり、続けて東京外国語学校、高等商業学校で20数年間教育の現場に立ち、多くの学生を世に送り出した。没後に立てられた顕彰碑の筆頭の門人は外務省勤務を経て実業界に転じた中田敬義¹²である。さらに門生として名を連ねている中には川島浪速や、呉大五郎、呉永寿、穎川君平、鄭永昌、鄭永邦、彭城邦貞ら中国語関係の著名人がいる¹³

1.3 漢語学所の教育

漢語学所の教育内容について詳しい資料は残されていない。

漢語学所に通った中田敬義は、石川県金沢の出身で、唐通事とは無縁であったが、漢学が盛んな土地柄で、14歳の時に県から選抜されて東京に中国語の勉強に派遣された。中田本人によると、1872年に外務省構内になった漢語学所に入所した。「外務省の漢語学所にはだいたい五六十人ぐらいの生徒がいた。一番はじめにアイウエオ、カキクケコを習わされた。今から考えてみると変な話だが、これで音を直すというのだった。『三字経』を支那音で習った。それから『華語跬歩』とう三冊ほどの黄色い表紙の本を習ったが、これは単語だけ並べたものだった。それから進んでは、長崎唐通事の使っていた『二才子』とか『開裏開』とか『訳家必備』とかいうような写本類を使った。いまひとつ、なんという名であったか忘れたが、船から長崎に上陸したときのことを書いたものもあった。これは進んだほうであった」と後年、中田は述懐している（中田敬義「明治初期の支那語」『中国文学』第83号 1942年 中国文学研究会）。1873年、廃藩置県の結果、藩からの給費がなくなり、郷里へ帰るしかないと覚悟を決めた中田らに、教師であった颯川重寛が外務省の書生職を斡旋してくれ、中田は中国語の勉強を続けることができたという。

上記以外の教育内容の記録は今のところ見当たらない。しかし、漢語学所での教育は、教師陣が唐通事出身者だったこと、特に教育部門の責任者である教導の颯川重寛は長崎でも訳家学校の教師であったことから、長崎での唐通事養成教育とほぼ同じだったものと推測できる。そして、ここでいう中国語は南京官話であった。

漢語学所は1873年5月5日に「其省語学所文部省可引渡事」と太政官から外務省に指示されている¹⁴。さらに、6月2日文部省から外務省に向けて「従前相分り居候漢語学所今般洋語学所中ニ合併以申候ニ付右教場不用相成候条此段申進候也」¹⁵という文書が出されており、文部省に移管されると同時に、漢語学所は洋語学所に吸収され外国語学所の一部となった。

1.4 外国語学所

文部省へ移管された直後の5月に文部省三等出仕である田中不二麿が太政官に向けて、語学所を受け入れたとして「従来外務省ニ於テ右語学所取設候趣意ハ兼テ同省ヨリ申上候通外国交際上緊要之通弁其人ニ乏シク往々差支有之候ニ付生徒成業之上ハ専ラ通弁等ニ相候目的ニ有之就テハ兼テ当省ヨリ去年中各省学校管理一途ニ被仰出書旨伺候節右学所之儀ハ素ヨリ当省ニテ管理致可然且同省之需求ニ応シ処分可候……」と伺書¹⁶が出されている。「被仰出書(おおせいだされしよ)」とは、学事奨励に関する太政官布告を指す。1871年に文部省が設置され、それまで各省で管轄していた学校はすべて文部省管轄となった。また、この文書では太政官にさらに語学所の費用も引き渡すように要求している。

この文部省の伺書でも、外務省の語学所は「国際業務で不足している通弁養成」であったことが明らかになっている。そして文部省でもその方針を継承するということも書かれている。

この段階で文部省が見積もった1カ月間の外国語学所の経費は1364円、内訳は423円が

運営費、241 円が事務職員の給与、700 円が外国人教師二人分 450 円を含む教師の給与となっている。¹⁷この外国人教師は洋語学所に所属していた二人と推測される。

文部省に移管された外国語学所は、それに先立って 1973 年 4 月に公布されていた明治政府の「学制二編追加」、5 月 2 日に公布された「外国語学校教則」によって外国語学校となった。

この外国語学校は外国語学所と開成学校の語学部、第一大学区独逸教場が合併したものである。開成学校とは、江戸幕府が 1855 年に設立した洋学所に始まり、洋書調所、開成所と名称を変えながら明治維新後も、明治政府は開成所で英独仏語の教育を行った。1869 年に昌平学校を大学校とし、開成所と医学所をその分校とした。さらに大学校を大学、開成所を大学南校、医学校を大学東校と改称し、この三校で大学を構成した。さらに 1870 年、大学南校を専門学校とし英仏独語教育を行うことになった。1871 年大学が廃止され文部省が設置された後、南校、東校とも一時閉校し、1872 年の「学制」の公布によって南校は第一大学区第一番中学と改称された。さらに 1873 年、文部省は第一大学区第一番中学を専門学校の開成所と改称したが、この開成学校には専門生徒と語学生徒の 2 種類の区分があり、法学、理学、工業学などを学ぶ専門生徒がそのまま開成学校に残ったのに対し、語学生徒は外国語学所、第一大学区独逸教場の生徒とともに、東京外国語学校を構成することになった。

第二節 東京外国語学校の設立と漢語学科

1873 年 6 月、外国語学所と開成学校の語学生徒、第一大学区独逸教場とが合併され、神田錦町に引っ越した開成学校の跡地である東京・一ツ橋に校舎が置かれた。その年の 11 月、東京外国語学校という校名が定められた。

その設立の経緯から、東京外国語学校では英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、そして漢語の五カ国語が教授されることになった。ここでは東京外国語学校における初期の中国語教育を明らかにする。

2.1 東京外国語学校の教育

東京外国語学校ではまず南京官話が教授された。それは長崎唐通事の教育をそのまま受け継いだものであったが、日清間の外交が盛んになるにつれ、北京官話の必要性が認識されたため、教師陣や教本など北京官話教育が導入された。

設立当初の漢語科での教育はどのようなものだったのか。中田敬義によると、「ここに入ってから以前とは少しちがひ、『今古奇観』を少しづつ支那語で教はり、また作文は日本の官庁の布達とか告示とかを支那の吏牘文（公文書）に訳したり、また上海の申報などの記事の散文を日本文に翻訳するといふやうなことをした。これはみな穎川重寛氏の担当であったから、長崎風の発音で教へられた」という内容であった（中田敬義「明治初期の支

那語」『中国文学』第 83 号 P13)。漢語学所に引き続き、南京官話を教えていた。

しかし、漢語学所での唐通事時代の教本を使っただけでなく、翻訳の授業も行われるようになった。通弁養成という目的のための教育内容が考慮されるようになってきた。六角恒廣の『中国語教育史の研究』(1988 年 東方書店 P75)では「中国語教育で中国の新聞が使われたのはこのように早い時期からである。しかも、このようなことは旧来の中国語教育にはみられないことで、明治の新しい時代における中国語教育の一面をものがたっているといえよう」としている。創刊されて間もなかった上海の申報を教材として使用することは、通弁という仕事には欠かせない実際の清国の様子を知るために不可欠であったろう。このころは唐通事の教師がそのまま雇用されていたことから、発音教育は南京官話によったのであつただろうが、文書は南北中国の違いがないことから翻訳はその後の北京官話への転換に際してもスムーズであつたと思われる。

また、東京外国語学校となつてから初めて中国人教師を招聘した。初めての中国人教師は蘇州人で周愈、字を幼梅という画家であつた。「この人は絵はうまいが、学問がない、それにアヘンを飲んだ」(中田敬義「明治初期の支那語」)ということで、1年足らずで解雇され、次には上海の総領事館の紹介で、葉松石という浙江省嘉興出身者が就任した。

何盛三の『北京官話文法』(1928 年 太平洋書房)では、中田敬義からの聞き書きとして、「當時の修学法も漢語学所時代と同様で、稍進むと今古奇観一点張で、夫を厳格な穎川重寛が怪気な部分をも微笑だにせず講じたものである。尚支那人教師との会話が初めて行われ、之より実用の語学を為すこととなつたのである。外国語学校時代の教師は穎川、蔡、川崎の三人で約六十名の生徒を上下両等各六級に分ち、生徒中には漢語学所時代の唐通事の子弟が多くを占めて居た」とある。唐通事の稽古の時代にはなかつた「会話」の練習が取り入れられたが、この支那人教師とは、中田敬義の前出「明治初期の支那語」によると「周幼梅といい、葉松石といい、いずれも南方の人であり、この人々から習つた支那語はみな南方語であつた」というから、授業は南京官話であつたことがうかがえる。

この当時(1874年)の漢語学科の授業は、上等第六級から下等第二級乙までのクラスでは月曜日から土曜日まで、1時間目が暗誦・暗写、2時間目が生課、3時間目が算術、4時間目が話稿、5時間目が解文(月水金)と作文(火木土)、その後体操となつており、下等第三級、第四級は1時間目が習字、2時間目が話稿、3時間目が暗誦・暗写、4時間目が生課、5時間目が算術、その後体操、となつている(中嶋幹起「唐通事の担つた初期中国語教育」『東京外国語大学史』1999年 東京外国語大学 P883)。

2.2 北京官話教育

清国との交渉には北京官話が必要であると気づいた外務省の要請により、東京外国語学校漢語科も北京官話教育へ移行した。

2.2.1 北京官話教育への移行

中田敬義の「明治初期の支那語」によると、「支那と交渉がはじってみると、支那の首

府は北京であるから南方語では通じない。外務省でも、首府北京の官話を習はせる必要を感じた。そこで外国語学校の首座三人を外務省から北京へやろうということになった。わたくしは七十人ばかりいたうちの首席だったから、他の二人といっしょに採用された。通弁見習という名で明治九年に北京の公使館にやられた。」という。さらに、「平岩道知、速水一孔、宮島大八等諸先生の談話を基として記した」として、何盛三は、「台湾征討の役、紛々たる征韓論は延いて西南戦争となり、琉球問題あり、韓国問題あり。亜細亜に於ける我国の外交は年と共に多事にして、殊に琉球問題、韓国問題は日支両国の政治外交関係に異常の緊張を加え来て、朝野は支那問題を重要視し、聊か志ある者は其研究に専念し、或は彼地の観察に赴く等漸く多く、従って明治十年前後に至って北京官話尊重の機運頗る盛となり始めた」（何盛三『北京官話文法』P71）と記している。

日清間でさまざまな交渉が進展するにしたがい、南京官話では通弁が務まらないことははっきりしたため、外務省は 1876 年東京外国語学校から優秀者 3 名を選抜して北京の公使館に送り出した。それと同時に、北京の旗人である薛乃良が葉松石の後任として来日し、その年から北京官話教育が始まった。

さらに 1879 年には続けて同じく旗人である龔恩禄が着任した。龔恩禄は、中田敬義が北京の公使館に北京官話の習得のため派遣された際、語学教師となった英紹古の次男である。中田は『伊蘇普喻言』を龔恩禄とともに 2 年半かけて翻訳した。中田の「明治初期の支那語」によると、龔恩禄はもともと恩禄という名前であったが、当時旗人は北京から「四十里出ると処刑される」ことになっていたため、龔という漢人の姓を名乗って出国したという。龔恩禄は外国語学校を退職後は慶応義塾大学の支那語科で 1 年ほど教えてから帰国した。

しかし、明治十年代には唐通事出身の教師がまだ在籍していたことから、しばらくは南京官話も平行して授業が行われていたと思われる。

2.2.2 北京官話教育の内容

北京官話教育の初期段階では、英国の北京公使館書記官であったトーマス・ウェイド（1818-1895）が執筆し、1867 年に初版が出た『語言自邇集』が使われた。東京外国語学校に 1 部だけ持ち込まれた原書を筆写したものを教科書として、「先づ其平仄編に依り正確なる発音を練習し、十分習熟して甫めて談論編に移り、更に上達して後、教授颯川重寛が紅樓夢を講じ、川崎近義が熱心にその補佐をしたと云う」と何盛三は先達からの聞き書きをもとに記している（『北京官話文法』P72）。発音を極めて重要視していたことが分かる。

この川崎近義とは、唐通事出身ではなく、水戸藩に生まれ、明治維新後に上京して人に紹介されて颯川重寛の門に入り漢語を学んだ人である。後に漢語学所が設立されるにあたり、颯川重寛が塾佐の職につけた。彼は『語言自邇集』の写本を残しており、彼自身が教

師として新たに北京官話の習得に非常に努力して取り組み、写本には四声と重念をはじめさまざまな書き込みがなされている。

1876年に北京に派遣された中田敬義は、北京でイソップ物語の中国語訳『北京官話 伊蘇普諭言』を編み、1879年日本で出版された。これは東京外国語学校の渡部温校長が英語から翻訳した『通俗伊蘇普物語』を北京官話に訳すよう、渡部自身から依頼されたもので、中田の「明治初期の支那語」によると、「この本は相当苦心した」という。

外国語学校で北京官話教育が始まったのは1876年からであったが、この翌年には英語もカリキュラムに導入されている。1883、1884年度には簿記や代数、幾何、そして修身学という科目も登場している。『語言自邇集』、『華語跬歩』、『今古奇観』、『紅樓夢』、『北京官話 伊蘇普諭言』などがテキストとして使われていた（中嶋幹起「唐通事の担った初期中国語教育」『東京外国語大学史』 1999年 東京外国語大学 P898）。

また、田中慶太郎の「出版と支那語」（『中国文学』83号）によると、「むかしは学校で教科書をそろえて学生に貸し出したものです。（中略）そんなわけで高等商業学校ではたくさんの『語言自邇集』が生徒用として用意してあったものです。明治三十何年だったか、全国一斉に官品を整理して払い下げがあったことがありましたが、そのとき『語言自邇集』と『四声聯珠』で高等商業学校印の押してあるものが三百部以上もあって……」としている。高等商業学校時代の東京外国語学校で使われていたものと思われるが、廃校に伴い払い下げされたのだろう。これによると、福島安正の『四声聯珠』も使われていたらしい。

1882年には張滋昉（1839-1900）が日本国内で採用された。張滋昉は東京外国語学校で東京商業学校の語学部となった後1886年に廃止されるまで勤務した。その後帝国大学でも教えている。この人は北京国子監で学び、1876年アジア漫遊の旅に出た副島種臣と親交を持ち、また興亜会設立メンバーである曾根俊虎が海軍中尉として清国に派遣された際、北京官話を教えた（鱒澤彰夫「興亜会の中国語教育」『興亜会報告・亜細亜協会報告』第一巻解説）。1880年12月12日の大阪朝日新聞の「雑報」には「近頃支那との貿易を盛んとせざるべからずといふ處に注目する人少なからざる故にや追々諸方にて支那語学の義塾を開くものあり。興亜会では張滋昉を雇い文部省では蔡伯昂を御雇になりて専ら官話を伝習せらると聞きしが……」という記事が載っており、各地で中国人教師を雇い入れているとしている。張滋昉は、曾根の興亜会の活動にも積極的に参加し、さらに漢詩の専門家として活動した。詩人として張滋昉の日本での活動は、二宮俊博 2002『『逍遙遺稿』礼記—シルレルとショオペンハウエルのこと及び張滋昉について』に詳しく報告されている。張滋昉が興亜会の活動に参加するや、清国公使・何如璋は曾根俊虎に対し「どこの出身でなぜ日本にいるのか」と尋ねていることから、清国ではまったく無名の存在だったことがうかがえる。1898年1月28日の東京朝日新聞の「雑報」には、「蒼海老伯を訪ふ」という見出しの副島種臣へのインタビュー記事が掲載されているが、そこには「余の友人なる清人張滋昉氏は一兩年前より中風症に罹り已に東京帝国大学の雇をも解かれ……」とある。副

島は病を得て異郷の日本で落魄の身となった張滋昉を案じている。1900年12月1日の東京朝日新聞の「訃報」には張滋昉が上海で亡くなったことが掲載された。

2.3 東京外国語学校の閉校

唯一の外国語の専門高等教育機関であった東京外国語学校は、文部大臣森有礼の時代に廃校となる。廃校の経緯を検証する。

2.3.1 閉校の理由

英・仏・独・ロシア・漢語の5言語でスタートした東京外国語学校であるが、1972年の学制公布後、外国語学校は全国に31校を数えるほどに増えた。しかし、それは専門学校に進学するための語学を学ぶ予備校的存在であり、設置は英語が多く、独仏語がそれに続いた。中国語を教授する外国語学校は東京外国語学校ただ一校であった。

1874年に英語学科が東京外国語学校から分離し、開成学校への進学者に対する語学教育を行う学校として東京英語学校となり、1877年に東京大学が設立した時にその予備門となった。英語、フランス語、ドイツ語は専門学校に進学するための語学であり、エリートになるために必須の語学であった。しかし、漢語は文部省が外務省から漢語学所を引き継いだ際、「通弁養成」という外務省の目的もそのまま受け継いだ。授業のカリキュラムも、他の学科に比べ実務的な内容となっている。英独仏語の学科で学ぶ学生とは違い、漢語学科の出身者は専門学校への進学の可能性は低かったであろう。通弁など実務者として漢語を使って仕事をするか、あるいは外務省に入って外交の道を進む者がほとんどであったようだ。

1884年3月、文部省は東京外国語学校附属の高等商業学校設置を発表した。¹⁸この結果、翌1885年にフランス語とドイツ語学科は英語に続いて東京大学予備門へと移った。そして東京外国語学校とその附属高等商業学校、さらに東京商業学校（もとは、当時文部省入りした森有礼文部副卿一副大臣に相当一が創設した商法講習所）の3校が合併して東京商業学校が設立された。これにより、東京外国語学校は廃校となった。さらに東京商業学校の語学部として残された部門も1886年2月には廃止され、実質上、東京外国語学校の教育の系統は断ち切られた。漢語とロシア語、朝鮮語の各学科はもともと外務省の通訳養成という教育目的を文部省も引き継いだものであり、文部省がその目的は果たせたと判断したと思われる。

1886年2月の文部省書記官と外務省書記官による書簡のやり取り「露清朝三ヶ国語学生養成および採用法ニ関シ文部省ヨリ協議一件」¹⁹を見ると、文部省書記官は「成業ノ後其職ヲ持ザルニ苦ムノ姿」が多いので、外務省に対し、文部省の予算で養成していた5年間くらいは外務省で採用できないかと聞いている。しかし、外務省書記官は、今のところ公使館でも本省でも必要な人員は備わっている、と返事をしており、将来の欠員は予測し難く、採用の増減はわからないが、将来必要であることは間違いない。将来を見据えて、支那語、ロシア語、朝鮮語という専門だけを専修せず、支那語と英語、ロシア語とドイツ語

というように兼修すれば、外務省でとても便利だというものであった。

1886年2月に東京商業学校の語学部が廃止されたのは、この時代の就職難にも理由があったのではないだろうか。

2.3.2 森有礼

さらに、中嶋幹起「唐通事の担った初期中国語教育」(『東京外国語大学史』P902)では初代文部大臣森有礼(1847-1889)がロシア語、漢語、朝鮮語を「商業の言葉」と決めつけて、東京外国語学校を廃校に追い込んだとしている。森は江戸末期開成所に入って洋学を学び英国、米国に留学し、明治維新後は福沢諭吉、西周らと「明六社」を結成するなど、欧米派であったが、1876年には特命全権大使として清国に駐在し、江華島事件の後の朝鮮帰属を清国の欽差大臣李鴻章(1823-1901)と協議している。この時は東京外国語学校の穎川重寛が通訳として随行した。また当時、北京公使館には東京外国語学校を卒業した鄭永昌とその父でもと唐通事の鄭永寧が勤務していた。

森は朝鮮問題とは別に、鄭永寧を伴い、直隸・保定府に清国の欽差大臣李鴻章を訪問し、会談している。この時、李は保定の蓮池書院の院長である進士・黄彭年と英語通訳の黄惠廉を伴っていた。この時の会談は英語で行われたのかもしれない。

この会談の記録²⁰によると、森は李に対して清国の服装にしても満州族に強制されたものであるのに対し、日本で洋服を着るようになったのは自主的だとし、清の伝統的服装は、洋服の精緻で便利なことに比べれば半分にも及ばないと西洋文化を持ち上げている。さらに、李は森の才能を褒めたうえで、征韓論のような浅慮の軽挙が発生しないようにできなかったのか、と言っている。また、森が外債は国家の経済の必然としているのに対し、李は「貴国において負債と服の変換が人民に幸せをもたらすならよいが……」とも言っている。清国の重鎮であり、学者でもある李鴻章と脱亜入欧の考えを持つ森、二人の会話はかみ合わないままである。

森有礼は清から帰国すると、外務大輔(だゆう/太政官時代の役職で次官に相当)、駐英公使を歴任、1885年から1889年に暗殺されるまで文部大臣(初代)を務めた。森が行った教育制度改革は現在までその制度の多くが継続していることから、日本の近代化の根底をなすものであった。功績は非常に大きい。森は英語を日本の国語とすることを提唱したほどの欧化主義者であり、清や清国人、漢語を重視していなかったとも考えられる。

外国語学校は1897年9月、高等商業学校の付属として再開される。さらに1899年の勅令²¹により東京外国語学校と改称される。そこに至るまでには1894年の日清戦争を経なければならなかった。

第三節 民間の中国語教育

外務省の主導で始まった明治政府の公的な中国語教育は文部省に移管され、教育制度が

変わるにつれて明治中期にはいったん断絶してしまう。しかし、民間ではいくつかの中国語教育の場が生まれた。

明治時代の中国語の民間教育機関は、宮島大八が 1895 年に詠帰舎を設立する前までの期間、1876 年の日清社を皮切りに、1880 年の興亜会支那語学校と続き、1894 年には清韓語学校も設立された。また中国にも中国語教育機関が設立された。

3.1 日清社

1876 年、日清社を起こしたのは廣部精である。廣部精と日清社については六角恒廣の『中国語教育史の研究』に詳しく取り上げられている。六角によると、廣部精はアジアの衰運を挽回することを目的として日清社を創設し、日清両国の和親のために「互いにその言語に通じる」必要があるとして中国語教育を行うことにしたという（六角恒廣『中国語教育史の研究』1988 年 東方書店）P93）。

3.1.1 廣部精

廣部精は 1854 年、上総の国に生まれた。廣部精の父周助は戊辰戦争（1868-1869）では奥羽越列藩同盟に与して薩長連合軍と戦ったため、明治維新後は不遇であったと思われる。次に紹介する興亜会の幹部も非藩閥出身の外務省中国関係者と自由民権論者によって占められていたことから、新しい政府への不満を持つかつての知識階級である武士出身者が自由民権運動やアジア主義へと傾倒していく社会背景があった。廣部精は明治 12 年に『亜細亜言語集』を刊行したころは、「支那語などに従事する者は愚にあらざれば狂でなければ固陋の蛮夫と言われる位」だったと文明開化の欧化主義の世の中を形容している。

廣部精は少年時代には漢学を学び、1875 年ころから周幼梅について中国語の勉強を始めた。周幼梅は蘇州出身の画家で、一時東京外国語学校にも雇われていたことがある人で、廣部精は南京官話を習っていた。廣瀬は 1876 年には「私学開業願」を提出、漢学と支那語学を学科としている（六角恒廣『中国語教育史の研究』P164-166）。

1903 年に廣部精が刊行した『増訂亜細亜言語集』の「緒言」によると、「明治の初年に東京に出て窃に其衰運を挽回することを目的とし日清社を創設し支那南辺の学者等数名を賄い漢学及び支那語学を教授し」たとある。そして北京官話の教科書がなくて大変不便だったので、自分で編んだとしている。そして「日清社以来同人社共同社興亜学校其他編者の関係から支那語を学びたる者は皆この亜細亜言語集によりました」という。

廣部精は日清社を一年足らずで閉じた後、中村正直²²の私塾である同人社に入り、漢学を教えた。同時に、東京外国語学校の中国人教師である薛乃良（在任期間 1876-1878）について北京官話を学んだ。この時期に中村正直からトーマス・ウェードの『語言自邇集』原著を贈られ、北京官話の教本を刊行するよう勧められたことにより、『亜細亜言語集』を刊行するに至った（六角恒廣『中国語教育史の研究』P164）。

この 1879 年の初版の序言で廣部は、「欧米人がお互いの情に通じているのは七八ヶ国語、十余ヶ国語に通じているからではないか」と書いており、「遠くの親戚より隣人」というこ

とわざも引用して、日清両国間において言語が通じることの必要性を説いている。また第二巻で廣部精は「熟通我邦之南北語」であると序を寄せている龔恩禄は薛乃良の後任として1878年に東京外国語学校に着任している。

廣部精は、同人社と同時に陸軍将校の学習所である共同社でも漢学と中国語を教え、さらに1879年からは漢語会という私塾でも教え始め、ここでの生徒の資金援助によって『亜細言語集』の第二巻以下を刊行することができたという（六角恒廣『中国語教育史の研究』P168）。さらに、興亜会の設立メンバーの一人でもある中村正直の紹介によるものだろうか、設立早々の興亜会支那語学校に講師として招かれる。この興亜会支那語学校も1882年には閉校し、廣部精はその後陸軍主計官などを務め、後に実業界に転じた。

3.1.2 日清社の中国語教育

日清社では漢学と中国語を教えた。1877年に日清社が東京府に提出した「明細書」には教員2名、生徒15人、15歳より25歳までとあり、ここに清国人王治本（号は黍園）の名がある（六角恒廣『中国語教育史の研究』P103）。王治本は1875年来日し、詩文を教えた。大河内輝声²³にも詩文を教え、のちには大河内の自宅に住み顧問となった。また、彼は宮島大八の父である宮島誠一郎の詩も添削していた。

日清社では廣部精が自分で教本『日清対話』を作って教えたというが（『中国語教育史の研究』P109）、この時期はまだ北京官話は学んでおらず、授業では南京官話を教えたものと思われる。

日清社が順調にスタートした数ヶ月後、1877年に西南戦争が勃発した。この西郷隆盛による明治政府への反乱は、日本国内に大きな混乱をもたらした。学生たちも帰郷したものが多かったといい、廣部精はこの社会情勢の変化の中で日清社を維持することができなくなり、閉校を決意した。廣部精はこの後も中国語教育界でしばらく活躍する。

3.2 興亜会支那語学校

興亜会は1880年、初代会長・長岡護美で発足した団体であり、設立と同時に支那語学校も開設し、北京官話教育を行った。

3.2.1 興亜会

1880年、東京で興亜会が設立された。これは近代日本最初のアジア主義団体といえよう。アジア主義を定義することは難しい。竹内好も1963年に発表した「アジア主義の展望」（『現代日本思想体系』筑摩書房1963年）のなかで、「辞書の数だけ定義の種類がある」としている。しかし、アジア主義については第三章で詳しく取り上げるので、ここでは「アジアが団結して欧米列強の侵略に対抗し、アジアの隆盛を志向する」という日清戦争以前のアジア主義という思想を体現すべく設立された興亜会の歴史を概観する。

興亜会設立を推進したのは海軍中尉の曾根俊虎（1947-1910）であった。曾根は大久保利通と親交があり、大久保は天津条約締結後に李鴻章と将来の日中関係のために相互に語

学学校を開くことを約束していたとされ、曾根は大久保の遺志を継いで興亜会の前身である振亜社を設立したのではないかと推測できる。また宮島大八は、「詠帰舎閑話」『中国文学』第83号（1942年 中国文学研究会 P23）のなかで、「日本のほうでは大久保内務卿などが力をいれられたものだ。---日本と支那とは手を取りあってやらねばならぬ。その第一歩として、青年の研究を手を取りあってやらねばならぬ---これがそもそも大久保内務卿の考えだ。そこで何如璋と相談して、日本から支那へ十四人、支那からも日本へ十四人、青年を研究につかわすということになった。どうして十四という数にしたか、そこはわからぬが、両方で油がのって来た。そのとき内務卿が暗殺にあったものだから断ち消えになった」と述懐している。

当時はロシアのアジア侵出が叫ばれ、また琉球の日本帰属によって日中関係も緊迫していた。さらに、日本国内では自由民権運動が盛んであり、薩長による明治政府の専横が批判されていた。

興亜会の第一回会合は1880年3月9日、東京の学習院で行われた。この会では多くの関係者が演説をしたが、その中には宮島大八の父・宮島誠一郎もいた。宮島誠一郎は演説の中で「然り而して通使交歓の始め兩國をして気脈相通じ、情意感ずるの事は、独り官職上の交際のみにては到底其真益を収取すべからず。余適々欽差大臣何如璋氏の来るに及んで、自ら其私交を修め、互いに相往来し漸次親睦大いに得るところあり。故の大久保氏頗る此事に感ずるところあり、何如璋君と義して東京中央に日支兩國の語学校を開き互に四名の教師を延き兩國の生徒六十名をして語学に従事せしめ大に兩國の洪益を謀らんとす」²⁴と述べている。上記の宮島大八の述懐とは数字が違うものの、大久保利通が学校設立を考えていたことは間違いないだろう。

並木頼寿「明治初期の興亜論と曾根俊虎について」(『中国研究月報』47号 1993年 社団法人中国研究所 P13)によると、宮島誠一郎は曾根と同郷の米沢藩出身であり、1880年当時は宮内省修史館御用掛の職にあった。宮島誠一郎については第四節で詳しく紹介するが、宮島誠一郎の人脈によって、駐日公使何如璋をはじめ藩閥以外の官僚や、漢学者たちが興亜会の設立の呼びかけに応じたという。

興亜会設立とほぼ同時に附属の支那語学校（当初は「興亜学塾」という名称）も作られている。

3.2.2 支那語学校

興亜会成立と同時に、「興亜学塾」の「假規則」も作成されている。²⁵

この中では「正課生」「学則」として、

- 一 清国普通官話
 - 一 尺牘並ニ照会文
 - 一 文章詩賦
- 「予科生」は

- 一 歴史
- 一 古文
- 一 洋算

となっている。正課生は午前、予科生は午後の授業で、「束脩」は1円、専門正課月謝75銭、次門予科月謝25銭、塾料25銭、食料3円となっている。12歳未満は寄宿はできないとある。さらに、起床から就寝までの細則が定められている。6時起床、6時半に食事、その後は復習時間、9時半から11時半までが授業、午後は1時から3時までが授業、その後は散歩時間、夜7時から10時までは復習時間と決められ、散歩時間以外は外出禁止、復習時間は談話禁止などと細かく決められている。

興亜会支那語学校について、ここで学んだ宮島大八は「生徒は約数十名、支那教師一名、日本教師数名という至って小規模の学校であったが、入学のとき廣部精という先生に試験的に質問された」「学校の位置は愛宕山の下で、天徳寺という寺の部屋を借りてついていた。この学校に集まっていたものは、各地方のもので、六十歳以上の老人から自分のような十四五歳の少年等が交って研究していた。」と「詠帰社閑話」で語っている。

宮島の述懐から、この学校は小規模な私塾のような性格だったことがうかがえる。上記の「假規則」には「教師ハ支那北京儒士張滋昉」と明記されており、北京官話を教えることが前提だったことが分かる。開校当初の1880年2月にはほかに曾根俊虎、金子弥兵衛が教師を務めていた。さらに廣部精がこの学校の教師陣に加わった4月には、本課生40名、別課生42名、夜間生5名とかなり大人数となっている。²⁶

ここで使われたのが興亜会支那語学校編集『新校語言自邇集 散語の部』である。この教本は、1879年に廣部精がトーマス・ウェードの『語言自邇集』を日本人向けに翻案し、出版した『亜細亞言語集』の「卷之一 散語」全四十章だけを取り出したものである。表紙には「興亜会支那語学校編輯」、「明治十三年四月出版」とあり、誰が編纂したかは記載されていないが、元が『亜細亞言語集』であることから、廣部精編纂の可能性は高い。この教本は興亜会支那語学校専用に出版され、創立早々からこの教本が使われていたようだ。

『新校語言自邇集 散語の部』の「緒言」には、
 「本校授ル所支那語学課ハ専ラ英人威徳氏編纂スル所ノ語言自邇集ニ依ル然レドモ其書往々語言ノ妥當佳妙ナラザル者アリ恆ニ以テ憾ト為ス今特ニ其書ヲ刪正増減シテ新校語言自邇集ト名ケ印刷ニ付シ校中ノ用ニ供セントス庶幾クハ生徒タル者愈新校語言自邇集ノ便宜ヲ得テ学課愈長進シ以テ當時威徳氏ガ世ノ学者ヲシテ遠キニ行ク必ズ邇キヨリセシムルノ意ニ背カザランコトヲ是レ本校此書ヲ印刷スルノ旨也
 明治十三年 興亜会 支那語学校 識」

と記されている。『語言自邇集』の「妥当」「佳妙」ではない部分を除くなど内容を増減して編集し直したとあり、さらに「邇(近) いところから学ぶ」というトーマス・ウェードによる書名の意を説明している。

さらに『三字経』音読や、『中庸』音読など、古典を使った発音練習、会話を学ぶ「問答」、これは『亜細亜言語集』の「問答篇」を使ったと推測できる。「千字文音読」「六字話」、「零碎話」なども『亜細亜言語集』を使った授業であろう。さらに、文書を作成する尺牘の授業も行われた。²⁷

まだ国内で中国語を学べる学校は、東京外国語学校しかなかった時代に、北京官話をネイティブの教師について学べるのだから学生が増えたのもうなずける。北京公使館で通弁見習いとして4年あまり学んだ中田敬義も帰国してから「外務省に出る前一時間ずつ半年ばかり教えたことがある」（中田敬義「明治初期の支那語」）という。廣部に頼まれたとはいえ、やはり当時は北京官語のできる教師がまだ足りなかったのだろう。

宮島大八も1880年4月からこの学校に入学し、北京官話を学び始めた。その頃のことを宮島は「詠帰舎閑話」で以下のように話している。

「元来この興亜学校はすべての事が不整頓で、教授法など全く無関心であったが、只暗誦だけは厳重にやらせられたもので、その日に教えられたことは、翌日必ず暗誦してゆくと云う様にされた。これは支那の背（ベイ）といふやりかたを倣ったものであらうと思はれたが、支那にては児童が教師の前に本を伏せて、後ろ向きになって、そらよみをする。卓の上にはうづたかくなっている書を、かたはしから誦んじてゆく、実にえらいやりかただが、その間に自然に自分のものになるといふやりかた、語学の研究などには、これが最もよいやりかたなので、生徒にとっては最も苦しい仕事であつた。ましてわれわれ日本人には最も苦手はこの暗誦である。自分はまだ子供であつて、学校の規則をよく守って、その日に習った事は翌日学校に行くまでには必ず暗誦のできる様にして、土曜の晩だけが翌日暗誦がないから、はじめて一息ついたわけで、実にこれには苦しんだものだ。しかしこのやり方のおかげで、語学にも文学の根底にもなつたとおもう。これは実に興亜学校に入ったおかげだとおもう。この恩義は忘れられない。この興亜学校ほど思い出深き處はない。」

興亜支那語学校は「すべて不整頓で、教授法など全く無関心」な学校ではあつたが、暗誦という古来から続く効果的な学習法によって、北京官話の教育をがむしゃらに行っていた様子うかがえる。

宮島が「この校長は人格者で生徒をかわいがり、生徒は校長をしたい、一家族のような関係があつた」（「詠帰舎閑話」）であつたと懐かしむ興亜会支那語学校は、経費不足に陥り1882年に閉校する。最後に残った生徒23名のうち、外国語学校に転学した者は19名だという。興亜会支那語学校に在籍した生徒は総計164名に上った（六角恒廣『中国語教育の研究』P193）。中田敬義によると、「外務省から派遣するという七人は、みなこの学校の生徒からえらんだ。その後も幾人か派遣したが、多くこの学校の生徒から採つた。派遣したなかで、今でも覚えているのは小田切壽之助、大河平、白須、瀬川、豊島捨松などの諸君」（「明治初期の支那語」）だといひ、多くの優秀な生徒を輩出したと思われる。小田切壽之助はのちの上海総領事、白須直も蘇州総領事、大河平隆則は杭州領事館勤務、瀬川浅之進は宮口総領事、豊島捨松は福州領事となり、明治の外交シーンにたびたび登場している。

3.3 清韓語学校

清韓語学校について、資料はほとんど残されていない。のちに外務省に入省し、中国各地の公使館に勤務し、領事も務めた岩村成允の手記にその学校のことが触れられているにすぎない。

岩村成允の父は徳川時代に昌平黌で漢学を学んで千葉県匝瑳郡で時習塾を開き、漢学を教えていた。岩村もそこで学び、1894年には東京の法政大学に進学したが、夜は清韓語学校に通って支那語を学んだという。

岩村の「外交と中国語」(『中国文学』第83号)によると、「清韓語学校といふのは、京橋区肴町(いまの銀座西三丁目)にありました。渋沢栄一氏などが発起して設立されて私立学校で夜学でした。先生は清国人張滋昉氏、このひとは明治二十年頃から三十年頃まで、帝国大学で支那語及び文学を教授し夜はこの清韓語学校で教えていた人で、なかなか学問のあるひとでした。日清戦争中の為めかいつも、支那服を着ず、洋服も着ず、紋付羽織袴でとおしておられました。でも弁髪はとるわけにはゆかないので頭の上で巻いて、ピンでとめ、その上に山高帽をかぶっておられました」という。そして、元唐通事であり、漢語学所の講師となり、また外務省で長く通訳を勤めていた鄭永寧も定年退職後はここで夜、中国語を教えていた。このころには鄭永寧も北京官話を習得していたものと思われる。

この学校は「日清戦争のころは、さかんなものでしたが、遼東半島半を還付することになった後は、学生が追々すくなくなって、遂にやめることになりました」と岩村は述べている。岩村はその後、清から帰国した宮島大八が開いた詠帰舎に入学し、その後外務省の留学生試験に合格し1897年に北京に渡った。さらに外交官として勤務するかたわら、『北京正音支那新字典』(明治38年)を編んでいる。1925年頃日本に帰国し、昭和に入ってからラジオ講座の講師も担当している。

日清社は1894年頃には開校し、1895年5月の遼東半島還付の後、岩村が詠帰舎に入学した1896年ごろ閉校した。短い期間しか存続していなかったが、張滋昉と鄭永寧という一流の講師が教鞭を執っていた。しかし、岩村が「此時は支那語の教科書もなく、皆筆記でした。」と書いていたことから、この時期にはすでに世に出ていた廣部精の『亜細亜言語集』を始め、東京外国語学校で使われていた教本なども用いていなかったと思われる。夜学であったことから、社会人のための学校であったろうが、閉校する前には宮島大八の詠帰舎が開設されていたことを考え合わせると、少なからずその影響もあって閉校に追い込まれたのかもしれない。

3.4 その他の民間の学校

明治期における国内の民間学校についての資料は多くはないが、教本の出版状況などからもある程度推測できる。廣部精が教えていた陸軍将校の学習所である共同社や漢語会という私塾もあったらしい。1905年の『日清会話独習』の編者は「同文学会講師 鈴木雲峰」

となっており、同文学会でも中国語を教えていたらしい。同じく 1905 年発行の『清語読本』は東方語学校編纂となっており、この学校もあったと思われ、1906 年の『清語正規』は清語学堂速成科編纂となっており、明治期にはさまざまな中国語学校が存在していたらしい。特に日露戦争以降、民間の学校が増えたものと思われる。

3.5 私立大学における中国語教育

明治期には、いくつかの私立大学でも中国語教育が開始された。専攻学科であったり、また第二外国語であったりしたが、中国語の重要性が認識され始めたためであろう。

慶応義塾大学には 1889 年、支那語学科が初めて設けられた。その経緯について、『慶応義塾百年史』（1958 年 慶応義塾大学 P593）では、「福沢は当時、日支間には必ず事が起きるであろうと予測して、しきりに支那語研究の必要を説いていたが、塾生中二、三の者が支那語を学びたいという希望があったので、清国人龔恩禄を招いて支那語学科を開いた。そのうえ助手兼通弁として当時北京に留学中であった金子弥平も呼んだ。」といい、金子は週に 2 回くらい時文と会話を教えたという。教科書は『語言自邇集』を使い、これを慶応義塾出版社から刊行したりしている。当初は学生数が 40 人ほどいたというが、龔と金子が 1 年ほどで辞職し、その後に張滋昉が赴任したが半年ほどで帰国したため生徒数も次第に減少し、浙江省出身の郭宗儀が来任したものの、それまでの北京官話ではなく、「南音だった」ため、学生は困惑し、1891 年には閉鎖することになった。

また、明治期前半には早稲田大学の政治経済学科などでも中国語の授業が設けられていたし、東洋大学の前身である哲学館でも漢語の授業が金井保三（1871～1917）によって行われており、1901 年には金井の編纂によるテキスト『哲学館漢学専修科 漢学講義 支那語』が出版されている。

3.6 中国における民間中国語教育

日本でいえば幕末の時期に上海が開港し、外国人居留地が建設された。ここは租界と呼ばれ、中国の主権が及ばない地域であった。日本人にも幕末から上海に渡航する者があったというが、明治元年（1868 年）、長崎の田代源平が上海に「田代商店」を開店したのが、商人の大陸進出の先駆けであったという。また 1869 年には紀州人・和田雄次郎が上海で英語と清語を学んだ。1875 年には三菱汽船が上海航路を開始、1878 年には岸田吟香²⁸が上海に楽善堂支店を開く（「日本支那語研究年表」『中国文学』83 号）。この後も続々と民間の日本人が上海へ、そして内陸へと渡清するようになる。

1871 年には日清修好条規締結、1874 年には台湾出兵、1879 年には琉球処分、と日清間には外交問題が次々に発生する。1872 年には上海、福州、香港に領事館を開設し、1874 年には初代駐支公使・柳原前光が赴任し、1877 年には初代駐日公使・何如璋が着任する。明治初期、公式外交ルートの各層の交流も徐々に活発になっていった。

3.6.1 東洋学館

中国語教育機関として初めて日本人が中国に設立したのは上海の東洋学館である。これについては佐々博雄の「清仏戦争と上海東洋学館の設立」（1980年 国士舘大学文学部人文学会紀要 第12号 P55～76）において詳細な研究結果が報告されている。それによると、1884年、「当時の民権活動家を中心として、上海に設立された中国語・英語の二カ国語を教授する語学校であった。また海外に設立された邦人経営の学校として我国最初のものである」とされ、名称を変えながら学校を整備したが経営難のため1885年に閉校されたという。

佐々によると、「東洋学館の設立には曲折があり、前後二期に分けられる」、「自由民権派の人々によって創設された前期の東洋学館と、末永重恭を学長として設立された後期の亜細亜学館である」という。さらに、「前者は国内における自由民権運動の衰退を背景とし、清仏戦争による中国の混乱に乗じ、自由民権の理想実現のために中国民衆と提携し中国改革をめざす目的の方便としての学校設立であり、後者は末広重恭を館長、山本忠礼を設立者とした、中国語、アジアをブルジョア的展望により好市場とみなし国家的利益を求める手段として貿易商業に従事する人物養成を目的とした学校設立であった」とその性格をまとめている。

東洋学館の設立メンバーの中心は九州改進黨²⁹の人々であった。また末広重恭は1880年に設立された興亜会の会員でもある。民権運動の行き詰まりから上海で学校の設立を目指したが、上海総領事安藤太郎は「有名無実」な学校で、徴兵逃れの者が多いと外務卿井上馨に機密文書を出している。

上海の芳しからぬ地域に立地していた学校を移転し、「亜細亜学館」と改称し、安藤領事からも新しく設立願書を出すようにと勧められて提出したものの、この設立願は文部卿大木喬任と陸軍卿大山巖の両大臣から設立不可という結論が外務卿に送られ、申請は却下されたのである。閉校にあたり、負債の清算には大隈重信からの援助があった（佐々博雄「清仏戦争と上海東洋学館の設立」）。

東洋学館での教育は、北京官話であったものと思われる。六角『中国語教育史の研究』（P296）で、学科課程を紹介しているが、「支那学」と「英学」、「算術」に分かれ、「支那学」は「二字話」、「三字話」「三字経」、「上海土音」に始まり、「第三期」では『語言自彙集』の名も掲げられている。清英対訳の教本で英語と中国語を兼修することになっている。

しかし資金難により、1年足らずで閉校を余儀なくされた。この学校の存在意義として、「日本で最初に海外に設立された学校であり、対支文化教育活動の具体的施設としてはその先駆をなすものであるといえるであろう」と佐々は、その先進的な着目点を評価し、「自由民権派の人々がアジア民衆と連帯を謀った初めての具体的事例」として注目に値していると述べている。

3.6.2 日清貿易研究所

1886年、陸軍の荒尾精中尉（1859-1896）は参謀本部の派遣将校として、中国国内での諜報活動を行うため、漢口へと赴いた。そして漢口で楽善堂漢口支店を開いた。この楽善堂とは、岸田吟香（1933-1905）が銀座に開いた薬局であり、1880年には上海にも楽善堂を開店している。岸田吟香は岡山美作藩の出身で幕末に英国人へボンの『和英語林集成』の編纂を手伝ったことから、眼薬の製法を伝授され「精錡水」として売り出す。同時に東京日日新聞の主筆として活躍する。1880年には興亜会の設立にも関わった。

荒尾は岸田との協議により、漢口に楽善堂を開き諜報活動の拠点としたのである。荒尾自身は陸軍少尉として熊本に赴任した際に、御幡雅文について中国語を学んだ。ここで荒尾は「支那浪人」たちを集め、中国全土に商品の行商に行かせ、各地の状況を調査させた。その間、荒尾は清国の内情が厳しく、東洋の危機が大きいと見え、危機を挽回するために日清貿易を振興しなければならない。そのために貿易に従事する人材の養成こそ急務であると、日清貿易研究所の設立を決意した。（鈴木擇郎「日清貿易研究所と東亜同文書院」『中国文学』第83号）

荒尾は1899年退役し、盟友であった陸軍参謀本部の根津一大尉とともに資金集めに奔走し、山県有朋首相、松方正義蔵相の賛成を得て内閣機密費から4万円を獲得し、日本各地を遊説して学生150名を集めた（六角恒廣『中国語教育の研究』P302）。佐々は「清仏戦争と上海東洋学館の設立」で、日清戦争後の中国における民間人の系譜は、征韓派の不平等士族、自由民権運動に参加し、政府の弾圧により国内活動の場を失った人々にあるとされるが、見落とされがちなのが西南戦争に参加し敗れた熊本土族を忠臣に国権拡張を一大主義として結成された紫溟会・熊本国権党系の集団であるとしている。彼らは1880年興亜会支那語学校が設立されたことにインスパイアされ、熊本の済々黻に「支那語科」を設置し、御幡雅文が中国語を教授した。ほかに同心学校でも中国語が教えられ、これらが「熊本国権党系大陸実践集団」を生み出す源流となったという。そして日清貿易研究所に入学した学生は九州出身者が多く、熊本と福岡で学生の半分を占めていた（佐々博雄「日清戦争後における大陸「志士」集団の活動について」『国士館大学文学部人文学会紀要』（1994年 国士館大学）P45）。

1900年、荒尾と教職員、学生は上海に到着し、競馬場付近に中国家屋3棟を改造して校舎とし、9月20日、開所式が行われた。荒尾は東洋の商権を日本が握り欧米列強に対抗するための貿易・ビジネス人材の養成に着手した。

日清貿易研究所の時間割を見ると、中国語、英語、商業地理、簿記、和漢文学、作文、商業算、経済学、法律学、習字、商務実習、柔術体操など、商業学校のようなカリキュラムだが、中国語が1週12時間と英語の2倍設置された。中国語の教師は荒尾の熊本時代の恩師である御幡雅文で、『華語跬歩』（1890年 文求堂）の編者である。この教本を使って授業を行ったと考えられる。

設立から1893年までの3年間、財政の困難がありながらも、卒業生86名を世に送り出した。その後2年間の商業実習が予定されていた。この学校は普通の学校のように年々学

生を募集するのではなく、荒尾は英国の東インド会社のような組織を作ることを目的に、そこに研究所で養成した人材をあてる予定であった（鈴木擇郎「日清貿易研究所と東亜同文書院」）。商業実習は日清商品陳列所で行われていたが、1894年日清戦争の勃発によって、陸軍から研究所卒業生を通訳として従軍するよう要請があり、卒業生たちは実習を切り上げ、通訳や偵察役として従軍した。ここに日清貿易研究所は幕を閉じたのである。戦後は台湾で仕事をする者も多かったという。

荒尾は1896年、若くして病気に倒れた。彼は日清戦争が勃発すると、戦後処理について「対清意見」を公表した。中には「領土の割譲を求めない」「賠償金は実地の損害を償わしめるに止めること」などもあったが、反映はされなかった。宮崎滔天³⁰は、1891年に初めて上海に渡った時、「その校長たる荒尾精君およびその一派の人々を黙して支那占領主義者の一団なりとし、異主義の集団なりとしたるをもって、その粟を食うを好まず」としているが、荒尾が侵略主義者といえるかどうかは評価の分かれるところである。

日清戦争後に、清国にかつて在住していたか、現住している者たちによる「乙未同志会」という組織が発足した。佐々博雄「日清戦争後における大陸「志士」集団の活動について」によると正確な月日は明らかでないものの、1895年9月ごろに組織されたと推測できるという。この団体は平時は親睦団体だが、アジア、特に清国に対する重要問題については社会の先達となって運動するという趣旨の、政治結社の一面を持つものであった。佐々は1896年10月の148名の名簿を掲載しているが、名簿には日清貿易研究所の卒業生と関係者が約半数を占めている。その他漢口楽善堂の関係者、興亜会支那語学校の出身者、上海東洋学館の出身者、日清戦争従軍通訳官などがメンバーとなっている。この名簿には宮島大八も出身母体・興亜会として掲載されている。佐々によると、この乙未同志会が1898年に近衛篤磨とともに「同文会」へと発展していき、さらに同年中に犬養毅らの東亜会と連合合併し、「東亜同文会」になった。

3.6.3 東亜同文書院

東亜同文書院は当初、1900年に設立された南京同文書院に始まる。南京に開校したものの、北京で義和団の暴動が起きたことでまもなく上海に移転し、それ以降は1945年の敗戦まで上海で中国関係の各分野で活躍する人材を送り出し続けた。戦後は愛知大学として継続しているため、東亜同文書院に関しては研究も多くなされている。ここでは概略を紹介するにとどめる。

明治時代の他の中国語学校と同様に、東亜同文書院も政治団体によって経営された学校であった。母体となる東亜同文会は、1898年に日中問題に関心を持つ東亜会と同文会が合併して設立され、「支那を保存す 支那の改善を助成す 支那の時事を討究し実行を期す 国論を喚起す」という四綱目が決定された。政府から機密費を受け取れるようにした同文会系のメンバーが主導権を持つようになる。

初代会長である貴族院議員・近衛篤磨（1863-1904）は日清提携して欧米と競争する、

そのためには中国の南方総督と手を組んで内部改革を推進するという主張を持っていた。東亜同文会には当初から、「清朝を援助して列国の分割を防ぐべし」という日清提携論者と「支那の革命を促進して自彊の実を挙げしむ」という革命論者がいた。近衛は 1900 年の義和団の暴動に列強が鎮圧に出兵した際、清朝の衰退を知り、南方提督たちと連絡を密にし、ロシアの南下に対して「支那保全」「対露強硬」を唱える北進論者である。しかし、東亜同文会は政府から機密費を受け取っており、自由な政治活動は難しいため、近衛は犬養毅、陸羯南、頭山満、中江兆民ら対外硬派とともに 1899 年国民同盟会を設立、別の団体を設立する。これに対して伊藤博文は同年立憲政友会を組織し、国際協調路線を唱えて対立した。

(1) 東亜同文書院の教育

東亜同文書院の初代院長は根津一（1860-1927）であった。彼は陸軍予備役として荒尾精とともに日清貿易研究所を設立した人物である。1894 年に研究所を閉じてからは、日清戦争に従軍し、戦後は退役し京都に隠棲していたが、近衛篤磨の要請により再び上海で学校を運営することとなる。

六角恒廣『中国語教育史の研究』のによると、1899 年、東亜同文書院は日本国内で学生募集を始めた。結果的に公費生 51 名、私費生 18 名の合計 69 名が合格し、渡清した。開校当初は政治科と商務科の 2 学科に分かれていたが、1 週間に清語が 11 時間、英語が 7 時間設けられているのは共通している。当初、教師が足りず、すでに三井洋行上海支店に勤務していた元陸軍熊本鎮台で荒尾らに中国語を教授し、さらに日清貿易研究所でも教鞭を執った御幡雅文が仕事の合間に中国語を教えた。しかし、徐々に教授、助教授、中国人講師ともに増え、常に 10 人前後の教師陣を擁するようになる。

1915 年から 1918 年まで在籍した鈴木擇郎³¹は、『華語翡翠編初集』、『官話指南』、『談論新編』、『支那声音字彙』を教材として使ったという。また、同学院では全員が寮生活であったため、新生は同県人の先輩に毎朝毎晩 1 時間ずつ発音のトレーニングを受けることになっていたという。これによって 1 年もするとどうにか会話ができるようになったという独特の練習法が行われていた（六角恒廣『中国語教育史の研究』P331）。

鈴木擇郎が卒業して 2 年後に東亜同文書院に入学した坂本一郎³²は「中国語学習の体験」(『中国語学』71 号 1958 年) に以下のように書いている。

「私は大正九年に上海の東亜同文書院に入学した。そして初めて中国語を学んだのであったが、当時の同文書院の中国語教育には次の長所と短所があったと思う。長所は三つあって、その第一は九月上海に渡って後三ヶ月程行われる課外の発音訓練である。それは毎朝同室または同郷の先輩が指導して『華語萃編』というテキストについて毎日平均百回位その日または前日学んだ所を読む方法である。これによって二三ヶ月で北京語の発音は一応できるようになり、四声を間違えるというような心配はなくなった。これと共に北京語話しことばの句調を自然と覚えて来たのであったが、この後者の価値の方は

私は実は神戸に来て北京語と接触が少なくなって始めて気づいた。第二の長所は中国人の先生の多いことで、二年経った時は北京人の話なら大体わかるという自信がついた。第三は大旅行と称して二年が終わった夏-当時は中国的に夏入学夏卒業であった-学生が数人ずつのグループに分かれて中国各地を旅行する制度であった。」

坂本は、この旅行によって、南方でも県知事や警察部長は北京官話が上手なことを知り、「北京官話のその頃の中国における地位や効用を知る上により経験であった」と、普段は上海に暮らす東亜同文書院の学生にとって、この旅行が社会言語学的に北京語にとらえるよい機会があったことを挙げ、さらに「会話の実地練習に役立ったことは言うまでもない」としている。

坂本はさらに、欠点については主に二つあるとした。

「一つは会話テキストに重点を置きながら教室で実際の会話が少なかったことで、これは三年間にたった一度会話があったような気がするだけで、それも一年の時で殆どしゃべれなかったので記憶が薄いのである。」

「第二は北京語、それも狭義北京語の偏重である。純北京語を正確に学ぶことは結構な事ではあるが、発音四声に重点を置くあまり、学生はちょっとでも発音がちがえば正しくない汚い中国語と考え之を排斥する気分が生ずる。上海に居りながら上海数百万の中国人の言語に無頓着となるのみか、北方に住んでも北京以外の土地では中国語を学習する気持ちになれないという致命的な欠陥が生じてきた。」

坂本は母校・東亜同文書院の教員として着任した時、自身の中国語のレベルの低さに嫌気がさし、北京へ中国語の修行に行ったという³³。坂本は1931年から2年間北京に留学し、北京で教師についたり、大学の聴講生になったり、茶館での語り物「説書」をノート片手に聞いたりと学んだ結果、「邦人になじみの旗人系北京語課程教師のことばや同文書院の発音は純北京語ではあるが時代から取り残された感じであった。」「今更ながら私の中国語は教室育ち学校育ちであることがよくわかった。」としている。

東亜同文書院は上海にありながら、カリキュラムの内容及び関係者の談話から、徹底した北京官話教育が行われていたことがうかがえる。

(2) 東亜同文書院の教本

東亜同文書院では中国人教師による中国語教本、『華語萃編』が編まれた。初集から4集までを各学年でそれぞれ使用する、一貫した内容の教本シリーズである。

初集は1916年に発行。「発音」から「散語」へと進んでいる。付録として名詞集が付いている。「凡例」に「本集においては専ら家常須知の語にして、雅に過ぎず、俗に失せず、比較的簡易なる者を採択編集せり。其稍複雑なる交際応酬の語、商界官界用語に至っては、之を本書第二集第三集に収めんことを期す。」とある。その通り、第二集は、談論形式であり、応酬通話、使令通話、俗尚瑣談、接見問答とやや複雑になる。第三集も談論形式で商業と農工業に関する内容、第四集は文化、教育、農業、工業、商業などの題材、公式な挨拶

抄や講演など、最終学年の仕上げをする内容となっている。

形式的には学院の初期に使われていた教本、『官話指南』、『談論新編』と共通したものが多く、こういった教本を授業で使いながら、学院独自のものを編んでいったと思われる。

松田かの子「官話教科書『華語萃編』の成立に関する一考察」『藝文研究』第 80 号（2001 年 慶応義塾大学 P194-178）では、「『華語萃編』は、全くのオリジナルというわけではないが、東亜同文書院の中国語教授・講師陣が当時の中国情勢に鑑みて編纂したものであり、また同院の中国語教程に合わせてあるため、教科書として体系的に整備されている。成立後も数回にわたって改訂が行われ、中国情勢と教学上の必要性に併せて常にその姿を変え続けた『華語萃編』は、決して魚返 1958（『三十三年華語夢』『書報』5 号 1968 年 極東書店）の言う「ただ素材としての会話を漢字で記録した教科書」の範疇を脱してはいない。しかし当時の教科書としては、これ程素早く忠実に中国を反映していた教科書は稀であり、学習者にとっては内容・形態ともに非常に新しい物だったといえるのではないだろうか。松田は「この編纂の背後には、眼前の中国情勢の変化を具に観察しようとする、同院の中国研究全体に対する姿勢があり、それこそが同院の独自性といえるだろう」と結論付けている。

『華語萃編』は東亜同文書院のオリジナル教材であり、同学院の教育方針に合わせた内容となっている。ほかにも青木喬の『支那時文類編』（1918 年）や『尺牘教科書』（1924 年）なども同学院用に編まれた。これらの教本は上海で使われていたためか、内容が東亜同文書院向けのためか、日本国内ではあまり用いられた記録がない。

東亜同文書院は教育形式や内容を変えながら、また戦火によって校舎を長崎に移転したりしながら、1939 年には大学に昇格して東亜同文大学となり、1945 年までの 46 年間に 4638 名という多数の学生が学んだ、中国語学校としては最大規模を誇るものであった。同学院の「興学要旨」の冒頭には「講中外之実学。育日清之英才」とあるように、中国語や実学が中心であり、卒業生の多くは中国国内、満州国、日本などに職を得ている。また軍からの要請で従軍通訳も多く出している。東亜同文書院は日本の中国語進出の最前線の人材育成基地という性格を持っていた。

また、東亜同文会から離脱した、孫文に加担する宮崎滔天らの親孫文グループも、東亜同文書院の学生たちに目をつけ、上海の同学院で革命人材のリクルートを行っていた。これを知った近衛は引き締めをはかったが、教師であった山田良政も孫文のもとに去った。またその後大陸浪人となった学生も多かったという。

第四節 宮島大人が受けた中国語教育

第一節から第三節まで、宮島大人が生まれた幕末期から、留学から帰国し中国語教師として活躍し始める時期、すなわち 1867 年前後から 1900 年頃までの、日本における公的な中国語教育、民間の中国語教育、また中国における日本人による中国語教育について概観

してきた。

宮島が 1895 年に開いた詠帰舎は 1898 年に善隣書院と改称し、その後しばらくの間は日本の中国語教育の総本山ともいえる教育機関となった。当代一流の中国語教師として、また中国語教本の編纂者として、宮島の中国語のベースはどこでどのように作られたのだろうか。

今まで見てきた時代背景を鑑みつつ、彼の受けた中国語教育について残存する資料からその具体的な足跡を読み取りたい。

4.1 黄遵楷の個人指導

宮島は 1867 年（慶應 3 年）、米沢に生まれた。父・誠一郎は漢学を学び、藩校の講師をしていた。明治政府となってから、誠一郎は 1871 年、勝海舟の口利きによって政府に職を得て、家族とともに上京した。清国初代公使の何如璋一行が来日したのは 1877 年であった。

当時、修史館御用掛であった誠一郎は文人として漢詩を通じて清国の公使館員と交流した。このようすは『大河内文書』（1969 年 平凡社 東洋文庫 18）にも記載されている。誠一郎も自作の詩の添削に公使館に通っている。当時の文人たちは漢学の本場である中国からの文人と直接触れ合うことを大変な光栄としていた。その場にはたまに大八も同行したようである。

誠一郎が何如璋に息子・大八に漢学の勉強をさせたい旨相談すると、何如璋は黄遵憲³⁴の弟、黄遵楷を紹介してくれた。13 歳の大八は小学校の帰りに永田町の公使館に通った。

その当時のことを大八自身が「詠帰舎閑話」（『中国文学』第 83 号）で以下のように語っている。

「いよいよ習うことになる、どんな教科書を使ったら適当かといふことになったが、教える方でも教えられるほうでも経験がないので、見当がつかない。そこで親父の案で、とにかく漢字を支那音で覚えたらよからうといふことになって、詩の韻のごとく支那音で習うことになって、一東の韻から始めて若干字ずつ先生が楷書で丁寧に認めて教えて呉れられたが、毎日毎日同じようなことで、すこしの変化もない。こちらは子供のことなれば、云われる通りに習って居ったが、しばらくすると先生の方に厭きが来た。ある日のこと先生は居られずして机の上に紙片が置いて何やら認めてある。それを読んでみると、こういう意味のことが書いてあった。

「お前に毎日詩の稽古してやって、三四ヶ月にもなるが、お前に何の益にもならない様だ。わたしはこれから英語でも少し習はうと思うから詩の音の稽古はしばらく止めよう。」

それを家にかえって親父に話すと、得三（当時堺の県令だつた税所篤さんの息子で、自分と同じく公使館で稽古していた）はどうしたか、との問いであつた。

「自分よりも先に興亜学校に入りました。」

「それならお前もそれにするより仕方があるまい。」

そこで自分も興亜学校に入るようになった。」

大人は詩の音を習っていたが、それは誠一郎のアドバイスによるものだという。大人は「親父は支那の音が分からなかったが、いつもしきりに音節がわからなくては、詩でも文でも真の妙味に触れる事は出来ないと言っていた。」³⁵と後年語っている。文人でもあった誠一郎は、まず漢詩を作るのに欠かせない音韻の勉強から始めさせたのだろう。誠一郎は大人に興亜会で北京官話を学ばせるより前に、音韻を学ばせている。漢学の教養を重んじた明治初期の文化的風潮がうかがえる。また、この時「一東」から学んだということで、テキストは『広韻』³⁶を用いていたものと思われる。

しかしすぐに教師のほうが好きでしまい、この個人教授も終わった。大人は当時愛宕山の下にある天徳寺の一角を借りて開校していた興亜会に入学することになった。

4.2 興亜会支那語学校

1880年4月、宮島大人は興亜会の支那語学校に入ることになり、廣部精に面接を受けた。当時を振り返って宮島は「詠帰舎閑話」の中で以下のように話している。

「お前はこれまでどこで支那語をならったか？」

「支那公館で習いました。」

「どんな本を習ったか？」

「本は習いません、詩の韻を習いました。」

「ことばの方は？」

「ことばの方は二三句覚ええました。」

すると先生は、黒板に「有没有」と書かれ、読んでみよと云われた。そこで公使館で習ったとおり、

「有没有」(ユウモオユウ)

と発音すると、先生は頗る不興な顔で、

「お前のそれは何と云う発音だ、全で土音ぢゃ。他の人には通ぜぬ。習ひなおさなければだめだ。」

といはれたので、自分はおどろいた。それでは今まで何を習っていたのだろう？ まるで狐につままれたような気がした。

宮島大人が黄遵楷について学んだ発音は南京官話であったことを、ここからうかがい知ることができる。

興亜会支那語学校については前節で紹介したので、ここでは宮島大人が受けた中国語教育について「暗誦だけは嚴重にやらせられたもので、その日に教えられたことは、翌日必ず暗誦してゆくと云う様にされた」、「しかしこのやり方のおかげで、語学にも伝が之根底にもなつたとおもう。これは実に興亜学校に入つたおかげだとおもう。この恩義は忘れら

れない。この興亜学校ほど思い出深き處はない。」と、自らの中国語の基礎はこの興亜会支那語学校で築かれたと認めている（「詠帰舎閑話」『中国文学』83号）

4.3 東京外国語学校時代

1882年、宮島大八は興亜会支那語学校の閉校にあたり、外国語学校の2年生に転入した。大八は興亜学校時代から親しかった徳丸作三、小田切万寿之助、大河平隆則に加えて、外国語学校では川島浪速、長瀬鳳輔、重野紹一郎、1学年上の瀬川浅之進、そして瀬川の友人で大学予備門に通っていた松平康国らと親しくつきあった。友人たちについては第三章で詳述する。

大八が学んでいた当時の外国語学校では、学校に1部だけ持ち込まれた原書を筆写した『語言自邇集』を教科書として、「先づ其平仄編に依り正確なる発音を練習し、十分習熟して甫めて談論編に移り、更に上達して後、教授颯川重寛が紅樓夢を講じ、川崎近義が熱心にその補佐をしたと云う」と何盛三が先達からの聞き書きをもとに『北京官話文法』(P72)に記しているように、『語言自邇集』を使い、また発音を重視していたことが分かる。

当時の外国語学校の授業時間は1～3年生は1週間に21時間、4年生は19時間、5年生は22時間となっていた。各学年とも、1週間に20時間近く中国語の授業があり、4、5年生は英語が週に6時間あった。北京官話の発音、会話から作文、読解までの授業の5年間で、通弁としての基礎的な力は十分習得できたと思われる。

しかし、大八が4年生になった1884年、外国語学校に附属の高等商業学校が設置された。翌年1885年には外国語学校の仏語、ドイツ語の両学科の教員と学生が東京大学予備門へ転学転籍し、その後に残されたロシア語、漢語、朝鮮語の外国語学校と高等商業学校、森有礼が設立した私塾である商法講習所の三校が合併して東京商業学校となり、外国語学校は姿を消すことになった。合併後、外国語学校は第三部となった。1886年1月には第三部を語学部と改称、2月には語学部を廃止、外国語学校の系譜はここで断たれ、外国語学校の学生たちは多くが退学してしまった。大八もこの時退学し、その後は父・誠一郎の勧めにより清国公使館で経学³⁷を学び始めた。

4.4 清国留学

1887年4月、21歳の大八は横浜を出発して清国に向かった。清国公使黎庶昌と父誠一郎との間にかわされた、張裕釗を紹介するという約束が果たされ、大八の念願であった清国留学がついに実現したのである。

大八はのちに父誠一郎への書簡で、「どこまでも漢学を仕上げ候のみ」が宿願であると書いている³⁸。張裕釗について漢学を学ぶことだけが希望であったようだ。

大八は5月、張裕釗が院長を勤める保定（現・河北省）の蓮池書院に到着し、ここに張裕釗について学ぶ7年間が始まった。この留学時代については主に、魚住和晃『宮島詠士 [人と芸術]』（1990年 二玄社）を参考にまとめた。

4.4.1 張裕釗

大八が師とした張裕釗は字を廉卿、1823年武昌に生まれ、1846年に挙人となり、1850年北京・国子監の登用試験に合格し、学正³⁹となった。しかし1850年、故郷武昌で母の喪に服していた張裕釗は、武昌が太平天国軍と曾国藩の官軍の戦場となったため、曾国藩の幕僚となったが、太平天国の乱が平定された後も官職にはもどらず、曾国藩について学問の道に入った。曾国藩は進士であり、両江提督、内閣大学士を兼ねた政治家、軍事家であり、また清代の文人としても超一流の人物であった。曾国藩は唐宋八家以来の文章を伝え、その書き方を踏襲する古文派の一つである桐城派⁴⁰の文人として知られている。張裕釗は黎庶昌、薛福成、吳汝綸とともに「曾門四弟子」と呼ばれるようになった。

張裕釗が最初に主講を勤めたのは武昌の芍庭書院、さらには金陵（南京）の鳳池書院、そして1884年には直隸省保定府の蓮池書院に移った。

書院とは、元來図書の貯蔵所を意味していたが、唐・宋代になって在野の学者が自ら講学場を設け、自ら長になって経営と教育に当たったものを書院と称するようになった。元、明を経て清になるとこの種の書院が盛んになり、地方の大官や在郷の篤志家などの後援によって経営されるようになった。また、著名な学者を招聘するようになり、公的な性格が生じるようになった。1733年、雍正帝の時代になり、各省に20の書院を指定して資金を下賜し、1736年乾隆帝の時代には朝廷によって書院の課程や教法、奨励、監督、師生の選択方法まで指示し、公的な学校として位置づけた。書院では主に経学、史学、治術が講義された。⁴¹

張裕釗の長子である張沆は駐日公使黎庶昌の随員として来日していたが、大八が保定に到着した時にはすでに帰国して保定におり、弟の張澹とともに科挙を受ける準備をしていた。

宮島大八が父誠一郎に出した5月20日付けの書簡によると、「今日張沆参り呉、昨日御相談ノ件ハ親父ニモ委曲相話候処、親父モ委曲承諾相候得共、何分ニモ老年之上ニ書院事務多端ニテ、毎日始終教授致スナドト云事ハ不叶……」（『宮島詠士[人と芸術]』P112）ということで、しばらくは書院の外に下宿をして勉強することになった。張裕釗は直隸総督⁴²である李鴻章（1823-1901）に大八の入学の是非を聞いているが、問題なしということで認められたということが、吳汝綸への書簡「張廉卿先生論学手札」で明らかにされている。張裕釗に清国の高等教育機関に外国人学生を受け入れることについて戸惑いがあり、李鴻章にも伺いをたてたものと思われる。

4.4.2 蓮池書院

大八は蓮池書院の近くで家を借り、使用人を雇い、食事や身の回りの世話をさせ、留学生生活を始めた。大八が父誠一郎に出した書簡の中で、1カ月で食費7円、賃貸料2円50銭、使用人給料75銭、雑費5円、そのほか書籍など5円、合計20円と予算を組んでいる。

蓮池書院で張裕釗は大八に、『史記』、『漢書』から読み始め、中国の歴史を知り、經書を読んで知識をつけ、王安石、曾国藩の文、『資治通鑑』、韓愈の詩を熟読すること、筆談、会話能力をつけるように命じた。

この年、駐日公使を辞して帰国した黎庶昌が保定を訪れた。黎庶昌は大八に対し、「張裕釗は学問の該博さといい人品の高邁さといい、中国随一の人物といっても過言ではない」と激励した。さらに、書を希望する大八に『曾子弟問答』を記した文末に、「大八はわが友人の宮島栗香（誠一郎の号）の子であり、才俊にして学に志す」とし、「この書を書いて与えるので、之に励め」と記している。

しかし、大八は慣れない中国での生活に体を壊し、1887年秋にはいったん北京の湯山温泉⁴³で湯治をしている。大八はほどなく北京市内に戻り、療養を続けた。ここで、大八のちに中国語教師としての語学の基礎となる北京語を学んだと考えられる。北京滞在時の大八のようすは『宗方小四郎日記』からもうかがい知ることができる。大八は在京邦人の友人たちと食事や飲み会、京劇鑑賞など、さまざまな付き合いをしている。1888年11月10日の『宗方小四郎日記』には「宮島大酔して至る。通州帰途吃門にて驢馬より落ちたりと云う。満身泥造の如し」という記載もあり、大八の若さ溢れる日々をうかがい知ることができる。

張裕釗は湖北省武昌出身であるが、北京・国士監の学正であったことから、湖北なまりの北京官話が話せたものと考えられる。大八は興亜会支那語学校、東京外国語学校で北京語の授業を受けており、基礎的な力は十分にあったと思われる。しかし、ここで張裕釗に会話力をつけるように指導されるということは、学校で学んだ北京官話では十分ではなかったということだろう。坂本一郎は「中国語学習の体験」(『中国語学』1958年71号)で、「終戦まで日本人で中国語が抜群の人は北京育ちに多かったのは北京でのみ日本人の生活が中国人に融けこんでいたからであり」、「上海では門扉を深く鎮して知人以外には会わず、全上海的性格の生活がなく各地の人間が各々そのグループ間で勝手な生活をしていたのであった」と述懐している。北京で生活していた1年半で、大八の北京語はかなり上達したのではないか。そして、この北京生活はのちに編纂する教本の言語及び内容に深く影響を与えたと思われる。

4.4.3 江漢書院

大八が北京で静養している間に、張裕釗は武昌の江漢書院の主講となるべく南帰していた。これは湖広総督裕祿からの招聘に応じたものではあるが、それ以前に蓮池書院を置く直隸総督李鴻章が、張佩綸に蓮池書院主講のポストを与えたかったからだといわれる。張佩綸は1885年の清仏戦争の際、福建軍務会弁としての作戦失敗により福建海軍が全滅してしまい、何如璋とともに敗走したために失脚した。しかし、李鴻章は張佩綸を高く評価し、娘婿としたほどである。その動きを察知した張裕釗は、自ら武昌行きを決めたという。

1889年9月、大八は北京を発ち、先に武昌の江漢書院に着任した張裕釗を追って行っ

た。大八は花園山に居を構えて書院に通い、多忙な師について学び続けた。江漢書院での大八の大きな収穫は友人胡啓心との交流であった。学問を追求する胡の真摯な態度を大八は信頼し、親しく付き合い、その交流を楽しんだという。大八の留学も3年がたち、順調に学問に打ち込んでいた時期である。

しかし、また政治の波が張裕釗を襲った。張之洞⁴⁴が湖広総督に就任し、教育改革を断行したのである。張之洞は新しく両湖書院を設立、近代的で蔵書も多く教育環境が良い両湖書院は江漢書院の学生をも引きつけた。そこで、張裕釗は招聘を受けて襄陽にある鹿門書院へと移ることを決心する。

4.4.4 一時帰国から西安へ

1991年、張裕釗と家族、一門の弟子たちは襄陽へ向かった。襄陽は武昌と同じ湖北省内ではあるが北端に位置し、武昌からは船旅で20日間に及んだ。大八は書籍12箱分を自ら船を借りて運んだ。

鹿門書院は小規模な書院であったが、大八は張裕釗の居宅の敷地内に小さな1棟を与えられ、師に近いところで学べることになった。しかしその翌年、大八は父の勧めにより一時帰国し、結婚した。半年間の日本滞在を経て、大八は再度清国に渡った。しかし、この間に張裕釗は鹿門書院の職を辞し隠居の身となって、西安知府となっていた長子張沆の元に身を寄せていたのである。

再度の清国行きに際しては、父誠一郎から2年という年限を決められた。誠一郎は2年分の留学費用1150円を全額借金してまかなった。この再渡清時、勝海舟からも20円を贈られている。10月に長崎港を出立した大八は上海経由で西安に向かう。上海では日清貿易研究所に友人を訪ねているし、旧友の川島浪速とも会って漢詩を贈っている。上海から船に乗って武昌に向かった。ここから冬の漢水をさかのぼり、まず襄陽に到着してから丹江を水行、それから冬の秦嶺山脈を徒歩で越えて1月中旬、西安に到着したのである。

西安に到着した大八を張裕釗は喜んで迎え、知事公館と一緒に住ませ、さらに学問に精進するように諭した。当時、張裕釗は隠居していたため、門人はおらず、大八は寝起きを共にし、その勉学の姿勢を学んだ。朝は経書を読み、午前は書を学び、午後は正史、夜は作文、という日課の中で、「始終師之教を聞き居申候」⁴⁵と父への手紙にも書いている通り、常に師と一緒にいて学ぶ生活であった。この西安で、大八は張裕釗の書法の神髄にも触れることができた。実際の揮毫に立ち会う機会もあり、大八は書にも開眼し、励むことになった。

西安には1893年秋、清国の美術調査旅行中だった岡倉天心が大八と張裕釗を訪ねてきたりしている。しかし、1894年1月、張裕釗は71歳でこの世を去る。蓮池書院時代には3千人もいた弟子が、臨終の際には大八だけになっていたと、大八はのちに語っている。

師の喪に服していた大八は、8月、日清両国が戦争を始めたという衝撃の知らせを聞き、帰国を決心する。中国人の格好のまま山を越え、川を下り1カ月、上海にたどり着いた。

すでに日清間は開戦していたため、上海では日本旅館に投宿したものの、スパイ容疑で追捕の的となっていると聞き、危険を察知した大八は、石渡マサという上海で裁縫の師匠から洗濯業へと事業を拡大した女傑に助けを求め、かくまってもらい長崎行きの船に乗船することができたという。⁴⁶

大八の7年にわたる清国留学はついに終わりを迎えた。大八は「在清留学意見」を記して自らの留学を総括した。これは、清朝屈指の碩学であった張裕釗について学べた幸せと教えを守っていきたいという内容である。漢学、そして書法を学んで帰国した大八は、勝海舟から清国語の教育と漢学振興に力を注ぐようにとのアドバイスを受け、それにしたがって教育者の道を歩み始めることになった。

第二章で詳しく分析するが、宮島の編んだ教本には清国留学の際に身に付けた清朝の教養の高い人びととの交わりから得た内容が生かされ、格調高い中国語が採用されている。また興亜会で受けた「暗誦中心」の教育は宮島がのちに編んだ教本に大きな影響を与えた。

清国留学では中国語そのもの、そして中国語で学んだ経学、さらに張裕釗の衣鉢を継ぐ書法という三つの大きな収穫を得た宮島は、帰国した日本の中国語教育界においてはひときわ抜きでた存在となった。しかし、彼はあくまで在野での全人教育にこだわった。それは清国留学で7年間師となった張裕釗を尊敬し、師の身の処し方に感銘を受けたためであろう。恩師と同様、宮島も隠士として公式の表舞台に出ることなく、教育者としての一生を全うした。

第五節 明治期の中国語教育の目的

宮島大八が中国語教育を受けた明治初期から中期、その中国語教育の目的は、「漢文教育の補填」、「通弁の養成」、「アジア主義による人材育成」、「商業・貿易の振興」の四項に分類できる。ここではこの4点についてまとめる。

(1) 漢文教育の補填

明治に入り、日本の政治・経済・外交の分野はいっせいに欧化主義に走り、西欧を模した近代国家への道を歩み始めた。その中で中国語教育はメインストリームとはなりえなかった。外国語教育としては英語、独語、仏語の三カ国語が中心であり、それが「学問」に直結する語学だったのである。江戸時代に長崎や昌平黌で行われていた公的な中国語教育は一時中断された。

外務省の漢語学所での中国語教育は始まったものの、公的な高等教育の場である大学での中国語は、帝国大学文科大學博言科に1886年「支那語（俗語）」が週1時間設けられ、1889年には漢文学科に「支那語」がやはり週に1時間設けられたにすぎない。これはあくまで漢文を読むため、古典の知識を得るため、いわば漢文教育の補填部分としての中国語の授業であった。

時代が下り大正時代に入っても変化はなかった。1918年に東京大学支那文学科に入学した倉石武四郎の『中国語五十年』（1973年 岩波新書 P19）によると、「支那語」は1年生が週に2時間、2年生が週に1時間だったという。倉石は「漢文だけは、あるいは支那文学だけは不思議なことをやっているものだと考えた。原文を見ながら、その漢字をひっくり返していちいち日本語にして読んだ。第一、とてもまだるっこくてしようがないということを感じるようになりました」と述懐している。倉石は1921年に青木正児が『支那学』5号で発表した、漢文読みをやめた、中国語でよまなければならないという趣旨の論文に感銘を受けて京都に移る。倉石は『支那語教育の理論と実際』（1941年 岩波書店）の中で、「支那に対する知識教養については、朝野の注意がゆきとどかず、ことに、中学校高等学校の漢文から大学の支那学まで、著しい欠陥を生じている」とし、「支那人がその文化的教養を誇りとする限り、支那人に接すべき語学は、当然、文化的の一面を持たねば、十分に役に立たないのみならず、かえって彼等の侮蔑を招くことも少なくない」と記し、漢文を中国語の古典としてとらえ、教養としてとらえて、その手段としての中国語の教育には文化教育が必須であるとしている。

倉石は中国の経学、古典を読むための知識を補うものにすぎない中国語教育を否定しているが、現実として明治から大正にかけて、少なくとも公的高等教育の場においては、中国語は漢文教育の補填としてとらえられていた。

(2) 通弁養成

明治に入ってから教育は、「洋学重視」の流れのなかで英仏独の三カ国語が学問に結びつく学校制度を核として展開していく。その流れから脱落した中国語教育は、外交の場での通訳・翻訳人材の必要性の高まりから、実務教育として復活した。

第一節で詳述したが、外務省が1870年に中国語通弁の養成を太政官に訴え、「大学」に教育をもちかけたものの断られたため、外務省が自力で漢語学所を設立したのが、明治期の公的教育機関における中国語教育の始まりである。漢語学所はその後文部省の管轄となり東京外国語学校という「専門学校」になった。そのなかの「漢語学科」で続けられた中国語教育は、さらに東京商業学校に合併、廃止という政策の変化のなかで1887年には消滅した。この時期までには、急速に拡大した清国との外交を担う通弁の養成という教育目標は一応達成され、多くの通訳たちが外交の場に出ていった。

(3) アジア主義による人材育成

明治期、国内で行われた民間の中国語教育の目標は、「西欧列強支配下のアジアの提携をはかる」ということが基本となっている。例えば、1876年の廣部精によって設立された日清社の設立目的は、前章第三節で紹介したとおり、「アジアの衰運を挽回すべく、日清両国が和親しなければならず、そのためにはお互いの言語に通じていなければならない」というものである。日清社は西南戦争の勃発が遠因となって閉校した。1880年には興亜会支那

語学校が設立されたが、この「設立緒言」にも「アジアで独立しているのは清と日本だけだが、その提携のためにまず言語に通じること」だとしている。

さらに上海において 1884 年に設立された東洋学館の「趣意書」でも、清国の政治、人情、風俗、言語等に通暁する人材を養成し、東洋の衰運を挽回する」とある。しかし 1 年足らずで閉校し、亜細亜学館と改称して再開校したが、六角恒廣『中国語教育史の研究』では両学館設立の中心人物である玄洋社の末廣重恭は「どちらかといえば中国との貿易面で将来活躍する人材を養成する学校である」と考えていたとしている。この時期、自由民権運動の退潮から中国大陸へとその活動の対象を移す人々が出ていたと六角は分析している。

明治中期は初期アジア主義の興亜の思想から、大陸進出へと軸足が移動しつつある時期であったといえる。

アジア主義という思想から生まれた中国語教育は、明治中期以降、宮島大八の詠帰舎・善隣書院に受け継がれる。

(4) 商業・貿易の振興

前述したように、1884～85 年の東洋学館・亜細亜学館でも商業や貿易のための中国語教育に重きを置いていたが、1990 年に上海に荒尾精によって設立された日清貿易研究所は、六角恒廣『中国語教育史の研究』によると、「日本は中国と交易を拡大していかなければならない。」「中国との貿易に意をそそぎ、先進資本主義国の中国における利益の独占をくじき、日本が中国で商権を確立することを願った」という荒尾の考えが反映されたものと指摘されている。

東洋学館・亜細亜学館が、六角の言う「支那浪人的運営のため」短期間で閉校したのは、カリキュラムに商業・貿易に関する科目は設置されなかったことも原因の一つであろう。それに対して日清貿易研究所は、「商業地理」、「簿記学」、「商業算」、「支那商業史」、「商務実習」などの科目がおかれ、さらに 3 年間の学校教育の後には日清商品陳列所での実習が 2 年間予定されていた。1894 年の日清戦争勃発により、実習は切り上げられて学生の多くは通訳として従軍したが、あくまで「貿易と商業」が教育の目的であった。

1900 年に南京に設立された東亜同文書院の「興学要旨」によると、清国の富強を図り、日清の協力が必要であり、中外の実学を講じるとある。東亜同文書院の初代院長根津一は日清貿易研究所を荒尾とともに運営した人物であり、東亜同文書院は別組織でありながらも日清貿易研究所の後身であるとみられており、その設立の趣旨は共通している。

しかし、東亜同文書院の「立教綱領」においては「国家有用の士」を養成することが重要な教育目標であるとしており、母体である東亜同文会の「支那を保全す、支那及び朝鮮の改善を助成す」という綱領に基づいた教育目標が立てられた。しかし明治も後期となって日露戦争に至り、日本の外交策が推移するにつれて、「貿易と商業」から「大陸進出」へとその教育目標の解釈も変化したと思われる。もともとは中国語の実地練習や中国内地

の実情視察のために行われた学生の「調査旅行」も、1907年からは外務省から補助が出て、軍事・外交・経済に関する情報を政府各部門に提出する諜報活動的な役割を持つようになる。六角恒廣『中国語教育史の研究』では、東亜同文書院の「卒業生は多く中国に職をえて活動し」、「国家有用の士」となったとしている。日本の国策に添って、東亜同文書院の教育は大陸進出を目的としたものになっていったのである。

第二章 宮島大八の中国語教育

前章では、明治期の日本における中国語教育を概観した。宮島は明治期に日本で中国語教育を受けた後、7年間清国へ留学し、1894年に帰国するとすぐに勝海舟を訪ねた。中国語教育、漢学教育を行うことを勝から後押しされ、のちに善隣書院となる詠帰舎を設立する。同時に宮島は帝国大学の講師となり、宮島の中国語教師としての人生が始まった。

この章では、宮島の中国語教育に対する姿勢や思想にアプローチする手法として、史料・資料からその学校教育および編纂した教本について詳細に分析を行う。

第一節 学校教育

ここでは宮島が教鞭を執った官民の学校とその教育について、学校別に整理して教育内容と使用した教本を明らかにする。

1.1 帝国大学

宮島は1895年、帝国大学文科大学漢文科の講師として清語を教え始める。松浦玲は『明治の海舟とアジア』（1987年 岩波書店 P239）で、漢学者でもある外交官の竹添進一郎⁴⁷の口添えによるものではないかと推測している。

1.1.1 帝国大学の歴史

宮島が教鞭を執った帝国大学は幕末にその母体である学校が設立され、明治維新以降は何度も組織や名称が変更された。1883年の帝国大学令によって、東京大学から帝国大学へと改称されたものである。

以下、蕃書調所→開成所・昌平黌→東京大学→帝国大学の変遷についてまとめた⁴⁸

<開成学校まで>

1856【安政3】幕府、洋学所を蕃書調所として九段坂下竹本図書頭屋敷に設立（現千代田区九段南一丁目付近）。

1862.05【文久2】蕃書調所を神田一ツ橋門外護持院原（一橋通町一番地）に新築移転し（これ以前、九段坂上表六番地和学講談所、安政6年7月には小川町に移転）、洋書調所と改称。

1863.08【文久3】洋書調所を開成所と改称。

1868.06【明治元】新政府、旧幕府時代の医学校を復興、昌平坂学問所を復興して、医学校、昌平学校設置。

1868.09 新政府、開成所を復興して開成学校（その後、大学南校、第一大学区第一番中学、開成学校、東京開成学校と改称）を設置。

1869.06 昌平学校を大学校（本校）とし、開成、医学両校を大学分局（分校）とする。

1870.02 大学規則の制定。

1870.07 大学内部における国漢学派と洋学派の対立により大学本校閉鎖。

1873.06 開成学校、神田錦町に新校舎（現神田神保町三丁目、学士会館近傍）落成。

<東京大学時代>

1877年4月 東京大学創設(東京開成学校と東京医学校を合併。旧東京開成学校を改組して法・理・文3学部、旧東京医学校を改組して医学部を設置)。東京大学法理文学部総理に加藤弘之が就任。文学部には第一史学、哲学及政治学科、第二和漢文学科が置かれた。

1879年9月 文学部2学科のうち「第一史学、哲学及政治学科」のなかから史学学科を削り「第一哲学、政治学、理財学科(経済学)」とする。漢文の作文を重視し、また卒業論文を課するようになる。

1881年9月 文学部に第一哲学科、第二政治学及理財学科、第三和漢文学科の3学科が置かれた。

1882年9月 文学部附属として古典講習科を設置(本科と別の修業年限三年)。

1885年4月 古典講習科の生徒の新規募集を中止。

1885年12月 法学部を法政学部と改称(文学部の政治学及理財学科を法政学部に移す) それとともに、文学部は第一哲学科、第二和漢文学科、第三漢文学科の3学科となった。

<帝国大学文科大学時代>

1886年3月 帝国大学令を公布。工部大学校を統合して帝国大学に改組(法・医・工・文・理の5分科大学および大学院を設置。総長・各分科大学長・評議会を置く)、文学部に新学科を置く(第四博言学科)。

1887年9月 文科大学に、史学科、英文学科、独逸文学科を増設し、第一哲学 第二和漢文学科 第三漢文学科 第四史学科 第五博言学科 第六英文学科 第七独逸文学科の7学科とした。

1888年6月 文科大学に国史科を増設し8学科とするとともに、和文学科を国文学科、漢文学科を漢学科と名称変更する。

1897年6月 東京帝国大学官制公布。京都帝国大学創設に伴い帝国大学を東京帝国大学と改称。

1.1.2 帝国大学の清語教育

宮島が帝国大学に職を得た1895年は、帝国大学文科大学漢文科時代である。宮島はここで1898年まで3年間教鞭を執った。帝国大学文科大学漢文科に初めて清語の科目が置かれたのは1889年である。興亜会支那語学校から東京外国語学校に移り、1886年東京商業学校語学部が廃止されてからは帝国大学文科大学博言学科で清語を教えていた張滋昉は、ちょうど宮島とは入れ替わりに帝国大学を辞めていたものと思われる。1898年1月28日の東京朝日新聞の「雑報」に、副島種臣の談話「張滋昉氏は一両年前より中風症に罹り已に

東京帝国大学の雇をも解かれ」が掲載されており、宮島が勝海舟、竹添進一郎の推挙によって講師になったのは張滋昉が病気により退職したと無関係ではなさそうである。

帝国大学の中国語教育は、1886年文科大学博言学科で清語を教授し始めたのが最初である。さらに1889年漢文学科にも清語の科目が設けられたが、清語の授業は週に1～2時間だけであった。帝国大学での清語の授業がどんなものだったのか、どんな教材を使ったのか、関連資料はついに発見できずじまいである。しかし、張滋昉が興亜会支那語学校で1880年から1882年、東京外国語学校で1882年から教鞭を執っていたことから、帝国大学でも前任校と同様に、トーマス・ウェイドの『語言自邇集』、これを編み直した廣部精の『亜細亜言語集』、呉啓太、鄭永邦『官話指南』が使われていたと推測できる。宮島が1895年に開いた詠帰舎でも、当時在籍した青柳篤恒が「廣部精氏の著『亜細亜言語集』という書物一種より外にはなかった」（「思い出づる支那語研究の懐古」『中国文学』第83号）としていることから、宮島が同時期に教えた帝国大学でも『亜細亜言語集』が用いられていた可能性は極めて高い。

帝国大学の時代の宮島の教え子には、鈴木虎夫、小柳司気太、狩野直禧らがいたという（金丸邦三「東京外国語学校から東京外国語大学へ」『東京外国語大学百年史』1999年東京外国語大学）。鈴木虎夫は1900年東京帝国大学文科大学漢学科卒業、京都帝国大学文科大学で長年教鞭を執り、吉川幸次郎や小川環樹らを育てた漢学・中国古典文学者である。小柳司気太は漢学者、道教研究者であり、東京帝国大学卒業後、学習院大学、国学院大学などを経て大東文化学院教授、1940年3月に総長となる（同年12月死去）。狩野直禧は東京帝国大学文科大学卒業後、清国留学、京都帝国大学文科大学教授となった漢学者、歴史学者である。

宮島は1898年に詠帰舎を善隣書院と改称して本格的に中国語と漢学教育に乗り出すと同時に帝国大学の職を辞した。宮島の後任には金井保三⁴⁹が就いた。

1.2 東京外国語学校

1885年に廃校となった東京外国語学校は、1897年4月に高等商業学校の附属として設立され、9月には独立して再開校された。再開校当初から、宮島は講師として招聘された。「漢語」と呼ばれていた中国語は、「清語」という名称になった。

1.2.1 東京外国語学校の再開

1896年1月、帝国議会（国会）の衆議院・貴族院の両院で、近衛篤磨らが発起人となり外国語学校設立の建議案が提出された。その内容は以下の通りである。⁵⁰

第九回帝国議会貴族院建議案

征清の大捷は頓に内治外交の繁忙を促すに至れり今日以後外政上に工商業及學術上に於ける中外の交通は日に益々隆盛ならざるを得ず而して此時に際し先づ要するものは

外国語に熟達するの士なりとす。然るに今日外国語の教授を以て専務とする所の学校は官私立共に殆ど之れを見る能わず豈遺憾とせざるべけんや。

故に政府は速に外国語学校を創成せんことを要す。

依って政府は適当なる計画を定め要する経費を明治二十九年度追加予算として本期の議会に提出せられんことを望む。

茲に之れを建議す。

第九回帝国議会議院建議案

今や我国は一躍して東洋の表に雄視し宇内生存競争の衝路に当る。固より万般の事物に一大刷新を加えて膨張的の資性に順応するの準備を為さざるべからず。殊に列国の事情を詳悉し其趨勢を觀察し談笑の際外交に商略に光栄を發揮し利益を拡充する敏捷の士を養成するを要す。

露、支、韓の如きは将来益々密接の関係を有するものにて今尚其言語を教授するの学校なく外交も商業も殆ど摸索以て之れに応ぜんとす猶俎の際折衝の時麻姑の癢を搔くの快なきは豈雄視の一大欠点にあらずや、英、仏、独の如きは頗る流行の觀あるも要するに科学を研究するの階梯に過ぎず今総て此等の語学を専修せしむるの必要あり茲に学校規定の要領及学科表を添付して参考に供す。政府は速に採納して設立の挙あらんことを望む。

この建議は帝国議会を通過し、英、仏、独、露、西、清、韓の7学科を置いて、まずは高等商業学校の附属として再開校された。

1932年に『東京外国語学校沿革・第二編』（1932年 東京外国語学校）を執筆した当時の東京外国語学校長・長屋順耳はそのなかで、1885年に東京外国語学校が消滅したことにより、「高等学校にしる高等商業学校にしる、英、仏、独等の外国語は学習したに相違ないが語学習得は最後の目的でなく各外に特別の目的を持って居るので到底外国語を十分にやる時間もなく気分もなかったのである。此処に語学に堪能なる人士を養成する途は絶えた。森氏の誤れる英断の酬は九年の後明治二十七年に爆発した所の日清戦争に遺憾なく顕れたのは遺憾極りないのである。いざ戦争が始まったと云う時に支那語、朝鮮語、露西亜語又は英、仏、独語に堪能なる人多数を求めたとてそうは問屋が卸さない」とし、さらに「東京外国語学校が中絶せず明治十八年後卒業者を出し各種外国語練達の士多くして日清戦争を未然に防ぎ得、又は講和条約を有利に導き得て其内容を替えて居たならば、日露戦争も今回の事変事件も殆ど起こらなかつただろうと考えられるのである」としている。これは「我田引水の感」ありとしつつも、日本人は「一人残らず外国語の必要を痛感」していると憤慨している。

日清、日露戦争の勃発も外国語に堪能な外語の卒業生がいなかったせいだというのは、確かに「我田引水」ではあろうが、今で言う国際人、グローバル人材が明治時代にも求め

られていたことは確実である。

上記の帝国議会建議で、「英仏独の三カ国語は流行しているものの、科学研究の手段に過ぎず、やはりこれらも専門的に学ぶ必要がある」としている点が、1876年に英語学科が英語学校に分離、のちに大学予備門となり、1885年には仏、独語が大学予備門に転籍した当時とは、外国語学に対する見方が大きく変化している。大学進学のための外国語教育だけでは実用に適さないこと、欧化政策、英仏独語による洋学の取り入れが一段落し、日清戦争を経て国際社会での外交・通商には多くの外国語の人材が必要であることが社会的にも認識されたためであろう。

再開された東京外国語学校は7カ国語7学科、翌年はイタリア語を新設して8学科、さらに1911年には新たに5学科(蒙古語、暹羅語、馬來語、ヒンドスタニー語、タミル語)を設置し13学科となり、1913年には清語学科を支那語学科と改称、さらに学科の改称・増減を経て、1949年には東京外国語大学となり現在に至っている。

1.2.2 東京外国語学校と宮島大八

1897年に再開校された東京外国語学校では、1885年閉校した際には「漢語」科であった中国語の専攻科が「清語」科という名称となった。清語科の第一期入学者数は正科10名、特別科が18名、合計28名であった。正科は3年制、清語学科の授業時間は週30時間、このうち語学が24時間、漢文が3時間であり、夜学の特別科(1899年からは別科)は2年間で授業時間は週10時間であった。再開校時に講師として招聘されたのが、宮島大八と金国璞である。さらに囑託として青柳篤恒がいた。宮島はその後1901年まで3年余り講師を務めた(金丸邦三「東京外国語学校から東京外国語大学へ」)。

この時期の東京外国語学校については、1898年入学の第二期生であり、文求堂から多くの中国語・中国関係の書籍を出版した田中慶太郎⁵¹が「出版と支那語」(『中国文学』第83号)で以下のように回顧している。

「そのころは本科は三年、特別科つまりいま専修科にあたる夜学は二年卒業で、わたしはその特別科にはいったのです。特別科は毎日一時間ずつで、土曜日は休みです。先生は宮島さんが講師で——宮島さんはあんなかたですから、教授などは断られた——あって主任教授、それから講師の青柳先生、中国人では金国璞さんでした。」「最初の教科書は『日漢英語言合璧』(呉大五郎・鄭永邦 1888年 可否茶館)で、そのほかは助字のつかいかたをボードに書き、それをうつしたものです。そのころはプリントなどはありませんでしたからね。二年生になったとき、平岩道知、金国璞共著の『談論新編』(1898年 積嵐楼書屋)ができたので、それをならいました」。

上記の田中の述懐からも、宮島は官職に就くのを敬遠したことがうかがえる。当時、官立の学校では位階勲等がないと教授にはなれなかったため、宮島は主任ではあったが講師の身分のままであった。青柳篤恒は詠帰舎の第一期生であり、宮島と張澹のもとで3年間

学んだ後、東京外国語学校の講師となっているが、同時に宮島の推挙によって陸軍大学校の嘱託教授にも就任したため、外国語学校は1899年には退職している。

田中はさらに、「語学校の初期は、本科も特別科も、おたがいによく職りあった。それというの、これをひきいる宮島さんの教育ぶりがそうなのです。宮島さんは、はじめ詠帰舎というのをつくられ、それが善隣書院になった。(中略)この善隣書院はたいしたもの、語学校の支那語科というのは善隣の支店のようなものでした。したがって外語の支那語科にも、しぜんと詠帰舎の伝統があつて、ときには宮島さんが生徒一同――といつても二十人ぐらいをひきつれて、大森あたりまでもつれてゆかれ、鰻ぐらいおごられる。そのときは、支那語でもってメートルをあげ、「詠じて而して帰る」というわけでした。」と語っている。

宮島が主任講師ではあつたが、1900年には第一期卒業生の岡本正文⁵²が助教授に就任、陸軍教授の木野村政徳が講師として出講、さらに中国人講師が2、3人在職していた。

では、宮島はこの時期、東京外国語学校で「清語」を教授したのか、「漢文」を教授したのか、どんなテキストを用いたのだろうか。残念ながら明確な記録はない。

1898年から1900年まで在籍した田中慶太郎によると、教科書は『日漢英語言合璧』、2年生では『談論新編』だったとしている。

1902年入学の井上翠⁵³は、『松濤自述』(1950年私家版)のなかで、青柳篤恒『新編支那語会話読本』(1903年 早稲田大学出版部)、『日漢英語言合璧』、『支那交際往来公牘』(1902年、泰東同文局刊行。金国璞・呉泰寿編の手紙文の教本)、2年生では金国璞と松雲程に『官話指南』(呉啓太・鄭永邦 1881年 楊龍太郎出版)を習ったとしている。

また、何盛三の『北京官話文法』(1928年 太平洋書房)によると、鄭永邦の『生財大道』(1887年 島田氏蔵版)を善隣書院や東京外国語学校では、「蒟蒻版で複写し、教材に使ったものである」としている。

1909年入学、1912年卒業の、のちの陸軍大学教授である武田寧信は、岡本正文、宮越健太郎⁵⁴、木野村、神谷衡平⁵⁵、松雲程、宮錦舒という講師陣であつたとしている。そして、宮島の『官話急就篇』(1904年 善隣書院)を宮越が使い、松雲程が自著の『日清語入門』、『続日清語入門』(1905年 文求堂 これらの教本は宮島大八が校閲している)、『日漢英語言合璧』を口授、岡本が発音、その後自著『北京紀聞』(1904年 文求堂)、張廷彦著『支那語動字用法』(1904年 文求堂)、宮が自著『清国商業用文』(1908年 文求堂)、『清国最新書簡文』(1909年 文求堂)、神谷が時文、その後『談論新編』、『官話指南』、金国璞による『今古奇観』、張廷彦、田中慶太郎『官話文法』(1905年 救堂書屋)と続いた、と回想している。⁵⁶

上記のさまざまな回顧をみると、当時の東京外国語学校で使われた教科書は、再開校直後はすでに出版されていたものが使われていたが、徐々に講師陣が自著を刊行後すぐに教室で使っていることが分かる。宮島は1897年に最初の教本『官話輯要』を編纂・出版している。東京外国語学校で使われたという記録はないものの、あるいはこれを用いていたかもしれない。田中は1903年に宮島が編んだ『官話篇』も挙げており、こちらでも使われた可

能性があるだろう。宮島が東京外国語学校を退いた後、1904年に初版が出た『官話急就篇』は前出の武田の回想にもあるように教科書として使われており、その後も長い間使われ続けた。

宮島が退職した後、1904年に勃発した日露戦争に従軍して通訳官となった東京外国語学校の卒業生は40名以上、在校生が数十名いたという。外交・通商のための人材養成を目的として設立された東京外国語学校であったが、やはり戦争に巻き込まれることになった。

1.2.3 東京外国語学校の中国人講師

宮島が再開校した東京外国語学校の講師に就任した時、中国人講師としては金国璞を招聘した。金国璞は生年・没年とも不明である。北京・京師同文館⁵⁷を卒業した後、高等商業学校の附属として1897年に再開された東京外国語学校に招かれた。詳しい経歴はわからないが、平岩道知との共著『談論新編』の序文で当時は高等師範学校の教授、東京帝国大学文科大学助教であった服部宇之吉が、「高等商業学校附属外国語学校清語教師金国璞先生本国に在りて多年本邦の留学生に清語を教授し来りて現職に就く」としており、金国璞は北京で日本人留学生に中国語を教えた経験が豊富であったことがうかがえる。そして共著者の陸軍参謀本部の平岩道知は東京外国語学校の漢語科の学生であった。参謀本部から選ばれて1879年に北京に派遣された在學生12名のうちの一人である。彼らは北京で参謀本部の管理下で北京官話の勉強をし、1881年に帰国した。この平岩の北京留学時代に金国璞と平岩が知り合ったと思われる。

詠帰舎の一期生、青柳篤恒は金国璞について以下のように語っている。

「日本で苟も支那語をやったものに此の人の教を満更受けないものは蓋し一人もあるまいと思われるのは、我国から名誉の勲章までいただいている北京の人金国璞先生であつたらう。当時の高等商業学校附属外国語学校即ち今の東京外国語学校の支那語教師として文部省の聘に応じ、その東京に来るや、麹町の仮寓に僑居した。当時宮島大八先生の推輓を辱うして皇太后官職のつとめを拝辞し、新たに高等商業学校附属外国語学校支那語講師となっていた私は、母と二人の麻布の住居を引き払い、麹町なる金国璞先生の仮寓を距る数歩といつてもよいほど、その極く近間なところに引越して来た。初めての日本入りをした金先生の側に侍して及ばずながら朝夕のお世話を申し上げ、殊に既に老境に入られた先生の半蔵門から一ツ橋を経て外国語学校までの近からざる道の往復に必ずお供して、何事もないようにという大切な任務はあるものの、それと同時に、殆ど二六時中絶えず絶対に一句の日本語もわからない先生の側に侍して居るところから、まだ弱体な私の支那語の練習鍛練の上に、果たしてどれだけの恵まれたる力強い機会であつたことか！ 実に山王下と一ツ橋との間の日々の往復は、私の支那語実地練習に就いての火花を散らしての一大道場であつた」（「思い出づる支那語研究の懐古」『中国文学』第83号）

金国璞は来日時にはすでに中高年であつたらしい。また日本語はまったく話さなかつたということである。彼の授業については田中慶太郎が前出の「出版と支那語」で、「金国璞

の教えかたは、四声もすこしは注意したが、この先生のいうには、支那語は、歌でもならう気でやってくれというのです。この人は日本語はわからず、英語はすこしはいえました」と語っている。

日本語のできない金国璞であるが、平岩道知と共著で『談論新編』を編纂したほか、1902年には『支那交際往来公牘』、1903年には『士商叢談便覧』、『華言問答』、『官話指南改訂版』を文求堂から出版している。この文求堂の田中慶太郎は「出版と支那語」で金国璞を以下のように高く評価している。

「あのころは張廷彦さんでも金国璞さんでも、科学的ではなかったが、はっきりしたかかんがえをもっていた。それは、文章には「応世之文」と「伝世之文」がある。自分のやっている語学は「応世之文」であって、「伝世之文」はおのずから別である——こういう風にかんがえていた。これは一見識あることだとおもはれます」。

金国璞は1903年8月に帰国するが、その前に文部大臣、外務大臣の推薦により勲五等旭日章を受章している。残された記録や、当時在学していた人びとの回想をまとめた『北京同学会の回想』（那須清編 1995年 不二出版）によると、帰国後、金国璞は「支那語研究舎」の教員となった。この研究舎は東京外国語学校出身の山本滝四郎、上田三徳、古賀邦彦、林要五郎が発起人となって、在留邦人の清国研究者に対して、「清国近世の文章を教授し、かつ清国の制度習慣を研究すること」を目的として1903年に創設された。この支那語研究舎は1905年「清語同学会」と改称、1912年には清語がふさわしくないとして、「大日本支那語同学会」と改称、さらに1925年には「北京同学会」となる。この学校で金国璞は主任として『談論新編』、『官話指南』、『日漢英語言合璧』を担当していた。もともとこの学校は、金国璞が帰国するにあたり、「金先生養老の資に供した」のだという。学校の中に金国璞の住まいもあった。『北京同学会の回想』には、1910年には金国璞が「近来病気がちではあるにも拘わらず、熱心に出教せられ」というが記載ある。この後1911年に鄭永邦が公使館に赴任し、清語同学会臨時評議員会が招集されて会則改正及びその他の重要事項が議定された中に、金国璞の名もある。しかし、同書にもこの後10年間の学校の記録は掲載されていないので、金国璞の没年ははっきりしないままである。

一方、井上翠の『松濤自述』によると、「明治三十五、六年の頃松雲程先生の許で勉強していた際、時々宮島先生が談話に来られまして、わたしもよくそれに出合いました。その家は靖国神社の裏手で、金国璞、張廷彦両氏も同居されていました。（中略）先生はそのころ『急就篇』の編纂に従事されておられたので、それでしばしば張廷彦先生の所へ来られたのでしょう」という。1902年から3年にかけてのこの時期、東京外国語学校には松雲程、金国璞の二人がいて、善隣書院には張廷彦がいた。この三人はいっしょに住んでいたのであった。

張廷彦は1864年北京生まれ。1897年に高等商業学校に招かれて中国語を教え、善隣書院でも中国語を教えていたが翌年帰国、1900年に再来日し、陸軍大学校の専任講

師のほか、東京帝国大学文科大学漢文科で中国語を担当し、その他高等商業学校、善隣書院でも中国語を教えた。張廷彦は 1908 年に高等商業学校を、1909 年には東京外国語学校を辞した。張廷彦も多くの教本を編纂した。1904 年には『支那語動字用法』（文求堂）、1904 年には宮島大八の『官話急就篇』の校閲にその名が掲載され、さらにこの教本の末尾の「附・家庭常語」「応酬須知」を執筆し、これによって多くの人にその名を知られた。さらに同年『日清語入門』（文求堂）、1905 年には田中慶太郎と共著の『官話文法』（救堂書屋）、1906 年『動字分類大全』（文求堂）、1911 年『北京官話中外蒙求』（文求堂）、1918 年『三国選萃支那最新通用官話』（文求堂）、1919 年『普通官話新華言集』（文求堂）、1921 年『華語啓蒙』（文求堂）、『最新官話談論編』（文求堂）など実に多くの教本を編んでいる。しかし、昭和に入り『日華大辞典』の編纂をしている途中で 1929 年、ジフテリアのために日本で亡くなった。56 歳であった。東京帝国大学での勤務 30 年ということで、東京帝国大学支那文学科の有志によって葬儀が営まれたという。

張廷彦は 1918 年に東京帝国大学に入学した倉石武四郎を教えている。張廷彦が使ったテキストは『官話急就篇』であったが、倉石は第一高等学校時代に同級生に習って『官話急就篇』を暗記してしまっていたが、それを 1 年間かかって半分までいかないところまで進んだ、と倉石は回顧している。「当時陸軍大学校専任の先生でしたが、そのかたが毎週一回東京大学へも来てくださいました。(中略)二年目からはわたくしが唯一人の学生であったものですから、何を講義するかということになりますと、これは相談ずくというよりもわたくしが決め手しまったのです。つまりカリキュラムは学生であるわたくしが決める。(中略)たとえば『赤壁』あるいは『帰去来辞』であるとか、または『唐詩』、そういうものをわたくしが二部用意するわけです。」そのようにして倉石は大学 2、3 年生、大学院生になっても張廷彦を「独占」したと書いている（『中国語五十年』P14）。

当時の張廷彦の受け持ち学生は倉石一人だったということで、東京帝国大学では支那語の人気がなかった時期だろうが、熱心な学生を得た張廷彦は詩吟を披露したりしているし、自著『三国選萃』を倉石に贈呈している。

金国璞、張廷彦という二人の中国人教師は東京外国語学校、東京帝国大学で大きな足跡を残しつつ、宮島大八の善隣書院でも教鞭を執った。

1.3 大東文化学院

宮島は 1923 年(大正 12 年)に開校した大東文化大学の前身である大東文化学院の支那語の講師として設立申請書に名前が記載されている。⁵⁸講師として招聘された経緯に関する記録はないが、東洋文化学会のメンバーで、漢学振興運動の中心的人物であった早稲田大学教授・松平康国は、青年時代から宮島との親交があり、1898 年の善隣書院創立時の院長として「善隣書院主意書」にも名前が残っている。宮島は松平との関係で講師として申請書に名を連ねたものと思われる。

1921年3月、第44回帝国議会で「漢学振興ニ関スル建議案」が提出され、審議を経て1923年に可決、大東文化協会、大東文化学院の創設へと進行するが、1923年9月の関東大震災によって開講が遅れ、実際には1924年1月ようやく始業している。さらに設立後には大東文化学院内で官学派と私学派の紛争が起きて松平も一時辞職(のちに復職)する事態となった。1925年度の「担任表」によると、すでに宮島の名はなく、弟子であり、早稲田高等学院講師の渡俊治が支那語講師として掲載されている。⁵⁹実際に宮島が教鞭を執ったのかどうかは資料がなく、不明である。

1.4 詠帰舎・善隣書院

宮島は東京帝国大学、東京外国語学校で教鞭を執るかたわら、私塾「詠帰舎」とその後身である「善隣書院」で青少年たちに中国語と漢学の教育を行った。1897年、東京・麴町平河町の自宅に宮島が開いた詠帰舎は、宮島が清国留学を終え、師事する勝海舟を訪ねた時に勝が揮毫してくれた「詠而帰」から名付けられたものである。「詠而帰」は、『論語・先進篇』の中の一節、孔子の門人曾皙の言、「莫春者。春服既成。冠者五六人。童子六七人。浴乎沂。風乎舞雩。詠而帰。」(春四月ともなれば、春の装いに着かえ、若者五、六人、子供六、七人をひきつれて遊山に出、沂水の川で浴(ゆあみ)し、舞雩の広場で風に吹かれ、歌を口ずさみながら帰ってきましょう。)(現代語訳・宮崎市定)の一節で、「詠じて帰らん」という内容の揮毫である。宮島もこの言葉を大切にし、私塾の名とした。善隣書院と改称した後も、宮島は「詠帰廬主人」という号を使い続け、書には「詠士」の名を用いていた。

1.4.1 詠帰舎の教育

1895年5月に宮島が開いた私塾・詠帰舎は、1898年6月に善隣書院と改称するまでの3年間、中国語と漢文の教育を行った。この時代の資料は少ないが、一期生である青柳篤恒はその叔母が宮島の叔父である宮島季四郎に嫁いでいたという遠い姻戚関係から、宮島に勧められて詠帰舎で学ぶことになり、当時について以下のように語っている。

「麴町平河町角の邸宅の門に隣接した長屋建の家屋を塾舎に充てて『詠帰舎』と名づけられ、集まった七八名の塾生の中からは後の帝国博物館長杉榮三郎、満州国中央銀行副総裁山成喬六の諸氏があった。」(「思い出づる支那語研究の懐古」『中国文学』第83号)。杉榮三郎は岡山県出身、1900年に東京帝国大学法科大学を卒業し、服部宇之吉・東京帝国大学教授と同時に1902年、北京の京師大学堂に赴任し教習として1912年まで教鞭を執っている。山成喬六も岡山県出身、高等商業学校を経て大蔵省入省、台湾銀行理事を経て満州国中央銀行副総裁。岡山出身者の間にも、日清貿易研究所出身の白岩龍平⁶⁰が率いる中国関係のグループがあり、宮島の友人である白岩との関係で宮島の私塾に参加したのかもしれない。この時期、詠帰舎は夜学だけであり、青柳は青山御所で給仕をしてから夜詠帰舎に通っていたと書いている。ほかの学生たちも昼間は仕事か学校に通っていたと思われる。

詠帰舎の教師は「遼東から来た劉雨田と閻傳英両氏がよく来ました。わたくしは每晚そ

こへ行って、三人の方から支那語及び支那文学をならいました。」と岩村成允は「外交と支那語」(『中国文学』第 83 号) で書いている。また、田中慶太郎は「日清戦争後、宮島さんが劉雨田をつれて来られ、善隣書院なり、外国語学校なりの講師をしていました。この人は正科ではないが、漢文の棒読みを教えていました。わたしも頭をふりながら読むのをきいたので、すこしは覚えているわけです」と言っている(「出版と支那語」『中国文学』第 83 号)。

篠田正作の『日清戦争見聞録』(1895 年 明昇堂) によれば、劉雨田は 24 歳の時、日清戦争中に遼東・盛京省普蘭店で従軍していた外務省書記官・鄭永昌に会い、鄭永昌が明朝の鄭成功の子孫であると知り感激し、父とともに自らも明朝の遺臣であるとして黄金五百両、名馬五十頭などを大山巖陸軍大将に献じたという。鄭永昌について日本に渡り、日本に帰化した劉雨田は詠帰舎、東京外国語学校で教鞭を執った。朝日新聞 1898 年 6 月 27 日の朝刊三面には「帰化清人の近況」という記事があり、その中で劉の一家は「半島中有名なる富豪にて非常なる大地積を所有し金州城中にも二百戸以上の土地家屋を有し」ていたが、帰化したことで没収されそうになったため、劉が 1897 年に一時帰国したという記事がある。その記事でも劉は「宮島大八氏の支那語教授所に入り支那語学の教授を為し傍ら邦語の研究に従事し」とある。また 1900 年の善隣書院の支那語学校「学校規則」には劉雨田の肩書に陸軍大学校兼陸軍經理学校教授とあることから、陸軍大学校の教授として日本で生活していたことが分かる。閻傳英については資料がないが、上記の新聞記事に「馬公、張閻、閻の三名は大久保餘町に住み……」とあり、劉雨田とともに日清戦争時に帰化したものと思われる。

劉雨田が出会った鄭永昌は長崎唐通事・鄭永寧の息子であり、1874 年の「東京外国語学校官員並生徒一覧」⁶¹によると、「漢語下等部第一級」に名前が掲載されている第一期生。弟の永邦も東京外国語学校の第一期生(下等第三級)であり、1880 年には北京公使館の通訳見習いとなり、日清戦争では従軍通訳、1881 年には吳啓太とともに『官話指南』を編纂している。兄弟とも 1882 年に入学した宮島よりも年上であるが東京外国語学校の同窓であり、あるいは宮島が清国留学中に北京に滞在していた時期、面識があったかもしれない。いずれにせよ鄭が講師として推薦したのではないか。

詠帰舎では「教科書らしい教科書とてなく、英国の人サー・トーマス・ウェイド氏の『語言自邇集』と『文献自邇集』とを殆どそのままに模倣したというてもよい廣部精氏の著『亜細亞言語集』という書物一種より外にはなかった。」と青柳が「思い出づる支那語研究の懐古」のなかで書いている。

詠帰舎は、六角恒廣『漢語師家伝—中国語教育の先人たち』(1999 年 東方書店) によると、初年度 5 名だった学生も翌 1896 年には 23 名が入学、1897 年には 26 名が入学している。もともと詠帰舎は宮島の父・誠一郎の屋敷内に設けられていたため、夜学とはいえ手狭になったのかもしれない。あるいは学生が増えて、昼間にも授業を行う学校を設立する決心がついたのかもしれない。1898 年、宮島は善隣書院を立ち上げた。

1.4.2 善隣書院の教育

宮島は本格的に中国語と漢学の教育を行うことを決め、1898年「善隣書院主意書」と「創設善隣書院啓」を發表した。

「善隣書院主意書」は以下の通りである。

孔子ノ教天二本キテ入極ヲ立ツ、中正平易適ク所トシテ通セザルハナシ、阿直岐王仁ノ書契ヲ伝ヘシヨリ、歴代ノ天皇儒学ヲ崇ビ給ヒ、政令此ニ因テ成リ、応仁仁徳ノ深仁澤、延喜天曆ノ至治泰平ハ論ズル迄モナク、徳川氏二百年ノ驩虞亦皆儒教ノ効ニ非ズト謂フ可カラズ、顧フニ我国体民俗ノ美ハ、固有ニ属スルモノナルモ、儒教ノ之ト融化スルニ及ビ、綱常繫倫益、明ラカナルヲ致セリ、乃知ル我国道德ノ根底ハ實に儒教ニ存スルコトヲ。

維新以来西洋諸国ト交通スルニ至リ、世ヲ挙テ開物成務ニ急ナルヤ、趨新懐旧ノ極、儒教ハ迂腐固陋トシテ排斥セラレ、利用厚生ニ専ナルヤ、才知ヲ尊ミテ道德ヲ鄙ミ、格致ニ偏シテ正誠ヲ怠レリ、是ニ於テカ人多ク放縱自恣、廉恥ノ念名利ノ心ニ勝ツヲ能ハズ、争奪ノ意動モスレバ愛敬ノ情ヲ傷ケ、骨肉相閼ギ、師弟相謗リ、朋友相讎シ、隣里相訴フルモノ、日トシテ耳目ニ触レザルハナシ、嗚呼是レ西洋ノ文化ヲ取ルニ当リ、風俗ノ同異ヲ察セズ、政法ノ長短ヲ審理ニセズ、一意模倣、或ヒハ形ニ泥テ神ヲ遺シ或ハ物ニ偏シテ理ヲ失ヒ、以テ我国風民俗ヲ壞敗セシガ為ニ非ズヤ、而シテ其此ノ如キモノハ、我ニ教ノ據ベキモノナキノ致ス所ノミ、故ニ今ノ弊ヲ據ルベキモノナキノ致ス所ノミ、故ニ今ノ弊ヲ救ントセバ、教ヲ擇デ固ク之ヲ守ルニ如クハナシ、孔子ノ教本ト醇粹精美ニシテ一ノ疵病ナク、且進守卷放唯人ノ行フ所ニ由ル、後世ノ儒教ナルモノ、或ハ偏狭退讓ニ失シ、迂疎固陋ノ職ヲ貽ス如キ、皆之レヲ奉ズルモノ其真意ニ達スル能ハザルノ過ニシテ、固ヨリ教ノ失ト云フベカラザルナリ、況乎我

列聖崇遵ノ意ニ副ヒ、国民忠孝ノ質ニ適シ、二千年来素養ノ在ル所、成績ノ著ハルル所、據テ以テ益、其根底ヲ鞏固ナラシムベキ者、孔子ノ教ヲ措テ他ニ求ムベカラザルオヤ夫レ道ノ大本天ヨリ出ヅ、固ニ万世易ユベカラザルモノナリ、而シテ其之レヲ發揮スル所以ノ者ハ、弧リ變通シテ宜シキヲ得ルヲ尚ブ、今ノ時孔子ノ時ト相距ル数千年、時殊ナレバ事モ亦異ナラザルコトヲ得ズ、若シ徒ニ形迹ニ拘泥シ、膠柱刻舟ノ行ニ類スル如キハ、何ゾ道ニ称フニ足タランヤ、今ヤ風氣ノ開クル所、世上百般ノ學術、之ヲ講究スルニ於テ其便ヲ得ザルナシ、宜ク遍ク天下ノ知識ヲ求メ、博覽宏通シテ益博大精微ノ旨ヲ究ムルベシ、其レ然後道德ノ流行モ亦益ス其遠キヲ致サン、是亦吾人今ノ世ニ生ルノ幸福ニシテ、宜ク任ズベキノ責任ナルコトヲ信ズ、故ニ今同志相謀リ、本院ヲ創シテ以テ講習ノ所トナス

世界ノ間其何ノ洲タルヲ問ハズ、凡国ヲ建ルモノ皆我興国ナリ、我子リ親疎ヲ其間ニ挟ムベキノ理ナレ、然レドモ地近キ者ハ情通事ジ易ク、交久シキモノハ志孚ナリ易シ、況

ヤ同文同種利害モ亦相関スル清国ノ如キ、吾人情ニ於テ豈ニ親ヲ加フルナキヲ得ムヤ、蓋彼国民ノ孔教ヲ信ズル極メテ篤ク、四百州聖廟ヲ設ケザル所ナク、其典礼ト曰ヒ、風俗ト曰ヒ、一ニ孔教ヲ以テ本トナス、亦以テ其深く肺腑ニ入ルヲ知ルニ足レリ、蓋シ其一大民俗トシテ宇内ニ立ツ所ノモノ、実に名教ノ其社会ヲ統一スルノ力ニ由ラズンバアラズ、夫レ一日孔教ナキハ則、清国ナキナリ、清国ナキハ則、又支那ナキナリ、謂ツベシ孔教ハ清国ノ根本ニシテ孔教ノ消長ハ支那存亡ノ関スル所、抑亦垂細垂盛衰ノ繫ル所ナリト、今ヤ清国其氣運ヲ鑿ミ、革新ヲ図リ、盛ニ泰西ノ学ヲ講ズルニ方リ、吾人ハ宜シク之レヲ助ケテ新学ヲ開カシムルコト共ニ、益其固有ノ学問ヲ勉メシメ、以テ大ニ東方ノ根本ヲ鞏固ナラシメンコトヲ期セザル可カラズ

夫レ吾邦ノ西学ニ潜心スル已ニ数十年、其利害得失ノ関スル所、討盡講究セザルナシ、今ヤ隣国ノ艱難ニ處ス、宜シク親切誘掖シテ我が得ル所ニ察セシメ、失フ所ニ鑑ミシムベシ、是亦同洲ノ情已マント欲シテ能ハザルモノナリ、矧ンヤ大局ヲ重ンジ、小嫌ヲ捨テ、学生ヲ派シテ我レニ学バシメントスルムニ至レルオヤ、是レ本院ガ彼ノ子弟ノ為ニ分席シテ待ツ所以ニシテ、亦実ニ教ヲ重ンズルノ致ス所、語ニ曰ク善隣親賢国ノ寶トナスト、蓋隣国ノ為メニ謀テ始ヲ慎ミ遠ヲ慮リ、利ヲ興シ害ニ遠ザカリ、其子弟ヲ教育シテ、国家ニ忠ナラシム、此ノ如キモノ庶幾ハ善隣ノ意ヲ得ンカ、天下ノ賢士ヲ聘シ学生ヲシテ親ク其薫陶ヲ受ケシメ、道德ヲ崇ビ、名教ヲ維持スルニカメシム、此ノ如キモノ庶幾ハ親賢ノ実ヲ得ンカ、蓋シ吾人ノ此ニ心ヲ盡シカヲ致ス所以ノモノハ、亦聊カ 聖明ノ治ニ報ジ、国宝ヲ増サントスルノ微衷ニ過ギザルノミ

東方問題の起レルヨリ有、志ノ士相尋テ起チ、政治ニ貿易ニ各自社ヲ結び会ヲ設ケ、大イニ為スアルヲ期ス、是皆今ノ時勢ニ於テ少クベカラザルモノ蓋往将ニ大ニ其効ヲ見ルアラントス、而トテ本院ノ期スル所、一ニ學術ノ講究ヲ主トシ、徳性ト知識ヲ發達シ、人材ヲ養成スルニ在リ、大方ノ君子幸ニ多ヲ責ルコトナク、微衷ヲ諒シテ、賛成スル所アラバ、幸甚矣、

明治三十一年九月

善隣書院謹啓

宮島は上記の『趣意書』で、儒教こそが日本社会の基盤としてきたものであるとして、儒教的思想を前面に打ち出した。明治維新以来儒教を古くさいものとして遠ざけ、西洋のものを善し悪しに関係なく取り入れた結果、道德や精神的なものが軽視されていると嘆いている。さらに、形式にはこだわることなく天下の知識を求めるべきなので、そのために同志と善隣書院を設立するとしている。また、中国は儒教により成り立っていて、アジアの盛衰も儒教によるとして、清国からの留学生を受けて入れ「善隣親賢国ノ宝トナス」としている。そして、善隣書院の目的はまず學術の講究、さらに徳性と知識を育成して人材を養成することだとしている。

同時に漢文による「創設善隣書院啓」も出されており、こちらは「首創員 宮島大八」と「賛成員 張澹」の名が記載されているが、内容は前述の「善隣書院主意書」とほぼ同

じである。設立当初の善隣書院では、中国語を宮島と長瀬鳳輔⁶²が教え、漢学を松平康国らが教えた。

また、1901年に出された『支那語学校講義録』の「初学者心得」には、「語言の学たるや、師伝口授あつてすら、猶且成功を難とす。況んや講義録によって之が成功を期せんとするは蓋し容易の業にあらじ、然れども方今支那語の必要なる、人之を説かざるなし、而して講修の道備らず、徒に志を懐て達する能ざる者多きを想えば、吾人は情に於て遂に黙視するに忍びず、是れ講義録を發行す所以なり」と記している。明治後期の中国語ブームが起きている中、学習意欲の高い人たちに何とか中国語を教授したいという宮島の気持ちが表れている。

1.4.3 支那語学校

善隣書院は1900年11月から神田に支那語学校を設立し、中国語教育部門を一時独立させた。1900年10月1日の朝日新聞朝刊八面の広告では「支那語学別科生募集 善隣書院」となっているが、1カ月後の1900年11月11日の朝日新聞朝刊四面には「当書院従来支那語学部を設置支那語教授致し事候所目下生徒逐増員に付茲に同部を増張し支那語学校を設立致候此段広告す」と掲載した。

この広告では、「校長 長谷川雄太郎⁶³、教頭 宮島大八」となっている。さらに「講師」として、金国璞、張廷彦、于冲漢、夏循愷、張孝移、黎淵、劉雨田、青柳篤恒、宮島吉敏、佐藤長次郎、中島比多吉、福崎三次郎、このほか、夏偕復、王世挙、岡本正文の諸氏は翻訳添削、小越平陸氏は地理講義を担当するとある。夏循愷は高等商業学校の講師で清朝の工部主事を経て日本に留学し1899年から1901年まで留日学生総監督を務め、民国時代にはニューヨーク総領事。張孝移は東京外国語学校の講師である。宮島吉敏、佐藤長次郎は陸軍大学校の講師、中島比多吉は東京専門学校漢語講師、福崎三次郎は陸軍経理学校漢語講師である。岡本正文は再開校後の1900年に東京外国語学校を卒業しすぐに同校の助教授となった。小越平陸は勝海舟の知遇を得て中国大陸に渡った探検家。その他黎淵と王世挙については資料が見つからないが、黎淵は『支那語学校講義録』では「四川紀行」を執筆している。于冲漢については次章で紹介するが、いずれも当代一流の講師たちが揃っていた。

1901年3月23日付朝日新聞朝刊3面には「支那語学校」という見出しの記事が掲載されており、「神田錦町三丁目十番地に設立せる支那語学校は善隣書院の事業として同院長宮島大八氏が其の同士と共に経営せる所なるが来る四月新学年と同時に更に生徒を募集し且つ地方にありて語学修学の不便を感じる者の為め講義録を發行する筈なりと云う」と書かれている。この記事の後の4月の入学者は118名と大幅に増えた。

宮島は1901年5月発行の『支那語学校講義録』の第一号の「初学者心得」に

一 初学者は首に官話入門に依りて、言語の組織を知るを要す

一 入門に次て普通会話問答を誦すべし

一 次に音声門の発音、第一、第二、及び四声を熟習すべし

以上列記せる三種の外は、校内生正科及研究科の講義に係る者なれば、初学者にあつては之を参考に供するに止め、必ずしも初より練習するの勞を用いざるべし、但し他日に至り、自修の程度を測り、その何門何種の練習若くは参考すべきを注意すべし。

と書いている。宮島が担当した「講義録」の内容は、「官話入門」（単語の後に短句の並んでいる形式）、「普通会話」、「日常問答」、そして「音声門」、「発音」があり、まず最初に、「支那語の最も緊要とするは、発音にあり」として、発音の重要性を第一に挙げている。

この支那語学校がいつまで存続したのかははっきりしない。1901年11月10日付朝日新聞朝刊七面の広告では「支那語学校外生募集 講義録第四号既刊」とあるが、住所は神田ではなく「麹町区平河町 善隣書院」となっている。あるいは長谷川雄太郎が広州から帰国しなかったことが原因で、神田の支那語学校を閉じて善隣書院へと復帰したのかもしれない。支那語学校では広告のとおり校外生のための講義録を発行したが、1901年5月に第一号、その後1902年2月に第七号が出ており、そこまでは六角恒廣編『中国語教本類集成』に収録されているが、それ以降の号は残されていない。

講義録に執筆者が記載されている第二号、第六号、第七号を見ると、「官話」が宮島、「商業会話」が張廷彦、「経済論」が金国璞、「天津報告」が佐藤長次郎、「清国地理述」が小越平陸となっており、宮島、金国璞、張廷彦による講義が中心となっている。

また、1918年4月から1919年7月までの間、再度、善隣書院から『支那語講義録』が第1号から第12号まで出されている。これも校外生のためのテキストである。第1号の「通信教授規則」によると、毎月1号、1年間で完結するとあり、いつでも開始することができるとしている。このテキストは1901年のものと構成が異なり、担当者別に講義が12部門に分れており、修了後には各講義別に合本できるよう表紙も入っている。1918年5月27日付朝日新聞朝刊6面には「出版界」という新刊書の紹介コーナーがあり、そこには「支那語文の大家たる善隣書院長宮島大八氏の監修に係る本講義録は其の内容発音、会話、語法、書簡文、新聞読法、時文、翻訳、小説等の各講義に分かれ何れも従来の陳腐たる教授法を改め現代の新用語等に注意し時代の進歩に伴うよう……」と紹介されている。

1.4.4 善隣書院の授業

1898年から善隣書院ではどのような授業が行われていたのか、資料は多くないものの、中国語の教科書としては宮島による『官話輯要』（1897年）、『官話篇』（1903年）、『官話急就篇』（1904年）が使われたはずである。講師の顔ぶれから、東京外国語学校の授業

と同様に、『日漢英語言合璧』、『官話指南』、『官話急就篇』、『生財大道』なども使われていたと推測できる。また、『支那語学校講義録』の内容から、「官話」の授業のほか、『児女英雄伝』などの小説、漢詩、商業会話、経済論、翻訳などの授業も置かれていたと考えられる。

善隣書院は1903年6月8日付朝日新聞朝刊八面に「支那語学校生徒募集 限定三十名 六月二十日始業」という広告を掲載、1906年9月19日付朝日新聞朝刊第七面には「支那語生徒募集」として「十月八日より新学期」と掲載している。しかし、その1カ月後の10月21日には「臨時 支那語速成科募集 芝櫻川町 善隣書院分校」という広告が同紙に掲載されていることから、日露戦争後の中国語ブームによって一時的に分校が設置されていたと考えられる。

さらに1908年3月30日の同紙には「出身者一同宮島氏の師恩に報いるため記念として 抛金し新校舎を紀尾井町に建設し四月より大に校務を拡張する由授業時間は専ら余暇勉学者の利を計り毎日午後六時より午後八時迄なり」という記事が掲載されている。卒業生たちが宮島に洋館の新校舎を寄贈したのである。この洋館は1923年の関東大震災にも耐え、1976年に善隣書院が代々木の善隣ビルに移転するまで70年近く使用された。

1918年から19年まで12号が発行された『支那語講義録』では、「主幹 宮島大八」のほか、講師には「陸軍士官学校附陸軍教授 池田良策、東京外国語学校教師 包象寅（翻訳）、拓殖大学講師 速水一孔（支那新聞読法/支那事情）、東京帝国大学文科大学講師 陸軍大学校講師 張廷彦、法学士 何盛三、陸軍経理学校附陸軍教授 東京外国語学校講師 神谷衡平（支那小説）、中島竦（時文/清朝史談）、陸軍士官学校附陸軍教授 宇佐美右之（時文）、陸軍大学校附陸軍教授 日本大学講師 宮島吉敏（語法）、早稲田實業学校講師 関菊麿」と紹介されている。1901年の講師陣と比較すると、宮島吉敏、張廷彦以外は入れ替わっている。この講義録からは善隣書院の授業の一端を垣間見ることができる。宮島はこのなかで「会話講義」と「書簡文講義」を担当している。宮島のこの講義の内容は1921年に出版された『支那語会話篇』に生かされている。

また、1919年9月4日の同紙新聞広告には、「速成科四ヶ月、補助科四ヶ月、研究科1カ年」というコースが初めて記載された。この3コースは1923年までの新聞広告のなかに掲載されている。

この時期の宮島に対する評価として、1926年の外務省の報告書に宮島に関する記載がある。⁶⁴ 中華実践学校という雲南省出身の李長春が校長を務める中国人留学生のための大学予備校についての外務省の漢口総領事・高尾亨による報告書であるが、この学校の経営維持のため日本の有志が援助しており、そこには白岩龍平や速水一孔とともに宮島大八の名も挙げられており、「宮島大八は東京に於て日支の間に貢献すること少なからず 自力を以て経営せる善隣書院の如き開校以来已に二十数年を経過せるも未だ曾て物質上の補助を人に求めず」とあり、宮島を高く評価している。

また、中村久一郎『現代日本における支那学研究の実状』（1928年 外務省文化事業部）の記載によれば、善隣書院は1922年に漢文科を新設したとされている。1928年の組織は「一、研究科 無期限 甲班修了者を収容す 二、甲班 六ヶ月修了 乙班修了者を及び同程度のものを収容す 三、乙班 六ヶ月修了 初歩より 四、時文科 合併教授 五、漢文科 一般有志者に講授す」となっている。当時の講師は宮島大八のほか、中島竦、浅井新太郎、宇佐美右之、武田寧信、宮島吉敏、湯原桃雄、岡本吉之助、包象寅、李長春というメンバーで構成されている。1918年の講師陣と比べると、半数ほど入れ替わっている。

井上翠は『松濤自述』のなかで、「少年のころから支那に留学して、張濂卿に師事し、四書五経を支那音から鍛え上げたのは、当時では広い日本に先生一人だということでした。東京外国語学校に勤められた時分、その国士風の人格は、学生の欣慕の的になっていましたが、在勤年月は大へん短かったようです。先生は清廉潔白で、善隣書院の経営維持には、莫大な私財を注ぎこまれました。『急就篇』の印税などは、それに役立てられたのでしよう。外務省から多額の補助金を支給されたと聞きますが、さもあるべきことであります。」と宮島を回顧している。

宮島にとって善隣書院の経営は私財を投げうっての一大事業であったようだ。しかし、善隣書院は宮島にとって、中国語を学び、さらに漢学つまり儒教思想を学んで人格を陶冶することによって、中国と日本の掛け橋となる人材を育てる場所であり、単なる語学学校ではなかった。漢語学所から東京外国語学校へと移っていく官立学校の実務的人材養成とはあくまで一線を画した教育を行うことが、宮島が民間にこだわり、官職に就かなかった理由であろう。

1.4.5 出版助成金の給付

井上翠の『松濤自述』にある、「外務省から多額の補助金を支給された」件について、資料に基づいて以下に補足する。

善隣書院は1933～1934（昭和8～9年）年の2年間（第1回申請）と1937～1938年（昭和12～13年）の2年間（第2回申請）、外務省から「支那語教科書編纂事業助成」（出版助成金）を給付されている。⁶⁵ 宮島の署名がある1933年の外務大臣・内田康哉宛の助成申請書には以下のように記載されている。

「本書院は明治二十八年の創立の係り今日に至る迄支那語関係の人才を世に出すこと既に一千余名の多きに上り候處 近年日支、日満間の関係密接且つ多端となれるに従い益々此種人材養成の必要を痛感致候 本院茲に鑑みるところあり 従来本院に於て初級者用の支那語教科書として使用し居りたる当書院長宮島大八著『急就篇』の全般的改訂を行い尚お此機会に中等程度用の『続急就篇』及び更に高級程度用の『官話篇』を編纂し当書院学生の用に供するはもちろん広く国内各方面に提供して支那語学習者の便に資せんと計画し斯学の専門家数名に嘱し編纂に着手したるが之が完成に二カ年を要し且つ多額の経費を要し限りある本院の経費を以てしては負担重きに過ぎ候に付本事業の趣旨に御賛同の上昭和

八九年度に於て各金弍千五百円合計金五千円を御補助相仰度別紙本事業計画書及び同予算書相添え此段奉願候也」

さらに事業計画書は以下の通り。

「第一年度（昭和八年度）

(一) 初学者用支那語教科書 「急就篇」

(初版二百頁位のもの)

右編纂完了の見込

(二) 中等程度支那語教科書 「続急就篇」

(初版百頁位のもの)

右編纂資料の蒐集及整理

第二年度（昭和九年度）

(一) 「続急就篇」

右編纂完了の見込

(二) 高級程度支那語教科書 「官話篇」

(初版百五十頁のもの)

右編纂資料の蒐集及整理並に之が編纂完了の見込」

予算書も添付されており、「編纂担当学者七名に対する手当年額四千二百円（但一名に付各月五拾円）」と、「写字生二名に対する手当年額七百元（但一名に付各月参拾円）」と、「筆墨其他雑費金三百六十円」で合計 5260 円としている。また、決算書では、『訂正急就篇』（『急就篇』のこと）五千冊印刷したとなっている。

これに対して外務省文化事業部はこれを決済し、給付の指令書を交付している。決済書には「善隣書院は創立旧く支那語学界の大家を網羅し居るを以て相当権威ある教科書を編纂し得く本書発表の暁には支那語学習者を裨益する」とこの出版事業を有意義だとしている。

翌1934年にも再度申請書が出されているが、添付されている計画書には、『急就篇総譯』は印刷中、『続急就篇』は編纂終了、『官話篇』も編纂終了と記されている。

さらに第二回申請の1936～1937年（昭和11～12年）では、『続急就篇』と『官話篇』の刊行、そして『羅馬字急就篇』の編纂と刊行を計画している。しかし、第一回申請とは異なり、詳細な予算書と決算書も添付されている。1936年度と37年度予算書では、収入が「政府助成金」が2500円、借入金が2780円となっている。編纂事業費が4200円、事務員費が720円、筆紙墨其の他雑費として360円、合計5280円である。備考として、借入金は寄付金と教科書の売り上げ収入を充てるとしている。⁶⁶

また、この助成金を受けるに当って、「編纂担当学者」に編纂を依頼したわけだが、そのメンバーは第一回申請では、宮島吉敏（陸軍大学校講師）、浅井新太郎（陸軍大学校講師）、湯原桃雄、武田寧信（陸軍大学校講師）、岡本吉之助（陸軍大学校講師）の5名が月額50

円、そして写字生として関菊麿（早稲田実業学校講師、のちに陸軍関東義勇軍中尉）が月額 30 円の「手当」を受け取っている。第二回申請では、宮島吉敏、浅井新太郎、宮島貞亮、岡本吉之助、鈴木吉武の 5 名が月額 40 円、書記の田口丈輔が月額 20 円の「手当」を受け取っている。当時は一流商社の月給が平均 100 円であり、それが裕福な生活を現わす指標であったというから、編纂の手当としてはかなり高額であるといえる。

ほかに善隣書院が助成金を給付された記録はなく、この 2 件の出版助成金の申請から、1929 年の世界恐慌の影響を受けて 1930 年から始まった昭和恐慌により、善隣書院の経営がかなり厳しくなったことがうかがえる。昭和恐慌では企業倒産が相次いで失業者が急増し、農村も凶作で困窮した。入学者が集まりにくい状況になっていたのではないだろうか。

この助成金の対象となっている事業内容を検証すると、『続急就篇』の編纂は例文収集から始めるので手間がかかるものの、『急就篇』の改訂、『急就篇総譯』、『羅馬字急就篇』の編纂は 5 人の専門家が 1 年間かけて行うほどの作業の分量ではない。『急就篇』は『官話急就篇』の改訂であり、元の教本がある。あとの 2 冊は『急就篇』の日本語訳と発音をウェイド式で表すだけであり、宮島一人でも十分可能と思われる。あるいはウェイド式ローマ字を付ける作業は「書記」でも十分に行える作業である。印刷その他の諸経費は当然支払いが伴うため、助成金が必要だったかもしれないが、講師たちへの「手当」が善隣書院の給与代わりに支払われた可能性は高い。しかし、これらの「専門家」はほとんどが陸軍大学校の講師、つまり公務員であるから、昭和恐慌の影響はほとんど受けなかったとも考えられる。つまり、実際には支払われなかったという可能性も排除できない。40 年にわたり宮島が私財を投じて経営してきたという善隣書院であったが、宮島の晩年には学院の維持費そのものが不足していたのかもしれない。

第二節 同時代の中国語教本

本節では、宮島が影響を受けたと考えられる代表的な教本について紹介する。特に、宮島が学んだ当時の興亜会支那語学校と東京外国語学校で使われた教本、さらに宮島が留学から帰国した後、教師となって詠帰舎、善隣書院、東京外国語学校で使用した教本について、その内容を紹介する。

2.1 『語言自彙集』と廣部精の教本

宮島が北京官話を最初に学んだ興亜会支那語学校で使われたのは『新校語言自彙集 散語之部』（1880 年 4 月 慶應義塾出版社）である。編者は興亜会支那語学校となっており、個人名は入っていないが、興亜会支那語学校設立とともに講師に招かれた廣部精の手によるものと推測できる。

その理由として、『新校語言自彙集 散語の部』は廣部によって 1879 年に編纂された『亜細亜言語集 支那官話部』の「散語」40 章の部分を取り上げたものであるからだ。一

課1ページでまず最初に漢字が20数個、ウェイド式の発音記号とともに挙げられており、その左側にはその漢字を使った語句が、やや小さい文字で列挙されている。



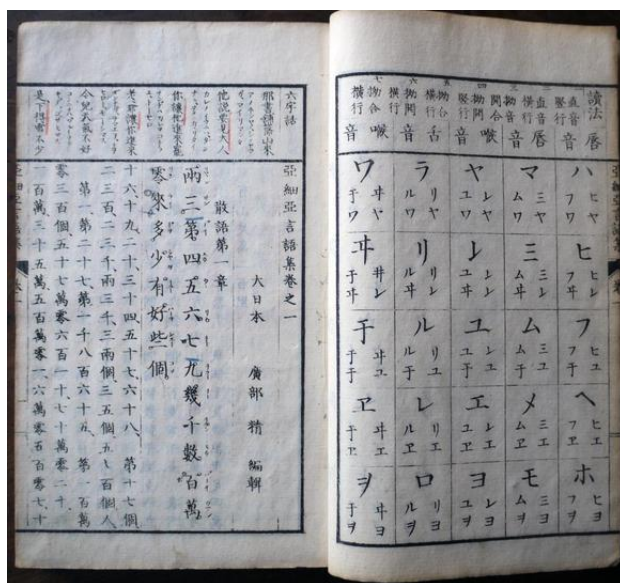
(一之章十四語散)

兩三第四五六七八九幾千數百萬零來多少有好些個
 十六十九二十三十四五十七六十八，第十七個二十三百二十三千三百三
 百三第百五十七萬零六百一十七十萬零二十，一百萬三十五萬五百萬
 零一六萬零五百零七十四，七萬零一百九十一千九百九十六萬一千五
 萬零八十八九萬八千四百零二千零五萬九千零七十二八千三百六十七
 一萬零六千一百零三，一百一十八二百五十四九百九十九萬三千。有幾
 個人來有些個人有好些個人有多少人來五萬多。數十個幾十個十幾個
 兩個幾個二十多八九個十幾個十幾個九個十個二百多五千多。長三十
 四一身一口五斤半肉六斤半肉幾斤魚。七斗幾子九斗米一斗幾子。幾
 個牙幾幾萬三四萬里打是高二百更。

ヨリヒレムルノ意ニ背カザランコトヲ是
 レ本校此書ヲ印刷スルノ旨也
 興亞會
 支那語學校識
 明治十三年四月

(国立国会図書館近代デジタルライブラリーより)

さらに同時期に廣部によって編まれた『亜細亞言語集 支那官話部』では、「散語」20章分の課文の上の欄外の部分に「六字話」として語句、短文を掲載し、日本語訳も付されている。



(神戸大学附属図書館展示品目デジタル版より)

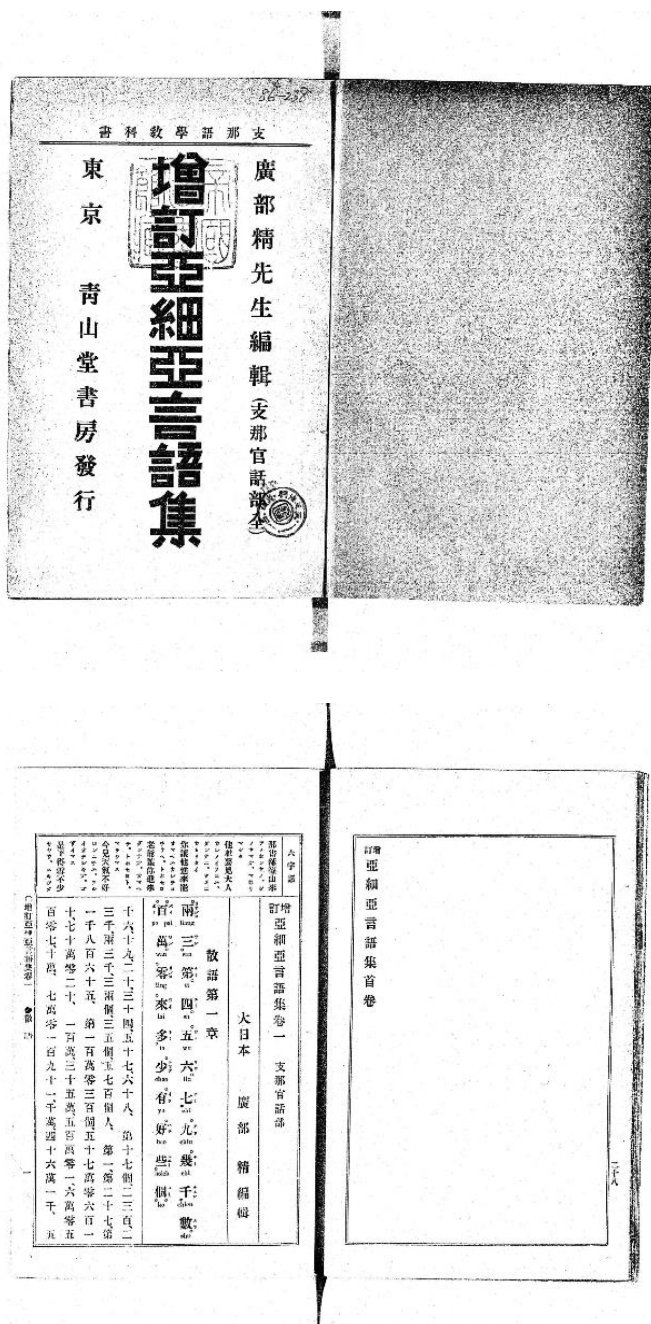
『亜細亞言語集 支那官話部』(1879~1880年 青山堂)の構成は以下のとおりである。

- 卷一 (王治本 廣部精) 凡例 音表 散語四十章 散語四十章適譯
- 卷二 (龔恩祿) 続散語十八章 常言
- 卷三 (敬字中邨正直) 問答十章
- 卷四 (劉世安) 談論五十章
- 卷五 続談論五十二章
- 卷六 例言 (廣部精) 平仄篇

卷七 言語例略十五段

(巻一は 1879 年、巻二以降は 1880 年刊行)

また廣部精は 1902 年にも『増訂亜細亞言語集』(青山堂書房)を編纂しているが、これは『亜細亞言語集 支那官話部』に「発音の部」を 20 ページ追加、さらに日本語の訳注が追加されている。

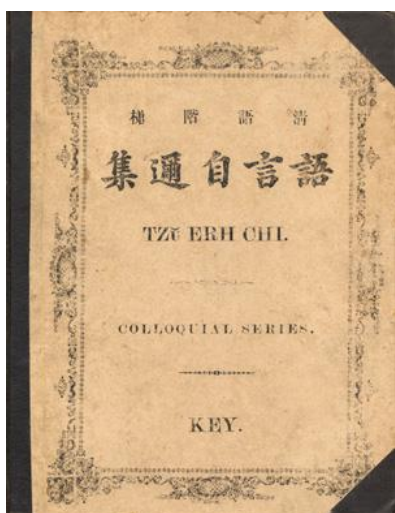


(国会図書館近代デジタルライブラリーより)

この廣部精による『亜細亞言語集』はもともと英国人の北京駐在公使であったトーマス・

ウェイド (Thomas Francis Wade 1818~1895) が北京公使館の書記官時代に編纂した『語言自邇集』を底本としたもので、初版全四冊の刊行は 1867 年であった。その構成は、第一巻の第一章は発音、第二章は部首、第三章は散語 40 章、第四章は問答 10 章、第五章は続散語 18 章、第六章は談論篇 100 章、第七章は声調練習、第八章は言語例略となっている。

『新校語言自邇集 散語之部』や『亜細亜言語集 支那官話部』の言語について、内田慶市『文化交渉学と言語接触—中国言語学における周縁からのアプローチ—』(2010 年 関西大学出版部) では「廣部精が (ウェイドによる早期の教本) 『問答篇』を見ていた事実はほぼ疑いのないものである」と、『亜細亜言語集 支那官話部』は『語言自邇集』より『問答篇』を底本としていたことを証明している。



(神戸附属大学図書館展示品目デジタル版より)

トーマス・ウェイドの『語言自邇集』編纂までの二十数年間にわたる道のりは高田時雄「トーマス・ウェイドと北京語の勝利」(『西洋近代文明と中華世界』2001 年 京都大学出版会) で詳述されている。高田は「全体を見ると、結局『語言自邇集』の中で最も中心になっているのは「談論篇」であると思われる。これは『自邇集』各版を通じて変わらず用いられ、もっとも大きな分量を占めている部分でもある。「談論篇」百章は、繰り返すように『問答篇』に由来するのだが、応龍田がウェイドのために、この材料を用意したとき、実は満州語会話教本である『清文指要』(*Manju gisun-i oyonggo jori-i bithe*) の漢語部分を利用しているのである」とし、北京語教本が満州語の会話教本から取材された例文を用いていることは「きわめて興味深い」としている。

また、中嶋幹起によると、漢語と満州語のテキスト『*Tanggu Meyen*』(『壹百条』、『清話百条』、『清字百条』1750 年頃) に初出している「君はこれから満州語を学ぶと言う、とてもいいことだね」という師弟間の問答は、その後、『清文指要』(1809 年) に再録、さらに『語言自邇集』に引き継がれた。満漢合璧本である『庸言知旨』(1819 年) にも同じモ

チーフの対話文が収録されており、「トーマス・F・ウェイドは『語言自邇集』を編纂するに当たり、各種の満州語対話集を参考にしていたことに疑いはない」（「はじめに満州語研究ありき」『東方』392号 2013年10月 P4～5）と結論付けている。

内田2000でも、「いずれにせよ、特に『語言自邇集』の「談論篇」と『續散語十八章』の成立過程は次のようになる。『清話百条』（1750）→『清文指要』（1809）→『問答篇』（1860）→『語言自邇集談論篇百章』（1867）」（「“您”に関わることがら」『関西大学文学論集』第50巻第2号）としている。

前出の内田『文化交渉学と言語接触—中国言語学における周縁からのアプローチ—』でも、『語言自邇集』の成書過程について、『問答篇』のテキストの順序から考えると、おそらくは『初學指南』、『三合語録』を直接の底本にしたと考えられる」との結論が得られている。

『語言自邇集』までは確実な北京語の教本は全く存在しなかったという高田の結論を前提とすれば、もちろんこの教本は近代中国語研究の上で大きな価値を持っているといえる。さらに、特に教本としての構成に注目するならば、この『語言自邇集』で用いられている「散語」「問答」「談論」という構成そのものが、明治以降日本で編纂された教本にそのまま使われていることは注目に値する。つまり、この構成そのものが満州語の教本からも流用されている可能性もあるのではないか。というのは、「散語」は『漢語大詞典』（1990年第一版 漢語大詞典出版社）では、「①散文、②随意而談」とあり、教本で使われている「散語」の「語句」という意味をもともと持っていないからである。

2.2 宮島大八が使用した教本

宮島が中国語教師として、詠帰舎、善隣書院、東京帝国大学、東京外国語学校で教鞭を執った際に使用した教本としては、『日漢英語言合璧』、『談論新編』、『生財大道』の3冊だけが青柳篤恒、田中慶太郎、何盛三によって記録に残されている。この3冊は確実に使われたと思われる。以下にその内容についてまとめる。

2.2.1 『日漢英語言合璧』

『日漢英語言合璧』は1888年に呉大五郎と鄭永邦によって編纂され、鄭の兄である永慶の可否茶館によって出版された、初級向けのテキストである。編者の鄭永邦も呉大五郎も旧長崎唐通事の子弟で、北京公使館で通弁見習として北京官話を学んだ。呉大五郎は『官話指南』を鄭永邦と共編した呉啓太の弟である。編者の「自序」によると、「我国に於て支那語を学ぶに亜細亜言語集一書あるに止り、尚且完備したるものに非らず。其他二三の語学書無きに非ざるも、我国現今勤学の道絶え、空しく志を抱て果さざるものあれば、亦痛嘆するに堪えたり。」とある。この時期、1886年に東京外国語学校が廃校となり、国内で中国語を学べる学校はほとんどなかった。そのため、この書を刊行して「貿易事業と共に鋭意奮励せられんことを望む」、つまりビジネス、貿易に役立ててほしいとしている。

また校閲者の島田胤則⁶⁷による序文には、北京公使館で呉と鄭に英語も学ぶようにアド

バイスし、二人は奮起して英語を学んだとある。英語の専門家である島田の校閲を経ており、教本の信頼性も高くなった。また、出版した可否茶館の主で鄭永邦の兄・永慶は米国の大学に留学しており、英語の力は島田よりも高かったに違いない。

第一部は単語。日本語では「数目」、「序次数目」、「時刻」、「七曜日」、「暦月」、「四季」、「方角」、「天文」、「地理」、「人倫」、「身体」、「家屋」、「家具」、「衣服」、「文具」、「馬具」、「食事」、「果物」、「野菜」、「走獸」、「飛禽」、「魚」、「昆虫」、「市府」、「旅立」、「職業」、「色」、「金石」、「薬劑」、「病名」、「貿易品」の項目に分けられている。

第二部は「短句」。第一節では形容詞、第二節では応酬、第三節では動詞述語文、第四節では疑問文である。

第三部は「会話」。「乗船」、「航海」、「税関にて」、「宿屋にて」、「朝飯」、「夕飯」、「払勘定」、「鉄道」、「訪問」、「郵便局」、「書肆（ほんや）」、「裁縫店（したてや）」、「料理屋」、「医師」、「英語」、「時計屋」、「靴肆（くつや）」、「道を尋ねる事」、「人を尋ねる事」、「呉服屋」、「暇乞い」、「時間」、「春」、「夏」、「秋」、「冬」、「歳」、「散歩」、「手紙を書く事」、「理髪店」、「茶商会話」となっている。

1888年の編纂であるから、『官話指南』初版（1881年）から6年、この時期は明治初期の中国語ブームも去り、刊行された中国語教本は少なく、陸軍大学校の福島安正による『自邇集平仄篇 四声聯珠』（1886年 陸軍文庫）、瓊浦揮肅の『華語跬歩』（1886年 未定稿）くらいしか出ていない。出回っている教本は『亜細亜言語集 支那官話部』、『官話指南』など限られていた。その中で、この『日漢英語言合璧』は横書きであり、また外来語が多く、会話の場面もハイカラな教本である点が異彩を放っている。例えば“湯”「ソップ」、「咖啡」「カヒイ」、「熟哥刺」「チョコレート」、「三便酒」「シャンペイン酒」、「毡子」「フランケット」などは同時代の教本には現れていない。また「会話」では、レストランで「オムレットが欲しい」、「ローストビーフを召し上がりますか」など、あくまで英語がベースになっており、ホテルで提供している新聞名も「ガゼット」、「ヘラルド」、「申報」となっている。

しかし、ビジネスの場面は第三部の最後の「茶商会話」だけであり、「自序」に、日本人にはとても清国人の商売方法はまねはできない、清国に行って商売をするには支那語ができなければだめだ、とあるわりには、ビジネスの場面より買い物や旅の場面が多くなっている。

また、張美蘭《日本明治时期汉语教科书汇刊》（2011年 广西师范大学出版社）、第7巻の「解題」では、“但作为一本多语言学习教材，本书仍然有一定疏误之处，如北京话特有的范围副词『所』（全，都），在对译英语时有时并不到位，如：So am I, I don't like winter at all. 我也事那么着，我所不爱冬天。（按：用副词『所』对译英语的『at all』，原句语义减弱，一定程度上造成了愿意表达不到位。）”と、英語と中国語の対訳に間違いもあると指摘している。

2.2.2 『生財大道』

『生財大道』は18世紀英国の経済学者マンデヴィルの著書“*The Compendium of Political Economy from the Lesson Book*”を小幡篤次郎⁶⁸が和訳した『経済入門--生産道案内』をさらに鄭永邦が中国語訳した書である。印刷・出版されたのは1926年であるが、それ以前には1887年に出された和綴じ本を謄写したものが使われている。それが東京外国語学校で使われた記録は見つかっていないが、善隣書院では「蒔菟版」で謄写されたものを教科書にしていたという（何盛三『北京官話文法』）。

序文は金国璞と黄裕寿が書いており、譯原序として小幡篤次郎の序を中国語に訳したものを掲載している。「通用貨幣」とは、「外国貿易」とは、「国内生意」とは等々、「本文を補する」として解説を加えている。

内容は「論物価」「論工価」「論貧富」「論資本」「論賦税」「論借貸」「論分業」等、経済に関するテキストであるが、レベルは中級以上である。

2.2.3 『談論新編』

1898年に金国璞と平岩道知によって編纂され、積嵐楼書屋から刊行された。金国璞は東京外国語学校の中国語講師、平岩道知は陸軍参謀本部にいた。金国璞は北京で陸軍派遣の留学生であった平岩に中国語を教えた。

序は服部宇之吉が記している。「彼此の情を通彼此の信を堅くせんには言語文章によらざるべからず。」とし、本書は「時務に適切なるに於ては旧来流布の諸書の及ぶところはあらず」と推薦している。

本書は全100章、1章は一つのテーマについて二人の会話、つまり問答形式によって成っている。テーマは、英語学習、船旅、旅館、新聞、北京の町、交際、会社、貿易など多岐に及んでおり、レベルは中級、『官話指南』とほぼ同じ程度である。中級の教科書として『官話指南』とともに東京外国語学校で使われた。

張美蘭による《日本明治时期汉语教科书汇刊》の「解題」では、『官話指南』と比較すると、『官話指南』が清末社会の交際生活を反映しているのに対して、『談論新編』は清末社会のビジネスシーンを反映しているところが異なるとしている。

『談論新編』には清朝末期の激動している社会情勢が具体的に描かれており、戊戌政変、京師大学堂の設立、中国初の銀行などタイムリーな話題が採用されており、学校の教科書として使われるにふさわしい内容となっている。

2.3 『官話指南』

1881年に、呉啓太と鄭永邦が編み、楊龍太郎出版による、「支那語」時代のバイブル的地位にあり、明治を通じて「支那語」学習者の必読書といわれた教本である。

宮島大八がこの教本を使って学んだ、あるいは教えたという記録はないが、明治時代の中国語関係者には『官話指南』はかなり知られており、のちに東京外国語学校や善隣書院

で教鞭を執った金国璞がこの教本を使っていたことから、教師となってからの宮島もこの教本にはかなり影響を受けたものと推察できる。

また、この教本は英語、フランス語にも訳されているだけでなく、上海語や広東語にも訳され、さらに氷野善寛（『官話指南』の多様性—中国語教材から国語教材『東アジア文化交渉研究』第3号 2010年 関西大学文化交渉学教育研究拠点）によれば、「1900年代初頭の中国人にとっては、「北京語」あるいは「国語」の教科書としての一面を持っていた」ということから、採用されている北京官話が正確で信頼性の高いものであったことがうかがえる。

第一巻「応対須知」、第二巻「官商吐属」、第三巻「使令通話」、第四巻「官話問答」となっており、すべてが問答形式で構成されている。第一巻の始めは“您納貴姓”“賤姓吳”“請教台甫”“草字資靜”……という問答から始まっており、中級者向けのテキストである。

会話の内容はほとんどが民間の交際場面である。張美蘭《日本明治时期汉语教科书汇刊》の「解題」によると、“各章会话结构完整，句式或简单或复杂，内部的次话题间关联性很强，具有清晰的对话性。如使用最多的询问—回答话对，此外还有请求—回答兼提问—陈述话对，愿望—回应—建议话对，大都形式完整，且富于变化。”（各章の会話の組み立てが整っており、文はシンプルだったり複雑だったり、話題の関連性が強く、はっきりした対話となっている。最も多い形式は一問一答で、そのほか、請求-回答兼問い-陳述の組み合わせ、要望-回答-提案という形式もあり、(問答は)ほとんど形式が整っており、変化に富んでいる）とその構造や形式が整っていることに注目している。

張はさらにこの『官話指南』は、内容はまだ『語言自邇集』の「散語章」の影響を受けているとしているものの、『語言自邇集』に頼らない教本の編集が始まり、日本独自の教本編纂へと向かったターニングポイントであるとしている。

『官話指南』は1903年に金国璞によって改訂版が出されている。この改訂版では、第一巻の「応対須知」を削除、代わりに「酬応瑣談」20章を入れている。この内容は時代の要請によるものか、商談、貿易などの内容になっており、同じ金国璞による『談論新編』に近いものになっている。



(神戸大学附属図書館展示品目デジタル版より)

以上は宮島が中国語を学んだ同時代に編まれた教本で、宮島が影響を受けたと思われるものである。

明治時代の中国語教本は、まずウェイドの『語言自邇集』を下敷きにして、日本人向けの教本編纂が始まった。ウェイドの教本の「散語」、「問答」、「談論」の構成は、多くの日本の教本にも踏襲されている。1899年の京都商業学校の教科書『燕語啓蒙』（若林書店）でも、「散語」の章があり、1900年の西島良爾⁶⁹による『清語会話案内』も「単語」、「散語」、「妙話」、「問答」と分けられ、1908年の御幡雅文『華語跬歩』も「単句」「散語」「問答」「常言」に章立てされている。大正時代に入り、1916年の東亜同文書院の『華語萃編』にも「散語問答」という見出しがある。宮島の教本にも、「散語」、「問答」という分類がほとんどの教本で使われている。

第三節 宮島大八の中国語教本

次に、中国語教育の場で宮島が力を傾注した教本—中国語教材について取り上げる。宮島は生涯に多くの教本を世に送り出しており、中には明治から大正にかけてのベストセラーテキスト『官話急就篇』と、昭和に広く用いられた『急就篇』という、宮島の名を全国に知らしめた有名な教本『急就篇』シリーズがある。

宮島の中国語教育については周囲の回顧と断片的な記録しか残されていないが、宮島の中国語教育に対する考えかたは、彼が編纂した多くの教本から推察できる。

本節では、宮島の教本の時代背景とともに、教本の言語的特徴を詳細に分析し、教本シリーズの内容の推移を概観した上で、宮島の中国語教育の中心部分ともいえる教本についてその編集方針や教育思想を論じる。

なお、本論文の分析の対象とするのは、宮島の教本の中心部分である「問答」が掲載されている教本7種（『官話輯要』、『支那語独習書』、『官話篇』、『官話急就篇』初版、『官話急就篇』増訂四版、『支那語会話篇』、『急就篇』⁷⁰）を対象とする。『続急就篇』はタイトルとしては『急就篇』シリーズに含まれるが、内容が談論中心で「問答」は含まれていないためここでは取り上げない。

ここで主に詳細に語彙、文法の分析を行うのは、『官話急就篇』初版と増訂四版、及び『急就篇』の3冊である。『官話急就篇』と『急就篇』は、それぞれ明治時代後期から大正にかけて、また昭和初期から日中戦争・第二次世界大戦終戦までの日本国内での中国語教本のベストセラーであり（奥付によると、『官話急就篇』は126刷、『急就篇』は2万部）多くの教育の場で使われた、極めて影響力が大きい教本として、中国語教育研究において研究価値が高いと考えられるからである。

3.1 各教本の構成

宮島は以下の教本・辞書類を編纂、刊行している。

- 1897年 『官話輯要』(哲学書院)
 1900年 『支那語独習書』(善隣書院)
 1901～1902年 『支那語学校講義録』(善隣書院) 通信教育用テキスト
 1902年 『官話篇』(善隣書院)
 1904年 『官話急就篇』初版(善隣書院)
 『支那語速成 兵時会話』(善隣書院)
 『北清通話 兵時会話』(善隣書院)
 『清国時文 兵時告示文範』(文求堂)
 1905年 『日華字典』(文求堂)
 1906年 『官話急就篇』増訂四版(善隣書院)
 『時文類纂』(善隣書院)
 1917年 『支那 官話文典』(善隣書院)
 1918～1919年 『支那語講義録』(善隣書院) 通信教育用テキスト
 1921年 『支那語会話篇』(善隣書院)
 1933年 『急就篇』(善隣書院)
 1934年 『急就篇総譯』(善隣書院)
 1935年 『羅馬字急就篇』(善隣書院)
 1935年 『急就篇発音』(善隣書院)
 1941年 『續急就篇』(善隣書院)

今回研究対象とした1897年の『官話輯要』から1933年の『急就篇』までの宮島による中国語教本の構成は以下の表のとおりである。

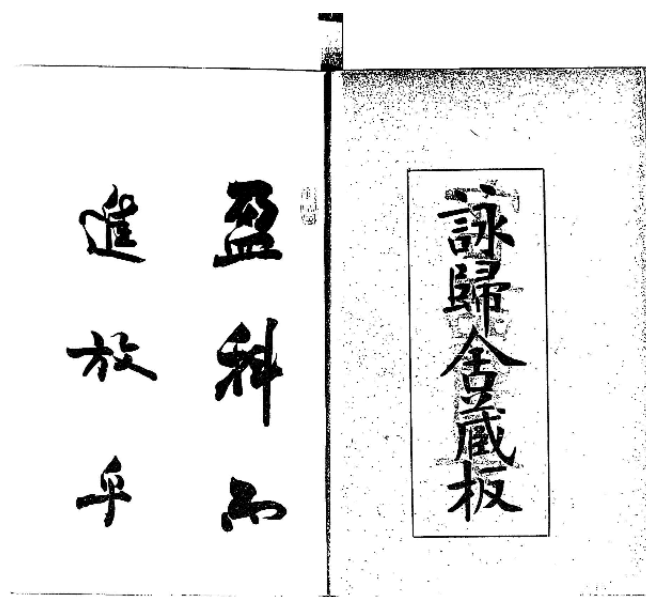
表1 各教本の構成

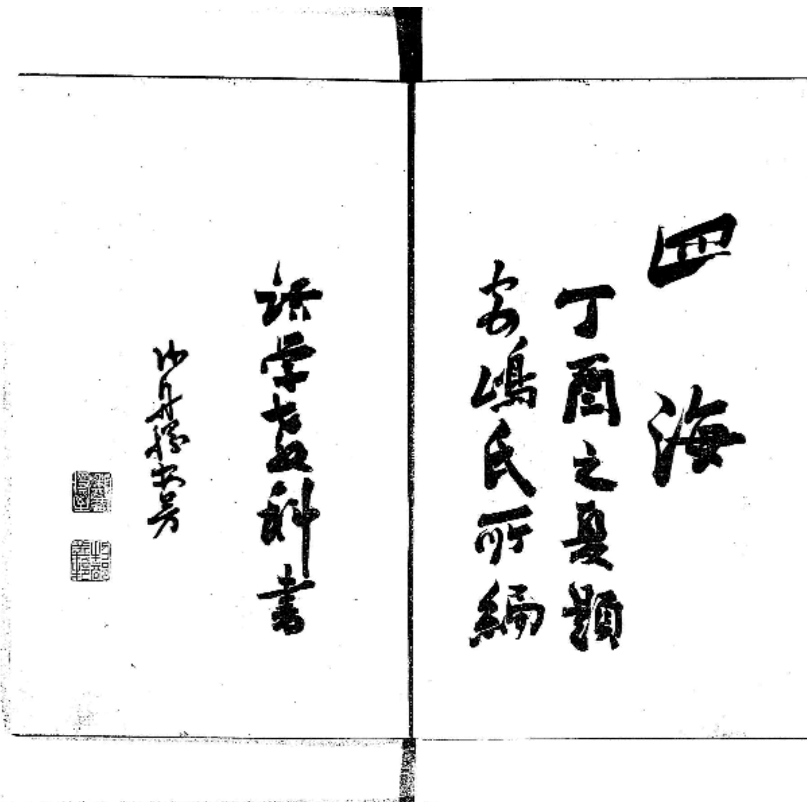
『官話輯要』	『支那語独習書』	『官話篇』	『官話急就篇』初版	『官話急就篇』増訂四版	『支那語会話篇』	『急就篇』
1897年	1900年	1903年	1904年	1906年	1921年	1933年
発音	凡例	腔調	發音	名辞	第一部会話入門	単語
散語	発音	散語	四聲	問答之上 102	名辞・語法	問答之上 100
名辞	四聲	問答前篇65	名辞	問答之中 152	第二部の上 簡易問答 147	問答之中 163

辞類	名辞	問答中篇 32	語法	問答之下 74	第二部の下 会話雑例 60	問答之下 33
造語小例	動辞	散語 507	問答之上 102	散語 11 篇	第三部 新語会話	散語 11 篇
問答前編上 50	語例	問答後篇 24	問答之下 152	附	名辞	附
問答前編中 3	問答 70 篇	腔調	散語 5 篇	家庭常語 (張廷彦)	熟語	家庭常語 (張廷彦)
虚辞約例	散語	議論	附	應酬須知 (張廷彦)	散語	應酬須知 (張廷彦)
問答前編下 8			家庭常語 (張廷彦)		問答	
成句			應酬須知 (張廷彦)		単句	
音母	全 95 ページ	130 ページ	125 ページ	182 ページ	151 ページ	153 ページ
音声分彙	善隣書院	善隣書院	善隣書院	善隣書院	善隣書院	善隣書院
虚辞						
問答後編上 11						
問答後編中 12						
問答後編下 (太平天国)						
字眼						
成句						
翻訳						
論語						
孟子						
戦国策						
史記						
文典						
全 150 ページ						
哲学書院						

以上、表 1 による各教本の構成上の相違点については、以下のようにまとめられる。

- ① ページ数については、『官話輯要』150 ページ、『支那語独習書』で 95 ページと 3 割減少しているが、『官話篇』は 130 ページ、『官話急就篇』初版では 125 ページ、増訂版では 182 ページと増加、『支那語会話篇』は 151 ページ、『急就篇』は 153 ページとなった。
- ② すべての教本に共通するのは「問答」部分である。『官話輯要』、『官話篇』、『官話急就篇』、『急就篇』ともに「問答」は最初一問一答から始まり、徐々に会話も長くなり、さらに後半では会話ではなく故事などの短文が採用されるという共通点がある。しかし、『支那語独習書』と『支那語会話篇』の「問答」は会話だけで短文は掲載されていない。
- ③ 「発音」のパートが『支那語独習書』と『官話急就篇』の初版には採用されている。
- ④ 「名辞」は『官話篇』以外のテキストに収められている（『急就篇』では「単語」となる）。「天部」、「地部」などと分類されているのは『官話輯要』と『支那語会話篇』だけである。
- ⑤ 「重念」について初めて記載があるのは『官話篇』である。「第一 腔調」として、「第一字重念」、「第二字重念」、「第三字重念」……と分類して単語や語句を紹介しているが、「問答」部分には重念を表す記号は付けられていない。『官話急就篇』初版、増訂四版ともに「重念」の記号は付けられていない。『支那語会話篇』、『急就篇』では「重念」の字の右側に縦棒が引かれている。
- ⑥ 『支那語独習書』には解説、日本語訳、カタカナによる中国語の読みなどが入っているが、それ以外の教本は中国語のみとなっている。
- ⑦ 勝海舟による揮毫、「盈科而进，放乎四海」は、『支那語独習書』をのぞくすべての教本に入っている。





(国立国会図書館近代デジタルライブラリーより)

3.2 『官話急就篇』の初版と増訂四版との比較

まず、宮島大八の最初のベストセラー教本である『官話急就篇』の初版と、この2年後に出された増訂四版について内容を比較する。

『官話急就篇』はどのような経緯で生まれたのだろうか。

『官話急就篇』が刊行された1904年、日本では『官話指南』(呉啓太・劉永邦)、『談論新編』(金国璞・平岩道知)などがすでに教科書として広く使われていた。しかしこれらは中級以上のレベルのやや高い内容であり、入門書としては宮島も使った廣部精の『亜細亜言語集』が使われていただけであった。そこで、『官話急就篇』は、初心者・初級者向けに作られた。安藤彦太郎『中国語と近代日本』(1988年 岩波新書)では「ひさしく待ち望まれていた入門書として、たちまち中国語のバイブルとなった」としている。この時期、宮島はすでに何冊かの教本を刊行したが、1897年の『官話輯要』は、『語言自邇集』の散語章に似た構成で始まり、やや難度が高い。1900年の『支那語独習書』は初心者向けではあるが、独習書の作りであり、なおかつ「問答」が短い一問一答で終わり、初級段階までの内容しかない。1902年の『官話篇』は中級レベルである。そんな中、宮島は1901～1902年に『支那語学校講義録』で入門者向けの講座を掲載していくなかで、入門者向け教本編

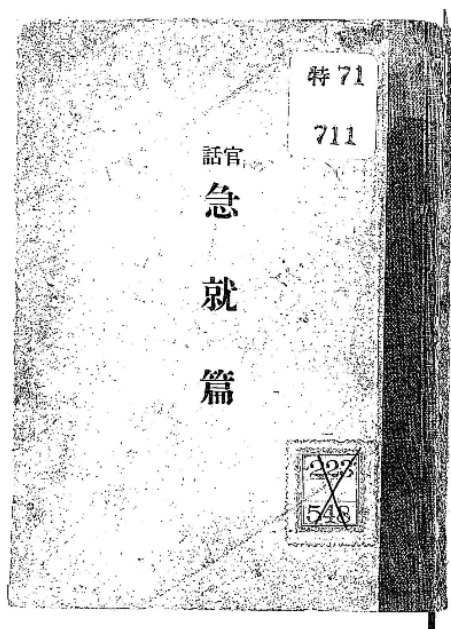
纂のヒントをつかんだと推測できる。

『官話急就篇』は、初版が出て2年後の1906年には増訂四版が出されており、六角恒廣による『中国語教本類集成』(1992 不二出版)第二集に収録されているテキストも1918年(大正7年)発行の46版である。『官話急就篇』に対しては、『官話急就篇総譯』(杉本吉五郎 1916 満書堂)や『官話急就篇詳譯』(大橋末彦 1917 文求堂)という日本語訳と解説を掲載したのも出されているが、これらも増訂四版以降の内容に基づいて書かれており、1933年(昭和8年)に全面改訂された『急就篇』が出版されるまで、『官話急就篇』といえは増訂四版以降の版を指すのが通例となっていた。

しかし、近年、国会図書館収蔵の1904年発行の初版本がデータベースに加えられたことから、初版本が増訂本とは内容が大きく異なることが分かった。わずか2年という短い間に増訂が行われたのだが、この増訂は何を目的になされたのか。初版本から、結果的にベストセラーとなった増訂本へと、どのような改訂が行われたのか、まずこの2冊の違いについて考察する。

3.2.1 『官話急就篇』初版

『官話急就篇』(1904年初版)は文庫本とほぼ同じサイズ(15cm×10.5cm)である。(『急就篇』も同じサイズ) 宮島のそれまでの著書の中でも最も小さく、他の編者による教本類と比べてもコンパクトである。持ち運びしやすい手軽な作りである。



(国会図書館近代デジタルライブラリーより)

内容の構成は、以下の通りである。

<発音>

音度(舌根音、舌尖音、拗音)、音脚

<四声>

上平 下平 上声 去声

<名辞>

数(61)、時間(69)、代名詞(17)、時間(32)、天文・地理(37)、家族・職業(62)、身体(33)、動物(22)、植物(22)、食物(59)、家屋・場所(34)、服装(22)、家具・生活用品(91)、社会的名詞(39)、二字形容詞(28)、二字動詞(22)、尊称(29) 合計 679 (分類は著書による)

<語法>

量詞(10)、疑問詞(7)、重ね型(4)、形容詞・名詞(31)、副詞のあるフレーズ(13)、“得”フレーズ(3)、形容詞+数量詞(3)、“點兒”“的多”“多了”“多”+形容詞(16)、1語の動詞+“了”(60)、補語(6)、動詞+“着”(15)、動詞+“一”+動詞(5)、動詞句(71)、動詞+“去了”(9)、動詞+“來了”(7)、“了”フレーズ(16)、“了沒有”フレーズ(4)、離合詞+“了”(9)、“要”+動詞(3)、“不”+動詞(4)、“還沒”+動詞(3)、“沒…過”(3)、形容詞の否定(4)、“有”と“沒有”、“是”と“不”(26)、疑問詞フレーズ(8)、動詞+補語“上”(3)、“把…上”フレーズ(9)、“擘”フレーズ(6)、“着”フレーズ(6)、“在”+方位名詞(4)、“到”(4)、“打”(2)、“上”(2)、“在”+場所(3)、“往”(4)、“給”(3)、“叫”(7)、“被”(3)、“過”(2)、“了”+数量詞(4)、“會兒”(2)、“點兒”(4)、“沒人”(2)、“可以”(2)、“得”(2)、“該”(6)、“別”(4)、補語の否定型(6)、時間名詞/副詞+“來”“走”等動詞(9)、“所”(1)、“的”(7)、接続詞(17)、副詞(16) 合計 473(分類は著書による)

<問答之上>

一問一答の会話 全 102 場面

問答之下

二問二答以上の会話 全 152 場面

<散語>

家常……156句、応酬……63、売買……46、出外……54、兵事……79

附(張廷彦)

家庭常語……28句、臨幼……13、款客初会……13、常会……20、行情……17、読書……22
応酬須知 (中国語人との交際作法)

構成は、ウェイド『語言自邇集』に似ており、「発音」「散語」「問答」など同じ見出しになっているが、「名辞」(単語)を章立てして加えた構成は明治時代前半の教本にはなく、初学者向けに工夫されている。

3.2.2 語彙・文法の「初級ガイドライン」との比較

『急就篇』について、六角恒廣は、『中国語教育史の研究』(1988)では「これらの問答は相互に何の脈絡もなく、語学的な発音・語彙・文法の面での配慮はなされていない」と評

している。文法や語彙がきっちりと書き込まれた現代のテキストに比べると、確かに学習者に対する配慮はあまり見られないが、『急就篇』が長年テキストとして使用され続けたことに意味を見い出すとするならば、「使いやすい」、「学びやすい」テキストであったからという使用する側の支持があったと思われる。果たして『官話急就篇』、『急就篇』は本当に教育的配慮のないテキストなのかをまず検証していきたい。

『官話急就篇』は入門、入門・初心者向けテキストであることから、まず中国語教育学会による「中国語初級段階学習指導ガイドライン」⁷¹（以下「ガイドライン」とする）に『官話急就篇』初版の内容を照らしていく。

<語彙>

「ガイドライン」の学習語彙表と対照した結果、ガイドラインの語彙表 1000 語(第 1 表 600 語、第 2 表 400 語)のうち、『官話急就篇』の「名辞」で取り上げられている語は 497 語、ほぼ半分であった(“那”と“哪”をはじめ繁体字・旧字はカウントしている。また、“裏”“裡” = “里”とカウントした。このほか“利害” = “厉害”“康健” = “健康”もそれぞれカウントした)。

『官話急就篇』は 100 年以上前に出版されたテキストであり、100 年間の生活自体の変化による物品や名称の変化などの名詞の変化が特に大きいことを考慮すれば、現在の「ガイドライン」が提示する半分の語彙をカバーしているということは当時の初級テキストの語彙としては合格ラインといえるのではないか。「ガイドライン」では、基本語彙の第 1 表 600 語、準基本語彙の第 2 表 400 語という語彙が設定されているが、『官話急就篇』の「名辞」(単語の意)は 679 語であり、語の量という面では 1 表はクリアしていることになる。

<文法項目>

さらに『官話急就篇』の「語法」で取り上げている文法項目を「ガイドライン」の文法項目表に照らしてみる。まず、「4 文の種類①構造上の分類」「5 文の種類②肯定文と否定文」「6 文の種類③用法上の分類」に照らしてみると、「ガイドライン」で提示されている文型は全部カバーされていた。さらに、「7 文の成分」の「主語」「述語」「賓語」「述語の構成から見た基本構文」「補語」「修飾語」のそれぞれの基準に基づいて『官話急就篇』全体の構文を分類していくと、「7-5 補語」「7-6 修飾語」について、一部「ガイドライン」の項目をカバーしていないものの、「7-4 基本構文」では「動詞述語文」「賓語のある文」のうち「“是”“有”“在”を用いる文」「助動詞を用いる文」「述語の構成が複雑な文」(「連動文」「存現文」「処置文」「受動文」「比較文」)「形容詞述語文」「名詞述語文」をすべてカバーしている。ここから、初級テキストとして必要な文法事項に基づいた例文はおおむね記載されていると考えてもよいのではないだろうか。

以上のことから、『官話急就篇』初版は教室用の入門・初級テキストとして、文法・語彙は当時のレベルで過不足なく取り上げられていると言ってもよいと思われる。この 1 冊をマスターすれば明治時代まで日本人が親しんだ「漢文」ではない、当代の「中国語」に触

れることができ、その言語としての大まかな輪郭は理解できるし、ある程度の会話もできるようになる。しかし、126 版を重ねた実績は、教科書として使いやすかったからだけではなく、さらに当時の広範な読者のニーズをつかんだ内容によるものだともいえる。

以上の結果、『官話急就篇』初版の特長は以下にまとめられる（板垣友子『『官話急就篇』の言語について』『外国語学研究』 第 13 号 2011 年 大東文化大学）。

- ① 学習対象：それ以前にはなかった入門用テキストである。
- ② 内容の選択：文法・語彙の選択も初級向けとして整っている。語彙に関しては北京方言が多く取り入れられている。（北京方言については次で詳しく分析する）
- ③ 構成：問答中心であり、会話という分かりやすい形で中国社会の事情を理解できる。
体裁：ポケット判で携帯しやすく、また活字が大きく、課文が見やすいため、入門者にも使いやすい。

しかし、『官話』では文法項目は順序立てて記載されているわけではなく、説明もないため、教師の教えかたによっては学習効果が上がらない可能性も考えられる。また、同じ語彙や文法のフレーズを多用する一方で、「ガイドライン」にある接続詞や副詞を使ったものが掲載されていないなど、語彙や文法項目の取り上げかたのバランスが良いとは言えない。

3.2.3 『官話急就篇』初版における北京語

次に上記の「特徴」②「北京方言が多く取り入れられている」点について、さらに一歩進めて分析してみたい。

宮島は足掛け 7 年間にわたる中国留学中、師である張裕釗について学んでいる期間は、湖北省から湖南省へ、最後は西安と、おもに中原およびその南方の地域に居住していた。張廉卿は、武昌の出身で拳人となり曾国藩に重用された人物である（詳しくは第一章第四節）。宮島が師について漢籍を学んだ時には、二人の間でどのような中国語が用いられていたのかはよく分からない。しかし友人として親交を結んだ張裕釗の長子と次子は、清朝政府の官僚であり、北京官話を上手に操ることができたと推察できる。さらに、宮島は病気に倒れ、2 年近くを北京市内およびその近郊で療養している。その間に北京語の会話を習得したこと、北京の地理や文化を学んだことを、帰国後に編纂した多くの教本の中からうかがい知ることができる。とくに『官話急就篇』は「官話」と銘打っているだけあって、北京語の語彙・文法の特徴が多く見られる（この点については 3.3.3 で分析する）。

まず、『官話急就篇』（初版）、特に「問答」部分に含まれる北京語の文法の特徴について、『中国語学新辞典』（中国語学研究会編 光生館 1969 年）にある太田辰夫執筆部分の「北京語の語法特点」（P186）に照らして分析していく。

- 1) 一人称代詞の包括形(inclusive)と除外形(exclusive)を「咱們」「我們」で区別する。
「俺」「咱」などは用いない。

“咱們”は下の3例、

(問答下 22) 咱們溜達溜達去 (散歩に行こう)

(問答下 37) 咱們拏皇曆照照罷 (こよみで見てみよう)

“我們”は

(問答下 74) 我們街坊的 (うちの近所の (子) だ)

(問答下 107) 他是我們的提調 (彼はうちのマネージャーだ)

など用例が多くみられ、区別されている。

2) 介詞「給」を有する。

「問答」において用例多数。介詞の例としては:

(問答下 82) 給您豫備晚飯麼 (あなたに夕ご飯を用意します)

3) 助詞「來着」を用いる。

(問答下 95) 某兄有信來了麼 (彼からの手紙は来ましたか)

來了，他還問您好來着 (来ました、彼はあなたによろしくとのことでした)

4) 助詞「哩」を用いずに「呢」を用いる。

「問答」では「哩」は使われておらず、「呢」が使われている。

(問答下 9) 末站呢 (終点は?)

(問答下 16) 您的底下人呢 (あなたの召使いは?)

など用例は多数ある。

5) 禁止の副詞「別」を有する。

(問答下 54) 您別客氣 (ご遠慮なさないで)

(問答下 78) 您別過獎了 (そんなにお褒めにならないでください)

など用例は多数ある。

6) 程度副詞「很」を状語に用いる。
 (問答上 36) 還很公道 (やはり公正です)
 など多数見られる。

7) 「～多了」を形容詞の後におき、「ずっと、はるかに」の意を表す。
 「問答」にはこの用例はないものの、初版の「語法」には“多了”の項がある。
 “強多了” “貴多了” “遠多了” “好多了”の4例が示されている。

また、「問答」には(問答下 45) 改變多了, 簡直的認不出道兒來哪 (かなり変わってしまっ、まったく道も分からなかったよ) が採用されているが、これは「動詞+“多了”」となっている。

以上から「問答」には、太田が挙げている7つの「特点」のうち6つが用いられ、残りの一つは初版の「語法」部分に取り入れられていることから、『官話急就篇』初版は北京語の特徴を有しているといえるだろう。

3.2.4 構成の相違

次に、初版と増訂四版の構成の相違点を挙げる。

表2 初版と増訂四版の構成

初版 1904		増訂四版 1906～	
発音			
四声			
名辞		名辞	
語法		問答之上	
問答之上		問答之中	
問答之下		問答之下	
散語		散語	
家常		第一	
応酬		～第十一	
売買			
出外			
兵事			
家庭常語	張廷彦	家庭常語	張廷彦
臨幼		待老	

款客(初見)		臨幼	
常会		款客(初見)	
行情		常会	
読書		行情	
応酬須知	張廷彦	読書	
		応酬須知	張廷彦

総ページ数は初版 125 ページ、増訂版は 182 ページである。

初版と増訂版では、構成上の違いを以下の 5 点にまとめることができる。

- (1) 初版にある「発音」(目次上では「発音」となっているが、実際には「音頭」、「音脚」「四声」の 3 項目に分かれている)が、増訂版では削除された。
- (2) 初版にある「語法」は増訂版では削除された。
- (3) 初版では上と下しかなかった「問答」が増訂版では上、中、下に増えている。
- (4) 「散語」(フレーズ)が初版ではテーマ別になっていたものが、増訂版では第一から十までとなっている。
- (5) 張廷彦の執筆による「家庭常語」「応酬須知」に関しての修正はない。小見出しの「老」が初版では見当たらないが、「家庭常語」という見出し部分の本文が「待老」に当たるため、収録された内容に違いはない。

3.2.5 各パートの比較

(1) 「発音」について

初版では、「音頭」「音脚」「四声」が紹介されているが、「音頭」では「舌根音」、「舌尖音」、「拗音」の三つに分かれ、全部で 45 の漢字が示されている。現代中国語の「舌根音」は声母の g, k, h を指すが、初版で示されている漢字は「阿」、「瓦」などで、(日)を除いては韻母 a で声母の種類を説明している。現代の「舌根音」とは異なる。同様に「舌尖音」(牙、下、家……)も現代中国語では声母 d, t, n, l であるが、ここでは介音 i の発音の漢字を並べている。また、「拗音」(瓜、跨、算……)は日本語の「キャ、キュ、キョ……」など 1 音節が 2 文字で表される音であり、現在では中国語の音声を表すには使われないがここでは介音 u の発音の漢字を並べている。

「音脚」では「阿」、「伊、為、愛、于」、「屋、有、欧」、「也、月」「窩約傲要」「惡」、
「安元袞印云恩言」、「昂揚英亨用兄」(爾)(司)とグループ分けされた 29 個の漢字を示している。これは現在の「韻母」の説明と思われる。

「四声」では、「上平」「下平」「上声」「去声」と分けて漢字を示している。

「発音」の中で「音頭」「音脚」「拗音」は、中国語の発音についてすべての例を、分かりやすい分類法で挙げたものとはいえない。教科書としての『官話急就篇』は、教室での

発音指導という前提で使われるので解説がなくてもよいのかもしれないが、初版の「発音」は極めて不十分な内容と言わざるを得ない。

宮島はなぜ初版では「発音」を取り入れたのだろうか。宮島は執筆した教本『支那語独習書』(1900年)では、「支那語の学ぶの要は、最も音声に存す」、『支那語学校講義録』(1901年)でも、「支那語の最も緊要となるは、発音にあり」とし、発音の重要性を説いている。

『官話急就篇』の前に出された『支那語独習書』では、「重音(有気音)」、「軽音(無気音)」、「廣音」(-ng)、「窄音」(-n)、「捲舌音」、「舌尖音」、「開口音」、「合口音」と分類している。『支那語学校講義録』の「発音」では、「有気音」と「無気音」、「寛音」と「窄音」、「捲舌音」、「舌尖音」、「合口音」、「上脰音」、「囁口音」、「喉音」と分類している。

『支那語独習書』には、「発音一」として、「阿、愛、安、昂、傲」「嘎、改、甘、剛、告」「卡、開、看、炕、考」……と、漢字が並べられ、仮名が振られている。『支那語学校講義録』第一号にも、「発音一」として、「阿、牙、○、嘎、薩、殺、大、他、乍、茶、那、拉、○……」(○はパソコン上に出ない漢字)と漢字があり、発音の仮名がふってある。これらの漢字は初版の「音頭」に出てくる漢字と共通しており、アイウエオ順で有気音と無気音、捲舌音と舌尖音の区別をつけている。1903年に出された『官話篇』(1903年)には、前書きや解説はないが、これには「発音」はなく、「腔調」として、「重念」だけが取り上げられている。

初版の「発音」を増訂四版では削除しているのは、もとより全2ページと非常に簡単なものであったため、この程度ではとても発音について十分な説明はできないと、宮島が判断したためではないだろうか。『官話急就篇』はもともと善隣書院の授業で使われる教本として作られたものであるため、前提は教室での「口授」であり、紙面には発音記号もなければ、日本語訳も文法解説もない、シンプルな中国語だけの教本であるから、あえて「発音」を入れて複雑にすることを避けたのではないか。

(2) 「名辞」(単語)について

「名辞」部分にも初版と増訂四版とでは大きな違いがある。まず取り上げられている単語数であるが、初版では679語、増訂四版では897語と増えている。

増訂四版は初版の「数」「時間」「自然」「人体」「人称」などの単語を、多少の増減はあるものの、ほとんどそのまま挙げている。大幅に増やしたのは、世界各国や中国国内の地名55、新聞名8、鉄道名6、物産23、役人の職稱4、宗教8、北京の地名28、歴史上の人名30、書名27、漢字のへん15、干支38、蘇州文字10などの固有名詞がほとんどである。初版では不足していたと感じた、宮島自身の中国の地理や文化の知識を盛り込んだものと思われる。

また、数が増えた以外、「名辞」の初版と増訂四版の単語では、以下の点で違いが見られる。

① “一吊錢” “五百錢” “一吊二白錢”が増訂版では削除されている。清朝の貨幣制度は

地方によってばらつきがあるが、北京では“一吊錢”が穴あき錢 49 文を連ねたものという。初版ではこのような単位と、1 元、1 角、1 毛という現在と同様の単位も併記されていたが、増訂版では単位として分かりにくい“一吊錢”以下を削除したと思われる。しかし、「問答篇」の会話には登場している。

(問答下 12) “拉我到前門” “您給一吊錢罷” (「前門までやってくれ」「49 文ください」)

② 初版の“閑人”が増訂版では“閒人”と、漢字が変わっている。

③ 初版の“飯麪”が増訂版では“飯”“麪”と分けられた。

④ 初版の“嚙噪子”が増訂版では“嚙子”となっている。

(初版の“手掌”が増訂版では“手掌兒”となっている。

以上の削除・修正については、2 年間教本として初版を使用している間に、宮島自身が気づいたり、または中国人講師から指摘を受けたりした箇所であろう。②に関しては漢字が変わっているものの、初版の“閑人”が“閒人”となっているのは、“閑”の 2 つの語義のうち「ひま、何事もない」等の意味の“閑・閒”の漢字の一つを採用したと思われる。

(3) 「語法」について

初版では、「語法」として、量詞、疑問詞、形容詞、動詞、助動詞、“了”の例文、“在”、使役文、副詞、接続詞などの項目に分かれ(見出し語はない)、492 の例句が紹介されている。この部分は、『支那語独習書』(1900 年)で「動辞」「形象辞」「語例」として紹介されている部分から多くが流用されている。

宮島はなぜ増訂版でこの部分を削除したのだろうか。増訂版では、初版で「上、下」だけだった「問答篇」が「上、中、下」と 3 つの部分に増えていることから、ページ数が 125 ページから 182 ページと大幅に増えている。宮島は「問答篇」を増やすために、「語法」を削除したのかもしれない。初版「語法」には、初級段階の文法項目がほとんど含まれており、中国語の文法が教室で紹介しやすいようにまとめられている。『官話急就篇』はもとも教科書であるため、授業では「問答」の中で文法項目も説明しながら進めただろうから、「語法」部分はあえて置かなくてもいいとの判断があったのかもしれない。しかし、文法項目を分かりやすく説明することが求められる初級テキストとして、この「語法」の削除は極めて惜しまれる。

(4) 「問答」の語句について

“來了麼” “來了” から始まる「問答之上」はシンプルな一問一答形式(「問答之中、下」では二問二答かそれ以上となる)で構成され、『官話急就篇』『急就篇』のもっとも特徴的なパートである。明治時代、問答体の教本は他にも多く出版されているが、『官話急就篇』

はその中でも入門者から使える教本として支持を得たもので、この「問答之上」は初心者が中国語に触れるのには適切なレベルであり、親しみやすかったと思われる。

初版と増訂版の大きな違いは、初版の「問答之下」部分が、増訂版では「問答之中」となり、増訂四版の「問答之下」の部分は、初版にはなく新しく追加されたという点である。

まず、共通の部分である初版の「問答之上」「問答之下」と増訂版の「問答之上」、「問答之中」について比較する。

表3 語が削除または追加されているもの。(問答之上)

	初版(上)	増訂四版(上)
63	您認高兄麼	您認得高兄麼
92	一疋有多少長	一疋有多長
94	昨天甚麼時候兒回家	昨天甚麼時候兒回的家
96	進去過很好看	進去過很好
97	今兒沒有船明天有船	今兒沒船明天有船

表4 語が削除、追加、変更されているもの。(問答之下)

	初版(下)	増訂四版(中)
35	在家裏做活	在家裏做活哪
39	這行李我交到那兒呢	這行李我可以交到那兒呢
52	我和您借一樣東西	我和您借一樣兒東西
84	我輸給您一個東兒	若下我輸給您一個東兒
85	他是小孩子不懂甚麼	他是小孩子不懂的甚麼
134	這鐵路是起北京蘆溝橋	這鐵道是起北京蘆溝橋
140	我仿佛是聽人這麼說	我仿佛是聽人這樣說

表5 漢字が訂正されているもの。

初版(上)	増訂版(上)
叫	叫
拏	拿
々々	瞧瞧、嚷嚷など

以上の違いはさほど大きなものではなく、宮島が気がついた箇所を随意に訂正したと思われる。漢字の訂正についても特筆すべき点はない。

以上から、初版から増訂版への修正のほとんどは、誤りの訂正と恣意的な訂正であると言っても差し支えない。

また、初版の「問答之下」は増訂四版では「問答之中」とタイトルが変わった。そして増訂四版の「問答之下」は初版にはなかった新しい内容が追加されている。

増訂四版「問答之下」の問答は 74 ある。1～70 までは問答体だが、71～73 は短文、74 は『急就篇』シリーズのシンボルともいえる“桃郎征鬼”（桃太郎の鬼退治）の話でやや長くなっている。

「問答之下」は後から追加されたものだが、すべてがこのために新しく作られた問答というわけではない。74のうち、65の問答(話)は『官話篇』(1903年)の「問答前篇」全65問答から46、「問答中篇」から19が流用されている。ちなみに“桃郎征鬼”はまず『支那語学校講義録』(1901年)に収録され、さらに『官話篇』、そして『官話急就篇』にも収められている。

(5) 「散語」について

「散語」の部分は、初版では項目が「家常」「応酬」「売買」「出外」「兵事」となっていたものが、増訂四版「第一」から「第十一」と変わっている。初版の内容は項目が変わったものの、すべて増訂四版にも収録されている。さらに増訂四版の「第一」は『官話篇』の「散語」から転載されている。しかし、「第二」から「第四」そして「第十一」については新しく増やされた部分となっており、全体としては増訂四版は33ページと初版の2倍余りになっている。

「散語」の部分は前後脈絡のないフレーズが集められているが、増訂四版に新しく追加された部分は、「第二」は“説”を使ったフレーズ、「第三」は“做” “辦”を使ったフレーズ、「第四」は“買”を使ったフレーズとなっている。「第十一」に羅列されているフレーズは学校、中国の役所、役人、軍隊などに関するものである。

3.2.5 増訂の理由

以上、『官話急就篇』の初版と2年後に作られた増訂版の違いを見てきた。その結果、大きな修正は「発音」と「語法」部分の削除、「名辞」、「問答」部分の追加にあること、その結果として全体のページ数が125ページから182ページへと50%も増加したことが分かった。

宮島はなぜ初版からわずか2年で増訂版を作ったのか、その理由として、2年間実際に善隣書院などで教本として使用した時のいくつかの反省やフィードバックに基づいた増訂ではなかったかと推察できる。

(1) レベル

まず、「簡単すぎる」ことに対する反省があったのではないか。倉石武四郎も『中国語五十年』(岩波新書1973)のなかで、1915年第一高等学校に入学後、2年生の時に「たしか二週間くらい習って、ほぼこの本を一冊おぼえてしまった」と記しているように、『官話急就

篇』は増訂版においても中国語を専攻しようとする学生にとってはまさに入門のための教本であり、それ以上のものではなかった。

増訂版の「問答之下」には、数編の短い物語や宮島の教本でおなじみの“桃郎征鬼”が収められており、やや難易度が上がっている。一般の学習者にとって長文は問答とは違う難しさがあつたのではないか。宮島は初版に中級レベルの「問答之下」部分を加え、レベルを上げ、学習対象者を広げようとしたと思われる。

(2) 「問答」部分の充実化

増訂版の「問答之下」は宮島自身の教本から転載されたものがほとんどであったが、この部分だけではなく、初版、増訂版にかかわらず『官話急就篇』に収録された問答、1900年『支那語独習書』の「問答七十篇」、1901年～1902年の『支那語学校講義録』、1903年『官話篇』に収録された問答・短文の中から宮島自身の評価が高いものを取捨選択した結果であると推測できる。「問答」は宮島の教本にとっては中心部分であるから、増訂四版ではこのパートを一層充実させたのであろう。

(3) 一部パートの削除

さらに「発音」の部分の説明の不十分さに対する反省があつたので、この部分を削除したのではないか。また「語法」については、「問答」のページ数を増やすために削除したと思われる。

(4) 固有名詞の追加

固有名詞の不足に対する反省も感じられる。「名辞」部分はほとんど初版と同じ単語を並べた後、中国の地名 55 をはじめ、新聞名、鉄道路線、各地の物産、科挙の合格者、宗教、北京の名所や地名、歴史上の人物名、書名や干支など、合計 218 語が新しく追加された。初版が出た 1904 年は日露戦争勃発の年であるから、初版を 2 年間テキストとして使う中で、宮島は単語の不足を感じ、これらの語を追加したのであろう。時代のニーズに合わせた増訂であつたことがここにもうかがえる。

3.2.6 ベストセラー『官話急就篇』

宮島の代表的教本である『官話急就篇』は宮島が中国留学から戻ってから、東京外国語学校や善隣書院で教鞭をとりながら編纂した数冊の教本の集大成といえる。宮島はこの後、辞書も含め何冊か教本を編纂しているものの、戦前から前後にかけての中国語教本のベストセラー『急就篇』を 1933 年に編纂するまでの 30 年間、『官話急就篇』増訂四版は増刷を続けていた。

『急就篇』は約 2 万部以上売れたと言われているが、『官話急就篇』については 1904 年に初版が出て以来、126 刷を重ねたことは分かっているものの、部数については不明である。しかし 30 年間増刷を続けたということは、やはり明治後期から、大正、昭和初期までの中国語教本の中ではベストセラーであつたことは間違いない。

では、宮島はなぜこのようなベストセラーを編纂することができたのだろうか。

1900年に宮島が編纂した『支那語独習書』は全95ページとボリュームはなく、内容もしごく初歩的なレベルにとどまっている。『官話篇』は131ページと増えたものの、この教本は入門者にとってはハードルが高く、「問答前篇」が『官話急就篇』増訂版の「問答之下」にほぼ相当する上、「議論」という成語故事の部分も難易度が高い。そこで宮島は入門者向けの教本として『官話急就篇』の内容をかなり絞り込んだ結果、初版は125ページと減らし、さらに版はポケット版、文字も大きい版面を取り入れて、初学者にも手に取りやすいものを作り出した。それまでになかったカジュアルな教本を作り出した宮島のセンスが光る一冊である。

昭和に入り、世界情勢や日中関係も大きく変化した1933年、宮島は『官話急就篇』を大きく改訂し、『急就篇』を世に出した。この『急就篇』は戦前から戦後にかけての中国語教材のバイブル的な存在となった。現在の中国語研究者の中にも『急就篇』で学ばれた方々が少なくない。

3.3 『官話急就篇』と『急就篇』との比較

次に、宮島の中心的教本である『官話急就篇』増訂四版と『急就篇』を比較する。この2冊の間には約30年の年月がたっており、明治から昭和へ、日本も国際情勢も大きく変化した。中国語教本にその変化はどう映し出されているのだろうか。

3.3.1 「単語」の比較

『官話急就篇』（以下、『官』）と『急就篇』（以下、『急』）はいずれも名詞中心の単語を紹介している。

『官』では「名辞」、『急』では「単語」という項目になっており、『官』では名詞（動詞や形容詞も挙げているが名詞としても使われる単語のみ）の羅列、『急』では数は少ないものの、動詞としてのみ使われる語を加えている。

まず、数量的な変化について、その内訳を以下の表にまとめた。なお、語の分類は『官』『急』ともになされておらず、以下の数詞、代名詞などの分類は筆者による。

表6 単語の推移

	官話急就篇	急就篇	増加	減少	共通
数詞	74	78	17	9	65
代名詞・方位	16	27	11	0	16
時間詞	82	85	16	13	69
自然	37	32	4	9	28
人称・職業	62	54	7	15	47
人体	33	21	2	14	19

動物	22	19	2	5	17
鉱物植物	21	23	4	6	17
食物	61	53	5	13	48
住居・建物	34	21	2	15	16
衣服	22	16	2	8	14
家具・道具	84	60	3	27	57
その他名詞	48	34	19	33	15
★形容詞	26	32	24	18	8
★動詞	22	21	9	10	12
敬称	29	22	1	8	20
地名	67	42	9	34	33
物産	23	9	0	14	9
固有名詞など	134	62	8	80	54
	897	711	133	310	586

(★は名詞との兼類を含む)

上の表からも分かるとおり、全体の単語数が 897 語から 711 語へと減少している。310 語を減らし、133 語を増やしている。『官』と『急』で共通の単語は 586 語、『官』の単語の 65.3%が『急』にも掲載されたことになる。しかし、分野によって増減の割合に差がある。例えば、数詞や代名詞、時間名詞、自然、人称、自然、動物、食物、家具や道具については、『急』に残された単語が 7 割を超えており、時間の推移による変化がそれほど大きくない一方で、抽象的な名詞、形容詞、動詞、物産などは 4 割以下しか残っていない。また固有名詞や地名などについても単語数は大きく削減された。

以下、単語の種類別に『官』と『急』で変化が目立つもの、その違いに時代の変遷が見てとれるものを挙げる。

なお、訳語は『官話急就篇』に対しては、大橋末彦『官話急就篇詳譯』（1917 年 文求堂）と内田重治郎『急就篇を基礎とせる支那語独習』（1924 年 大阪屋書店）、そして『急就篇』に対しては宮島大八『急就篇総譯』（1934 年 善隣書院）によっている。

表 7 職業を表す単語で、『官』には見られたが、『急』には収録されていないもの

『官』	訳語(大橋 1917)	訳語(内田 1921)
念書的人	読書人	読書人
馬夫	別当(馬丁)	馬丁
丫頭	下女	下女
看門的	門番	門番

經紀	仲買人	仲買人
閒人	遊人	無職人
赶車的	御者	御者
戲子	俳優	役者
賊	盜賊	族

上の職業そのものが『急』の時代に完全になくなっていったとは思えないが、呼称が『急』の民国時代には一般的ではなくなっていた場合もあろう。いずれも現在では消滅した職業、または使われていない単語である。逆に、『急』で新しく収録された単語“司機人”（運転手）は、民国に入ってから自動車が普及したためと考えられる。

表8 建築物を表す単語で、『官』には見られたが、『急』には収録されていないもの。

『官』	訳語(大橋 1917)	訳語(内田 1921)
澡堂子	浴場(湯屋・湯殿)	浴場
馬棚	馬小屋	馬厩(うまや)
炕	火床	火床
倉	倉(米穀)	穀倉
庫	庫(金銭)	金庫
錢舗	両替店	両替商
電報局	電報局	電報局

表9 『官』から『急』に単語が変化したもの

『官』	『急』	訳語(大橋 1917)	訳語(内田 1921)	訳語(宮島 1934)
機器局	兵工廠	造兵廠	兵器廠	造兵廠
營房	兵營	兵營	兵營	兵營

“機器局”については用語の変化とも考えられるが、“營房”は、現在も“營房”と“兵營”の両方が使われている。1933年ごろには日本語の“兵營”をそのまま使うようになったと思われる。

表10 道具などで『官』には見られたが、『急』には収録されていないものは以下のとおり。

『官』	訳語(大橋・内田)
轎	かご
鞍子	鞍
扯手	手綱
嚼子	くつわ

馬掌	蹄鉄
----	----

逆に『官』にはなかったが、『急』に新しく収録されたものは“汽車”（自動車）で、明治時代の交通手段は馬・馬車中心だったのが、昭和となると自動車が普及してきたことがうかがえる。

表 11 道具などで『官』から『急』に単語が変化したものは以下のとおり。

『官』	『急』	訳語(大橋 1917)	訳語(内田 1921)	訳語(宮島 1934)
火輪船	輪船	蒸気船	汽船	汽船

「蒸気船」中心だった清朝から民国では「汽船」へと語が変化したものと思われる。

表 12 貨幣などで『官』には見られたが、『急』には収録されていないものは以下のとおり。

『官』	訳語(大橋 1917)	訳語(内田 1921)
金子	金塊	金塊
銀子	銀塊	銀塊
對條兒	手形	手形
錢	金銀銅貨	錢

民国時代になると、金塊や銀塊は徐々に貨幣として流通しなくなった。また、手形“對條兒”は下の“匯票”へと用語が変化したものと思われる。

表 13 『官』にはなかったが、『急』に新しく収録されたものは以下のとおり。

『急』	訳語(宮島 1934)
銀元	銀貨
匯票	為替証書

“銀元”は大型銀貨で 1935 年に流通禁止されたが、1933 年当時はまだ流通していたものと思われる。

表 14 貨幣などで変化した単語

『官』	『急』	訳語(大橋 1917)	訳語(内田 1921)	訳語(宮島 1934)
票子	紙幣 鈔票	紙幣	紙幣	紙幣

「紙幣」を表す語も清朝末期と民国時代では変化したものと考えられる。

表 15 『官』には収録されたが、『急』で削除された地名は以下のとおり。

『官』	『急』	訳語(大橋 1917)	訳語(内田 1921)	訳語(宮島 1934)	
奧國	高麗	印度	南斐洲	南洋諸島	西比利亞
營口	保定	廣州	廈門	膠州	威海衛
哈克園	大沽				

表 16 『官』にはなかったが、『急』で追加された地名は以下のとおり。

上海（扈）	南京	下關	廣東	浦口	塘沽
歸化城					

表 17 『官』から『急』で表記が変更された地名は以下のとおり。

『官』	『急』
金山	舊金山
奉天	奉天（遼寧）
北京	北京（北平）

地名についても、日清・日露戦争の時代から日中戦争の時代へ、日本人にとってのその地の重要性の変化を表している。

表 18 敬称で『官』にはあったが、『急』で削除された語は以下のとおり。

貴衙門	台甫	家母	家兄	舍親	賤内
敝衙門	草字				

表 19 『官』にはなかったが、『急』で増えた語は以下のとおり。

内人	令愛
----	----

「妻」を表す謙遜語“賤内”が『急』では“内人”に変わっている。その他、“台甫”（お名前、あざな）“草字”（自分のあざな）、“貴衙門” “敝衙門”という役所の旧呼称が削除された。『急』では“令愛”（お嬢さま）が増えている。

表 20 抽象名詞で削除された語は以下の 27 語。

照會	告示	護照	文書	地方	新聞
條約	履歷	國家	呈子	字樣	收單
皮氣	工夫	景致	經費	氣運	姓名
碼字	賄賂	年紀	尺寸	習氣	精神
方向	年成	志氣			

表 21 新たに加えられた語は以下の 15 語。

憑據	性質	目的	面子	命運	海量
機會	關係	社會	學界	商界	語言
政事	機關	代表	科學		

削除された語の中には、「中国語初級段階学習指導ガイドライン」の基礎語彙に含まれている常用語である“新聞”“地方”“工夫”“姓名”“國家”“精神”の 6 語も含まれていることから、この単語の選択はかなり恣意的だといえる。

表 22 『官』から『急』で削除された形容詞

乾淨	舒服	爽快	寬綽	清楚	簡便
暴虐	含糊	傲慢	公道	勤謹	利害
懶惰	奸詐	冷清	簫索	奇怪	稀罕

表 23 『急』で追加された形容詞

大小	遠近	生熟	紅白	緊鬆
長短	有無	勝敗	悲喜	閒靜
可憐	頷磳 hanchen	慷慨	麻煩	可惜

『官』から『急』で削除された語の中には、「ガイドライン」にある基礎語彙“乾淨”“舒服”“清楚”“利害”“奇怪”も含まれている。また、追加された語は“大小”“遠近”などのように反対語を並べたものが多く、これは一つ一つの漢字は形容詞の基本語であるものの、二つ続けた熟語は形容詞とはいえないだろう(ただし、『急』には「形容詞」という括りは記載されていない)。

表 24 『官』から『急』で削除された動詞

照應	定規	預備	進去	收拾	吩咐
保舉	佩服	感激	防備		

表 25 追加された動詞

笑	哭	樂	悶	交渉	贊成
反對	委任	辦理			

清朝時代の“保舉”が削除され、“笑”“哭”“樂”“悶”などの心理的動詞が追加されたが、「ガイドライン」にある“進去”“收拾”や常用語の“感激”“吩咐”も削除されており、語の選択は恣意的といえる。

表 26 新しい語

性質	目的	機會	關係	社會	機關
代表	科學	語言	交渉	贊成	反對
委任					

那須清「急就篇の語彙」(『文学論輯』第 19 号 1972 年 北九州大学)では、「増補された語の中には、当時のいわゆる新名詞が若干ある」と指摘している。そして「筆者の主観によって拾った語は次の 13 語ある」として、上の語を取り上げている。

表 27 削除された基礎語彙

夜裏	大夫	飯	點心	茶	窗戶
銀行	盆	錢	地方	護照	新聞
國家	工夫	姓名	精神	乾淨	舒服
清楚	奇怪				

『官』から『急』で削除された単語のうち、「ガイドライン」のある基礎語彙に入っているものが上のように20語あった。

以上、『官』の「名辞」と『急』の「単語」の語の違いをまとめたが、増減した語には30年間の時間の流れを示しているものもあるはいえ、特に形容詞や動詞の増減、選択について教育的意図はあまり感じられず、恣意的なものとしている那須清「急就篇の語彙」の評価は妥当であると考ええる。

3.3.2 「問答」の比較

『官』、『急』ともに「問答上」「問答中」「問答下」の3つの部分に分かれている。「問答上」は一問一答の比較的簡単な短い対話を収録、「問答之中」はほとんどが二問二答、中にはやや長い受け答えも含まれている。「問答之下」は一問一答から始まり、長い問答、そして問答ではなく故事などの文章も含まれている。これは両教本に共通している。

「問答之上」の問答数102が、『急就篇』では100、「問答之中」は『官』の問答数150、『急』では163、「問答之下」では、『官』の問答数74が『急』では33、問答数の合計は328から296へと減少している。なお、『急』の「問答之中」で追加された問答は45であるが、この増加分のうち、『官』の「問答之下」で削除されたものから繰り上げられた問答が15回ある。つまり、共通の問答は実際には235となる。

表 28: 問答数の推移

	『官話急就篇』	『急就篇』	削除	追加	共通
問答之上	102	100	12	10	90
問答之中	152	163	34	45	118
問答之下	74	33	62	21	12
合計	328	296	108	76	220

削除されたものだけでなく、追加されたものもあり、また問答の単語や内容の入れ替えもある。どのような改訂がなされ、時代による変化がどのようにに反映されているのか、以下で考察する。

(なお、『官』『急』ともに、疑問詞の“哪”は“那”と表記されている。ただし文末助詞としては“哪”と表記されている)

(1) 「問答之上」

「問答之上」では、『官』の問答数 102 のうち、『急』ではそのうち 12 が削除され、10 の問答が追加され 100 となった。

削除、追加された問答は以下のとおりである。左が問い、右が答えとなる。なお、数字は問答に付された番号である。

表 29 『官』から『急』へ削除された問答

3	行不行	行
5	對不對	對
11	有幾斤	有二斤
27	您多嚒走	我下盪船走
64	他做甚麼哪	他閑着哪
67	這是那兒	是哈達門
71	爾醉了麼	我有點兒醉了
75	您上那兒去	瞧朋友去
89	這是老樣兒麼	是時樣兒的
90	一匣子多少	一匣十二個
95	您到過北京麼	我沒到過北京到過天津
99	您告訴他了沒有	告訴他兩回他不聽

表 30 『急』で追加された問答

3	去了麼	去了
4	到了麼	到了
5	是不是	是
8	可以不可以	可以
11	有沒有	沒有
38	有甚麼新聞沒有	沒甚麼新聞
50	沏甚麼茶	沏綠茶罷
74	有甚麼新鮮花樣兒麼	爾瞧這都是時興的
75	爾冷不冷	不冷。我穿着皮襖哪
81	令尊令堂都好啊	是。都是康健

上の二つの表から、削除された問答のうち、27 の北方方言“多嚒”と回数を表す量詞“趟”と同義の“盪(=燙)”は意図的に削られたかもしれないが、その他についてはどのような基準をもって削除・追加されたものかは不明である。

しかし、削除と追加を経て、『急』の最初の部分が、“來了麼 來了”“走了麼 走了”“去了麼 去了”“到了麼 到了”と暗誦するのにリズムが整い、入門会話としては『官』より導入部分が学習しやすくなっている点は注目に値する。

次に『官』から『急』へ、訂正されたものは以下の通りである。

表 31 『官』から『急』へ語句が訂正された問答

	『官』		『急』
21	今兒幾兒了	23	今天幾號了
”	今兒初十	”	今兒十號
22	多啗禮拜	24	幾時禮拜
”	明兒禮拜	”	明天禮拜
29	您怎麼走	29	(由)怎麼走
32	二百錢	32	十個銅子兒
36	我看新聞紙	37	我看報哪
37	今兒禮拜幾	39	今兒星期幾
41	他做甚麼買賣	43	他做甚麼生意
43	上那兒去	45	上那裡去
48	賤姓李	51	姓張
49	貴處是那兒	52	貴處是那裡
52	您打那兒來	55	爾從那裡來
”	打家里來	”	打家(裏)來
61	您到這兒幾年了	64	您到這裡幾年了
76	他上那兒去了	75	他上那裡去了
91	多兒錢一斤	90	多少錢一斤
”	三百錢一斤	”	三毛錢一斤
97	今兒沒船明天有船	96	今兒個沒有明天有
100	明兒禮拜爾上那兒逛去	98	明天禮拜爾上那裡逛去

〃	我約一個朋友照相去	〃	我約一個朋友看棒球兒去
101	那是兵船麼	99	爾看那是軍艦不是

上の対照表から明らかとなった点を整理すると、以下の6点にまとめられる。

① 規範化したと思われるもの。

“今兒” → “今天”、“明兒” → “明天”、“多啗” → “幾時”、“幾兒” → “幾號”、“那兒” → “那裡”、“這兒” → “這裡”、“多兒” → “多少”のように兒化を訂正している。しかし、“今兒” “明兒”の兒化については、『官』の「名辞」部分ではすでに“今天(今兒)”と兒化はすでに優先されてはいない。(これは『急』の「単語」部分でも同様)。『急』の23、39など、直していない箇所も多く、両方を併用している。

また、52 “打那兒” → “從那裡”では介詞を北京方言から訂正しているが、『急』の同じ問答の中では“打家(裏)來”と“從”と“打”は併記されており、『急』のほかの「問答」でも“打”が使われている。

② 北京方言化したと思われるもの。

97 “今兒個”のように逆に北京方言化している箇所もある。

③ 時代の流れによる名詞の変化と思われるもの。

“初十” → “十號”、“新聞紙” → “報”、“二百錢” → “十個銅子兒”、“三百錢” → “三毛錢”、“兵船” → “軍船”などで、太陰暦から太陽暦へ変わった点、貨幣の単位が変化している点、また“兵船” → “軍艦”のように日本語から逆輸入されたものと推測される語もある。

④ 敬語の修正。

“賤姓” → “姓”。“賤姓”の謙讓表現は明治、大正期の他の教本にも記載があることからも、謙讓表現として命脈を保っていたものと考えられる。しかし、『急』が刊行された1933年にはこの表現を使うような場、中国人に敬語を使う場面が明治に比べて減少していたために訂正を行ったという可能性も排除できない。

⑤ 新しい語の導入。

“照相” → “看棒球兒”(野球見物)が挙げられる。当時も“照相”は使われていただろうが、いっそうモダンな“看棒球”が登場していることに明治から昭和への時代の流れが感じられる。

⑥ その他

“禮拜” → “星期”、“買賣” → “生意”と同義の置き換えもある。

(2) 「問答之中」

「問答之中」部分は、『官』の152から、『急』では163問答と増えている。このうち、『官』から削除された問答は34、『急』で追加された問答は45。この増加分のうち、『官』の「問答之下」から繰り上げられた問答が15回ある。

「問答之中」で『官』から『急』へ削除された問答には以下のような文と語句が含まれる。

表 32 『官』から『急』へ削除された問答

10	坐高砂丸
14	是哈蟆做的糖麼
”	爾別胡說了是遼東的地名兒
38	這是直放船，不掛煙台
46	他有甚麼差使
46	他在戶部裏
61	日本兵到那兒了
”	快到了瀋陽了
88	頂高的銀子叫甚麼
”	元寶銀子
89	俄國又沈了一隻船
”	是怎麼沈的您知道麼
90	日本兵又贏了
”	贏了是贏了，可是傷的人也不少
108	守旅順的俄國兵，不知道怎麼個收場

10の“高砂丸”、14の“哈蟆塘”は日露戦争時代の名残の船名、地名(撫順市内)、61、89、90、108の各問答も日露戦争を話題としていることによる削除である。38の“直放船”(直航便)、“掛”(寄港する)、46の“戸部”(清朝政府で戸籍財政を預かる部署)、88“元寶銀子”(私蔵貨幣の馬蹄銀で50両)は、民国時代にはすでに用いられなくなったため削除されたと思われる。

『官』から『急』の問答の中で、語が訂正されているもののうち、固有名詞の入れ替え等を除いた主なものを以下に挙げる。

表 33 『官』から『急』へ訂正された問答

	『官』		『急』
5	九點半鐘	5	九點半了

26	今兒有學堂沒有	25	先生今日有學校沒有
29	那個學堂一個禮拜你去幾盪	28	那個學校一禮拜您去幾次
33	咱們溜達溜達去	31	我們溜達溜達去
37	咱們拏皇曆照照罷	38	看看月份牌就知道了
47	他是參贊麼	47	他是秘書長麼
48	欽差到了麼	48	公使到了麼
58	您出門帶現錢麼	57	您出門帶現洋麼
59	這溜兒有一客店麼	60	這溜兒有一客棧麼
75	打衙門裏來	72	打公司裏來
80	因為禮拜，又搭着天氣好	77	因為禮拜，又趕上天氣好
86	別藏奸了	90	別瞞著了
93	他還沒娶親麼	93	他還沒成家麼
107	我問的是穿洋衣裳的那一位	103	我問的是穿西服的
〃	他是我們的提調	〃	他是我們的買辦麼
111	今兒他起身您給他送行去了麼	108	今兒他走了您給送行去了麼
126	這盪車我們坐行不行	120	這趟車我們坐成不成
141	聽說令愛有點兒不舒服，現在大好了沒有	132	聽說令愛有點兒欠安，現在全癒了沒有
〃	叫您惦記着他不過着點兒涼，現在已經大好了	〃	叫您惦記着他不過受點兒感冒，現在已經大好了
145	老兄今年貴甲子	136	閣下今年貴甲子
145	我虛度三十二。老先生您高壽	136	我纔三十二。老先生您高壽

(ここでは「問答之上」ですでに訂正された語は挙げていない。)

「問答之中」での語の変化については、次の4点に整理することができる。

① 時代の流れによる名詞の変化と思われるもの。

“學堂” → “學校”、“皇曆” → “月份牌”、“參贊” → “秘書長”、“欽差” → “公使” “現錢” → “現洋” “客店” → “客棧”、“洋衣裳” → “西服”は時代の変遷による名詞の変化、“衙門” → “公司”、“提調” → “買辦”は意味が異なる語に入れ替えているが、やはり時代の変遷による名詞の変化を表している。

② 規範化したと思われるもの。

“幾盪” → “幾次”、“這盪車” → “這趟車”は北京方言から標準的な表現への量詞の変化を表している。

“九點半鐘” → “九點半了”、“九點半鐘”という形は、梁淑珉「清末民初时期的时间表现使用情况考察」(『清代民国漢語研究』2011年 学古房)によると、民末清初にのみ用い

られる表現とされているが、広東語圏インフォーマントによると中国南方では現在もまだ使われているという。

“藏奸” → “瞞着” はほぼ同義だが、“藏奸”は《現代汉语辞典第六版》(商務印書館 2012、以下《現代》)によると方言であることから、規範的表現に変わっていると思われる。

“着涼” → “受感冒”は『岩波中国語辞典』(倉石武四郎 1963、以下『岩波』)によると、“受感冒”のほうが標準語(ラジオ・テレビで用いられる)としてランクが上であり、北京語インフォーマントによると、同義だが北京方言から規範的な表現に変わっているという。

“娶親” → “成家”は同義語を入れ替えただけであるが、『岩波』では“娶親”のランクが下の4に対して“成家”はランク0、北京語インフォーマントによってもやや規範的になっているという。

“又搭着” → “(又)趕上”は同義で「おまけに、～の上に」の意。《現代》に“搭着”は採用されていないが、“趕上”はある。“趕上”がより規範的と思われる。

③ 敬語の修正

“老兄” → “閣下”の問答の内容を見ると、問うている方は61歳、答えているのは32歳、ということで、同年配同士の敬称“老兄”という敬称は用いない場面。そのため一般的な敬称“閣下”に訂正したと思われる。

“虚度” → “纔”で、年齢を言う謙譲語としての“虚度”は明治期の教本には現れているが、昭和期の教本や『岩波』には掲載されておらず、1930年代には一般に用いられなくなっていた可能性がある。

“不舒服” → “欠安”、“大好” → “全愈”は問うているのが相手の「お嬢様」であることから、より雅な表現に変えていると思われる。

④ その他。

“起身” → “走了”は同義の入れ替えである。

(3) 「問答之下」

「下」の問答数は『官』の74回から『急』は33回と大きく減少している。問答数の減少にともない、ページ数も『官』の51ページから『急』の35ページと減っている。『官』から『急』に残された問答は12、追加された問答は21回である。削除された62回のうち、『急』の「問答之中」に15回が移動された。削除された残りの47問答のうち42回は、宮島自身による教本『官話篇』(1903 善隣書院)にも採用されている。残りの『官』オリジナルの問答のうち、『急』で削除されたものは6問答である。

なお、「問答之下」は「問答」という括りになってはいるが、「問答」ではない短文も含まれており、『官』には3篇の物語が採用され、そのうちの1篇は〈桃郎征鬼〉(「桃太郎の鬼退治」)で、『急』には8篇の短文と〈桃郎征鬼〉が含まれている。

『官』と『急』(中、下)共通の27問答のなかで、固有名詞の入れ替え等を除いた主な訂正点は以下のとおりである。

表34 『官』から『急』へ訂正された問答

	『官』		『急』
14	我有一件事和您商量, 請您明兒早起在家裏等一等。	中 153	我有一件事和您商量, 請您明兒早起在家裏候一候。
39	您不舒坦剛好, 總是少出去, 看着了涼。	中 144	您病剛好, 總是少出去為是。
"	我這麼幾天了, 連屋門兒都沒出, 實在是悶極了。	"	我這麼幾天了, 連屋門兒都沒出去, 眞眞悶極了。
"	這話是不錯的。	"	這話說的也有道理。
45	這屋子怎麼這麼亂七八遭的, 你快拾掇拾掇。	中 85	這屋子太亂七八遭的, 你給快拾掇拾掇。
46	你把我的靴子拿出來。	中 138	你把我的靴子先給拿出來。
50	我是天一亮就起來。	中 139	我是天亮就起來。
61	沒甚麼, 左不過是年年的俗套子。	4	沒甚麼, 無非是年年的俗套子。
	請您用點兒點心。	"	請您用點兒點心。
"	不啞了, 我要告辭了。	"	不用了
"	(略)	"	(略)
"	那兒的話呢, 該當的。	"	那可萬不敢當。我來是應該的。
62	一個家常飯, 還這麼客氣做甚麼哪	5	一個家常飯, 勿須乎客氣
65	你既是越多越好, 為甚麼叫我拿住了呢。	7	您既是多多益善, 為甚麼反叫我給拿住了。

68	若是遊民少，有事業的人多， 國家就可以富了	9	若是遊民少，有事業的人多，國家 就可以富強了
----	--------------------------	---	---------------------------

上の表にある修正箇所は下記の5点に分類することができる。

①やや文語的表現に訂正されたもの。

“等一等” → “候一候”、“那兒的話呢” → “那可萬不敢當”、“越多越好” → “多多益善”

②規範化したと思われるもの。

“不舒坦” → “病”、“不啞了” → “不用了”、“左不過是” → “無非是”、“這麼客氣做甚麼哪” → “勿須乎客氣”、“富了” → “富強了”

③口語表現への訂正と思われるもの。

“實在” → “眞眞”の“眞眞”は《現代》には記載がないが、北京語インフォーマントによると、“實在”より口語的な北方表現という。《近代汉语辞典》(団結出版社 1997)によると“眞正”の意であり、《红楼梦》にも口語の用例があるが、“實在”も《红楼梦》に口語の用例がある(太田 1981, P286)。清代には双方とも口語で用いられているものの、“眞眞”は《漢語大詞典》(漢語大詞典出版社 1991 年)では“實實在在”と説明されていることから、“實在”よりもやや強調するニュアンスが含まれていると思われる。

④“給”について

“你把我的靴子拿出來” → “你把我的靴子先給拿出來”、“你快拾掇拾掇” → “你給快拾掇拾掇”と2つの文で、“給”を加えている。これは宮島自身による『急就篇総譯』(1934)によると命令形になっている。前者では“給”を処置文の述語の動詞の前に置いた場合、語気を強める(《現代》)働きがあるための訂正と思われる。後者は「受給者の望まない動作が行われることを示すとき」(『岩波』)に訂正され、ニュアンスが加えられたと思われる。

⑤その他、“天一亮” → “天亮”は“天一亮”が“一…就…”の構文であることから、その変更の理由は不明である。“不錯的” → “也有道理”は、“不錯”ではなく“沒錯”が正しいと思われ、そのため訂正されたのかもしれない。“怎麼這麼亂七八糟” → “太亂七八糟”の修正は理由不明。

上記の①と②が同時に行われることには矛盾があるが、それについては3.3.6で後述する。

また『官』の「問答之下」について特徴的な点は、宮島が『官』より前の1903年に編纂した教本『官話篇』(善隣書院)から流用した問答が、全74問答中66含まれていた点である。このうち42回が削除された。また『官』で新しく作られた8回のうち、6回が削除された。

『急』で削除された『官』の問答の中で、時代の変遷による用語や表現の変化という原因によると思われるものは、以下のとおりである。

表 35 『急』で削除された問答

4	我那是打學房回來。
5	沒上那兒去，我打那麼就回家了。
7	我這兒有點兒東西，孝敬尊大人罷。
8	前者勞駕到舍去，今兒特來謝步來了。
26	您帶着的那是甚麼書。
26	是曾文正的日記。
30	你近來瞧京報哪麼。
〃	是天天瞧報，您問甚麼事麼。
54	您這就要上衙門麼。

“學房”は民国では“学堂/学校”となる。5については、太田辰夫『中国語歴史文法』（1981年 朋友書店 P129）では、“打那麼”は“那麼”の「方向をあらわすことがあるが、いずれも介詞をまえにとる」用法としている。“尊大人”は相手の父を敬った言い方だが、『岩波』には見出し語としては載っていない。“前者”は『岩波』では上の4にランクされ《現代》には記載がなく、“謝步”は《現代》で「旧時の返礼」とある。“曾文正”（曾国藩）、“京報”（清朝の政府官報）、“衙門”（清朝時代の役所を指す語）という清朝の人物、事物が含まれた問答は削除された。

また、以下の物価に関する内容が入った『官』の問答は『急』では削られた。

表 36 『急』では削られた物価に関する問答

27	這個報一個月出幾本。
〃	每月出一本。
〃	多兒錢一本。
〃	一角五一本。
53	一百二一包的，合多兒錢一斤呢。
〃	若論斤，合十二吊多錢。
59	一個月交多少學費啊。
〃	二十五塊錢。
〃	怎麼這麼多啊。
〃	連學費伙食帶穿衣裳，都是學堂管，所以顯着多。

清朝末期には政府発行の銀貨「光緒元宝」が発行されたものの、当時は地方によってさ

さまざまな貨幣が雑多に流通し、その貨幣制度は混乱していたようだ。

上表のような『官』の価格に関する問答については、民国時代に全面的に貨幣制度が改められ、その結果、削除されたのであろう。

さらに、『官』から『急』へ追加された問答 21 回が新出の短文である。その内容は「ジョージ・ワシントンの幼年時代の話」、「四不像の話」、「漁夫の利」、「朝三暮四」、「楊震四知」、「李鴻章の話」、「孔子家語」などの出典のあるものと、「小話」である。「問答之下」には『官』から流用されたものにも故事が多い。「孫叔敖の故事」、「漢の高祖と韓信の問答」、「孟子・梁惠王篇下・出乎爾者」など、『官』、『急』共に掲載されている。宮島は「問答之下」では単なる会話ではなく、故事を取り入れて読者に中国古典の知識を提供している。

3.3.3 北京語の比較

『官』、『急』ともに、北京語が多用されているが、以下、太田辰夫の「北京語の文法特點」(『中国語文論集』1964年 1981年復刊 汲古書院)に照らして詳細に比較したい。

表 37 『官』、『急』の北京語

	「北京語の文法特點」(太田辰夫)	官話急就篇(増訂四版)	急就篇
1.2	北方語の名詞接尾辞“兒”は南京官話においては用いることが少ない	「名辞」に用例多数	同左
2	代名詞		
2.1	人称代名詞一人称複数の包括形(咱們)と除外形(我們)の区別は南京官話にはない	(問答下 37) 咱們拏皇曆照照罷	中 116
2.2	北方語では二人称の敬称として“您” “您哪”がある	“您哪”はなし “您”は多数	同左
2.3	三人称の敬称がある	なし	なし
2.4	“誰”を職業などを問うときにも用いる	なし	なし
2.5	自称の代名詞“各人”“自各兒”“自己各兒”などがある	なし	なし
2.6	一人称単数の“俺”“咱”“俺”などは北京語では用いられない	なし	なし
2.7	北京語では名詞のあとに“甚麼的”をつけて“等”の意をあらわす	(問答下 116) 甚麼魚都有鯉魚鯽魚華魚甚麼的	(中 11) 上過漢口宜昌甚麼的

2.8	場所をあらわす“這兒”“那兒”“哪兒”は南京官話では用いられず、“這裏”“那裏”“哪裏”を用いる	『官話急就篇』では“這兒”“那兒”“那(哪)兒”しか用いられていない。	(中 11) 都到過那裏のように“裡”を用いる
2.9	時間を問う“多嗜”“多會兒”は南京官話では用いない	(問答上 22) 多嗜禮拜 (問答上 27) 您多嗜走	なし
2.10	這程子”も南京官話では用いず	(問答下 20) 這程子您接着府報了麼。	(中 67) 這程子很忙竟打夜作
2.11	“這麼”“那麼”を副詞的修飾語として用いる	(問答下 9) 您請上坐。我不敢那麼坐。(問答下 52) 既是這麼着, 我留下, 等我錢下來, 就給你送來。	(中 109) 散學的能說的這麼好, 您實在是天分高
2.12	“哪麼”を用いる。方向を問う時	なし	なし
2.13	“怎麼”に“着”をつけて述詞化する。または名詞の修飾語とする時、北京語では“個”などの量詞を要する	(問答中 133) 貴國出口貨, 一年穀怎麼個數目 (問答下 33) 這兩條手巾, 大的倒便宜, 小的倒貴, 這是怎麼個理呢。	同左
2.14	疑問・感嘆を表す“多麼”は南京官話では用いない	なし	なし
2.15	“多”を形容詞の前に用い、疑問を表すのに用いる	(問答中 125) 這站停多大工夫	同左
3	数詞・量詞		
3.1	“二百”といい、“兩百”とはいわない	(問答上 31) 二百錢	なし

3.2	南京官話には“倆”“仨”など数詞と量詞の合体した語がない	(問答中 31) 倆人均攤	同左
3.3	官話では“老二”“老三”というが純然たる北京語にはなかった	なし	なし
3.4	北京語の“一點兒”“點兒”は南ではあまり用いず“些”などを用いる傾向がある	(問答中 58) 您總得帶點兒現錢路上方便些	同左
3.5	北京語では“這些”“那些”“好些”“些”の後には“個”をとる場合もある。“些個”を南京官話では“一些”	(問答下 32) 怎麼會差這麼些個時候兒。“一些”はなし	(中 141) 同左
3.6	量詞の用法の差 一輛車→一部車子 一掛車子 一口豬 →一隻豬 一頭牛→一隻牛 坐一會兒→坐一下子 去一盪 →去一回など	(問答中 103) 等一會兒, 俺們一同去 (問答中 53) 早起出去一盪一回はなし	(上 47) 一會兒就開 (中 11) 坐過好幾趟了
3.7	不定数をいう場合、北方語では“十來個”のごとく“來”を用いるが、南京語では“上”のごとく言う場合もある。また北京語では“整”を数詞の前におくのが普通であるが、南京官話では数詞の後におくことがある	なし	(中 1) 整五十
4	形容詞		
4.1	比較の場合、がんらい北京語では形容詞の後に“多了”を用いた。北方語の一部と南京官話では“得多”が用いられた。現在(1964)では区別がなくなっているようだ	(問答下 33) 你瞧, 這小的比大的織的細多了, 並且也厚。“得多”はなし	同左
4.2	“更”“還”などの副詞を用いて比較する時に南京官話では副詞の後に“要”を用いるのが普通である。北京語ではこれを用いない	(問答下 57) 這張相, 照得比本人兒還好哪, 您別損人下不去。	同左

4.3	「…したほうがよい」という場合、北方語では“還是自己去好”南では“還是自己去的好”ということがある	両方なし	同左
4.4	北方語では“一天比一天大”のごとくいう。南では“一天大似一天”	両方なし	同左
5	動詞		
5.1	動作の進行を表す場合、“在”“正在”を動詞のまえにおいてこれを表すことは北方語にはない	進行形の“在”はない	同左
5.2	北方語では時間や費用がかかるときに“得”という。南京官話では“要”という。また「…せねばならぬ」意にも用い、しばしば“總得”“必得”などともする。南京官話では“要”または“該”を用いる	(問答中 48) 是我得去	(問答中 15) 得幾時回來
5.3	“不能”を北方語では“不會”の意味にも使用する	用例なし	なし
5.4	北方語で“待要”という語は、また北方語の一部では単に“待”というが、南京官話では“要”という	用例なし	なし
5.5	北方語では「よく…する」というとき“愛”を用い“愛下雨”のようにいうが南京官話ではこの言い方がない	(問答下) 這個地方常愛鬧甚麼病	なし
5.6	動詞“没有”は北方語では単に“没”という。しかし、南京官話では賓語をとるときには“没”は用いない	(問答中 62) 還沒哪 (多数あり)	(問答中 81) 沒準兒
5.7	北方語では“沒的”(“沒得”とも書く)を動詞の前におき、「…するものがない」という意味をあらわす	(問答下 13) 見倒見着了，他家裏有兩位生客，我麼倆人沒得說細話，定規今兒晚上還見面。	なし

5.8	可能不可能をあらわす複合動詞“～得了” “～不了” liǎo は南京官話では用いられず……(後略)	(問答下 15) 你們都記得了麼。 (問答中 125) 停不了多大工夫	得了 はない が、不了 は同左
5.9	可能不可能をあらわす複合動詞に賓語が用いられる場合、北方語では動詞を分離しないのが普通であるが南では分離することがある	用例なし	同左
5.10	「でき上がった」意をあらわす～得了” dele は南京官話では使われず……(後略)	(問答上 13) 飯得了麼	同左
5.11	北方語では接尾辞 da 搭, 達, 打を動詞接尾辞とするものがある	用例なし	なし
5.12	一部の心理・感覚をあらわす動詞につきその程度をあらわす“～得慌”は南京官話にはない	用例なし	なし
5.13	「与える」意味の動詞は北方語では“給”である。動詞のあとにつく“給”は南京官話では“把”という	(問答中 12) 您給一吊錢罷	(問答中 12) 您給兩毛錢罷
5.14	“～上來”を用いて状態の完成への接近をあらわすことは南京官話にはない	用例なし	なし
5.15	北方語でやや古く方言的に使われた「間に合う」意味の“～迭”	用例なし	なし
5.16	“不知道”と“知不道”	用例なし	なし
5.17	“讓”をよく用いる	用例なし	(中 113) 依我說 您還得 容讓他 寫纔合 乎對待 朋友的

			道理
5.18	“叫”を使役と被動に用いる	(中 98)叫您費心, 我必要奉擾的	同左
5.19	“來”と“去”を用いる連動句では南北で語順に違いがある	(中 115)來借書來了 (中 111)今兒他起身您給他送行去了麼	同左
5.20	反復疑問文に賓語をもちいるばあい、北方語では賓語を肯定・否定の中間に置くかまたは2個用いるが、南では後におく	(中 34)拏傘不拏	同左
6	介詞		
6.1	起点をあらわす“起”“解”は南では用いない。また“打”も稀である。南京官話ではおおく“從”“由”を用いる	“解”用例なし (上 52)您打那兒來 (中 134)是兩個地名, 因為這鐵路, 起北京蘆溝橋, 修到湖北漢口, 所以叫蘆漢鐵道	(上 55) 打家 (裏)來
6.2	行き先をあらわす“上”は南では多く“到”“往”を用いる	(上 43)上那兒去 (中 30)到那兒我還有點兒事哪	同左
6.3	方向をあらわす“衝”“衝着”も北方語で南では用いない	用例なし	なし
6.4	時間の到達をあらわす“趕”も南では用いず“等”“到”を用いる	(中 97)倆不聽我的話趕鬧了肚子就該後悔了	なし
6.5	介詞の“給”も南京官話では用いず“替”“和”などによる。	(中 82)給您豫備晚飯麼	同左
6.6	“跟”も南ではあまり用いない	(下 16)今兒跟老師告一天假。	同左
6.7	官話ではある者から借りたりもらったりする場合“問”を用いることがある。しかし北京語ではこれを用いない。	用例なし	なし
6.8	材料や用具をあらわす“使”も北方語に特有	用例なし	なし
6.9	依拠をあらわす“按”は南ではあまり用いない	用例なし	なし

6.10	“管”を“對”の意にもちいるのも北方語である。	用例なし	なし
7	副詞		
7.1	“大”を程度副詞に用いる	(中 141)聽說令愛有點兒不舒服，現在大好了沒有	なし
7.2	時間の長いことをいう“老”は南京官話では用いず	(下 10)因為僧們老沒見了，特意來望看您來了。	なし
	“且”も北京語で時間の長いことをあらわす	用例なし	なし
	“直”を「しきりに」「とめどもなく」の意に用いるのも北方語である	用例なし	なし
	北方では「これからすぐ」を“這就”というがこれも南にはない	(下 54)您這就要上衙門麼。	なし
	“趕緊的”もおおくは北方で用いる	用例なし	なし
	“乍”も北方語であるという	用例なし	なし
7.3	“只”の意味の“光”は北京語	用例なし	なし
	“所”で「すっかり」「ぜんぜん」などの意をあらわすのも北京語	(中 99)沒有我這程子所沒出去	(中 46) 說是改變多了所不像原先的樣子了
	“都”を特指疑問に用い、問うところのものが何々であるかをきく用法は南にはない	(中 112)都是甚麼時候兒到手	同左
	“都”を北京語では“已經”の意に用いるがこれも普遍的ではない	(中 27)字都抄完了沒有	(中 11)都到過那裡
7.4	“準”を「たしかに」「きっと」の	(上 23)我準來	(上 25)

	意の副詞に用いるのも北方語		他準來
	“管保”は北、“保管”は南	(下 70) 憑你這個身軀兒，憑你這個才幹，我管保準是用不盡的錢，怎麼你還說沒本錢呢。	同左
	“敢情”“敢自”は北方語	(下 53) 敢情這麼貴哪，怪不得這麼受喝呢。	なし
	“白”を「ちょっと、ためしに」	用例なし	なし
	“也許”“行許”など“許”によって推測をあらわすのも北方語	(下 32) 也許罷。	(中 108) 也許是他走的忙沒肯告訴我
7.5	禁止の“別”も北方語	(中 78) 您別過獎了	(中 114) 別取笑了
8	助詞		
8.1	類似をあらわす“似的”は南京官話では用いず	用例なし	なし
8.2	北京語では“哩”を用いない	用例なし	なし
8.3	“來着”で過去の追憶を表す	(中 95) 來了，他還問您好來着	同左
8.4	単に確言するときは北京語では文末に“的”をつけないが官話地区ではこれを用いるところがある	用例なし	なし
8.5	“…得了”を文末にもちいることがあるが南京官話ではこれを使用しない	用例なし	なし
8.6	“不則”“罷咱”	用例なし	なし
8.7	北京語では“咖” jia という接尾辞を用いる。意味はなく単に語調から添えられる	用例なし	なし

以上の全 80 項目のうち用例のないものは、『官話急就篇』増訂四版に 37 項目、『急就篇』には 42 項目あった。これらの「文法特點」について太田は「南北の混淆が顕著にならない

以前のやや古い伝統的北京語を中心として述べている」としていることから、太田の用例は清代後期の北京語の語彙を中心とした項目であろうと思われる。同じく太田辰夫「北京語の語法特点」(1969年)の7つの基準(3.2.3参照)はすべてクリアしていることから、『官話急就篇』増訂四版、『急就篇』ともに北京語の語彙を特徴していることが分かる。

上の表の語彙のうち、『官話急就篇』増訂四版の例文にあるもので、『急就篇』の例文ではなくなっているものが9例、逆に増えているものは2例あった。全体としては、北京語の特徴はやや後退したといえる。

3.3.4 『官話急就篇』増訂四版と『急就篇』の語彙比較

『官話急就篇』増訂四版と『急就篇』の語彙を「単語」、「問答」で比較し、さらに「問答」での「北京語」について両教本を分析した。

この語彙の比較を初めて行ったのは六角恒廣による『中国語学新辞典』(1969年 光生館)の一項目「急就篇」である。ここで六角は、「改訂版では『今兒・明兒・昨兒・這兒・那兒』などの兒化音を一部『今天・明天・昨天・這裏・那裏』のようにあらためた。また『学堂・新聞紙・兵船』等を『学校・報紙・軍艦』などの新語彙に変えた。さらには語学的に不適切な表現、例えば『他中了没有。取上了』を『他考中了没有。取上了』に改訂している。そしてまた好ましからぬ内容、例えば『日本兵到那兒了』のごときものを削除した。初版から改訂版までの30年間に、中国の言語、とくに語彙の面で大きな変化があったため、それに応ずる必要から改訂がなされたのであろう。しかしながら、基本的には、基本的に改訂前の内容を大きく変えていない。」としている。

また那須清「急就篇の語彙」(1972年)では詳細に語彙の変化について分析している。ここで那須は「いかなる方針に基づいて改訂されたのか明らかでないが、「官話」という頭書がとり去られたところからすると、時代の進展に則して、〈官〉の北京官話一辺倒から脱し、より一般的な表現をとりいれようとした意図がうかがえる。〈官〉にあった日露戦争や清代の事物に関する会話が削除されたのは当然のことながら、〈急〉ではもとの問答之下の一部を問答之中へくりあげ、問答之下と散語の部へ古典に基づく対話や成語を増補して水準を高め、かつ教養的色彩を濃くしている。しかし、細部にあたって比較すると、改訂は極めて恣意的であり、中国語の変化に正確に対応したとは思えない」と、改訂を評価してはいない。そして、「単語」については、「この語彙が極めて恣意的に選択されているので、加減した語にも対した意味はない」としている。「問答の上」については、「北京語を一般的な用語に改めたものが多いが「不徹底である」、「問答之中」については、「全般的に表現を複雑にして程度を高めている。」「事物・制度等の改廃に伴う語の入れかえで、時代の進展に応じたもののがかなりみられる」、「問答之下」は、「補充したものは典故に基づく会話が多い」としている。

また、姚偉嘉「《官話急就篇》《急就篇》詞彙比較研究」(2013年6月 日本中国語学会 関東支部例会発表)では、「単語」の改訂について“我想宮島在使用《官話急就篇》的过程

中肯定也发现了很多问题。他对《急就篇》“单语”所作的修改有很多可以看作其对自己原有教学思路的修订。”⁷²（宮島は『官話急就篇』を使った過程で問題を見つけた。『急就篇』の「単語」に彼が行った改訂からは宮島の教育に対する考え方が見てとれる）とし、その例として、(1)『官話急就篇』にはなかった概数詞の補充 (2)『官話急就篇』にはなかった疑問代詞の補充 (3)『官話急就篇』にはなかった単音節形容詞の補充 (4) 学生の暗記の負担を減らすため、また日中外交の時局的变化により、北京の地名と固有名詞を削除 としているが、追加、削除は理由が分からないものが多いという。

さらに、姚偉嘉「《官話急就篇》《急就篇》詞彙比較研究(二)」(2013年7月 未発表)では、『官話急就篇』の「兒化」語の『急就篇』における変化を詳細に分析している。それによれば、『官話急就篇』での「今兒・明兒・昨兒・前兒・後兒」と「今天・明天・昨天・前天・後天」の出現についてそれぞれ統計をとったところ、『急就篇』では例えば「今兒」「今天」「今日」ともに使われており、「今兒」の数は減ってはいるが、なくなっていないとし、「詞彙比較研究(二)」での結論としては、改訂は「規範化」よりも「通語表現」化のほうが正確だとしている。同じ問答の中で「今兒」「今天」を共起している場合もある。これは、学生に二つの語について意識させてマスターさせ、北京語だけでなく南北中国で共通の表現も学ばせたかったという宮島の教育的意図があると結論付けている。1933年頃には、対中外交が北進と南進政策に分かれていた時代背景もその一つの要因となっているものと推察できる。

3.3.5 改訂の目的

「単語」「問答」という主要部分について、宮島が昭和に入り日本が中国に満州国を設立しようという時代に改訂を行ったという時間的な視点、そして清朝から民国への中国語の変化という視点の2点から、『官』と『急』を比較分析したが、「時代の変化を取り入れた改訂を行った」という予測に合致したとはいえない結果となった。

確かに「単語」の部分については、多くの新しい語が追加され、清朝・明治の古い事物は削除されていた。しかし、分析の前には、『急』に新しく収められた語の中には、民国に入り一般化した語も多く含まれているのではないかと予測したが、社会制度の変化に伴う新語、例えば政治・経済・行政・文化に関する新しい語は多くなかった。1921年の『支那語会話篇』では多く取り上げられている「新語」も、ほとんどここには転載されない。

「問答」部分を詳細に分析した結果、時代による語の変化は確かにフィードバックされてはいた。北京官話から規範的な表現（姚によると南北共通語化）へ、名詞の変化による訂正、日露戦争を話題にした問答の削除、貨幣制度の転換に伴う訂正は多く見られたものの、やはり民国時代の新しい事物に関する内容だと明確に分かる問答はほとんど見られない。魯迅をはじめとする『新青年』の文学革命や、孫文による辛亥革命の結果としての民国の世相を反映した面はほとんど見られない。

では、宮島は何のために『官』を30年ぶりに改訂し『急』を世に出したのであろうか。

この改訂の大きな特徴として、①時代の流れによる名詞の変化、②規範的な表現への訂正、③文語的表現への訂正や故事の追加が行われた、④教養的内容を厚くした、の4つが挙げられる。

①、②について、その理由は想像に難くない。民国の中国語と昭和の日本語に合わせた訂正はその時代に使われる教本としては必須である。また、南北中国での「通語」化もその目的だったと思われる。しかし、③文語的表現への訂正・故事の追加も同時に行われたこと、ここに宮島の中国語教育、教本に対する基本的な考えを見いださるのではないだろうか。

宮島が青年時代に7年間中国で師・張裕釗について学んだ伝統的な漢学、書法と中国語が彼の教育思想に大きく影響を与えたと思われる。そのためか、『急就篇』に掲載されている中国語には、社会科学的な内容は盛り込まれておらず、旧社会から抜け出していないかのようだ。しかし、宮島の教本には「善隣」思想がうかがえ、それゆえの格調の高さがある。

彼の「善隣」思想は、日中間が戦争へと向かっていく時代にあるテキストとしては、『急就篇』には戦争に関わる問答が掲載されていないことにも現れている。『官話急就篇』には日露戦争についての問答もあったが、『急就篇』では削除されている。

また、宮島による『急就篇総譯』に照らして日本語訳を確認しても、『急就篇』には、この時代の他の教本類に多く見られる現地の中国人に対する侮蔑的な内容の問答は採用されていない。宮島が学習者に提供するの、あくまで文人らしく、相手を尊重する、礼を重視する中国語である。教本としてふさわしい規範的表現に修正し、時代による言葉の変化に訂正を加えながらも、教養としての「故事」を追加し、古き良き中国語、そして中国の伝統文化を日本人に伝えたいという宮島の思いが伝わってくるのが『急就篇』という教本のもう一つの大きな特徴といえる。

また、宮島は『官話急就篇』『急就篇』ともに日本語訳や解説を一切加えていない。これは教室で教師について「口伝」で中国語を学ぶべし、という彼の教育思想の一つでもある。さらに、『急就篇』では『官話急就篇』よりさらに問答の始めの部分を修正し、初学者にも学びやすく、やさしい内容の、リズムカルな問答から始めている。“來了麼 來了” “走了麼 走了”という問答は、頭と身体に入りやすい。こういった問答中心のテキスト、というコンセプトは改訂後も変化していない。

3.4 その他の教本について

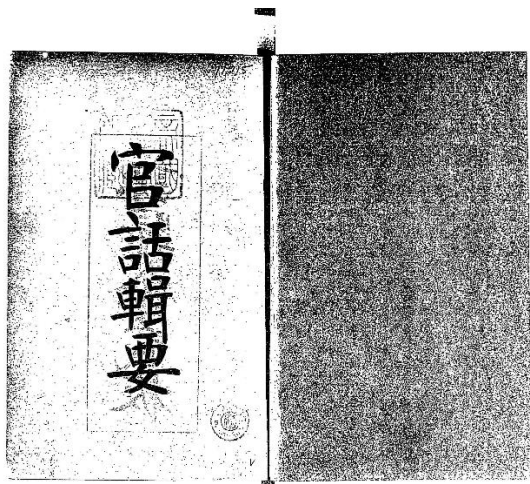
『官話急就篇』初版、『官話急就篇』増訂四版、『急就篇』については上述したが、ここでは宮島が編纂した他の教本、1897年に発行された初めての教本『官話輯要』、1902年の『官話篇』、1921年の『支那語会話篇』を中心に紹介する。

なお、各教本について『問答』の特徴の項を設けているが、ここではすべて1969太田辰男「近代漢語」（『中国語新事典』P186）にある「北京語の語法特点」（以下、「北京語

の語法特点」とする)を、北京語の特徴を有しているかを判断する基準としている。

(1) 『官話輯要』

1897年(明治30年)刊行。宮島にとって最初の教本である。善隣書院の前身である詠帰舎の時代に編まれた。『語言自邇集』の散語章に似た構成で始まり、単語の羅列の後に短句が並んでいる。



(国立国会図書館近代デジタルライブラリー)

<1> 構成

上

第一章 「発音」 “啊 愛 安 昂 傲 ・ ・ 瓦 外 完 往 ○” まで105個の漢字に声調記号がついている。

第二章 「散語」 第一～第八 声調付きの単語の羅列の後、短い語句。数字、人称など。

第三章 「名辞」 天部 14、地部 25、人部 76、動植物部 72、食部 61、住部 36、衣部 27 器具部 62、時令部 60。合計 433。声調が付いている。

第四章 「辞類」 動辞 258、形容辞 63、虚辞 87、発語辞 6、助語辞 5、陪伴辞 25。合計 444。声調が付いている。

第五章 「造語小例」 語句。

第六章 「問答前編上」 50 問答。

“你們的學堂在那兒啊 在這拐灣兒門口兒有報子” から始まる。

第七章 「問答前編中」 3 問答、内容は長い世間話。

第八章 「虚辞約例」 “上、下、頭、子” などの語句とそれを使った問答。

第九章 「問答前編下」 挨拶、呼称、敬語などの単語が挙げられ、それを使っての 8 問答。“貴姓 賤性李” から始まる。

第十章 「成句」 語句の紹介。

下

第一章 「音母」 “見 溪 郡 疑 端 透 定” など一字の漢字が羅列。

第二章 「音声分彙」

阿

愛 哀 埃 矮 愛

安 安 ○ 俺 岸

など声調の順に並べている。

第三章 「虚辞」 可以 可就 可是 就是 若是 已經 早就 など 64 語の虚詞と例文。

第四章 「問答後編上」 第一～第十一 「教訓」。

第五章 「問答後編中」 第一 お客との問答、第二 梅見の問答など店先の問答、師弟、問答、天津条約、全 12 篇。

第六章 「問答後編下」 太平天国の乱についてのやや長い文。

第七章 「字眼」 2 文字、3 文字、4 文字の単語。

第八章 「成句」 短い語句。

第九章 「翻訳」 論語など古典を口語文に訳したもの 金国僕氏らによる。

第十章 「文典」 張廷彦氏による、名詞、形容詞、動詞などの解説。

<構成・内容の特徴>

- ①この教本には後の教本に採用される要素すべてが盛り込まれており、いわば宮島教本の原点となっている。
- ②詠帰舎・善隣書院で一時期教本として使用されたためであろう、解説、発音、日本語訳はいっさい示されていない。また句読点もない。
- ③「名辞」部分が「天部」、「地部」などで見出しを付けて分類されている。分類されているのは、ほかに『支那語会話篇』だけである。このパートの語には四声を示す白丸がついており、さらに語句で重念する語は黒丸になっている。
- ④「辞類」として「動辞」「形容辞」などと分類して語を挙げている。分類されているのはこのほか『支那語独習書』だけである。
- ⑤「虚辞」については章を設け、語と例文を載せている。副詞を「虚辞」として取り上げているのはこの教本だけである。
- ⑥「散語」の部分はまず語を挙げてから、語句を羅列している。この形式は『亜細亜言語集』や、その元になっているトーマス・ウェイドの『語言自邇集』と同じである。
- ⑦「問答」部分は『亜細亜言語集』と同じく単語を先に出してから問答を続ける形式と『官話指南』と同じく問答のみの形式の両方が採用されている。『問答前編上』は一問一答形式、『問答前篇中』は長い問答であるが、どちらも単語の例示はなく、いきなり問答が始まる。『問答前篇下』はまた一問一答となるが、問答の前に単語や語句、語句(不敬當、

久仰久仰など)がある。下の『問答後編上』はほとんどが問答ではなく短文である。『問答後編中』はタイトル(賓主酬答など)のついたやや長い問答と短文、『問答後編之下』は太平天国平定についてのやや長い文となっている。

- ⑧第九章の「翻譯」、第十章の「文典」は、他の教本には見当たらない。「翻譯」では、古典と官話訳を掲載、「論語」、「孟子」を金国璞氏、「戦国策」を英継氏、「史記」を劉雨田氏などが担当している。第十章の「文典」は張廷彦氏によるもので、いくつかの文法事項を中国語で解説している。

<「問答」の特徴>

- ①北京方言が多用されている

太田「北京語の語法特点」にある7項目、①“咱們”②介詞“給”③“來者”④“呢”

- ⑤禁止“別”⑥状語“很”⑦“～多了”はすべて採用されている。さらに、“您納”(太田1964「北京語の文法特點」『中国語文論集 10 語学・元曲雜劇編』P249)もこの教本にしか登場しない。

- ②“少爺”“老爺”“令尊”“大人”“閣下”などの尊称を用いた問答が目立つ。“小弟”“昆仲”はこの教本にしか登場しない。

- ③1885年の天津条約についての説明文があり、「時文」的要素も取り入れられているが、この教本は日清戦争後の刊行であり、タイムリーな内容とはいえない。

- ④“清国語”という言い方もこの教本にしか出てこない。

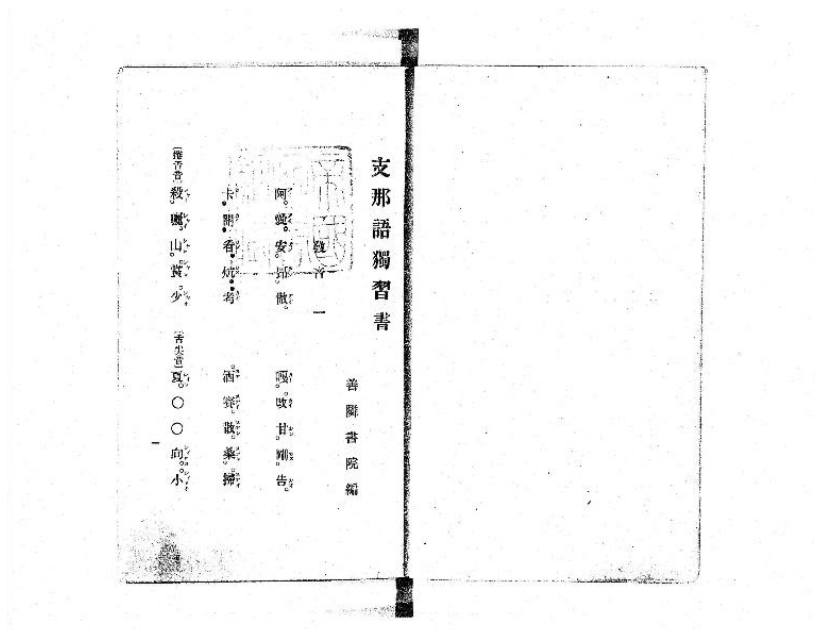
<まとめ>

項目も多く、内容も多岐にわたった教本である。30歳の宮島が、自らの清国留学で得た中国語の知識を発音から単語、会話、文章に至るまで詰め込んだ感がある。中国人講師にも執筆を依頼しているのが特長であり、そのなかで「翻譯」に古典を特に取り上げているのが他の教本にはない部分である。

この最初の教本を実際に教学に使用した結果を踏まえ、後の教本『官話篇』へと単語や問答の内容を厳選していったと考えられる。

(2)『支那語独習書』

1900年(明治33年)発行、初めて中国語を学ぶ独習者を対象としている。宮島の教本はほとんどが中国語の課文のみで構成されているが、この教本は初学者向けに日本語での解説、特に発音について細かく説明されている。教室用の『官話輯要』からの内容の継続性は少ない。



(国立国会図書館近代デジタルライブラリーより)

<構成>

前書き部分は、「凡例」「発音」「四声」「熟語」「造語」「各地の語音の不同」「符号及仮名使」に分けて解説。

- 第一 「発音」 アイウエオ順。“阿 愛 安 昂 傲……”「捲舌音」「舌尖音」
- 第二 「四声」 “説 熟 舌 卓 昼 車 駱 樓 樂 若 肉”
- 第三 「名辞」 「名辞」という小見出しで数詞、人称、職稱、食物、場所、家財道具、時間詞、場所詞、地名など 265、ただし分類はされていない。「名辞」の後に「動字」26、「形容辞」14、「接続辞」6、「人称」12、「挨拶」12の70語が収録。いずれもカタカナの発音と日本語訳が付けられている。
- 第四 「動辞」 一～四 “来了 去了 坐着 站着”など、“下雨 寫信”“車来了”など、“不要 不来”など。「形容辞」一～二“不要 不来”“很好 很多”カタカナの発音と日本語訳が付けられている。また「説明」が付されている箇所もある。
- 第五 「語例」 文法説明。是構文、疑問文などの構文紹介。カタカナの発音と日本語訳が付けられている。「説明」もある。
- 第六 「問答七十編」カタカナの発音と日本語訳が付けられている。「説明」「例」が付された箇所もある。
- 第七 「散語」カタカナの発音と日本語訳が付けられている。「説明」「例」が付された箇所もある。

<構成・内容の特徴>

①対象が初心者であり、教室用の教本ではなく独習用である。発音、声調についての説

明、カタカナの発音と声調記号、日本語訳と説明があるのはこの教本のみである。その意味では、他の教本類と本質的には異なる。

- ②「支那語を学ぶの要は、最も音声に存す。発音に数多くの種別あれども、左の数種を熟習すべし。」として、以下を挙げている。

重音(有気音) 軽音(無気音) 廣音(-ng) 窄音(-n) 捲舌音 舌尖音

(jia, xiao, jiang, qi) 開口音(che, she, he, sha) 合口音(yu, zhu, hu)ほかに「リ^ˊ」をあげている。

- ③重念する語は四声を示す白丸が黒くなっている。

- ③「名辞」で『官話急就篇』初版にはないもの。

度量衡→ “一寸 一尺 一丈 一里 一畝 一項 一升 一斗”

名詞 → “文官 武官 兵丁 營房 内閣 總理衙門 總督 道台 知縣 領事”。“圖書”が「印」、「打圖書」で「押印」とある。

<問答の特徴 >

- ①北京方言が多用されている。

太田 1969「北京語の語法特点」にある7項目、①“咱們”②介詞“給”③“來者”④“呢”⑤禁止“別”⑥状語“很”⑦“～多了”のうち、②、⑤は採用されていない。しかし、“今兒”(今天と併用)“沒準兒”“那兒”“這程子”“盪”“多僭”“打～”(～から)など、北京語の表現が多用されている。

- ②“東文”を用いているのはこの教本のみ。(「日本文」と訳されている。宮島の注釈には、「日本ヲ東洋ト称ス故に東文トイフナリ」)

- ③“官話”という語を用いている。

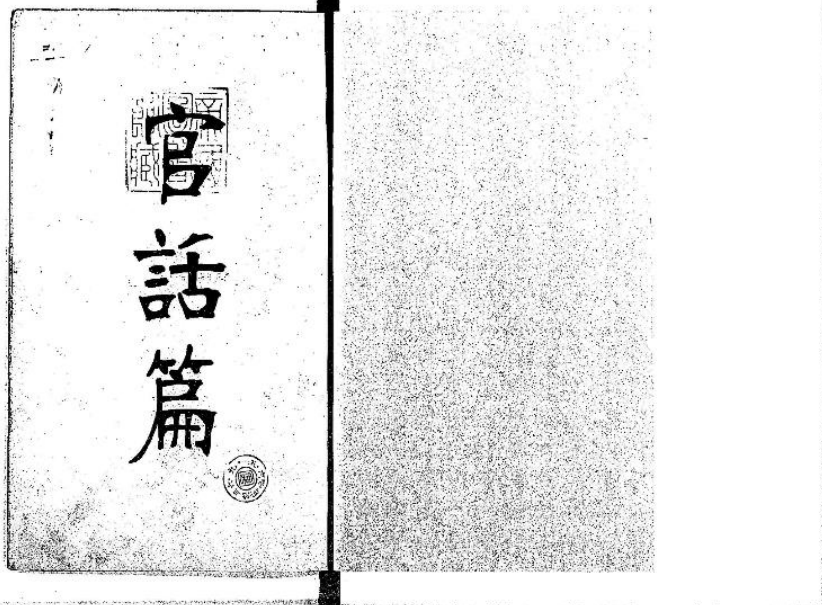
<まとめ>

前書き部分で、宮島の中国語教育に対する考えが垣間見える。「発音の概略と四声の区別を知り、漸次名辞、動辞、動辞の用法及び造語の数例を知り、しかる後会話に入るべし」、「支那語を学ぶの要は、最も音声に存す」、「この篇は小冊子に過ぎざれども、なお学者正則に独修せんことを以て主とせり」など、音声の重要さ、学習の順序を明記している。

またカナの発音、日本語訳や解説もあり、中国語には方言があることや発音の方法も初心者向けに丁寧に説明されている。

(3)『官話篇』

1903年(明治36年)、善隣書院より刊行。



(国立国会図書館近代デジタルライブラリーより)

<構成>

第一 「腔調」 ここでは2文字から4文字の語を「第一字重念」「第二字重念」「第三字重念」に分けて紹介している。

第二「散語」 短いフレーズの紹介。

第三「問答前篇」 社交的会話 65 篇。

第四「問答中篇」全 32 篇、うち 27 篇は社交的なやや長い会話、あとは物語。「桃太郎」も含まれる。

第五「散語」 507 のフレーズを羅列。

第六「問答後篇」 長い社交、家庭内、商売の会話を 25 篇紹介。

第七「腔調」 熟語の紹介。

第八「議論之上」 さまざまな警句、ことわざの紹介。

第九「議論之下」 成語故事の紹介。

<構成・内容の特徴>

- ① 他の教本には「単語」「名辞」などとして章立てされている単語だけを羅列したパートがあるが、この教本にだけは設けられていない。
- ② 四声と重念を示す白丸、黒丸は全く用いられていない。
- ③ 『急就篇』シリーズの「桃郎征鬼」が初めて登場する。
- ④ 中級以上向けの内容である。

〈「問答」の特徴〉

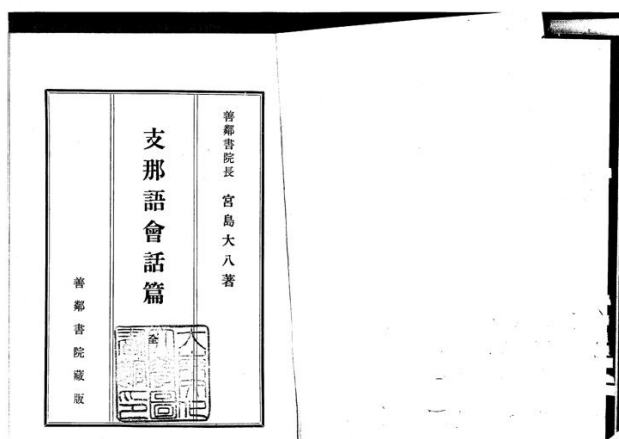
- ① 『急就篇』シリーズに採用されている多くの問答が、この教本の「問答」から登場している。「問答前篇」全 65 問答のうち、『官話急就篇』増訂四版の「問答」に 46 篇が採用されている。「問答中篇」全 32 問答のうち、『官話急就篇』増訂四版の「問答」に 18 篇(「桃郎征鬼」を含む)が採用されている。しかし、「問答後篇」全 25 篇については問答がそのまま『官話急就篇』に移行されているものはない。
- ② 北京方言が多用されている
太田 1969「北京語の語法特点」にある 7 項目、①“咱們”②介詞“給”③“來者”④“呢”⑤禁止“別”⑥状語“很”⑦“～多了”のすべてに用例がある。さらに、“今兒”(今天ともに使う)“沒準兒”“那兒”“這程子”“盪”“多僂”“打～”(～から)など、北京語の表現が多用されている。
- ③“漢話”を用いている(問答後編十九)。“(ただし「第五 散語」部分では“京話”も用いられている“京話到處通行”)

〈まとめ〉

内容から見ると、この『官話篇』が『急就篇』シリーズの第 1 冊目という位置付けになるだろう。「単語」(名辞)パートはないものの、問答の多くが『官話急就篇』に流用されている。また『急就篇』シリーズの特徴ともいえるべき「桃郎征鬼」が登場している(初出は『支那語学校講義録』第 7 号、1902 年)。この教本の翌年に『官話急就篇』初版が刊行されている。『官話輯要』、『支那語独習書』、『官話篇』と教本を編んでいくなかでの試行錯誤がベストセラー『官話急就篇』につながったと考えられる。

(4) 『支那語會話篇』

1921 年(大正 10 年)、善隣書院から刊行。



(1) 構成

第一部 「会話入門」

この章に単語部分「名辞」と散語（語句）部分が含まれている。

「天文類」22「地輿類」60「人倫類」48「身体類」44「飲食類」152「衣服及日用品類」62「家屋類」21「舗店類」48「動物類」41「雑」117 合計615の単語が紹介されている。

「名辞」の後には、“了”“請”「動詞の重ね型」「名詞と動詞の組み合わせ」「拏”“着、麼、那麼、怎麼”“可以”““別”、“給”、“把”、“得”、“該”、“就”、“叫”、“総”、“快”、“過”、“来着”、“連”、“一”、“因為”、“所以”、“不但”、“雖然”、“可是”、“只要”、“既是”、“若是”、“赶”、“任憑”、“就是”、“是”、

“罷”、“哎呀”を使った熟語や語句が掲載されている。

第二部之上 「簡易問答」147問答

『官話急就篇』、『急就篇』と共通するレベルの社交的な問答。

第二部之下 「会話雑例」60会話

時事的、社会的内容の会話が多く採用されている。

第三部 「新語会話」

「名辞」、その「名辞」を使った「熟語」のあと、「散語」、「問答」、「単句」、「問答」という構成。「散語」と「単句」は基本的に同じ種類で、文の列挙。時事的な内容、評論に関する短文が多く含まれている。

以上の内容については、1918年～1919年に出された善隣書院の通信教育用テキストである『支那語講義録』に掲載されたものとほぼ同じである。しかし、『支那語講義録』には日本語訳と解説が付されている点が異なっている。

(2) 「会話入門」の特徴

①「単語」では、食材や料理名が数多く収録されている。特に“包子”、“焼餅”、“烙餅”、“油渣果”、“麻花兒”などは他の教本には見られない。また、“電話局”、“郵務局”、“勸業場”、“工廠”、“汽車公司”、“保險公司”、“自来水公司”、“電燈公司”、“製

泥公司”、“電影戲公司”、“汽水公司”“理髮館”などの具体的な業態の記載が目立つ。“中西旅館”、“六国飯店”、“扶桑館”という固有名詞もある。

③「練習」「応用問題」が付いている。問題文はないが、中国語文は日本語に、日本語文は中国語に訳すことを求めていると思われる。「語法練習」もあり、細かく文法練習できるように例文が挙げてあるが、解説、訳はない。

〈「簡易問答」の特徴〉

- ① このパートで採用されている問答は一般的、社交的な内容であり、『急就篇』シリーズはもちろん、『官話指南』以来続く日本の教本類で取り上げられている問答の内容を踏襲している。
- ② 北京語の語彙が採用されているが、『官話急就篇』よりも減少している。
- 太田 1969「北京語の語法特点」にある7項目(①“咱們”②介詞“給”③“來者”④“呢”⑤禁止“別”⑥状語“很”⑦“~多了”)のうち、①“咱們”以外、すべて用例は見られる。(“咱們”は「会話入門」には単語が採用されているものの用例はない)
- さらに、“今兒”は用いられているが、“今天”のほうが用例が多い。“多咱”は使われておらず、“幾時”と“甚麼時候兒”、“幾點鐘”が使われている。“多兒”は使われておらず、すべて“多少”となっている。量詞は“一盪”、“一次”ともに使われている。代名詞“這兒”“那兒”と“這裏”“那裏”は両方使われているが、“這裡”“那裡”はない。
- ②時代の變遷による語彙の変化にも対応している。
- “初十”ではなく“十號”、“新聞紙”ではなく“報”を、また“十個銅子兒”、“三毛錢”、“軍船”、“星期”を用いている。さらに、“打電話”、“電泡”、“紅茶”、“電車”、“電扇”“蓄音機”、“留聲機”など12年後に刊行された『急就篇』にも出てこない単語が使われている。
- ③ 問答の内容は、表現の若干の違いはあるが、基本的には『官話急就篇』、『急就篇』と同等レベルの日常会話である。明治時代から日本の教本に伝統的に取り入れられてきた、日常的な交際の会話を採用している。

〈「会話雑例」の特徴〉

レベルとしては『急就篇』シリーズの「問答之中」に相当する。やや長い一般的な社交会話のほかに、時事的な文章も採用されているのが特徴である。『官話急就篇』では日露戦争の内容が取り上げられているが、『急就篇』ではそれも削除され、時事的な文章はほとんど見られない。また、抽象的な社会的または思想的な内容の文章もほとんど見られない。しかし、『支那語会話』の「会話雑例」とこの後の「新語会話」には、世相や世界情勢に関する会話が多く採用されている。以下にいくつか取り上げる。

(a) “我們兩國都在亞細亞立國總應當彼此親善方能外禦其侮哪”

“您說的是，像這幾年，因為小事，常鬧意見，總不是維持大局的道理，若求着東亞和平又何必捨近求遠” (会話雑例八)

「われわれ両国ともにアジアにあり、親善をなして外国に侮られないようにしなくては」
「おっしゃるとおりです。この数年間のように小さいことで悶着を起こしては、とて
も大局を維持できるわけがない。東アジアの平和を求めるなら、近きを捨てて遠くに就く

必要はない」

(b) “聽說內閣成立了 ”

“ 可不是官僚派倒了，某黨出來了”

“這個比那個強罷”

“無非是一樣胡蘆罷咧” (會話雜例二五)

「內閣が成立したそうだね」

「たしかに官僚派は敗れて某党が現れた」

「これはあれより強いだろう」

「どうせ似たようなものだ」

(c) “老前輩都沒了，後輩還沒成人，這正是青黃不接的時候兒，若錯了一部兒，可就要出危險了。”

“可不是我們處在這個時代，只可以忍耐着罷。” (會話雜例五五)

「先輩はみな没し、後輩はまだ育たない。実に後が続かない時期だ。もし少しでも誤れば、すぐに危険な状態になる」

「たしかにわれわれはこの時代にあって、忍耐あるのみだ」

(d) “學話以耳為先 辦事以得人為要 待人以恕人為主 內治以安定民心為本 安定民心又以平米價為先 外交以除去人種差別為先著 為國政以叫人信服為根本” (會話雜例五六)

「学ぶのは耳を先にし、ことを為すのは人を要にし、人に対しては寛容を主とし、内政は民心の安定を基本とし、民心の安定は米価の安定を先にし、外交は人種差別を取り除くことを先にし、国政のためには信頼させることを根本とする」

(e) “你們可不要因為德國敗了，就把軍國主義看輕了，若不講這個，國土怎能殼保護得住，那正經道理可又怎能行得開呢”

“那自然，聖人也曾經說過足食足兵，又說是又文事者必有武備，不過是他國用在野心上，故此失敗就是了，我們得軍國主義和他不同，俗說人是武士花是櫻，你看我們的武士道有多麼優美。” (會話雜例六〇)

「ドイツが負けたからといって、軍国主義者を軽く見てはいけない。でなければ、国土をどう守れるとこのうか。正しい道理もどのように通せるとこのか」

「それはそうだ。孔子も『足食足兵』(糧食が足りて軍備も整う)と言っているし、また文官も軍備すべしとも言っている。しかし、かの国は野心を持っていたので失敗したのだ。われわれの軍国主義は彼らとは違う。花は桜木、人は武士、という。われわれの武士道はとても優美なのだ」

以上の例文には、宮島自身の考えが表れていると推測できるものの、断定することは極めて難しい。

(5) 「新語会話」の特徴

『官話急就篇』と『急就篇』の間に編まれた『支那語会話篇』には、『急就篇』シリーズをはじめとする他の教本類にはない「新語会話」というパートが設けられている。第一次世界大戦後の世界のなかで、日本国内では大正デモクラシーの時代、1918年には「米騒動」も起きる。『支那語会話篇』が出版された1921年は、『官話急就篇』の1904年とは時代の様相が大きく変化していたし、宮島はこの間にさまざまな中国関係の研究会に参加したり、満蒙独立運動の後方支援活動をおこなっており、その経験から時事的な内容を増やしたのではないだろうか。

また、このパートは他の部分と同様、善隣書院の通信教育用のテキスト『支那語講義録』に初めて登場したものであり、そこに掲載された内容がほとんどこの『支那語会話篇』に採用されているが、『支那語会話篇』にはない、「緒言」が以下のとおり付されている。

「(前略) 吾人支那語ヲ研究スル者尚此新名辞ヲ知ラズ、徒ニ数十年前ノ「老話條子」ヲノミ株守スルニ於イテハ、彼国人トノ談話ニ際シ啞然トシテ竟ニ片言隻語モ亦能ク応酬シ得ザルニ至ランコトヲ恐ル……」

宮島が学んだ「老話條子」だけでは、民国時代の中国人には話が通じないといい、新語は日本語から来たものが多いので見れば分かるが、よく発音を練習するようにと書いている。

「新語会話」のパートは、「名辞」、「散語」、「問答」、「単句」という構成になっている。「散語」と「単句」とを分けているが、その違いははっきりしない。また、前の章の「会話雑例」との違いも明確ではない。

①「名辞」の部分には以下の単語が紹介されている。

目的 宗旨 原因 結果 事實 性質 手續 取締 引渡 取消 程度 影響 内容 解決
干涉 反對 形式 成立 組織 範圍 代表 團體 主義 機關 思想 問題 力量 公權
贊成 行為 過度 同情 複雜 精神 中立 能力 智識 權利 義務 特色
共產 國民 研究 民政 人民 國民 思想 感情 希望 發達 誤解 提携

(下線部分は『官話急就篇』にはなく、『急就篇』で加えた単語)

② 例文の中には一般的な会話も含まれているが、時事的内容も多い。「散語」、「問答」、「単句」の例文から時事な内容、外交に関する内容を一部紹介する。

P132 「散語」

(g) “共產就是均富的主義”

(共產とは均富主義だ)

(h) “沒有一點兒國家的思想還能算得了國民麼”

(国家という思想を持たなければ国民とはいえない)

“巴爾幹地方那是歐洲多年的問題”

(バルカン地方は欧州の長年の問題だ)

P135 「散語」

(i) “他們的思想，和我們不同”

(彼らの思想は我々とは違う)

“思想那兒能殼相同”

(思想が同じはずがない)

“千萬別傷了感情”

(くれぐれも感情を傷付けてはならない)

“兩國的國民，感情越來越厚了”

(両国民の感情はますます深くなってきた)

“這不過是那感情上的作用”

(感情の上の作用にすぎない)

“如此的利害攸關，萬不可以不注意”

(このような利害に関することは、くれぐれも注意しなければならない)

“事情辦的這樣兒糟，全是出於這個誤解上”

(ことがこんなにまズくなつたのは、すべてこの誤解から生じたことだ)

“你瞧這誤解兩個字，於兩國的邦交上，可有絕大的障礙”

(この誤解の2文字をごらん、両国の国交の上で大きな障害になっている)

“我們是兄弟之國，早該當提携提携，竟說些個空話，還當得了實行麼”

(われわれは兄弟のような国だ、早く提携すべきだ。空論ではなくやはり実行すべきである)

P137 「問答」

(j) “天天說日支親善，您想得從那裡辦起”

“像甚麼提携和聯合，據我說全是空話，必要的是先得把些難民救出來”

“誠然，這真是第一要義”

「毎日日支親善と言っていますが、どこから始めるべきだと思いますか」

「提携や連合のようなのは、私から見れば全部空論だ。必要なのはまず哀れな国民を救済することだ」

「確かに。それが最も肝要だ」

P139 「問答」

(k) “天下最叫人恨的是亂殺人，最叫人愛的是保護人，現在他們官場的行為，百姓可是恨他呢是愛他呢”

“人情都一樣若是把待自己的心掏出來去待人，人還有不愛他的麼”

「世の中で最も敵視されるのはみだりに人を殺すことで、最も愛されるのは人を保護することだ。今の官僚のやり方を庶民は恨むだろうか、愛するだろうか」

「人情はみな同じだ。もし自分にするように人に接するなら、愛さない者はないだろう」

P140 「単句」

(l) “某某關於出兵問題，雖然不置可否，可是他的左右的人，沒又不唱尚早論的”

「某氏は出兵問題についてその可否は言わないが、彼の側近で時期尚早論を言わないものはない」（1918年のシベリア出兵）

P146 「問答」

(m) “米騒動這兩天鎮靜些了沒有”

“好些，外米也快到了，新穀也快收了，米價還不住下落麼”

“這回事，並不專為米的問題，不過接着這個名目窮人跟闊人為難就是了”

“以現在社會的實情而論，所說的生活困難到不在下等人上，何以說呢，在那下等人，因為這幾年，歐洲開戰他們所得的那勞動金，比平常倒增了好幾倍至於那中產階級的人們所得的一點兒沒能增加，物價是一天貴似一天，既是稱為中等人，也得顧點兒體面，萬不能混在窮人裏頭上市場去買廉價米去，仍然得買一元兩升的，抱着個餓肚子，只好唱聲「武士不食使牙籤兒」，裝着吃飽了就是了，你說這個情形是困難不困難”

「米騒動はこの二日間で沈静化したか」

「少し。外米ももうすぐ来るし、新米もすぐ収穫されるので、米価はすぐに下がるだろう」

「今回のことは、米だけの問題ではない。この名目で貧乏人が金持ちを困らせたにすぎないのでは」

「今の社会事情から言えば、生活の困難は下層の人のことではない。なぜかというと、その下層の人たちはこの数年、ヨーロッパの開戦によって賃金が通常の数倍に増えたが、中産階級の所得は少しも増えなかった。物価は一日一日上がるが、中産階級は体面を気にしなければならず、貧乏人に交じって安い米を市場に買いに行くことはできない。相変わらず1円で2升買っている。腹を空かせ、『武士は食わねど高楊枝』と唱えるだけで、腹いっぱいふりをしているだけだ。この状況は厳しいとは思わないか」

P148 「単句」

(n) “這樣違憲的行為我們那兒敢贊成”（このような違憲行為に我々は賛成できるというのか）

“若是再去換言之，這邊的聲浪越壓越低，那邊的聲浪可更越激越高了”（さらに言い換えれば、こちらの民衆の声がますます抑えられれば、あちらの民衆の声がますます激高する）

(o) “某某提的那十四個條兒，我很喜歡他的意見，又和平又公道”（某氏の14条、私は好んでいる。平和的で公正だ）

“民族自定那句話的最妙，我們亞細亞的人，就應該定成一個族，那可是更妙的了”（民族自決というのは素晴らしい、われわれアジア人は、一つの民族となるべきだ。そうなればもっと素晴らしいくなる）

（1918年に出された米国ウイルソンの十四条についての問答。『支那語講義録』では“某某”が“維爾遜”となっている）

3.4.5 まとめ

①『支那語会話篇』は、『官話急就篇』（1904）と『急就篇』（1933）の間に出版された教本である。内容のほとんどが善隣書院の通信教育用テキスト『支那語講義録』の宮島の担当部分である「会話講義」から採用されたものである。「会話入門」「簡易問答」「会話雑例」「新語会話」という分類もまったく同様である。しかし、教室用の教本として編集し直してあり、『講義録』にある日本語訳と解説は省かれている。

『急就篇』の名はついていないが、内容的には会話が中心であり、『急就篇』の流れの中にある教本である。

- ② 前書きは「順序によらず各部門交互に練習すること」のみ。これだけではやや使いにくい。練習問題が出題されているが、解答は掲載されていない。
- ③ 単語、問答を通して四声の記号は付されていないが、重念の部分には漢字の右に縦棒が引かれている。重念の記号は『官話急就篇』では付されなかったが、この教本の後に出された『急就篇』では付されている。
- ④ 宮島の教本は、どれも基本的には「単語」を羅列し、「散語」で語句を紹介し、「問答」で日常的な交際会話を配列するという、1879年廣部精『亜細亜言語集』、1886年御幡雅文『華語跬歩』など明治時代の伝統的な教本の流れを汲んだものである。1904年の『官話急就篇』は長年東京外国語学校でも使われていたものの、内容的には清朝の中国語を反映したものであった。しかし、中国が民国時代に入ると日本社会も国際情勢も、そして日中関係も変化する。世相を背景に、時事的な文を例文として取り入れたのが『支那語会話篇』の大きな特徴である。

3.5 宮島が編纂した教本の特徴

宮島の主要な教本について、『官話急就篇』と『急就篇』を中心として、その構成や内容の推移を整理した。

今回の分析を通して、さらに宮島が長年にわたり教本の編纂に試行錯誤を繰り返していたことが分かった。その試行錯誤は「発音」パートを入れたり、削除したり、また四声記

号を入れたり、削除したり、重念の記号を入れたり、削除したり、とさまざまであったが、結局最後の『急就篇』では、重念の記号を入れるにとどまった。

『急就篇』シリーズの主体をなす「問答」部分については、7冊の教本のほか、善隣書院の通信教育ともいえるべき『支那語学校講義録』第1号～第7号(1901～1903年)に掲載された多くの問答から採ったものも多いが、最終的に“來了麼 來了”“走了麼 走了”というリズムがよく平明で覚えやすい問答から始まるようになったのは、問答を多数採用したなかから、入門向け教本としてふさわしいフレーズを提供することに力を注いだ結果だろう。

しかし、「問答」で取り上げた内容については、教本ごとに違いが感じられる結果となった。「問答体」の社交的な会話内容は、宮島の『急就篇』シリーズに一貫して採用されているが、1933年の『急就篇』は、『官話急就篇』に比べて「問答」の中に故事(文章)が増えている。「ジョージ・ワシントンの幼年時代の話」以外は、中国の故事「四不像の話」、「漁夫の利」、「朝三暮四」、「楊震四知」、「李鴻章の話」、「孔子家語」などが追加された。『官話急就篇』、『急就篇』ともに「問答」には「孫叔敖の故事」、「漢の高祖と韓信の問答」、「孟子・梁恵王篇下・出乎爾者」を採用している。宮島は「問答」では単なる会話ではなく、故事を取り入れて読者に中国古典の教養を提供しようとした。また、初級レベルでの「講読」の必要性も十分に認識していたのであろう。「会話」と「講読」を中心とした中国語教育が日本では長い間一般的に行われており、「講読」は長年日本の中国語教育の重要な基礎的部分を形成した。

この点について、倉石武四郎は『支那語教育の理論と実際』(1941年 岩波書店)のなかで、当時の中国語教育は、目標とするところが実用的言語で唐通事の語学と共通しており、中国の文化全体を見通すための教養は十分だといえないし、「支那人がその文化的教養を誇りとする限り、支那人に接すべき語学は、当然、文化的の一面を持たねば、十分役に立たないものならず、かえって彼らの侮蔑を招くことが少なくない。支那人なら誰でも知っている典故に通じないため、まったく信用を落とした人もある。在学の期間内に、十二分の教養を身につけることは困難であろうが、将来にわたって、自力で勉強していけるだけの指導や設備において、欠けるところがないであろうか」としている。これは宮島の教本に見られる古典回帰にも通じる考え方である。

『急就篇』シリーズの教本では、最初の教本『官話輯要』で古典のパートを作っているし、『官話篇』では「議論」として故事を52篇も紹介しているが、『支那語独習書』は独習の入門者が長い文章を読むことは無理なので、取り入れられていないし、『支那語会話篇』は「会話」のタイトル通り会話中心となっていて、やはり故事は採用されていない。

逆に、『支那語会話篇』には時事的な内容の問答が多く取り入れられている。『官話急就篇』にもロシア船の沈没についての問答(初版では「問答之下」、増訂版では「問答之中」八十九)などもあったものの、それも『急就篇』では削除されている。『官話急就篇』の

17年後に出された『支那語会話篇』には時事文が多く採用されているのに、その12年後の『急就篇』では時事文はなく、故事が数多く導入されている。その理由は上に挙げた倉石のような「教養主義」もあったであろう。

また、1933年の『急就篇』刊行時には満州事変(1931年)を経て、日中関係は後戻りできない泥沼に入っており、「日本と中国は兄弟の国」と常々言っていた宮島にとっては不本意な状態だったろう。宮島が長年かけて編纂してきた中国語の問答からは宮島の中国や中国人に対する敬慕がにじみ出ている。そんな宮島は日中間の戦争状態を直視することができなかった。それも、『急就篇』には時事文ではなく古典を増やした理由の一つと考えられる。

もう一つの理由として、1933年の『急就篇』の時代にはすでに戦争状態に突入しており、昭和恐慌の影響で、善隣書院の経営も苦しくなっていたものと思われ、1933年と1937年にそれぞれ2年間にわたる出版助成金を申請、受領している。『急就篇』を出版する資金にも困っていたと考えられる。『急就篇』というよく知られた名前でも再度ベストセラーとしたかったのではないだろうか。

昭和に入って、日本における中国語のテキストの出版点数はうなぎのぼりに増加している。「満州語」を使ったタイトルの教本も多い。けっして「満州語」という言葉は使わなかった宮島が、競争の激しいなかで刊行した『急就篇』は、ビッグネームを使いベストセラーを狙って、また同時に再度中国理解を促すため、世に問うた一冊だったのではないだろうか。

第三章 宮島大八の思想背景

今まで、宮島自身の受けてきた中国語教育と社会的背景、そして宮島の編纂した中国語教本を見てきた。この章の第一節では彼に影響を与えた師ともいえるべき父、勝海舟、張裕釗や友人たちとの関わりを取り上げ、さらに第二節では宮島大八が関わったさまざまな政治活動を検証することによって、彼の中国観をさまざまな視角から追跡したい。

第一節 宮島大八に影響を与えた人びと

宮島大八は父誠一郎と勝海舟、張裕釗から大きな影響を受けた。その3人の人物像を紹介し、そのどの部分が宮島大八に受け継がれたかを明らかにする。さらに宮島大八が生涯にわたって交わりを結んだ友人たちと、どのような中国観を共有していたのかを再確認する。

1.1 父・宮島誠一郎

宮島大八の父である誠一郎は1838年米沢藩に生まれ、漢学を学び、長じては藩校・興讓館の助教となった優秀な知識青年であった。しかし、幕末の動乱の中で東北諸藩やそこに属する武士たちの運命は大きく変わった。誠一郎については、判沢弘が長い間注目されてこなかった彼の功績を紹介した「宮島誠一郎と雲井竜雄」(『明治維新』1967年徳間書店)に詳しい。この論文では、誠一郎が「戊辰戦争中、米沢藩外交方としての使命を帯びて、江戸、京都、米沢、仙台、会津若松と駆け廻った戦塵の日々に、外交の重要記事を記しておいた」と、宮島誠一郎の『戊辰日記』から、彼の足跡を追っている。宮島は幕末に東北諸藩の官軍への抵抗が不可抗力であったことを釈明した「建白書」を京都の朝廷に提出する活動中に勝海舟と知り合い、生涯の友人となった。

誠一郎は1871年、勝海舟の口利きによって明治政府に職を得て、家族とともに上京した。1874年、誠一郎は左院(立法府)三等議官の時、台湾出兵反対の建議を提出している。松浦玲の『明治の勝海舟とアジア』(1987年 岩波書店 P112)では、誠一郎が残した日記『養浩堂私記』や清国人の筆談記録を読み解いた結果として「宮島は二年前の琉球藩設置には反対であった。琉球の位置からして日清両属の形で相対的な独立を保持するのは極く自然、無理に日本の支配下に入れることはないという考えだった。しかも琉球漁民が台湾で殺害されたのは、日本が勝手に強行した琉球藩設置よりもさらに一年前だった。琉球人の事で日本が清国の責任を問うという理屈は成立しない」、「こんな問題でどうして清国に喧嘩を売る必要があるのか」と、誠一郎は主張し、「倭寇の仕業」、「海賊」などとして政府を非難していたとした。

誠一郎は勝海舟と同様に日清不戦論者だったのである。

その後、1877年には清国初代公使である何如璋⁷³一行が来日した。のちに『日本雑事詩』、『日本国志』を書いた黄遵憲も参贊官(随員)として、弟黄遵楷とともに来日した。

当時、修史館御用掛であった誠一郎は文人として漢詩を通じて清国の公使館員と交流した。このようすは大河内輝声の筆談記録をさねとうけいしゅうが現代語訳した『大河内文書』(1969年 平凡社 東洋文庫 18)にも記載されている。誠一郎も自作の詩を添削してもらいに公使館に通っている。当時の文人たちは漢学の本場である中国からの文人と直接触れ合うことを大変な光栄としていた。大河内輝声の中国人文人たちとの付き合いが完全に詩文に限られ政治抜きであったのと、宮島誠一郎の付き合い方とは違う性質を持っていたようだ。

松浦玲『明治の勝海舟とアジア』(1987年 岩波書店 P113)によると、「宮島誠一郎は、政治を避けない。詩文の交際と政治の話と両方ができるのである」としている。彼が残した『日清交渉書簡』には、「文事を以テ私交ヲ修ムト雖モ、其志ハ亜細亜大局ヲ維持スルニ在リ」の語がある。誠一郎の清人との交渉は、正式な外交官としてのものではなく、私人としての交友であった。しかし、松浦は「宮島は大河内輝声のような旧大名華族の財産家ではない。つきあいの費用を決して豊かではない家計から捻出しなければならないのである」と、宮島が外務省から経費を出すとと言われても断ったことを評価している。

1879年、琉球帰属の交渉が暗礁に乗り上げている間に、日本政府は琉球王国を廃して、沖縄県設置を強行した。何如璋は正式に外務省に抗議したが、突っぱねられた。琉球問題により、何如璋ら公使館のメンバーと宮島らとの付き合いは陰悪になる場面もあったが、「私交」であったことが幸いしてか断絶はしていない。さらに誠一郎は何如璋と勝海舟を引き合わせている。何如璋も1880年には勝海舟宅を訪問し、さらに6月に誠一郎は日清の親睦宴を開き、公使館メンバーと勝海舟や、榎本武揚、長岡護美という興亜会メンバーを集めた。何如璋は琉球問題を解決できないままに離任した。

誠一郎は1880年に同郷の友人である曾根俊虎が中心となって設立された興亜会のメンバーとして演説を行い、何如璋について述べている⁷⁴が、何如璋も会合には琉球問題のこともあり出席しなかったものの、会員として名前は掲載されていた。⁷⁵また第二代公使の黎庶昌⁷⁶も会合に出席している。

1882年、曾国藩の高弟である学者・黎庶昌が第二代公使として来日すると、誠一郎と公使らとの交流はいよいよ活発となり、琉球問題はまたもや解決できなかつたものの、多くの詩を贈りあう仲となった。この時の随員が張裕釗の長男・張沆であり、張沆は黎庶昌公使の女婿でもあった。その縁から、黎庶昌公使は誠一郎に張裕釗の文集を贈った。その文集を見た大八はすぐに張裕釗を師と決めたのである。しかし、この時はまだ大八は興亜会支那語学校閉校後に転校した東京外国語学校の学生であったため、誠一郎は、まだ早い、日本でもっと中国語を勉強してから留学するよう大八に言った。とはいえ、一方で誠一郎は黎庶昌公使に大八の弟子入り希望のことを伝えた。しかし、公使は張裕釗の学問はたいへん高い程度なので、はじめは他の先生についたほうがいいと答えたという。

1886年、東京外国語学校が東京商業学校に合併され、無事実上閉鎖されることになり、大八は退学してしまった。誠一郎の紹介により清国公使館でしばらく経学を学んだが、清

への留学の夢はふくらむばかりで、ついに誠一郎も渡清を許した。1887年、大八は直隸省（現在の河北省）保定の蓮池書院の院長であった張裕釗を訪ねて清国に渡った。

その後大八は足掛け7年間に渡る留學生活を送るが、その生活を経済的、精神的支えたのはもちろん父誠一郎であった。留學費用は莫大なものになったと思われるが、その資金を誠一郎はすべて借金で用意したという。また、魚住和晃『宮島詠士[人と芸術]』（1990年 二玄社）は、主に大八が父に宛てて中国から送った書簡をもとにして構成されており、父子の間で手紙のやりとりが頻繁に行われていたことがわかる。大八が父に送った数々の手紙の文面からも、遠い中国で一人学ぶ大八にとって日本にいる誠一郎が心の支えであったことが読み取れる。

誠一郎は最終的に貴族院議員になったが、それ以前の官僚（左院⁷⁷儀制課長）時代、1873年に「立国憲議」を建議している。これは日本において最も初期の憲法制定に関する意見書であり、議会設置意見であった。誠一郎の政治に対する先見性は後年、高く評価されている。また、明治天皇から「支那の事は宮島誠一郎にきけとのお言葉があった」と親友である吉井友實宮内次官から言われている（東亜同文書院『対支回顧録』下巻 1936年 1968年復刻 原書房 P1465）ほど、中国通として信任が厚かったようである。

宮島誠一郎は歴史の第一線で活躍した有名人ではないが、漢詩や詩吟の名人でもあり、その分野でも明治天皇や駐日公使をはじめとして日中のさまざまな人びととの交流があり、日清間の人的交流においては大きな役割を果たした。日清の友好関係を願った誠一郎の強い思いは、大八へと引き継がれた。

1.1.1 興亜会とアジア主義

宮島大八が父誠一郎から受け継いだ思想の一つとして、「アジア主義」が挙げられる。1880年に興亜会設立メンバーになったことなど誠一郎の政治活動について、判沢弘「宮島誠一郎と雲井竜雄」『明治維新』（1967年 徳間書店 P530）では、「近代国家としての出発以後のこの国の政權が、アジアの諸国、ことに隣国たる『中国』との国交において、得てしていわゆる『富国強兵』にものをいわせて強引な武断正朔をもって迫ろうとするのにたいし、こうした政策に批判の眼をもち、中国の眞の友人たるべく終始した人物には、会津（芝五郎、芝四郎）、米沢（曾根俊虎、宮島大八）、庄内（石原莞爾）、青森（山田良政、山田純一郎）その他など東北出身者が多かったのは、その証左であるといえないだろうか？そしてそれらは、屈辱のつづてを眞向から浴びることをとおして鍛えられていった日本の良心といえないだろうか？」と東北出身者に明治初期の「アジア主義者」が多く生まれたと指摘している。

「アジア主義」は明治から昭和にかけての日本の対アジア外交において、一時期もてはやされた概念である。これについては多くの評論があるが、特に竹内好が1963年に発表した論考「日本のアジア主義」（原題「アジア主義の展望」『現代思想主義体系』 1963年 筑摩書房 1980年の全集化の際に改題）は、その嚆矢であるといえよう。竹内はその

なかで、「アジア主義の定義は非常にまちまちである」とし、「実質の一致」について「最小限の定義」を与えるとして、おおむね「欧米列強のアジア侵略に抵抗するために、アジア諸民族は日本を盟主として団結せよ、という主張」であるが、大陸侵略策の標語としての「大アジア主義」と「非大アジア主義」の区別を立てることは「非常に困難」であるとしている。竹内が考えるアジア主義は「ある実質的内容をそなえた、客観的に限定できる内容ではなくて、一つの傾向性ともいべきものである」とし、思想ではなく傾向性だとしている。

竹内はさらに、「(例えば) ある思想家が、ある時期に、よりアジア主義的であるかないかを弁別することはできるが、それは当然状況的に変化するものであるから、状況を考えて定義を下すことはできない。またそうしないとアジア主義は捕捉できない。範疇としてアジア主義を固定する試みはかならず失敗するだろうと思う」、「膨張主義が直接にアジア主義を生んだのではなくて、膨張主義が国権論と民権論、または少し降って欧化と国粹という対立する風潮を生み出し、この双生児ともいべき風潮の対立の中からアジア主義が生み出された、と考えたい。」としている。そして、「アジア主義とよぶ以外にない心的ムード、およびそれに基づいて構築された思想が、日本の近代史を貫いて随所に露出していることは認めないわけにはいかない。ただ、それは民主主義とか社会主義とかファシズムとか、ようするに公認の思想とはちがって、それ自体に価値を内在させているものではないから、それだけで完全自足して自立することはできない。かならず他の思想に依拠してあらわれる」(松本健一『竹内好「日本のアジア主義」精読』2000年 岩波書店 P9-10)として、アジア主義を思想としては定義していない。

しかし、狭間直樹「初期アジア主義についての史的考察」(1)~(8)、『東亜』(2001年~2002年、霞山会)では、アジア主義を初期、中期、晩期に時期区分し、アジア主義を思想として再評価している。黒木彬文「興亜会のアジア主義」(『法政研究』71(4) 2005年 九州大学)とは時代区分の仕方が異なるが、初期アジア主義の特徴として日本と中国の対等な提携を志向したとする点が二人の結論の共通点となっている。

黒木彬文「興亜会のアジア主義」によれば、1880年に設立された興亜会に見られた思想はその設立趣旨に、「アジアで独立しているのは日本と中国であり、それ以外のアジア諸国は欧米に侵略、抑圧されている。そこでアジアの衰退を回復し、欧米に対抗してアジアを振興するため、中国、朝鮮をはじめとするアジア諸国は提携する必要がある。そのためにはまず中国、朝鮮やその他アジア諸国の情報収集と民間人の交流促進を図らなければならない」とし、そのために学校も作るとした。黒木はこの初期アジア主義を代表する興亜会は「朝鮮への盟主化志向と朝鮮との対等関係志向の併存」と「中国との対等提携」が特徴だとしている。

並木頼寿「明治初期の興亜論と曾根俊虎について」(『中国研究月報』47 1993年 中国研究所 P10)掲載の資料によると、宮島誠一郎は1880年3月9日に行われた興亜会の第一回大会で演説を行った。興亜会で学校を作ることは大久保利通と何如璋との間で協議

していたことであり、隣国なのに親密でないのは言葉が通じないからだとして興亜会の設立を祝っている。宮島が積極的に興亜会に関わったきっかけは同郷の曾根俊虎で、曾根は 1877 年に欧米列強のアジア侵略に危機感を抱き、アジア振興を旗印として振亜社という結社を創設している。その後、宮島を誘い、宮島を通して非藩閥系の外務省、海軍省などの高級官僚や漢学者の興亜会の会員を集めたという。

興亜会は 1883 年に亜細亜協会と改称する。これは清国側が、日本が「興亜」を名乗ることに異議を唱えたからだというが、これには宮島誠一郎はじめかなりの会員が反対したと、宮島大八は「詠帰舎閑話」（『中国文学』83 号）で語っている。

1885 年には前年の甲申政変の際、清国の反撃によって日本公使館が支援した朝鮮のクーデターが失敗したことで、日本国内では対清強硬論が盛り上がった。前出の黒木彬文の「興亜会のアジア主義」によれば、そんな中、日清非戦論者であった朝野新聞⁷⁸編集長の末広鉄腸（1849-1896）は 1885 年の亜細亜協会第二年会の議員選挙で選出議員のうち第 3 位の高い得票を得た。このことは亜細亜協会内ではこの時期、日清非戦の論調が強かったことを示しているという。

しかし、その後の日中関係の悪化によって亜細亜協会の活動は停滞していく。そして 1894 年には日清戦争が勃発する。アーネスト・サトー『アーネスト・サトー公使日記』（1989 年 新人物往来社 P163）によれば、宮島誠一郎は戦争に批判的であったし、また興亜会を背後で応援していた誠一郎の友人である勝海舟も開戦時には、「隣国交兵日 其軍更無名可憐鶏林肉 割以与魯英」と詩を読み、日清戦争は「無名の師」だと反対した。

1900 年、亜細亜協会は 1898 年に近衛篤磨が創設した東亜同文会に吸収され、その歴史の幕を閉じた。ここで、初期の興亜会が目指したアジアの対等な提携によるアジアの振興は、東亜同文会の「支那保全」、「大陸進出」に取って代わられた。その理由として、黒木彬文は「興亜会のアジア主義」で、おそらく亜細亜協会の指導層の日本間、中国観が変容したからであろうとし、日清戦争後、日本人が中国に対して優越感を持つようになったことをその背景に挙げている。

1.1.2 曾根俊虎

興亜会の設立メンバーである曾根俊虎は 1847 年米沢藩に生まれた。曾根の父が開いていた私塾では宮島誠一郎も学んでいた。明治政府では 1872 年兵部省にはいり、翌年は海軍省海軍少尉となり、たびたび清国に派遣されている。興亜会設立時には海軍大尉となっている。宮島大八は前出「詠帰舎閑話」のなかで曾根について、「同郷の先輩であった。海軍大尉でも軍艦のことなんかはよく知らぬ、艦に乗ると酔うというほどだったが、頗る出色の人物だった」と回顧し、さらに、「曾根俊虎氏は支那に考えをもった人だったから、いろいろと研究をやった。どうも、あのころの人は、えらい理想をもち、またこれを実現しようとしておった。だから先生の支那研究は、野心満々、長髪賊乱直後の支那はかならず大動乱がおこる、日本は大いにやらねばならぬ---すべてこの考えがもとなのだねえ。先

生は支那人と日本人と力をあわせてことをしようとおもい、支那のいろいろな人と交際しようとおもった。その一つの足場としてこの会をつくったので、いわば嘘から出た實というようなところがある」と述べている。

並木頼寿「明治初期の興亜論と曾根俊虎について」によると、「興亜会は海軍軍人曾根俊虎らの動きを重要な契機として誕生し、日本の国権の拡張をアジアとの提携を通して実現しようとした」としている。しかし、黒木彬文は「興亜会のアジア主義」のなかで、曾根は日本の人民が不平等条約下に苦しんでいるのを嘆き悲しむと同時に、アジア諸国の人民が欧米の侵略抑圧に呻吟している状態を強く憤り、アジア地域の独立を願う熱烈な興亜主義者であったとして、並木が主張する興亜会の「国権の拡大」について違う見方をしている。

1886年、清国の北洋艦隊が長崎に寄港した際に起きた「長崎事件（清国水兵暴行事件）」⁷⁹の後の、伊藤博文に対する書簡の中で曾根は「本邦人の清国人を見るは欧米人を見るとは大いに異なり之を牛豚視して軽蔑を加うるを以て、清国人もまた本邦人を軽蔑して仮鬼子と四分に居たり。是れ長崎事件の因起せざる能わざる所以なり」と、両国民間の感情が良くないのは、「我政府は明治維新より近年に至る迄、清国に対するの処置は彼を侮るの心なきも其形あるを免れず」と、政府の清国に対する処置が不当であると批判している。（並木頼寿「明治初期の興亜論と曾根俊虎について」）

曾根は筆禍により海軍省を退役せざるを得なくなり、その後台湾総督府でも一時勤務するが、晩年は1897年には宮崎滔天と陳白を紹介するなどしながら、革命家とのつながりも持っていたとされる。

曾根は、通商や貿易を通して経済面からのアジア提携を志向した。それはアジアの民衆や社会に通暁していた曾根ならではの視点であり、アジア主義を代表するものであろう。「日本人と中国人が力を合わせてことをしよう」という曾根のアジア主義は少年だった宮島に強い印象を与え、宮島もその思想を共有したのではないだろうか。

1.2 勝海舟

宮島大八の『急就篇』シリーズの教本には、勝海舟（1823～1899）の揮毫「盈科而后进，放乎四海」（孟子『离娄下』より。学問も一足とびに高い所に至ろうとせず、順を追って進めるべきである）は、『支那語独習書』を除くすべての教本に入っている。勝海舟は父誠一郎の友人であり、大八も名義上だけにしろ、11歳の時に勝海舟の門下生となっている。晩年の大八に師事した庄司徳治は「追想漫談 詠士宮島先生おぼえ書(1)」(『会報アジアの友』26号 1965年 アジア学生文化協会)のなかで、「先生が10才の時、父に連れられて初めて海舟先生に会われた時のことを話された。その日は偶々海舟邸に先客があり、羽織袴をつけたその客人と話しておられた海舟先生の居間に案内された。海舟先生の先客に対する態度は、鷹揚で慇懃を極めていたのに、先生の父君に対しては全く打ちくつろいだ友人の態度で、その違いに奇異の感をすら抱くほどであった。先客が辞去した後、海舟先

生は栗香先生（注・誠一郎の号）と長く話を続けておられたが、その間に先客の話も出て、当時わずか 10 才にすぎなかった子供の先生に向かって「誰だってそうだろう。大人さんだってそう思うだろう」と、あたかも大人に相談を持ちかける態度で、少しも子供扱いはしなかった。（中略）本当にうれしいことであったと、なんべんも海舟先生の言葉を繰り返して懐かしく語られたことがあった。そうしてその時の先客は榎本武揚であったことも付け加えられた。」と書いている。

勝海舟は幕末・明治の政治家、論客であり、日本の近代海軍の創設者でもある。1860 年、咸臨丸艦長として太平洋を横断した人物であり、戊辰戦争のときは旧幕府側を代表して官軍の西郷隆盛と交渉し江戸城無血開城に導いた。維新後は参議兼海軍卿に任じられ、明治政府の監視役といわれた。勝海舟についてはすでに多くの評論・研究があるので、晩年の宮島親子との関わり、中国に関する評論を中心に紹介する。最晩年の勝海舟を最も頻繁に訪ねたのは宮島父子で、臨終に真っ先に駆けつけたのもこの二人だったという（松浦玲『明治の勝海舟とアジア』P130）。

松浦玲『明治の勝海舟とアジア』では、「日清戦争反対論は、海舟が生涯をかけて煮詰めた政治的判断の、最後のものだった。幕末と明治の両方を生きて、日本とアジアを彼なりにつぶさに見た上で、その人生も終わりに当って日清戦争反対を表明したのである」としている。松浦はさらに、勝が幕末以来の筋の通ったアジア論者であり、東アジア三国の団結で欧米の侵略をはねかえせという原則的立場を維持し続け、清国と対立して欧米の側に身を置くという思想をもたなかったとしている。勝はアジア側に身を置いているので、兄弟喧嘩をして日本が勝っても、イギリスやロシアに乘じられるだけだと事前に注意し、戦後には俺の言うとおりでないかと繰り返し強調したと、勝海舟の対アジア観が揺らがないことを高く評価している。

しかし晩年の勝海舟には日清戦争を止めるだけの政治的な力はなかった。

勝海舟の談話集である『氷川清話』（江藤淳・松浦玲編 2000 年 講談社学術文庫 P209）によると、日清戦争後には「おれは大反対だった」と語っている。「なぜかって、兄弟げんかだもの犬も食わない」と述べ、「欧米人が分からないうちに、日本は支那と組んで商業なり工業なり、鉄道なりやるに限るよ」と経済面からの関係構築を提案している。勝海舟の「日清は兄弟の国」という概念は、宮島大八の教本の例文にも取り上げられているほど、宮島大八の中国に対する考え方の根本となっている。また「日中不戦」も宮島誠一郎と共通した考えである。

松浦玲は、『明治の勝海舟とアジア』の序文で、「明治の海舟に見えているような「アジア」、それをいまどうするかは、もちろん我々現代人の問題である。」とし、その問題に対する手順として明治の海舟を追跡したと述べている。しかし、いま現在も日中関係は明治時代に比べて良好になったとはいえない。勝海舟の後半生の思想は、その後の日本に引き継がれなかったのだろうか。

宮島大八にも勝海舟のアジア観は受け継がれているが、勝海舟と誠一郎が活躍した明治

時代と違い、大八が政治的活動をしたのは大正・昭和初期であり、国際情勢、国内の状況も大きく変化している。宮島の政治活動については後述するが、満蒙独立運動に関わっていた資料が残っている。日中関係についての考え方には、父や勝海舟とは違うベクトルが加わっているように思える。

日清戦争勃発後に帰国した宮島大八は、帰国するとすぐに勝海舟を訪ねている。勝海舟は大八の留学や結婚に際して多額の祝い金等を渡しており、帰国報告は当然だが、それ以上に大八は勝海舟に帰国後の身の振り方を相談したかったのであろう。その結果、大八は漢学と中国語の教育をするように勝海舟から勧められ、自らの意思とも合致したので、詠帰舎を開いた。また、この際には勝海舟も清国の最新情報を大八から聞いたかっと思われる。

日清戦争後、勝海舟は「支那は国家ではない」という意見を再三メディアの取材に対して述べている。「全体、支那を日本と同じように見るのが大間違いだ。日本は立派な国家であるけれども、支那は国家ではない。あれはただ人民の社会だ。政府などどうなっても構わない、自分さえ利益を得れば、それで支那人は満足するのだ」、また別の時には「おそらく支那人は日清戦争のある事さえ知らぬ人があるくらいさ。支那人は昔時から民族として発達したもので、政府というものにまるで重きを置かない人種だよ。」(『氷川清話』P283)という意見を言っている。勝海舟は決して「国家である日本」を高く評価していたのではなく、西欧の社会制度をまねた「国家」日本よりも、自らの文化伝統を手放そうとしない支那を愛し、「たぬきおやじ」の李鴻章を日本の指導者たちより高く評価していた。いっそう東アジア的であるからだろう。日清戦争に勝ったことが日本の道を誤らせると予見していた勝海舟の卓越した中国観は、日本近代を批判し中国型の近代化の優位性を説いた竹内好によって後世に復活したかもしれないが、宮島には受け継がれたのであろうか。日清両国間でのみ活動した宮島大八は、咸臨丸での航海によって日本と清国以外の世界を見た勝のグローバルな視点を持てなかったのかもしれない。

1.3 張裕釗

張裕釗については前章で紹介した。清朝末期を生きた文人である張裕釗は、政治的なきがらみによって、直隸省の保定府にある超一流の学府・蓮池書院から転出せざるを得なくなる。武昌出身でもあり、武昌先生とも親しまれた張裕釗はその武昌の江漢書院も辞し、襄陽の鹿門書院へと移って行く。その際、弟子としては宮島大八一人が張裕釗について襄陽への長旅に付き添った。鹿門書院では師弟二人の学びの日々であった。魚住は『宮島詠士[人と芸術]』(1990年 二玄社 P253)で、「あらゆる権力に屈せず、極度なまでに内向的で人を寄せつけることの少ない張裕釗であったが、日本人の宮島大八だけには心を開き、認めていたのである」としている。一時帰国して再渡清した大八が西安に隠居していた張裕釗のもとに艱難辛苦の末たどり着いた時、(張裕釗は)「子万里之陰途に来る、面顔殊に春色あり、天護厚きに依ると雖も、亦志氣之奮発する所然らしむる也」と大八が誠一郎

への書簡に記している。そして西安で息を引き取った張裕釗の臨終に立ち会ったのは家族のほかには大八一人であったという。

魚住が『宮島詠士[人と芸術]』(P134-135)のなかで、張裕釗『濂亭遺詩』(1895年 黎遵義氏刊)所収の「弧憤」を分析している。それによると、張裕釗は末期を迎えた清朝の頽廢を嘆き、憂慮している。張裕釗の「重修南宮県学記」(1886年)には科挙制度のためだけに学ぶ弊害が限界に達している、科挙の制度が時局にそぐわないため、現実について無知で実践力をもたない官僚を作り出している弊害は大きいと述べており、自らが主講を努める書院もこの風潮を助長している、ということが書かれているという。さらに、魚住は「張裕釗は古文家であり、書法家でありながら、夙に実学の重要性を訴えていた。」とその実学家としての面を高く評価している。

大八は大変高名な書家でもあるが、もともと清国留学前は書を学ぶつもりはなかったようである。大八は蓮池書院で学び始めてから、師の次子・張澹から張裕釗は書家としても一流であるから書も学んだほうがよいと勧められ、書の修業も始めることになった。張裕釗は手本を示すとか添削するということなく、ひたすら学ぶことによって道が開けるといふ指導法であったという。大八は張裕釗が西安に隠居してから、揮毫の場を見たり、碑林で研究したり書法の研さんにも励んだ(魚住和晃『宮島詠士[人と芸術]』 1990年 二玄社 P268)。

大八は1994年の帰国直後「在清留学意見」を記したが、その中で「先生は曾国藩の後を継ぎ、道德文章を以て任となし、超然末俗を脱出してその出处を汚辱する所なし。且つ遠觀達識、良く時運を察し、謙徳を以て身を蔵し、いやしくも名声を避け以て乱世に免れたり」と書いている。大八がただひたすらに尊敬し師事した張裕釗の身の処し方、清廉な生き方は、その後の大八の生き方にも大きく影響を与えた。

1.4 交友関係

宮島は生涯多くの友人と関わっており、それぞれが宮島の思想・中国観に対して何らかの影響を及ぼしたと考えられる。

まず、宮島が長年にわたって交友関係を持ち続けた興亜会支那語学校、東京外国語学校時代の同級生である徳丸作蔵、小田切萬寿之助、大河平隆則、そして東京外国語学校の同級生である川島浪速、長瀬鳳輔、重野紹一郎、1学年上の瀬川淺之進、また瀬川の友人で大学予備門に在学していた松平康国らがいた。

東京外国語学校で中国語を学んだ仲間の多くは外務省に入ったが、小田切萬寿之助、瀬川淺之進も外務省の清国留学生に選ばれ、1883年北京に留学した。小田切萬寿之助は北京留学の後、サンフランシスコ、ニューヨークに書記官として勤務し、1907年杭州領事となって清国に戻り、1903年には上海総領事となる。上海では日清間の通商に力を注いだといわれ、1906年には正金銀行に入行、以降は対支借款事業の最前線に立った。1919年には西園寺公望全權大使の随員としてパリ講和会議に赴いている(黒龍会『東亜先覚志士記伝』

1936年 復刻版 1966年 原書房 P168)。瀬川淺之進については、北京留学の後、広東領事、漢口総領事などを歴任、昭和に入ると外務省の東方文化事業の総務委員として活動したようである。瀬川についての詳しい資料は手に入らなかったが、東京外国語学校時代、1881年前後に、「血合会」という演説・討論の会を結成して寮内で会合を開き、学校側と対立し、同盟放課を企てたりしている（杉山晴康「ある監獄学者の青春」『早稲田法学』1983年 P11-16）。北京留学も小田切のように推薦ではなく、試験を受けて合格して派遣されているのは、そんな活動が原因だろう。宮島にとって生涯の盟友となる松平康国は瀬川の友人として知り合ったというが、松平もあるいは「血合会」に参加していたのかもしれない。宮島自身は「血合会」には参加していないが、瀬川や松平と親しく付き合っていたようである。

外交畑以外に進んだ同級生のうち、長瀬鳳輔は東京外国語学校を卒業後大学予備門に進んだが、翌年渡米レジョン・ホプキンス大学に入学。卒業後はドイツのベルリン大学へ入り欧州近世史を学び、博士号取得。1894年帰国し、山口高等学校教授、陸軍大学校教授を経て東亜同文書院校長となり7年間上海勤務。その後は参謀本部の命により中央アジアやトルコ調査、1907年私塾・国士館の学長に就任した（黒龍会『東亜先覚志士記伝』1936年 復刻版 1966年原書房 P790）。

また、宮島は1913年に「鎮海観音会」を設立したが、それは興亜会の同級生だった徳丸作蔵の遺志を継いだものであった。徳丸は日清戦争の際に陸軍通訳官となり、1897年には外務省通訳官となって北京公使館勤務となった。在任中に義和団の乱が起こり、北京に籠城した際に、北京の古刹の僧からもらった観音像によって病が癒えたことから、観音信仰を篤くした。外務省退職の際、宮島の義兄である上泉徳弥陸軍中將の斡旋によって朝鮮の鎮海に観音堂を建立して義和団の乱の戦死者を弔うことにしたが、徳丸は鎮海で急逝してしまった。宮島はその遺志を継いで観音会で法要や法話会を続けた（黒龍会『東亜先覚志士記伝』P734）。宮島の友情を重んじる、律義さを表すエピソードとなっている。

重野紹一郎についても、個人的な資料はほとんど見つからないが、父の安繹は帝国大学教授の著名な漢学者、歴史家であり、漢文訓読を排する主張を持って興亜会の設立にも参加している。紹一郎は東京外国語学校から上海に渡り梅溪書院で学んだ。その後パリに留学し、のちに東京外国語学校教授となった。バルザックの翻訳、安繹の全集の編纂などの業績がある。宮島大八とは卒業後の接点があまりなかったようだが、大八の清国留学期間には重野も上海にいたことは『宗方小太郎日記』（大里浩秋編「上海歴史研究所所蔵宗方小太郎資料について」『人文学研究報』2004年神奈川大学）に記載されている。また重野は川島浪速とは上海で一緒の下宿に住んでいた（会田勉『川島浪速翁』1997年復刻版 大空社 P31）こともあり、宮島とは川島を通して親交が続いたのかもしれないし、あるいは東京外国語学校で教鞭を執るようになってから再会した可能性も高い。

川島浪速は満蒙独立運動の志士として著名な人物である。その満蒙での活動については第二節で詳しく紹介する。川島は東京外国語学校時代の友人として「団結一致しておった仲間の中

で今残っている人は宮島大八、小田切萬寿之助などである。瀬川淺之進氏などは年上の先輩で乱暴はしなかったが、ごく気の合った親友であった。(中略)長谷川辰之助氏(注・二葉亭四迷)なども気の合うほうであった。(中略)同学ではなかったが、松平康国氏は校外に於ける敬畏すべき唯一の親友であった」「俺の為に畏友として其の感化に俗する事を得た者は、高成田、瀬川、松平の三氏で皆俺より年長であった。長瀬鳳輔とも同窓の仲良しであった」(会田勉『川島浪速翁』P23)としている。川島と宮島は共通の友人が多かった。

川島は東京外国語学校が東京商業学校に吸収された際に、「支那へ渡る心算」と退学し、その後清国へ渡り、上海で重野とともに梅溪書院で学んだ。この時期には、一時帰国後に武昌の張裕釗のもとに戻る途中の宮島が上海で川島を訪ねて漢詩を詠んでいる。その後川島は満州へと向かい、陸軍で通訳を務め、1900年の義和団の乱の際に紫禁城内の明け渡しに奔走して清朝王族からの信頼を得た。川島はその王族の生き残りである「宗社党」を助け、満蒙独立運動を続けた。この運動には、裏で陸軍参謀本部が関わっていたが、1916年に満蒙挙事工作の中止の際には、日本で宮島大八、松平康国、上泉徳弥らが連日のようにロビー活動を行い、川島支援の工作を行っていた。しかし、結局陸軍が満州事変を経て満州国を成立させ、川島はそれに直接に加わることはなかった。溥儀は満州国皇帝に就任した後、川島に感謝し、来日した際は川島邸を訪れた。

松平康国も宮島が長年親交を持った一人である。松平は宮島らが東京外国語学校に在学していた頃は大学予備門で学んでいた。のちに新聞記者などを経て、湖広総督張之洞の政治顧問として清国に渡り、帰国後は川島の満蒙独立運動を宮島とともに後方支援している。漢学と史学を専門として東京専門学校(早稲田大学)の教授として教鞭を執った。また、1921年には東洋文化学会の設立メンバーとなり、大東文化学院創立の中心的存在でもあった。強硬な国粹主義者として知られている。松平は善隣書院設立の際に院長となっており、漢学も教えている。また宮島の墓碑の撰文をしていることから、宮島の生涯の友人であったといえる。

宮島は清国に留学中、1887年秋から1889年春まで約1年半、体調を崩したため北京で療養していた時期があった。大里浩秋編『宗方小太郎日記』からその当時の宮島の様子が浮かび上がってくる。その時期、宮島は宗方とも非常に親しく交際している。宗方小太郎は熊本生まれ、濟々鬢出身、1884年に上海に渡った。1890年には荒尾精の日清貿易研究所に勤務、東亜同文書院の設立に参加した人物である。宗方は上海で大陸浪人として活動していた当時、川島とも知り合い親しくなった(会田勉『川島浪速翁』P32)。

『宗方小太郎日記』の1888年9月17日の記載に初めて宮島が登場する。上海から来た宗方を山口外三とともに北京で迎え、北京城内の六条胡同にあった公館をたびたび訪れている。その記載によると、宮島は北京の日本公使の公使館に住んでいたという。宮島は宗方や山口と食事したり酒を飲んだり、楽善堂について話したり、京劇を見に行ったりと、宗方の日記には三日と空けずに宮島の名が出てくる。しかし、宮島は大陸浪人の集まる楽善堂の活動には参加しておらず、宗方とも友人というだけで、同志という付き合いではなかったようだ。

しかし、楽善堂の傘下にいた大陸浪人・山口外三と宮島は親友だった。山口は、宮島が1887年から北京で療養生活した際に世話を受けた小泉正保大尉の書生だった縁で知り合ったのだろう。山口は小泉の帰国には同行せず、そのまま同仁病院に勤務していた。北京でも毎日のように宮島と連れ立っていたことが、『宗方小太郎日記』からもうかがえる。また宮島は29歳で夭逝した山口を偲んで、「山口は僕にとって又と無い心友であった。時に応じ事に処し最も味わうべき忠言を与えてくれた唯一無二の憐友であった」と語っている。山口は1889年に武昌に戻った宮島を「徒歩で飄然と訪ねてくれた。『君と志を談ずるを楽しみにし千里を遠しとせず山河を跋涉して来た。今後どこまでも志を同じうして邁進しようではないか』と彼がその時語った言葉は、今なお耳底に存している」と、後年語っている（『続対支回顧録』P335-336）。具体的にどのような話をしたのか、どんな「志」を共有したのか、今となっては明らかではないが、宮島の留学先である武昌まで徒歩で訪ねてきた友人は山口一人だったようだ。彼は宮島が本当に心を許したただ一人の友人であったといえよう。

宮島はほかにも次節で紹介するように、いくつかの団体に所属、または設立し、その都度多くの人びとと関わっており、生涯に多くの友人、知人と交わりを持った。

宮島は1916年の満蒙挙事失敗の後、川島らの満蒙独立運動の周辺からはその名が見当たらなくなる。宮島は中国問題の研究会活動はしていたものの、対中硬派とは一線を画したようである。また満州事変以降は表立った活動はしていない。

宮島は生涯にわたり、外交畑の友人とは中国留学の際に旧交を暖め、大陸浪人の友人とはある程度行動を共にしている。宮島は国家主義者といわれているが、その交友関係は広く、同じ主義を持った人びとばかり付き合っていたのではなかった。また次節に述べるように日本人だけでなく中国人とも親しく付き合った。友人とは立場や思想を別にして友情を媒介としてその付き合いを楽しみ、また応援もした。結局は思想家や活動家としてではなく、教育者としての人生を全うした宮島は、友人に影響を受けつつも、最終的には中国語教育、漢学教育という自身の本筋からはずれることはなかったといえる。

第二節 宮島大八の中国観と政治活動

前節で挙げたように、宮島大八は父誠一郎及び興亜会とアジア主義、勝海舟の中国観、張裕釗の漢学と書法に大きな影響を受けつつ、少年・青年時代を過ごした。さらに、善隣書院設立後には政治の表舞台には出ないものの、さまざまな活動も行っていた。ここでは、今まであまり取り上げられることがなかった、大八の中国観を含めた思想や活動について検証を試みたい。

2.1 激動する日中関係の中で

日露戦争後、日本の満蒙経営は1905年のポーツマス条約によって南満州の関東州の租借権を獲得したことから本格化した。ここに駐屯した陸軍が1919年に関東軍として独立した

後、1928年の張作霖爆殺事件、1931年の柳条湖事件（満州事変）、1932年の満州国建国宣言と独走していく。一方、中国国内も激動の時代を迎える。

宮島大八が留学し、学んだ清国は1912年、ついに崩壊した。孫文が東京で結成した中国同盟会が1911年10月10日武昌で蜂起して辛亥革命が始まり、1912年1月には孫文が臨時大総統に就任した。1912年2月には宣統帝溥儀が退位、清朝が滅亡し、続いて3月には袁世凱が臨時大総統に就任した。宮島の少年時代からの親友である川島浪速はこの時期以降、満蒙独立運動を一生の仕事としたのである。

宮島大八の興亜会支那語学校以来の友人である川島浪速は、清朝王家のシンパとして中国大陸で活動していた。川島は1866年（1865年との説もある）松本藩生まれ、維新後家族とともに上京し、東京外国語学校に入り宮島大八らとともに中国語を学んだ。学校が閉校されると、川島は上海に渡り清国を周遊する。1894年の日清戦争の勃発により陸軍通訳官に登用され、戦後は台湾で官職に就く。さらに1899年の北清事変で通訳として北京に行き、連合軍の北京占領後、川島は北京の警察制度改革に着手し、清国に施政権が戻ってからも朝廷の慶親王や李鴻章から慰留され、清国朝廷とのパイプを太くした。特に満州八旗の王家である肅親王ら宗社党とは個人的に親しくなる。しかし、川島が予測していた通り、1911年辛亥革命によって清朝は倒れる。川島は清朝を助けて満蒙を独立させることを決めた。そして、これは日本の陸軍参謀本部の支持を得たのである。

露骨な介入を避けた陸軍参謀本部は水面下の活動に川島を利用した。しかし、第二次西園寺内閣は中国への内政干渉を嫌ったため、川島がリードした1911年の満蒙拳事工作⁸⁰は失敗したが、その後日本国内では対外硬派による日本の覇権を守れという声が高まる。海軍出身の山本権兵衛首相と外務省官僚出身である原敬外相はその政治力を駆使して、国家の利害に関わる対中外交を慎重に進めており、陸軍と対外硬派が結びついた「満蒙切り離し策」を押え込んでいた。しかし、1914年1月に勃発した海軍内の汚職事件であるジーマンス事件により、山本内閣は総辞職に追い込まれ、海軍の外交への影響力も低下した。これに対して対中硬派の第二次大隈内閣が成立し、日本の対中政策はこれ以降、国内強硬派と陸軍参謀本部が主導していくことになる。

日本が第一次世界大戦に参戦していた1915年1月、大戦の混乱に乗じて日本政府は対華21カ条要求を提出、袁世凱政権はそれを受諾した。その後1917年11月の米国が中国での日本の特殊権益を認めた「石井・ランシング協定」⁸¹を経て、日本の中国における権益は拡大し、その結果1919年5月には北京で五・四運動が勃発、反帝国主義運動が始まった。

一方、1919年1月にはパリ講和会議が開かれ、6月にはヴェルサイユ条約が締結されて、その後の世界情勢はしばらく国際協調・軍縮の傾向が続く。しかし、日本経済は1920年の戦後恐慌、1923年の関東大震災に続き、1927年には金融恐慌が勃発、ついに田中義一内閣のもとで満蒙の権益を實力で守ることが決定し、満蒙を本土から切り離す、穏健な地方政権を育成する、排日運動に対する武力干渉などの対中方針が決まった。関東軍による張作霖爆死事件によって田中内閣が辞職すると、浜口雄幸内閣となり、対中政策は民衆運動を

刺激せず、安定した中国市場の確保を目指すという方針に転換したものの、浜口はテロにより引退、1931年の満州事変を政府は収拾できず、そこからは陸軍による満州国建国と五・一五事件、二・二六事件とテロが続き軍部台頭、1937年からの日中戦争へと突き進んでいくのである。

その歴史の波の中で、宮島大八はどのような政治的立場にいたのだろうか。

2.1.1 乙未同志会

佐々博雄「日清戦争後における大陸「志士」集団の活動について」（『国士舘大学文学部人文学会紀要』1994年 国士舘大学 P48）によると、宮島大八の名が見られる乙未同志会は、日清戦争後、1895年に設立された組織である。平時は親睦団体だが、清国やアジアで一旦問題が起きた時には社会の先鞭となって活動するという「志士」的な会であった。日清貿易研究所の卒業生・関係者が会員の半数を占め、漢口楽善堂の関係者や興亜会支那語学校出身者、日清戦争従軍通訳などが参加していた。1898年、会の中心的人物であった宗方小太郎、井出三郎⁸²、白岩龍平らが近衛篤磨に働きかけた結果、「同文会」が設立する。この同文会は、乙未同志会の事業計画をそのまま移行し、上海での学校や図書館、日本での学校、中国での新聞発行、貿易会社や海運会社などの設立を計画したが、最終的には1898年に設立された中国時事問題研究のための東亜会と合併し、東亜同文会となる（会の活動については第一章第二節参照）。

宮島は乙未同志会の名簿に掲載されてはいるものの、同志会から同文会へ移行前後の活動は日清貿易研究所関係者、つまり熊本県人が中心であり、日露戦争後も大陸での活動を展開した「志士」といわれるグループである。井出らはさらに近衛篤磨とともに国民同盟会を結成するなど対外硬派として活動を続けていくが、その活動の場に宮島の名はない。1916年の外務省資料「対支懇談会」⁸³にも井出三郎、頭山満らの名前と団体名が並ぶなか、宮島の名前はない。川島浪速とは連絡を取り続けていた宮島であるが、国内の対外硬派の政治活動とは一線を画していたようである。

2.1.2 一水会

乙未同志会では目立たった活動がなかった宮島であるが、1914年には中国に関する研究会である一水会を立ち上げた。一水会とは、中村義『白岩龍平日記』（1999年 研文出版 P135-136）の解説によれば、毎月第一水曜日に華族会館で開催されたため、一水会と呼ばれたという。会長は侯爵・細川護立、メンバーは宮島をはじめ徳川慶久、伊集院彦吉、浜口雄幸、白岩龍平、秋月左都夫、上泉西吉、柳田国男など44名だった。目的は中国問題の安定をはかり、国家に対してそれを強く働きかけることであった。満川亀太郎⁸⁴は『三国交渉以後』（1935年 1977年復刻版 現代ジャーナリズム出版会 P138）で、「上泉中将の義兄に当る善隣書院院長宮島大八先生は当代一流の支那学の大家として、将又まれに見る士君子として聞こえている。この宮島先生が肝入り役として、今日も猶続いている会に一

水会というのがある。主として支那問題を研究討議する会で、会員には朝野を網羅していた。私は上泉中将や、宮島先生を通じて、一水会の中でも支那問題の中心となっているのが、「共和か復辟か」の問題であることを知った」としている。ここに出てくる海軍中将の上泉徳弥は米沢藩出身で右派として知られ、宮島の姉キクと結婚していた。

一水会に関する資料はほとんどなく、その具体的な活動については不明である。「組織力はあるけれども行動力のきいたプレッシャーグループではないであろう。会場は華族会館で多分まじめな研究会、情報交換の場、サロンというような性格であつたろう。それ故長く継続したのであろう」と中村は『白岩龍平日記』に記している。1933年、1934年の白岩龍平の日記にも一水会に宮島とともに出席したことが明記されている。

宮島が1914年1月に外務省の船津辰一郎宛に出した書簡は、一水会を組織すること、国論喚起、宣統帝保護は国策として必須、という内容であり⁸⁵、一水会はやはり「中国保全」を目標としたものと推察される。「中国保全」とは、中国をヨーロッパ列強による分割から保全する、という骨子ではあったものの、実際的な部分では多様な主張があった。宮島は清朝復辟を目指した「保全」の立場をとったものと推測できる。

1914年当時は中国の第一次世界大戦参戦が問題になっていた。当初、英国、フランス、ロシアが中国の参戦に賛成し、日本と中華民国の黎大総統、国会議員の多数、孫文、中小軍閥などが反対していた。1917年に入ると、米国が強く要求し、また日本は親日軍閥の段祺瑞政権での発言権強化を狙って賛成に転じたため、段祺瑞は米英仏口による政権支持強化、対ドイツ・対オーストリアの不平等条約の改正、義和団賠償金の消滅、租界回収などを狙い参戦を決めた。中国参戦反対を唱えていたという一水会、宮島の目論見は外れた。

一方、宮島の親友である川島浪速は1914年、日本の対独宣戦布告後に「対支意見」を発表した。これは満州に保護国を作り実権を掌握すべし、というものであった。川島の活動を後方支援していた宮島は、この「意見」にも同調していたものと思われる。

1916年、張作霖暗殺が失敗し、袁世凱が急逝、満州では旧清朝派の宗社党が復辟のクーデターを起こそうとしており、川島らの動きが活発化していた。松平康国、海軍中将の上泉徳弥（1865-1945）らかつての東亜同文会・近衛篤磨派が集まって会議を重ね、川島浪速との連動を謀っていた。⁸⁶この中には宮島も入っている。

宮島と川島とのつながりは興亜会支那語学校、東京外国語学校の同級生という以上に深かったらしい。大陸浪人の伊達順之助（1892-1948）は華族の家柄ながら素行が悪く、暴力事件を起こし学校を転々としたが、最終的には宮島が主宰する善隣書院に入り、東洋哲学に目覚め、1916年に善隣書院卒業後は大陸に渡り、川島とともに満蒙独立運動に身を投じた。善隣書院出身者で大陸で活動の場を求めた者は非常に多い。中でも従軍通訳が多いが、伊達のように満蒙独立運動に関わった者も少なくなかった。

宮島の旧友である松平康国も満蒙独立運動に関与していたため、彼も寺内首相に「対支意見書」を出し、第一次世界大戦で列強が戦っている間に満蒙を独立させるように提案し

ている。しかし、1916年10月寺内内閣はロシアとの関係も配慮し、日本政府の対中方針が「内政不干涉」となったため、川島らの活動はその足場を失ってしまった。

1930年の貴族院議員岡部長景の『岡部長景日記』(尚友倶楽部編 1993年 柏書房 P48)によると、「昭和5年12月3日 夜、細川侯に招かれて華族会館に催された一水会に初めて出席した。金山、福田、町田三陸軍大将、森山、上原両海軍中将、植原、田中両大使、白岩、江口、角野、山井、坪上其約二十名列席。往年支那問題で相当議論を戦はした此会も、年齒を経て今や羊の如しとでも評せんか。」とある。1930年といえば満州事変の前夜であるが、宮島の中国に関する政治的活動は少なくとも表面には出ていなかったようである。

2.1.3 老社会

1918年、老社会という研究会が発足した。発起人である満川亀太郎の呼びかけに対し、第一回会合には宮島大八も、上泉徳弥、長瀬鳳輔や大川周明、何盛三らとともに参加した。この老社会は、「一切の年齢、職業、懐旧を遮断する所謂『縦の交際』」をするもので、憂国精神があれば所謂危険思想でも秩序紊乱でも何を発言してもよいという研究会であったという(満川亀太郎『三国干渉以後』1935年 1977年復刻 現代ジャーナリズム出版会 P184)。満川や大川周明をはじめとする後年の国家主義運動の指導者ばかりでなく、堺利彦、高尾平兵衛などの社会主義者、高島素之などの国家社会主義者ほか多彩な人々が参加したことに特色があった。

老社会は1921年ごろまで継続し、その後は国家主義の猶存会や大衆社へと分裂したが、宮島はどちらにも参加していない。

2.1.4 「人種差別撤廃案」

大正時代に入り、日本政府の外交方針が外務省を中心として対米協調へ転換していく中、対中強硬派の活動はしばらく水面下での動きにとどまる。宮島が再び歴史の記録の中に顔を出すのは、1919年のパリ講和会議の国際連盟規約委員会で日本政府が提案した「人種差別撤廃案」である。永田幸久「第一次世界大戦後における戦後構想と外交展開」(『中京大学法学研究論集』23号2003年 中京大学)によると、「人種差別撤廃案が日本政府内において「いつ」・「どこで」・「誰に」よって発案されたのかは、どの先行研究においてもはっきりとした指摘はなされていない。」という。しかし、1943年7月15日付『朝日新聞』に掲載された、外交官河相達夫⁸⁷による宮島の追悼文には「ヴェルサイユ会議におけるわが全権の人種平等案の最初の発案者は先生であった」としている。パリ講和会議の次席全権牧野伸顕⁸⁸(全権は西園寺公望)は、宮島の友人である同全権顧問秋月左都男⁸⁹の義弟にあたる。宮島と秋月は宮島の弟子である寺西秀武⁹⁰を仲介にして仏教によるつながりがあったらしいが、はっきりしていない。牧野伸顕による『回顧録』、『牧野伸顕日記』にも宮島の名は出てこないが、二人の間に書簡のやりとりがあった記録は残っている。⁹¹1922年に財

団法人となった当時の東亜同文会は会長が牧野伸顕、副会長近衛文麿、理事長白岩龍平、宮島は評議員となっており、白岩を介した付き合いであったのかもしれない。

この「人種差別撤廃案」について、1919年1月末には黒龍会などの団体が中心となって人種差別撤廃期成同盟が結成されている。黒龍会は内田良平が主宰する国家主義の政治結社であり、満蒙独立運動に深く関わり、一方、孫文の活動も支援している。1919年2月7日付大阪朝日新聞には「人種的差別撤廃同盟大会」の記事が掲載されている。⁹²そこには「実行委員」として「宮島大八（丙辰会）」の名も掲載されている。しかし、この丙辰会は資料に名前は挙がっているものの、具体的な会の内容は不明である。

この「人種差別撤廃案」は1919年4月、最終的に講和会議において否決された。前出の永田幸久「第一次世界大戦後における戦後構想と外交展開」では、「黄色人種国日本が欧米諸国と国際社会の中で同等の立場に立つことで、他の黄色人種国に対し「アジアのリーダー」としての地位をアピールするという優越感がこの「人種差別撤廃案」を提案する根本的な意図であったということができよう」としている。そして、この案が国際連盟で採用されなかったことによって日本国内で対米協調への不満が高まり、また大国として認められない挫折感「所謂「アジア主義」に裏打ちされた人種論的な対外膨張政策」が盛り上がった結果、日本が中国における膨張主義に突っ走っていったのではないかとしている。宮島の活動は実を結ばなかった。

2.1.5 満州国

1935年4月8日付の朝日新聞朝刊1面には、溥儀が満州国皇帝として来日したニュースがトップ記事で掲載されている。そのなかに、「建国の縁故者廿名に内謁見」として、陸軍関係者とともに、肩書のない頭山満と宮島大八の名前が載っている。さらに、同じときに東京丸の内の山水楼での溥儀と宮島の記念写真も残っている。⁹³

もともと宮島は清朝政府の民政部顧問であったといわれる⁹⁴が、それは確認できていない。溥儀から満州国皇帝の師として迎えたいという申し出があり、宮島がこれを固辞したというエピソードもある。⁹⁵ 溥儀は清朝時代の碩学・張裕釗の弟子である宮島大八に敬意を持っていたのであろうが、満州国建国に宮島が具体的にどのような貢献をしたのかは不明である。ただ、蓮池書院の同門であり、宮島の推薦により1900年から東京外国語学校で教鞭を執った于冲漢（2.1.6参照）が推挙した可能性もある。

さらに、宮島は1936年に秋月左都男らとともに満州国を訪問し、友人の徳丸作蔵の遺志を継いで宮島が発足させた鎮海観音会の活動の一環として、彫刻させた毘沙門天を溥儀に献上した。

宮島は一生を通して官職には就かず、在野の言論人としての立場を貫いた。中国大陸での「南進北進」政策ともに反対だったという。書家の上條信山（1907-1997）が初めて宮島を訪ねたのは1935年だったが、その時の先客は山本五十六大将だったという。上條信山は「宮島詠士先生の人と書」（『書論』第23号 1984年 書論研究会）で、「詠士先生は身をも

って中国を愛し、中国は兄弟の国なのだ、兄弟が相反目するが如きことがあってなるものかと、常に言われていた」、「国士的存在として政財界、軍、教育、中国関係といった広い範囲にわたる要人との交流にいとまがなかったようである」と記している。

2.1.6 中国人との交友

宮島は留学中の交友や学校関係以外にも、さまざまな立場の中国人との交流があり、それぞれとのつきあいから宮島の中国人に対する姿勢が浮き彫りにされてくる。

(1)于冲漢 (1871-1932)。于は1871年遼寧省生まれ、保定府の蓮池書院で主講・呉汝綸のもとで学ぶ。ちなみに張裕釗の後継者が呉汝綸であり、二人とも曾国藩の高弟である。その同門の縁か、1899年日本に留学した于は宮島の紹介で東京外国語学校に1904年まで教師として勤務した。日露戦争勃発後は通訳として諜報活動を行った。民国成立後は張作霖の下で働いたが、1931年満州事変後は関東軍に協力し、参謀本部の石原莞爾 (1889-1949) と非常に親しく、于は「建国の最大の功労者」と絶賛されている。そのため中国では「漢奸」とされている。

(2)馮国璋 (1859-1919)。1916年12月に中華民国副総統である馮国璋が来日し、12月19日付朝日新聞には「馮副総統と談る」という記事がある。そこでは、2年ほど日本にいたことがあり、「当時の友人として宮島大八君と交際していました。その頃健康が優れないと聞いたがその後時々消息を聞くだけで--経過はどうだろうか」と述べている。もともと馮は1885年に保定府の蓮池書院で学んでいたことがあり、宮島とは張裕釗の弟子仲間である。1895年に清国駐日公使・裕庚が来日した際に、張裕釗の次子・張澹が随員として来日し、宮島が同年開いた詠帰舎の一期生である青柳篤恒は宮島に命じられて公使館に一日おきに通い、張澹に古典を教授してもらっていた。青柳は、その時に「隣室に同僚の一紳士あり、時に私を延いて其室に入らしめ、座を給し、茶を点し、隅々漢書を復修し、予修せしめてくれることさえあった。のちの中華民国大総統馮国璋氏即ち此人であったことなども、蓋し奇遇と言えよう」と書いている（「思い出づる支那語研究の懐古」『中国文学』83号）。馮も新聞記事のなかで最後に「当時宮島君の門下に漢文を勉強していた青柳という少年が居た筈だが」と言っており、双方ともに印象深かったようである。宮島は張澹の同僚であり、蓮池書院の同窓でもある馮と親しくしていたものと思われるが、その時以来、二人は顔を合わせていないようだ。馮は1916年袁世凱が死去すると副総統となるが、その後、北洋軍閥は直隸派(馮国璋)・安徽派(段祺瑞)・奉天派(張作霖)に分かれて政争を繰り広げた。

(3)多羅特・升允 (1858-1931) は、蒙古旗人であり、清朝では陝甘総督を務めた。清朝の皇族、忠臣らによる復辟をもくろむ政治結社・宗社党に加わった。1914年に日本に亡命した時に内田康哉外相に依頼されて升允を保護したのが宮島である。財界の知り合いに頼んで升允を援助してもらい、升允が大陸に戻るまで面倒をみたという。さらに升允が清朝復辟運動のために帰国した際には弟子の工藤忠、斉藤源内を随行させた（『統対支回顧録』下P1312）。

(4)張継 (1882-1942)。張も蓮池書院で学んだ。1899年来日、宮島の善隣書院に入った。その後早稲田大学で学び、反清活動に参加して孫文、黄興らと知り合い、中国同盟会に参加するが、民国成立後は反共を唱えて孫文と対立した人物である。満川亀太郎も「宮島先生を訪問したところ、先生曰く、昨夜張継を伴うて歌舞伎座を案内し……」(『三国交渉以後』P138)と記しており、宮島が張の面倒を見ていたことがうかがえる。

ほかにも大勢の中国人とのつきあいがあったと思われるが、資料で迎えたのは上述の四人だけであった。四人とも民国における政治的立場は異なるが、宮島は中国国内での立場は二の次にして積極的にさまざまな人々との交流を行ったことがうかがえる。

2.2 宮島の中国観

現代の視点からとらえれば、宮島の生涯における中国に対する考え方は、いわゆる「親中派」から「対中硬派」「侵略推進派」へと変化したように感じられる。しかし、それには明治維新後の日本における中国認識の変化を投影した面も少なからずあるだろう。

宮島の交友関係からもその思想の変遷を探り、対中観を明確にしたい。

2.2.1 日本人の中国認識の歴史

日本人の中国認識については、松本三之介『近代日本の中国認識』(2011年 以文社)によって通観されている。

明治維新後、中国に対する日本の認識は、「固陋の国」という軽侮の感情、古代聖人の母国という畏敬の感情に加え、清国の軍事力に対する脅威という複雑なものがあつたと松本は指摘する。その中で、日本が文明開化を誇り中国を侮る傾向を戒めたのが、中村正直(1832-1891)などで、中村は英国留学経験を持つ、ミルの『自由論』を翻訳し啓蒙思想家であるが、中国のすぐれた側面を指摘し、中国を侮るような態度をとるべきではないとしている。その後、中村は興亜会の設立メンバーとなった。

さらに、国民主義を唱えた陸羯南(1857-1907)は日本がいたずらに欧化政策に流れる風潮を戒め、自国の固有の文化を尊重し保持する清国に深い敬意をもって接しようとしていた。陸はのちに犬養毅と東亜会を結成し、その後東亜同文会の幹事となる。興亜会のメンバーである重野安繹(1827-1910、宮島大八の友人紹一郎の父)は明治の歴史学者、漢学者として著名な人物だが、1879年には漢文を訓読ではなく中国語の読法による正則にすべきだと提唱した。それは予想される中国との活発な交流に備えて中国語を学び、清国に留学生を派遣して、両国が仲よくなれば日本の国益にもなるからだという理由である。同じく興亜会メンバーの草間時福(1853-1932)も、『朝野新聞』の論説で、欧州一辺倒を改めて中国との関係をより緊密にすべきだという立場を表明した。⁹⁶中村、重野、草間らは日清提携によるヨーロッパ列強のアジア進出阻止をはかることを目指して興亜会へ合流した。

一方、1885年、福沢諭吉は「脱亜論」を発表し、日本は隣国という「悪友を親しむ友は共に悪名を免かる可らず」として、東アジアの文明化を前提とした提携をあきらめたのであった。

さらに松本は『近代日本の中国認識』で、「日清戦争の日本の勝利は、日本の中国認識に対して一つの大きな節目となる意味」があったとし、上述のような興亜主義が後退するきっかけとなったとしている。日清戦争後、中国蔑視が日本国内に蔓延するが、それは当時の中国が国家の形を成していないからであることが基礎にあり、その認識は中国国内の革新的リーダーたちにも共有されていた。しかし、そこから中国人、漢民族そのものへの蔑視に結びついた論説も多くなった。

1898年発足の東亜同文会については第一章でも取り上げた。「支那を保全す、支那の改善を助成す、支那の時事を研究し、実行を期す、国論を喚起す」と決議された東亜同文会の初代会長であった近衛篤磨は、中国人を軽侮して反感を持たれることは先進国としての度量に欠け、対清政策の進行を妨げると、中国蔑視を戒めているが、1900年の義和団事件（北清事変）後、国民同盟会を結成した近衛はヨーロッパ列強との協調と日本の利益確保という立場に軸足を傾けていく。

松本は、日露戦争後に満州での権益を確保した後の日本の対中政策を、「西欧列強の東アジアへの帝国主義的進出に対して中国の独立を確保するという大義を掲げながら、他方では「中国保全」あるいは「大陸経営」の名の下に中国に対して自ら帝国主義的進出を図るという矛盾を内に秘めたまま中国政策を進めることとなります。しかもこの矛盾を矛盾とも自覚することなく、もっぱら「大陸進出」を正当化する根拠としては、中国各地の軍閥勢力の対立紛糾や中国民族の国家形成能力の貧困などを挙げ、さらには日本民族の生存に不可欠な条件として満蒙の特殊権益の確保を主張するという日本の対中政策の姿勢は、まさに「相手を侮蔑する方法」の一つの表現といえるでしょう」（『近代日本の中国認識』）と総括している。

さらに松本は、この日本の対中政策を大正デモクラシー期の日本の知識人である吉野作造、石橋湛山らが非難する論陣を張っていたことを指摘しているが、1932年には満州国建国が宣言され、その後三木清や尾崎秀実らによって提唱された「東亜共同体論」は日中戦争の解決のためのものではあるが、中国における民族主義の問題、日本や西欧帝国主義の問題、そして「ヨーロッパ中心の近代世界ならびに世界史の問題」を取り上げ、「非ヨーロッパとしてのアジア」を内包する新しい世界秩序を目指す面もあるとして評価している。

2.2.2 宮島とアジア主義

では、宮島の中国観は上述の流れのどこに位置していたのであろうか。

漢学を学んだ父とともに、勝海舟や日本に駐在した清国人と交流し、父が設立メンバーであった日清相互理解のための興亜会支那語学校で学び、清朝の文人である張裕釗に学んだ宮島は、自国の日本とともに中国をも愛していた。「兄弟の国」であるとして「日中不戦」

を唱えていた宮島であるが、同時に「清朝復辟」を目指し「中国保全」の立場をとった満蒙独立運動に関わっていた。満州国皇帝溥儀にも謁見している。宮島にとって満州国設立は「不戦」の範疇に入っていなかった。

宮島の中国観について、坂上信八郎は「大陸への出発」（判沢弘編『明治の群像6 アジアへの夢』1970年 三一書房 P65-76）で、『日本』先覚の人びとが追求した日本とアジアは、本来西欧的発想のナショナリズムとインターナショナリズムを超えるものであり、超えることを固有の立場には使命としたはずだ。そこには『連帯』によってもとらえきれず、『侵略』によってもわりきれぬ、何ものかがあるのではないかと指摘している。さらに、宮島を「善隣書院をもって中国語を教育し、両国人の往来の中にあって独特高邁廉潔の風を慕われたことは名高い。面白いことに雲井（注・父誠一郎の盟友である雲井竜雄）はじめ米沢出身の曾根（俊虎）・宮島大八とともに武田（注・範之。孫文のシンパ）と同じく安井息軒の陽明学を学んでいる。大八も他の日本の漢学者、支那学者と同じく、太平天国において湘勇を編成して清朝覆滅を防いだ忠臣といわれる曾国藩の人格を敬慕すること人後に落ちぬが、その敵将として名を轟かした石達開の詩をよく吟じ、書にのこした」として評価している。また、「阿片とキリスト教と近代兵器の法圧下につぎつぎに開港を強いられ、経済的混乱と動揺する清朝の漢民族と内の間からおこって、明治維新の四年前まで十数年の間、『排満』を掲げて独自の国家を創造した太平天国をどのように認識してきたかは、日本自身のバロメーターであり、見識の水準を物語るものだ。武田や宮島大八の血に流れる尊王攘夷と亜細亜経綸、善隣と国粹の間になじみでる奥ゆかしさ、見識の高さというものが、太平天国を自然に流れるように取り扱う、その態度から推察できる」として、アジア主義者の内面の葛藤を解説している。坂上は、孫文による革命運動、朝鮮における民族運動などが、アジア主義者を揺さぶり、満蒙問題に至ってついに侵略側へと立場を変えていくとしており、宮島大八が歩んだ道は、まさに日本のアジア主義者の歴史と重なっているように見える。

宮島に一貫して流れる思想が、興亜会に源流を持つ「アジア主義」であるとすれば、宮島の立脚点の変化もうなずける。興亜会・亜細亜協会が「中国との対等性と日中平和を志向していた」（黒木彬文「興亜会のアジア主義」P650）のに対し、近代日本で最も大きな影響力を長期にわたって維持していた東亜同文会はやはりアジア主義の組織であったが、この組織は日本の中国に対する啓発・指導・介入を志向していた。1898年日本が日清戦争後に帝国主義国家として大陸進出をはじめようとする段階で設立した東亜同文会は、興亜会・亜細亜協会とは性格が異なっていたが、黒木は「人的系譜は繋がっていた。（中略）興亜会の多くの会員が東亜同文会に入会した」「なぜ性格を異にする組織が人的に繋がるのであろうか。おそらく亜細亜協会の指導層の日本観、中国観が変容したからであろう」と「興亜会のアジア主義」のなかで推測している。日本が日清戦争に勝利し、中国への優越感を持つようになった1900年頃から、興亜会の指導層は日中関係を対等ととらえず、中国への

優越感をもつようになったため、興亜会の主要メンバーたちも、指導、干渉、介入を志向する東亜同文会に加入したと黒木は指摘している。

黒木のいう中国との対等提携を目指す「初期アジア主義」は、興亜会発足メンバーの、中国に対し敬意を持って接するという態度にも特徴があり、この点に宮島誠一郎・大八親子に共通する、また変わらない根本がある。しかし、アジア主義が日清戦争以降から満州事変までの「中期アジア主義」へと移り変わると、日本の指導、積極介入という考えが圧倒的になる。もちろん吉野作造や石橋湛山のような反帝国主義を唱える論客もいたのだが、その声は日本国内では大きくなかった。宮島がこの「中期アジア主義」の段階で満蒙独立運動、満州国を支持したことは、三木清が1938年に唱えた「東亜共同体論」に近い考えを持っていたからではないだろうか。三木の「東亜共同体論」は「民族を超えた全体として、その結合の基礎は血というが如き非合理的なものではなく、東洋文化という如きものでなければならぬだろう」として「日本には日本精神があるように、支那には支那精神がある」と中国にも日本と同じようにその独自性を認めるべきことを説いている（松本三之介『近代日本の中国認識』P302）。

清末に張裕釗について漢学を修め、中国伝統文化を非常に敬っていた宮島大八は、まさに「民族を超えた」満州国を作ることで、日中間の戦争を回避し、満州国において両国が提携して新しい国家を作り、西欧列強に対抗するという思想のもとに行動していたのではないだろうか。現に宮島は、明治末期に北米やハワイへの日本からの移民が増え、米国では日本の国際社会での台頭も懸念されて「黄禍論」が盛んになり、日本人移民排斥運動も起きたことから、パリ講和会議で日本政府が提出した「人種差別撤廃案」の起案を手伝っている。永田幸久は「対米協調への反発とは一方いったい何であるかを考えた場合、その要因の一つとして欧米諸国にたいする敵愾心あるいは警戒感があげられよう」としている。そして外務省の対米協調外交方針により、「人種差別撤廃案」は撤回されたことで、永田は「アジア主義的な膨張外交」が高まったとしている。ここで永田はこの撤回による失望感、そして中国や韓国にやける抗日運動の高まりというアジアでの疎外感から、アジア主義は日本がアジアの盟主になるという膨張外交へと転換していったという説を展開している（「第一次世界大戦後における戦後構想と外交展開」『中京大学法学研究論集』23号 2003年 中京大学 P235）。

最近の知見として、政治学者の中島岳志（北海道大学准教授）は、2013年3月29日、朝日新聞の紙面で、アジア主義とは「主権と平等を求め圧政と戦う連帯がもともとの出発点」だったとし、「過去の学び、『思想』としてのアジア主義を抽出できれば、アジアとの向き合い方も見えてくるのではないかと、中国に対しては「ともに思想的アジアを追求しつつ、民主化を支援すべき」だと論じている。アジア主義は日中戦争で消えたわけではなく、今後の日中関係を構築していく上で重要な考え方の一つとなり得る。

明治のアジア主義は日本国内の大陸進出の声に押されて変容した。日清戦争勃発とともに帰国した宮島は、その変容のまっただ中にいた。「中国文化への尊敬」「善隣」「日中不戦」という宮島の根本的な中国観は変化していない。清末民初の大陸の大きな動乱の中で、宮島は自らの「西欧列強から中国を守る」信念を曲げずに行動した。

「独特高邁廉潔」と評された宮島はまた、同時代の人々に「国士」と呼ばれている。「国士」とはどういった人物か。三省堂『大辞林第三版』によると、「身命をなげうって、国事を憂え奔走する人物。憂国の士」と「一国のなかできわめて優れた人物」という二つの解釈がある。宮島は愛する日中両国がヨーロッパ列強の帝国主義に触発され、争うことを憂えていた。宮島の晩年については東亜同文会の『続対支回顧録』（1941年 1973年復刻原書房 P1315）では「時事に感ずるところあって数年前より一切政治に関する言動を絶ち、力を世道人心の扶養に注ぎ……」と記している。日中戦争は宮島にとって不本意な結果であったと推測できる。晩年の宮島は政治活動からは手を引き、教育に最後の力を注いだのである。

一生官界には入らず、あくまで自己の言論の自由を守り抜いた宮島は、善隣書院での教育を通じて中国語と漢学を若い世代に教授し、人材を育成した。それは、1880年に興亜会がアジア諸国の提携のために民間人の交流促進を図るために支那語学校を作ったことにその源流があろう。そしてその興亜会のアジア主義思想は宮島の中国語教育にも映し出されている。

第四章 結論

ここまでの各章で、宮島大八の中国語教育、中国語教本、思想、そして宮島が生きた時代の日本を中心とした中国語教育について、可能な限り多角的に、かつ詳細に考察した。

宮島の中国語教育は、日本の中国語教育の流れのなかで、どのような役割を果たしたのか。先行研究を再度検討した上で本論文の結論を導き出したい。

現在の日本社会や世界情勢は、宮島の時代とは大きく変化している。さらに日中関係も悪化しつつあり、中国語教育のあり方も再検討される時期が到来しているといえる。「グローバル人材の育成」が国を挙げて叫ばれる今日の日本における中国語教育の実態を見つめ直し、今後の教材作成に向けた理論的基盤を構築したい。

1 宮島が果たした役割

宮島の中国語教育は、近代日本の中国語教育においてどのような役割を果たしたのであろうか。宮島が編んだ教本についてその評価、功績、役割をまとめる。

(1) 教本への評価

まず、宮島の大きな功績の一つである中国語教本について、その評価を取り上げる。

『官話急就篇』、『急就篇』で中国語を学んだ多くの先達によって、これまでさまざまな評価がなされている。

① 倉石武四郎による評価

まず倉石武四郎『中国語五十年』（1973年 岩波新書 P11）によると、「（『官話急就篇』）これこそわたくしがいわば本格的にやり始めた最初のテキストです。これはずいぶんふるい本で、編纂者としては宮島大八先生のお名前が出ています。そしてこの本は当時誰でも最初やることになっていたのです。（中略）たしか二週間くらい習って、ほぼこの本一冊覚えてしまったわけです。」として、高校生時代に最初に触れたテキストが『官話急就篇』であるという。さらに、倉石が1918年に東京帝国大学に入学した後、「東京大学での主要な教科書は何かと申しますと、実は『官話急就篇』であったのです。その教科書を東京大学一年生の一年間に、ざっと半分もいかないところまで習いました。それは実に悠々たる講義だったわけです。その講義をしてくださったのが張廷彦先生」と記している。

張は善隣書院や陸軍大学の講師を務め、『官話急就篇』の「附 家庭常語 応酬須知」を執筆者でもある。倉石にとって、『官話急就篇』は暗記して張について発音を習い基礎作りをした入門書だったのである。

しかし、倉石は直接『急就篇』という書名は挙げていないものの、「支那語は、今日生きている語学であるから、日常の会話に重きを置くことは結構であるが、会話の妙味は、かならずしも会話教科書の暗誦のみによっては、理解されないものがある。今日多数の会話教科書は、問答の羅列であって、たまたま時文が暗記した問答にぶつかれば、いつも爽や

かに対応できようが、一たび教科書にない様な問答になったら、たちまち狼狽してしまう。」(同上 P76) と、問答体の教本だけでは、中国語の習得には不十分であると述べている。

② 竹内好による評価

竹内好も 1931 年に東京帝国大学の漢文学科に入り、『急就篇』を使ったとしている。竹内は、その論文「中国語教育について」『中国語学研究会会報』第 36 号 (1955 年 P61) のなかで、彼が中国語を教えた経験から『急就篇』のようなものは非能率的だ。大学生にはダメだ。とてもシンボウできない」としている。しかし、『急就篇』や『官話指南』の類は古くはあつても少なくともデタラメではなかったとも記しており、昭和時代に発行された他の教科書類と比較し、内容の正確さについては評価している。

③ 安藤彦太郎による評価

安藤彦太郎『中国語と近代日本』(1988 年 岩波新書 P8) によると、1934 年に入学した早稲田第一高等学院で宮島の弟子・渡俊治から『急就篇』を 1 年がかりで暗記させられたという。安藤は 1964 年に北京で生活していた際に、『急就篇』そのままの会話ができたこと「古都北京の匂いをにじませた『急就篇』の名著たるゆえんを、このときほど痛感したことはない。」とその内容を評価しているが、1942 年に早稲田大学で中国語を教え始めた際には、『急就篇』を使うようにという指示に背いて『倉石中等支那語』を使って授業をしたということも同著のなかで紹介している。

安藤はまた、『官話指南』、『亜細亜言語集』、『四声聯珠』、『華語萃編』、『官話急就篇』など、「これらの古典的な「問答体」の教科書は、「問」と「答」が別行になっておらず、一見して会話と分かるようなものではなくて、いずれも漢字の連続で、その表情はいかにも素っ気ない。しかし、朗読してみると、中国人との対話の場面が躍如として浮かび上がってくる。戦争中に雨後の筍のごとくに出た、格好はよいが内容の空疎な会話テキストとは同日の談ではない。これらの風格を持った古典的な「問答体」教本は、伝統に生きる旧体制の中国と、その中国に寄せる日本の関心との釣り合った時代の、東の間の平和的均衡のしるしであったともいえるだろう。」(同上 P39) と問答体教科書の内容を高く評価しつつも、「口移しの伝承的教育のなかでは、少数の腕達者な名人は生んだとしても、学校という組織における教育には適合し難い。それに、こういう芸道的な教育のなかでは、異なった発想を有する外国文化として中国を研究する立場は生まれにくい」と、やはり学校教育のなかでは問答体教科書だけでは中国理解にはつながりにくいとしている。

④ 六角恒廣による評価

六角恒廣も安藤と同様に、1937 年に早稲田大学で渡俊治から、『急就篇』を学んでいる。六角は『官話急就篇』について、「テキストとして権威あるものであり、信用のできるものとして」受け入れられたとし、「内容において他の追従をゆるさないものをもっていた」(『近代日本の中国語教育』1961 年 播磨書房 P96) と、名著であると評価しつつも、「全体の語句や文の配列には、あまり難易や文法的考慮がなされておらず、清朝時代の封建中国の世界を映した中国語といえる。そこには現実の活きた中国の姿を伝えたものは見当たらず

ない」(『中国語教育の研究』1988年 東方書店 P221)と、中国語が教育のなかでは「実用本位の会話語学」でしかなかった時代の教本であるとしている。

⑤ 伊地智善継による評価

伊地智善継は、1942年に中国語を教え始めるが、その際に「急就篇の会話教科書を学校では全然使わなかった」と「わたくしと中国語教科書」(1960年 『中国語学』第104号)で、その理由として、「第1、これらのテキストの言語の伝達する内容にがまんができなかったことである。具体的にいえば、その思想は老人的であり、非科学的であり、実利的であり、立身出世的であり、時には非人間的でさえあったのだ。これは私の主観の問題であったかも知れないが……(略)第2、ここに羅列された会話は、多く思想的関連性のない雑然たる単語単文のあつまりであったからである。第3、当時の私は、どのようなテキストも、すぐれた教師がこれを活用すれば有益であるという素朴な教授法観を持っていたのであるが、私にはこの会話的教科書を流暢な中国語を駆使して教育する実力はなかった」と記述している。

⑥ その他

上の①から⑤では、プラス面の評価とマイナス面の評価が同時に指摘されている。しかし一方で、鐘ヶ江信光は「その表現は平明にして雅、日常的にして格調高く、美しい音律を兼ね備えた名著である」(「外語とともに70年」「東京外国語大学百周年」リーフレット1999年 東京外国語大学 P4)と評価しているし、高等師範学校で『急就篇』の授業を受けた牛島徳次は『中国語、その魅力と魔力』(1996年 同学社) P.206で、『支那語』の学習は意外にもむずかしく、困難なことだとはわかったが、これは現代の『支那』の人たちが使っている生きた『ことば』の学習で、『なぞ』解きの『漢文』の学習とは全く趣を異にする、新しい領域への挑戦だった。『支那語』はおもしろい、授業の回数が増すにつれ、わたしは心からそう思えるようになった」と『急就篇』による授業を回顧している。また、近年に至って、王順洪・名和敏光「日本中国語教育的道路」『山梨国際研究』(2006年 山梨県立大学 P25)では“～, 比起当时的其他汉语教材, 语言标准, 内容精炼, 现实感强, 便于携带, 非常合适于初、中级汉语学习的程度的人使用, 因而倍受欢迎。”とネイティブからも高い評価を得ている。

以上、中国語研究者の泰斗による『官話急就篇』、『急就篇』に対する評価である。この教本を使って学んだという先達は多いものの、その教科書としての評価はそれほど多くは残されていない。しかし、中国語教育者、研究者による評価は別として、宮島の教本がベストセラーとなったということは、広範な学習者に支持され、歓迎されたことを意味する。それは、宮島の教本が学習者のニーズに合ったものだったからであろう。

つまり、本稿第二章で検証したように、宮島の『急就篇』シリーズは、① ほかにはないオリジナルコンテンツ ② 新しいカジュアルなデザイン ③ 著者に権威があり内容が信頼できる、という点で、他の編著者の教本との差別化が明確であり、学習者の支持を

得て、版を重ねることができたのである。それを作り上げた宮島は需要を的確にとらえ、センスを発揮するというテキスト編纂者としての非凡な才能を持っていたことは間違いない。

実は、一方で、『急就篇』と同年に刊行された宮越健太郎ら東京外国語学校の教師たちが編纂した『最新支那語教科書』（1933年 外国語学校出版部）に対しては、多くの疑問が出されている。例えば、1941年には竹内好がその論考「支那語教科書について」（『中国文学』76号 1941年 生活社）のなかで、「いったいどうやったら一番デタラメな本が作れるかという実験の見本のようにひどい編纂である」とし、さらに続けて「路に落ちているゴミでも拾うように偶然集められたとしか思えない。お互いになんの脈絡もない。問答の主題がバラバラなだけでなく、あらたまった言葉とくだけた言葉、バカ丁寧な言葉とぞんざいな言葉、古めかしい云い回しとフダン使われる云い回し、含みの多い表現と平明な表現などがアチコチと入り混じっている」と痛烈に批判している。また、太田辰夫は1991年に「私はそこで、宮越健太郎・杉武夫共著『最新支那語教科書』会話篇を使ってもらうことにした。著者は二人とも東京外国語学校の教授で、この教科書はなんども版を重ねた権威あるものなのである。ところが読んでいくうちに、その先生（注・留学生）はぞくぞくと教科書の誤りを指摘する。……私はあきれるほかなかった。」（『わが華語の師』『トンシュエ』創刊号 1991年）と記している。

さらに、巴金は1935年にこんなエッセイを発表している。タイトルは“支那語”（1935年1月20日《太白》第一卷第九期）

“一个朋友要教我他中国话，这并不是什么苦事。然而因为课本的缘故，这却成了难忍的苦刑。

我手边有的尽这是岛国里的“支那语”界的名著。号称“支那语界的三权威”的宫越健太郎，杉武夫，清水元助三位在这岛国里没有匹敌的。但是给我受罪的正是这三权威的杰作。

朋友读的“支那语”教科书的《会话篇》，是宫越氏和杉氏两人合编的，出版期是去年三月，已经销到了八九版了。但附录《惯用语应用会话》里面还装满了前清的老话，什么点翰林，放知府哪，这样的话题到处都是；假如那两位作者不是别有居心，就是糊涂到连世界也看不清楚了罢。此外还有许多中国人嘴里说不出来的话，现在要我来读这样的书，说这样的话，这实在是一件难堪的事，所以我好几次向朋友表示这书编得不行，但他只是含糊地答应着，好像不相信我的话似的。在他看来那是两位大权威，而我只是一个中国学生，我的话大概不可靠。日本人的精神就在这一点。这从许多地方可以看出来。

“支那语界”的权威在中国话的课本里夹用了不少满洲的口音，土话，材料。而同样教科书的《时文篇》（宫越，清水两氏合编）里竟堂皇地选入了法令，外交部宣言，声明书，时评等等，若不看内容谁也想不到这些全是伪满洲国政府组织法，伪满洲国外交部宣言，伪满洲国报纸的时评，以及溥仪的即位诏书。这又是一种障眼法罢。更奇怪的是杉氏编的教科书的《作文篇》里会有“我爱满洲国好像爱我的身体一般”的话。这是从日本人的嘴说出来的。

杉氏在他的《最新支那語講座》开讲辞里说过：“……这样以共存共荣的对华政策却白白招来排日打倒帝国主义的喊声作报酬。”这意义不是很明显的吗？

权威们的努力是很可佩服的；但是做了中国人而来读这种奇怪的中国文和中国话，落进了这样恶运的我也该是值得怜悯的罢。”

（友人に中国語を教えてほしいと言われた。とりわけ大変なことでもない。しかし、教科書には多いに悩まされた。

手元にあるのはすべてこの島国の「支那語」の名著である。「支那語界の三権威」と称する宮越健太郎、杉武夫、清水元助の三人はこの国では匹敵するものはない存在だ。しかし、私を悩ませたのもまさにこの三権威による傑作なのだ。

友人が学んでいる『支那語教科書』の「会話篇」は宮越氏と杉氏の共著であり、昨年3月に出版されたもので、すでに8、9刷を重ねている。しかし、附録である『慣用語応用会話』の中には清朝の古い会話が詰まっており、翰林に抜擢するだの、知府に任命するだのといった話がいたるところに出てくる。著者の二人に含むところがないのであれば、世界のこともよく分からないほどぼけているのだろう。このほかにも中国人の口からは出てこないような言葉もあり、私はこの本を読むことも、そんな言葉を話すことも、とても堪え難いことなので、友人に何度もこの本はだめだと言ったが、友人はあいまいな返事をするだけで、私の話を信じていないようだ。彼にとって著者の二人は大権威であり、私は中国人学生にすぎず、私の言うことは信頼できないのだろう。日本人の精神はこの一点にある。これは多くの場所で見るとることができる。

「支那語界」の権威は中国語の教科書の中に多くの満州の発音、方言、材料を入れている。また同教科書の「時文篇」（宮越、清水氏共著）にはこともあろうに堂々と法令、外交部宣言、声明書、評論などを採用しているが、内容を見なければこれら全部が偽満州国政府の法律であり、偽満州国外交部の宣言であり、偽満州国の新聞の評論、溥儀の即位詔書であるとは思ってもよらないことだ。これもまた一種の人の目をくらます法だろう。さらに奇っ怪なことに、杉氏の教科書「作文篇」には「私は私の身体とおなじように満州国を愛しています」とあり、これは日本人の口から出てきたものだ。杉氏は自身の『最新支那語講座』の前書きの中で、「……このような共存共榮の対華政策はむざむざ反日帝国主義打倒の叫びを招き報酬とした」、この意味は明らかだ。

先生方の努力は敬服すべきだが、中国人としてこの種の奇っ怪な中国語文と中国語を読むという悪運に落ち込んだ自分もまた憐れんでもらうに値する。〔巴金「病中集」1989 巴金全集 12 人民文学出版社 P471 訳は筆者〕

巴金の『急就篇』に対する感想は示されていないのだが、竹内のように、古くはあってもデタラメではない、という評価を下したのではないだろうか。井上翠は、『松濤自述』で、1903、4年ころ宮島が張廷彦の家によく訪ねてきて談話をしていたと書いており、実際に『官話急就篇』「問答之下」(58)の“這是誰的像篇兒啊。 我們一家子的。……”という問

答はその際に張廷彦の家族の写真を見ながらの会話であったという。宮島の採用した問答は、ネイティブとの会話から生まれたものであり、ネイティブの校閲によって正確さを保証したものであるといえる。それが長く広範に使われた理由の一つでもある。

とはいえ、一方で『急就篇』は、研究者、教育者からは、主に「中国の今の現実の姿を伝えていない」という点、「単語や問答の配列が教育的配慮に基づいていない」という点の2点において、批判されている。確かに宮島は1894年に帰国してから、1936年まで中国に足を踏み入れておらず、中国が激動した歴史的現場には身を置いていない。魯迅らの文学運動による白話小説などについても取り上げてはいない。竹内のいう「楽善堂以来の行商中国語」という評価は正鵠を射ていると言えるのだろうか。

その批判に対し、本論文では視点を変えることで、二つの面で宮島の教本は優れていると評価できると結論付けたい。

まずは、「古い」と批判される内容面についてだが、樽沢彰夫はその論考「一九三〇年代の中国語教育への視点」(1992年『中国文学研究』第18期 早稲田大学)のなかで、「新『知識階級』の中国人留学生からみれば、日本の中国語テキストは旧来の言葉の詰まった陳腐な中国語の蓄積、と映った」とし、「非知識階級」の一般民衆が使う「旧来の言葉」によるテキストは、彼らとのコミュニケーションを支えたから『急就篇』は名著だとしている。

果たして当時の中国の話し言葉は、一握りのインテリ層と圧倒的多数非インテリ層との間にそれほど大きな違いがあったのかどうか、ここで証明することはできない。しかし、また、逆に「中国の今の現実」を知っていたのも、また当時の日本の一部インテリ層にすぎなかったのではないだろうか。宮島が中国での大きな時代の動きを知らなかったはずはない。しかし、それは日本の多くの初学者には必要のない知識と判断したのではないか。歴史から見て、結果的にその判断は誤ったものだったかもしれない。しかし、その判断そのものがテキスト編纂者としての宮島の価値基準によるものであること自体は非難の対象とはなり得ない。

倉石武四郎『支那語教育の理論と実際』(1941年 岩波書店 P76)では、「支那人の文章は、たとえ口語体でも、相当に簡潔を尚ぶため、単に会話教科書だけの知識では、到底翻訳できるものではない」、「語学力とは、目にのみ頼るものでもなく、耳にのみ頼るものでもない、書物とは、現代の文学のみではなく、今古さまざまの色美しき園の花である。古典のみを知って、近代を知らぬものと、近代のみを知って、古典を知らぬものとは、ともに不具者たることを免れない。」としている。

宮島の『急就篇』には、会話とともに初歩的なものではあるが故事や古典も採用されている。宮島が清国留学によって現地で習得したものは交流のための官話であり、また張鈞について学んだ経学・古典である。同時代の漢学者のなかでも、中国で、中国語によっ

て古典を学んだ者は宮島しかいない。清国に派遣された留学生も多いが、それは官話を学ぶためであり、そのなかで古典まで学びえたかどうかは疑問である。古典と官話の双方に通暁した宮島が当代きっての中国語教育者であり、また中国通であったことは間違いない。その宮島が、官話での問答と故事を同時に一冊の教本で紹介したことに意義がある。

宮島の教本は、大正末期に東京外国語学校の神谷衡平らに古くさいと批判され、神谷らは『標準中華国語教科書』などを世に問う。これらのテキストは日常会話中心の実用語学以上に、中国文化を伝える口語文学をも採用する画期的なものであったと評価された。しかし、果たして倉石のいう「古今さまざまの色美しき園の花」があったといえるだろうか。

中国文化は五千年余も命脈を保ち、その蓄積は膨大であり、それはどの時代でも、たとえ現代の中国においてでも、その社会の根底に生き生きと脈づいている。中国語文化の精華である古典を学ばなければ、いくら新しい文学を知っていても片手落ちではないか、そう考えて宮島は教本を編纂したのではないかと推察できる。

そして、批判にあるように『急就篇』は、交際のための問答が多く、昭和の日本社会の対中姿勢とは必ずしも一致していない。しかし、日清戦争後から日本社会に生まれる中国蔑視、中国人蔑視の世相におもねることなく、相手を尊敬する中国語表現を使った宮島の姿勢は評価に値する。それは、宮島自身による『急就篇総譯』（1934年）に掲載されている「古い」ながらも美しさを感じさせる日本語の会話（例：問答上 80 御宅では皆様御機嫌宜しう御座いますか。 御蔭で皆無事です。）と、宮島が採用した中国語（例：問答上 80 您府上都好啊。 托福都好。）とが対応していることからもうかがえる。

もう一つは構成面である。配列がばらばらで教育的配慮がないと批判されているが、宮島の教本は、易から難へと進み、単語を暗記、問答もまた暗誦し、さらに教師が説明を加える、という宮島が理想とする一連の初級クラスの授業の過程を実施するための教本となっていると思われる。宮島の教本は基本的に「口授」教育のためのものであり、「背=暗誦」を前提にしたものである。説明は一切ない。重念以外の発音も記されていない。つまり、教師に十分な実力がなければ教えることができない教科書なのである。

潘芸梅 “宮島大八及其《急就篇》”《对外汉语研究》（2009年 上海師範大学 中国期刊全文数据库）では『急就篇』が日本の中国語教育の停頓を招いたとしつつも、“宮島将[背诵法]对广至全国各地，为战后[直接法]教学在日本的诞生奠定了坚实的基础”「宮島の暗誦法が全国に広がり、戦後の直接法による教授法の誕生に確固たる基礎を築いた」としている。

内田慶市「中国語教育の歴史と現状」（1990年 関西大学『研究センター報』 P99）でも「中国の外国語教育が何故あそこまで「運用能力」に優れた学習者を養成できるのかを考えると、それは「ひたすら暗記、暗誦」という方法にあるように思われる。この方式はかつての中国語教育で行われた方法そのものではないか。そして、何よりも、最終的に問われるのは、そこに書かれている中国語そのものであり、教える人であろう」としてお

り、いつの時代でも「暗記・暗誦」が有効な語学習得法だということは間違いない。宮島は自らが興亜会支那語学校、東京外国語学校、そして清国留学を通じて会得した「背=暗誦」の効用を十分に理解しており、そのための教科書を編纂したのである。

以上のことから、『急就篇』は宮島の中国語教育に対する姿勢を体現している教本だといえる。現代の日本の中国語教育は理論研究も進み、すでに宮島のような経験主義的教育法は見られなくなっているが、また経験主義的すぎると『急就篇』を批判した 1950 年代の論考もまた、現在では一方的すぎる感がある。また、『急就篇』を学んだ人たち、特に善隣書院で学んだ人たちが多く日本の中国侵略のため大陸に渡り官民で活動する結果となったことは確かだが、当時の国内状況からみれば、教本や宮島の教育にだけその責任を負わせることはできない。なぜなら中国語教育はその時代の国策に翻弄されてきたからである。

(2) 宮島の中国語教育の役割

宮島の中国語教育は近代日本において、どのような役割を担ったのであろうか。

宮島が中国語教育者として生きた近代日本。近代とはどんな時代か。歴史学者である加藤祐三は『東アジアの近代』（ビジュアル版世界の歴史 17 1985 年 講談社）の序文で、「(近代とは) 富も人口も一挙に増加した、激しい変化の時代である。時間のテンポも早まった。世界各地で戦争と革命が起き、「弱肉強食」の抗争と競争が支配した荒々しい時代でもある」と、「近代化」が現在でも文脈のなかでしばしばプラスのイメージで出現するのに対し、マイナスの面を直視すべきだとしている。

近代という時代は、アジア諸国と西欧列強との戦いで幕を開けるが、日清戦争以降、アジアでの戦争には日本が必ず一方の側にいるようになったという点からも、日清戦争での勝利が日本人の対中感と日本の対中政策を大きく転換させた感は否めない。つまり、宮島が 7 年間の清国留学から帰国した 1894 年、日本は帝国主義国家として本格的に歩き始めたのである。宮島は幕末に生まれ、アジア主義者の父の薫陶を得た明治初期の少年時代、尊敬する師のもとで学んだ中国での青年時代、帰国後に日本が中国進出政策に転じて以降の教師としての中年時代、そして晩年には満州国建国と、日中関係が大きく変わる節目をその目で見ながら一人の教育者として生きた。

宮島は、父誠一郎と勝海舟と同様、「中国文化への尊敬」「善隣」「日中不戦」を貫いた。また、宮島が生涯、公の職に就かず、東京帝国大学、東京外国語学校でも講師のままであったことは、彼の「在野精神」の表れである。それは、師である張裕釗が清朝末期、その政治や国家を憂いながらも隠士として生きたことにも少なからず影響されていたのではないだろうか。そのことは、宮島が書家として名高い存在であったにもかかわらず積極的に弟子をとることもなく、弟子に手本を与えたり教えたりすることもなく、時事的な談話をするだけだったという上条信山の思い出（魚住和晃『宮島詠士[人と芸術]』1990 年「序」）にも通じるところがある。まさにそれが張裕釗の教育だったからである。

第三章第二節で見てきたように、宮島の思想は、近代の日本、近代の日中関係のなかでは、社会に十分に浸透することはなく、最終的には中国語教育の場、そして「国土」としてアドバイザー的な存在としての活動に終始した。また、「日中間で戦争はしてはいけない」とつねづね語っていたという宮島は、尊敬する張裕釗の師である曾国藩が仕えた清朝の末裔である溥儀に謁見し、満州国を訪ねている。宮島にとって、満州国は「善隣」の象徴であったと思われる。満州国建国に至る日本の対中侵略は宮島のなかで、彼の対中思想とは矛盾していなかった。

明治から昭和にかけての中国語教育を竹内好が「行商支那語」と「兵隊支那語」としてのことに対し、安藤彦太郎は『近代日本と中国語』（1988年 岩波新書 P16）のなかで、「興亜」という面もあったとして反論している。まさに宮島はそういった中国語教育を行った一人だといえる。

魚返善雄（1908～1966）は、日中戦争のさなかの1942年に発表した「支那語界・回顧と展望」（『中国文学』第83号 生活社）で、支那語は大陸進出と結び付けられており、それは現実の支那に即応する国策的な方途である、と当時の中国語教育のあり方に疑義を投げ掛けている。そして、支那語は言語学的な研究が進まないことを遺憾だとし、「支那の国語学者たちの高邁真摯な態度も学ばれてよい。流離と困窮のさ中にありながら、假寓する土地の方言を最新鋭の方法によって記録する彼等の努力は尊いものである」と中国の研究者たちに思いを馳せている。そして、「支那語学というものは、実用的、教育的、漢(支那)語学的、言語学的のそれぞれの面があって、四面は均しく研磨を要するものである。(中略)一応はその全般に通じ、更に翻って各自の長ずる所に従い一面に集中するというのが、真にこの学問を時代に活かす所以と考える」と、早くも戦後の中国語研究を見通している。

戦争中に冷静な論を展開した魚返善雄は東亜同文書院の出身であり、安藤彦太郎の「中国語教師の類型」によれば、中国語教師の「支那語派」のうちの「文化派」の典型だという。文化派とは新文学に魅かれた文学派と科学的中国語学の研究を目指す言語学派があるが、「国土」というのにはインテリジェンスを身に付けすぎた人たちだとして、安藤は、「数カ国語に精通し、はなばなしい活躍をした才人」と、魚返を高く評価している。戦争中の、このような若き研究者の出現が戦後の中国語研究発展につながっていくのである。まさに宮島大八の晩年に中国語界に登場した魚返善雄は、一見すると宮島とは正反対の科学的研究を提唱した学者ではあるが、彼の主張からは、宮島の中国、中国人への共感の部分の遺伝子を受け継いだと思える個所も少なくない。そしてその遺伝子こそが、中国語教育において今後も長く受け継がれていくべきものであろう。

宮島は、清国留学の結果、中国語そのものと、中国語で学んだ漢学という二つの大きな収穫を得た。日本語の読み下しである「漢文」ではなく、中国語で古典を学んだことは、宮島の教育者としての価値を高めた。しかし、彼は官職につくことを潔しとせず、民間の学校で全人教育を行い続けた。通訳養成のために設立された東京外国語学校で行われた中

国語、そこから巣立った教師たちによる中国語を大陸進出のツールとする中国語教育とは異なる、高邁で廉潔と称された宮島の中国語教育は、アジア主義に同調する人びとを引きつけたであろう。それは、清国留学で師とした張裕釗が政治の動きに巻き込まれ、その任地を転々としたことにも影響を受けたに違いない。張裕釗の清廉な生き方、学問に身を捧げ、弟子に全人教育を施すその姿勢に、宮島はその教育者としての基盤を見出し、その師の身の処し方と同様、隠士として表舞台に出ることなく、教育者としてその一生を全うしたのである。

歴史的な帰結として、日中戦争は長期にわたって続き、両国にとって不幸な歴史が生まれてしまった。しかし、そのなかで宮島による民間教育は中国を見つめ、中国との関係を考えながら中国語を学ぶという、中国語教育の基礎を守りつづけたことにその価値が見いだせる。

2 今後の中国語教育

本論文では宮島の中国語教育、中国語教本を分析し、その意義を考察した。宮島の中国語教育が行われたのは、日中が対立を深めていく時代であった。現在の日中関係もまた、国交正常化当時の熱が失われ、外交面では対立し、市民同士の感情も悪化、戦争の勃発を危惧する声さえ上がっている。そのような状況のなかで、中国語教育はどのような方向に進むべきかを考えたい。

まず、日中間の相互認識のなかでの中国語教育について考える。第三章では近代日本の知識人の中国認識の変化を概観したが、では、現在の一般の日本人の中国観は、宮島の生きた時代とはどう変化したのだろうか。雑誌『外交』（15号 2013年外務省）の特集「日中和解 40年目の岐路」で劉傑（早稲田大学社会科学部総合芸術学院教授）が「逆戻りする対中イメージ」として、1920～30年代の日本における「国際社会のルールを守らない」という中国のイメージが、現在再び広がっているという点に注目すべき、としている。劉は「歴史認識が中国人の対日イメージを決定づけているのに対し、現代中国をめぐるさまざまな情報が日本人の中国認識に影響を及ぼしている」と、双方の認識にずれが生じていることが問題だという。「間違っているのは相手で、自分は正しいとの考えが強まると、寛容さの働く余地が減る。優越感や相手への侮蔑意識も入り込みやすくなる。30年代の歴史が教えるのは、そうした構図では衝突が起こりやすいということです」（『朝日新聞』東京版夕刊 2012年11月13日）と、現在の日本人の対中認識に警鐘を鳴らしている。

歴史学者である加藤祐三は、前出『東アジアの歴史』のなかで、「限られた世代的、個人的体験だけを根拠に歴史を読むことはできない。歴史の感覚こそ、他の生物にない人類だけの能力であり、強大な破壊力を生み出してしまった人類の歯止めの役割を果たす」と、歴史を学ぶ意義を述べている。

では、昔の轍を踏み日中間に衝突が起こる事態を回避するため、その相互認識のずれを

克服しなければならないとすれば、それはどのような方法によるべきか。

その問題に対し、識者による多くの提言がなされている。例えば、真の民間交流の拡大、両国メディアの報道のあり方の再検討、歴史の誤解を改める、青少年への歴史教育など、さまざまな立場から具体的な提案がある。しかし、中国語教育という、対中認識を育成する第一線の現場から際立った提言はこれまでなされていない。わずかに民間団体である国際文化フォーラムにより『外国語学習のめやす 2012』⁹⁷として高校における中国語と韓国語教育の指導の指針が作成・発行されたにとどまる。

近代の中国語教育は官からの要請に応えるところから始まり、官民の教育機関から多くの人材を輩出したものの、結果的には日中戦争を防ぎ得ず、それゆえに現在の日中関係に歴史認識問題、教科書問題という遺恨をも残してしまった。

大平正芳（1910-1980）は外相時代（1972-1974）に日中国交正常化交渉に携わり、在中国日本語研修センター、通称「大平学校」を設立、日中間の掛け橋となる人材育成に力を注いだ。大平は座右の銘として「山上有山山幾層 波間無道道縦横」をよく口にしていたという。日中関係も山また山、そして荒波の中で道がないようでも実は縦横に道がある、ということだろう。現在のように日中関係が悪化しているなかでも、必ず良い方向に開ける道はあるに違いない。

今、私たちは過去の中国語教育の良い面にも反省点にも学ぶことが必要だ。そして中国語教育を通して相互理解を促進させる必要性をアピールし、日中間の相互認識のずれを修正すべく、社会に向けてメッセージを発信しつづけるべきではないだろうか。

次に、現在の「グローバル化」のなかで、中国語教育の立脚する位置についても再検討を行い明確化していく必要がある。

2000年1月に出された「21世紀日本の構想」懇談会⁹⁸の報告書には、日本と韓国、中国との関係は、「単に外交という名で呼ぶには足りない」、「外向的な努力だけでは掴みきれないものをすくいとり、深みのある関係を築く営みが必要である」と「隣交」の概念が打ち出された。そして、「日本人がこれらの隣国の民族の歴史、伝統、言語、文化を十分に理解することが求められる。そのためには学校教育において両国の歴史と日本との関係史、とりわけ現代史を教える時間を充実させるとともに、韓国語や中国語の語学教育を飛躍的に拡大するのが望ましい」と提言した。

一方、2012年11月にインターネット上で行われた「英語以外であなたが勉強したいと思っている外国語は何ですか」というアンケートの結果、624人から回答があり、「中国語」が21%で第1位（第2位は韓国語19%、第3位はフランス語17%）となり、1位であった。しかし、2011年のアンケート結果に比べると、同じ1位ではあるが、2011年の38%より大きく減少した。これは領土問題、反日デモなどの影響だと見られている。⁹⁹

アンケートの結果を見ると、報告書から13年たった現在、中国語学習意欲はやや下降つつあるものの、まだ優位にある。しかし、教育現場において、「21世紀日本の構想」報

告による提言が生かされているとは言い難い。どちらかといえば、逆の方向の力が働いているのが現状ではないだろうか。第二外国語の必修単位が削減される傾向、つまり英語を大学の生き残りのキーワードとしてとらえる大学が増えていることがその例である。中国語教育については、その時々の日中関係や政治的思惑にはとらわれない、一貫した、長期的な教育政策が採用されることが望ましい。

しかし、近年打ち出しされている文科省の「グローバル人材育成」に関して言えば、これは「英会話や IT 能力に優れ、海外でも技術革新を生み出せる」といった人材を想定している。日本社会で「グローバル化」といえば、イコール英語というのが一般的な通念となってきた。

グローバル=英語ではないということは、中国語教育に携わる人間であれば誰でも体感している。しかし、上述した『外国語学習のめやす』にも「1 外国語を学ぶ意義」として「グローバル人材としての素質・能力を育む」とある。これは高校生に求めるべきものかという点で疑問が残るし、まず「グローバル人材とはなにか」という点が経団連のアンケートに基づいて解釈されていることも問題だ。

「グローバル人材育成」とは、明治維新直後に外務省が太政官宛に提出した「通弁養成」の伺書とそれほど内容が変わっていない。すなわち「国益を国際社会で守れる人材」である。その方向に向かって教育が行われれば、再び過去の過ちを繰り返す危険性がある。国境なき世界、グローバル社会で生き抜いていく人材を育成するということは、国益を超えて、よりよい、平和な世界をつくるためだという大前提を貫くことが肝要であろう。

本論文の目的は、宮島大八の中国語教育を近代の歴史のなかで再検証し、新しい視点で再評価することである。

本論文では、宮島の教育、教材を研究することを通じて、近代の歴史、当時の政治・社会状況をはじめ、さまざまな要因のなかで揺れ動く中国語教育を通観した。宮島はその激動する日中関係のなかで、中国を愛する心、中国人への共感を持ち続け、その精神を十分に反映させた教材を編纂し、さらに善隣書院で中国語と漢学の教育を行ってきた。彼は東京外国語学校の出身ではあるが、そこから輩出した多く教師たちとは一線を画し、公職につくことを拒み、功名をあげることとは無縁な、高邁で廉潔な全人教育を行った。中国語教育界ではあくまで在野にあって独自の立場を守り続け、自由に自らの理想とする教育を行った。門人は二千名を超え、人材輩出という面でも日本の近代の中国語教育界における宮島の功績は非常に大きい。

しかし、彼の思想の根源にあるアジア主義は、歴史の表層においては中国侵略という負の側面も持つ結果となった。国家主義者として一時は満蒙独立運動など清朝復辟を目論んだ運動にも積極的に加わったが、満州事変以降は張裕釗の如く「脱俗を大切にし」（上条信山/魚住和晃『宮島詠士[人と芸術]』1990年 二玄社 序文）つつ、隠棲しつつ教育を続けたが、同時に 1935 年には山本五十六海軍大将が自宅を訪ねて来た記録があるなど、依然

として中国通のアドバイザーとして確固たる立場を保っていた。結果として、日本は日中両国にとって不幸な戦争へと突き進んだ。宮島が勝海舟や父から受け継いだ「日中不戦」という信念は実を結ばなかった。この面からは宮島の教育は結果的にはその目標を達成できなかったともいえよう。

宮島の中国語教育を再検証した結果、明治時代も現在も、中国語教育に携わるということが、日中関係の再構築に向けての人材育成という面で重い役割を担っている点においては変わらないということを確認できた。

現代の日本における中国語教育においても、まずその役割の自覚を持つことが必要であろう。一時的な政治的局面、外交関係がどうであれ、教育の場においては広く深い相互理解を進めるために努力すべきである。そのために何をすべきか、過去を検証し、未来志向の教育を推進すべく、教育目標、カリキュラムやテキストの内容を精査していかなければならない。さらにその結果を生かしつつ、狭い専門分野にとどまることなく社会にネットワークを広げ、常に未来への視座を持ち続ける中国語教育が、今まさに求められている。

<脚注>

- 1 李鴻章（1823-1901）安徽省出身。太平天国の乱に出兵、曾国藩の幕僚となり、のちに直隸総督、北洋大臣。下関条約を締結、義和団事件には全権となる。
- 2 国立公文書館 「外務省記録」 JACAR:B06151018600
- 3 国立公文書館 「外務省記録」 JACAR:B12081865200
- 4 明治維新政府の官庁名。各省を管轄する機関で、1885年に廃止された。
- 5 国立公文書館 「外務省記録」 JACAR:B12081865200
- 6 同上
- 7 林睦朗『長崎唐通事』（2000年 吉川弘文館）P3～P6
- 8 奥村佳代子『江戸時代の唐話に関する基礎研究』（2007年 関西大学出版部）P5
- 9 瀬戸口律子『琉球官話課本の研究』（2011年 榕樹書院）P15～23
- 10 中嶋幹起「唐通事の担った初期中国語教育」『東京外国語大学史』（1999年）P870
- 11 村松梢風「鄭先生の事」『秋山定輔は語る』（1938年 大日本雄弁会講談社）P107～132
- 12 中田敬義（1858-1943）金沢出身、漢語学所を経て北京公使館に留学。1876年外務省入省。ロンドン公使館勤務を経て榎本武揚、陸奥宗光の秘書官として日清講和会議などで通訳。のちに実業界に転じた。著書に『伊蘇普諭言』。
- 13 中嶋幹起「唐通事の担った初期中国語教育」『東京外国語大学史』（1999年 東京外国語大学）P883
- 14 国立公文書館 「外務省記録」 JACAR:B12081865200
- 15 同上
- 16 同上
- 17 同上
- 18 JACAR(アジア歴史資料センター) Ref. A07062166800 「文部省第十二年報」
- 19 JACAR(アジア歴史資料センター) Ref. B12081910600 「外務省記録」
- 20 JACAR(アジア歴史資料センター) Ref. B03030242200 「外務省記録/日清交際史提要」

- ²¹ JACAR(アジア歴史資料センター) Ref. A03020392100 「勅令第三百三十六号・高等師範学校附属音楽学校及高等商業学校附属外国語学校改称」
- ²² 中村正直(1832-1891) 江戸の同心の家生まれる。昌平坂学問所に学び、英国に留学。1882年大蔵省入りし、1887年に同心社設立。東京女子師範学校校長、東京帝国大学教授を務める。訳書に『西国立志篇』、『自由之理』など。明六社の主要メンバー。
- ²³ 大河内輝声(てるな)(1848-1882) 元高崎藩主。漢学的教養による中国文化愛好者で、日本に赴任した清国公使・何如璋や公使館員との交流の記録が『大河内文書 明治日中文化人の交遊』(さねとうけいしゅう編訳 1964年 平凡社 「東洋文庫18」)として残っている。
- ²⁴ 『興亜公報』第1輯 (1880年 興亜会) P15-17
- ²⁵ 『興亜会假規則 附学費規則』 (発行年不明 興亜会)
- ²⁶ 『興亜会報告』第4集 (1880年5月 興亜会) P19-21
- ²⁷ 『興亜会報告』第6集 (1880年6月 興亜会) P20-23
- ²⁸ 岸田吟香(1833-1905) 岡山県出身。大阪で漢学を学び、江戸に出た後にへボンに目薬の処方教わり、へボンとともに上海に行き『和英語林集成』を印刷出版。のちに楽善堂を設立。同文会の設立にも関わる。
- ²⁹ 明治時代前期に九州地方の民権派が合同して作った地方政党(1882~1885)。「改進黨」を称しているものの政治的には改進黨ではなく自由党の系列。
- ³⁰ 宮崎滔天(1871-1922) 熊本県出身。孫文の革命を支えた革命家、浪曲師。著書に『三十三年の夢』。
- ³¹ 鈴木擇郎(1898-1981) 東亜同文書院34期卒業後、教授を経て、戦後は愛知大学教授。1933年に東亜同文書院の華語研究部で華日辞典の編纂を始め、語彙カード140万枚を作成。終戦で中国側にカードを接収されるが、交渉の末1954年に返還された。1967年に鈴木が編纂委員長を務めた『中日大辞典』初版刊行。
- ³² 坂本一郎(1903-1996) 東亜同文書院出身、同校で1945年まで教師を務めた後、神戸市外国語大学、関西大学教授。
- ³³ 佐藤晴彦 「坂本一郎先生②」 『中国語の環』 83号 (2012年1月 中国語検定協会) P4
- ³⁴ 黄遵憲(1848-1905) 広東省梅県生まれの挙人で、清末を代表する詩人でもある。約4年間日本に滞在し、政府要人との折衝や情報収集に奔走。日清間には琉球処分や李氏朝鮮をめぐる懸案事項があった。シンガポール総領事を経て上海で梁啓超と知り合い、戊戌変法を支持。光緒帝に直接変法を説く。戊戌政変で失脚、日本で親交のあった伊藤博文によって救われ、郷里に帰り教育者として一生を終える。著書に『日本国志』、『日本雑事詩』。
- ³⁵ 魚住和晃『宮島詠士[人と芸術]』(1990年 二玄社) P82
- ³⁶ 『大宋重修広韻』、1008年、勅令を受けて陳彭年らによって編纂された韻書。『切韻』(601年)を増訂した。19万1690字が収められている。
- ³⁷ 儒学の経典、易・書・詩・礼・楽・春秋の6種類(六経)の研究を指す。
- ³⁸ 魚住和晃『宮島詠士[人と芸術]』(1990年 二玄社) P174
- ³⁹ 教育機関を統括する行政機関である国子監の下級学官。
- ⁴⁰ 清代古文の一派で、また最大の文学流派名。安徽省桐城県出身の方苞が基礎をつくり、継承者の劉大櫟、姚鼐(だい)がいずれも同県出身のためにこの名がある。明代の唐宋派の系譜に立ち、宋学の学統を守る(道の文学)を目指して文章の(義法)、すなわち内面的理法と外形的法則の調和を説き、簡潔で質実な文章を書いた。
- ⁴¹ 魚住和晃『宮島詠士[人と芸術]』(1990年 二玄社) P101
- ⁴² 清朝の地方長官名。直隸省、河南省、山東省の総督であり、地方の総督の中では筆頭格。1870年からは外国貿易港の監督も直隸総督の管轄となったため、北洋通商大臣を

兼任するようになり、その後は外交も管轄。

- ⁴³ 現在、北京市昌平区の小湯山温泉。清朝宮廷の湯治場だったという。
- ⁴⁴ 張之洞(1837-1909)、直隸(河北省)出身。「中体西用」を説く洋務派官僚。曾国藩、李鴻章、左宗棠とならんで、「四大名臣」とも称される。
- ⁴⁵ 魚住和晃『宮島詠士[人と芸術]』(1990年 二玄社) P262
- ⁴⁶ 東亜同文会、中島真雄編『対支回顧録列伝』(1968年 原書房 復刻原本 1936年) P1470
- ⁴⁷ 竹添進一郎(1842-1917) 天草出身。幕末、維新期に熊本藩のために上京、奔走するなかで勝海舟と親交を結ぶ。森有礼とともに渡清。1884年の朝鮮で公使として甲申政変で清軍に敗北して失脚、1885年に東京大学の漢文学の教授となる。琉球処分問題でも李鴻章との交渉を行う。宮島誠一郎による勝海舟の墓碑撰文に加筆している。著書に中国大陸旅行記の『棧雲峽雨日記並詩草』。
- ⁴⁸ 「東京大学文学部の歴史」<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/schema/history.html?page=1>
- ⁴⁹ 金井保三(1871-1917) 長野県出身。清国に留学後、東京帝国大学、早稲田大学、哲学館(のちの東洋大学)などで教鞭を執り、中国語と日本語を教える。著作に『日本俗語文典』(1901年)
- ⁵⁰ 長屋順耳『東京外国語学校沿革』(1932年 東京外国語学校) P108
- ⁵¹ 田中慶太郎(1880-1951) 京都の江戸時代から漢籍を扱う書店に生まれる。京都商業学校を経て1898年東京外国語学校清語科特別科に入学、1900年卒業。1901年、東京・本郷に文求堂を開く。出版人として多くの中国語関係書籍を刊行すると同時に、自身も漢学者であり、古典を自身で校訂して出版したものも多い。郭沫若の日本での友人としても知られている。
- ⁵² 岡本正文(生没年不明) 愛媛県出身、1900年東京外国語学校卒業後、同校の助教授となる。著書『支那声音字彙』(1902年 文求堂)は日本初のウェード式ローマ字による字典。
- ⁵³ 井上翠(1875-1957) 姫路生まれ。中国語学者。東京外国語学校に学び、1907年北京に留学。1922年、大阪外国語学校教授。『井上ポケット支那語辞典』(1935年 文求堂)など辞書を多数編纂。
- ⁵⁴ 宮越健太郎(1885-1962) 新潟県生まれ。1905年に東京外国語学校を繰り上げ卒業し、日露戦争の従軍通訳を経て1906年から同校講師、のちに教授。教科書執筆、ラジオ講座などで活躍し、大正から戦前の中国語教育界の大御所である。
- ⁵⁵ 神谷衡平(1883-1958) 東京出身。1905年に東京外国語学校清語科卒業、ドイツ語、蒙古語も学び1912年から清語科講師、善隣書院の講師も務めた。北京留学を経て1920年東京外国語学校教授。『標準中華国語教科書 初級編』などの教科書を編纂している。
- ⁵⁶ 金丸邦三「東京外国語学校から東京外国語大学へ」『東京外国語大学百年史』(1999年 東京外国語大学) P924
- ⁵⁷ 1862年、恭親王によって設立された中国初の外国語学校。
- ⁵⁸ 尾花清編著『大東文化学院創立過程基本資料』(2005年 大東文化大学人文研究所) P338
- ⁵⁹ 大東文化大学『五十年史』(1973年 大東文化学園) P170
- ⁶⁰ 白岩龍平(1870-1942) 岡山県出身。明治～昭和前期の実業家。荒尾精に師事、日清貿易研究所卒業。
- ⁶¹ 東京外国語学校『東京外国語学校沿革』(1918年 東京外国語学校) P58
- ⁶² 長瀬鳳輔(1865-1926) 岡山県生まれ。1880年東京外国語学校漢語科入学。卒業後、米国、ドイツに留学、1894年帰国、山口高等学校教授、陸軍大学校、東亜同文書院院長を歴任。帰国後国士館大学初代学長。
- ⁶³ 長谷川雄太郎(1865-1904) 群馬県生まれ。漢学を学ぶ。1888年上海に渡り、岸田吟香の上海楽善堂で活動し、1894年参謀本部に入り日清戦争で従軍通訳。1897年～1903年、広州同文館で日本語を教える。1901年には善隣書院から『日語入門』を刊行。

- ⁶⁴ JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B12082040500、在本邦外国学校関係雑件 (B-3-10-2-53) (外務省外交史料館)
- ⁶⁵ JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B05015891500、研究助成関係雑件／出版助成関係雑件 第二卷(B-H-06-02-00-04-00-00-02) (外務省外交史料館)
- ⁶⁶ JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B05015874200、研究助成関係雑件／出版助成関係雑件 第五卷(B-H-06-02-00-04-00-00-05) (外務省外交史料館)
- ⁶⁷ 島田胤則の生年没年は不明。長崎の人。中井えり子 2007「『官許佛和辞典』と岡田好樹をめぐって」によると、島田胤則は長崎唐通事の出身で、長崎奉行による英語学校で何礼之の指導により英語を学び、後に教師になった。明治維新後は外務省に入り、1884年から北京公使館の書記官となる。
- ⁶⁸ 小幡篤次郎(1843-1905)大分県出身の教育者、思想家。漢学から英学に転じ、福沢諭吉と『学問のすゝめ』(1892)を共著。慶応義塾塾長(1897-1901)
- ⁶⁹ 西島良爾(1870-1923)静岡県出身。上海の日清貿易研究所で学び、日清戦争に通訳として従軍、その後は台湾総督府に勤務。1899年に大阪控訴院・大阪地方裁判所の通訳官となり、大阪清語学校を設立。日露戦争で再び従軍、帰国後は神戸地方裁判所の通訳官となり、神戸在住時代には『日華新報』という日中両国語の新聞を発行し、孫文との交流があった。編纂した教本は『清語会話案内』(1900年 青木嵩山堂)、『清語教科書』(1901年 石塚猪男発行)、『和文対訳支那時文集』(1901年 青木嵩山堂)『清語読本』(1901年 石塚猪男発行)など多数。
- ⁷⁰ 1933年に出た『急就篇』は表紙や中表紙には「急就篇」となっているが、奥付には「改訂急就篇」と印字されているため、これを「改訂急就篇」として取り上げている研究もあるが、六角恒廣、安藤彦太郎、那須清らの先行研究では「急就篇」という書名としているため、本論文もそれにならって「急就篇」とする。『改訂急就篇』は1964年に善隣書院から刊行されており、それと区別するためでもある。
- ⁷¹ 2007年、中国語教育学会学力基準プロジェクト委員会編。初級段階 240時間で習得すべき語彙・文法を示している。
- ⁷² 姚偉嘉「《官話急就篇》《急就篇》詞彙比較研究」2013年6月 日本中国語学会関東支部例会発表
- ⁷³ 何如璋(1838-1891)広東省大埔出身の進士、外交官、高名な文人。1977年から初代駐日公使。清仏戦争で失脚、のちに李鴻章の招きで広東省潮州の韓山書院の主講となった。著書に『使東述略』。
- ⁷⁴ 第三章 第三節 3.2.1 参照
- ⁷⁵ 黒木彬文「興亜会のアジア主義」『法政研究』71(4) (2005年九州大学) P623
- ⁷⁶ 黎庶昌(1837-1897)貴州省出身。曾国藩の属僚となり、桐城派の文章を学び、張裕釗・呉汝綸・薛福成とともに「曾門四弟子」の一人に数えられた。英国、フランス、ドイツ、日本などに駐在し、さらに出使日本大臣。その在任中《古逸叢書》を刊行。
- ⁷⁷ 明治初期の立法院。1871年に正院、右院とともに設置され、1875年元老院設置に伴い廃止された。
- ⁷⁸ 1874年創刊の民権派の日刊新聞。1893年廃刊。
- ⁷⁹ 1886年8月1日、清国の北洋艦隊が長崎に寄港した際、勝手に上陸し金品の強奪や暴行を働き多くの死傷者を出した。事件後、清は日本側に謝罪せず、高圧的な態度に出た。この事件の2年前に発生した甲申政変でも日本は清に敗退しており、当時の日清の力関係は清が優位に立っていた。この事件は1884年(明治17年)の甲申政変と併せて日本国内の反清感情を刺激し、後の日清戦争を引き起こす遠因の一つとなったといわれる。

- ⁸⁰ 清朝の王族を旗印にして満蒙独立と日本の勢力拡大を目論んだ挙兵計画。
- ⁸¹ 1917年11月2日、アメリカ・ワシントンで日本の特命全権大使・石井菊次郎と国務長官ロバート・ランシングとの間で締結された、中国での特殊権益に関する協定。ワシントン体制への道に通じる対米協調政策の結果。
- ⁸² 井出三郎(1862～1931)、熊本出身。濟々鬢に学び、宗方小太郎の親友で、行動を共にする。
- ⁸³ JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B03030272500、支那政見雑纂 第二卷(B-1-1-2-152)(外務省外交史料館)」
- ⁸⁴ 満川亀太郎(1888-1936) 大阪出身。早稲田大学、東京外国語大学卒業後、新聞記者などを経て1919年大川周明とともに猶存社結成、民族主義的国家改造を唱えた活動家。
- ⁸⁵ 「宮島誠一郎関係文書(追加) 目録」国立国会図書館憲政資料室 No. 2217
- ⁸⁶ 波多野勝『満蒙独立運動』(2001年 PHP新書) P185
- ⁸⁷ 河相達夫(1889-1966) 広島県出身の外交官。外務省情報部長など中国に関わった。
- ⁸⁸ 牧野伸顕(1861-1949) 薩摩藩出身、大久保利通の次男、米国留学を経て外交官。西園寺公望の信望が厚い英米協調派、自由主義者で昭和天皇も牧野を信頼し、退官後も意見を聞いていたという。
- ⁸⁹ 秋月左都男(1858-1945) 宮崎出身の外交官。パリ講和会議の全権顧問。
- ⁹⁰ 寺西秀武(1869-1951) 金沢出身の軍人、東亜同文書院出身。宮島に師事した。陸軍参謀本部退役後は、張作霖や段祺瑞の軍事顧問を務めた。
- ⁹¹ 『宮島誠一郎関係文書(追加) 目録』国立国会図書館憲政資料室 No. 2275-2277
- ⁹² 神戸大学電子図書館システム 新聞記事文庫 外交 (22-109)
- ⁹³ 魚住和晃『宮島詠士[人と芸術] (1990年 二玄社) P14
- ⁹⁴ 波多野勝『満蒙独立運動』(2001年 PHP新書) P78
- ⁹⁵ 魚住和晃『宮島詠士[人と芸術] (1990年 二玄社) P15
- ⁹⁶ 松本三之介『近代日本の中国認識』(2011年 以文社) P71
- ⁹⁷ 『外国語学習のめやす 2012 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』2012年 公益財団法人国際文化フォーラム
- ⁹⁸ 1999年3月、21世紀における日本のあるべき姿を検討することを目的に、小淵恵三首相のもとに設立された懇談会、座長は河合隼雄氏。
- ⁹⁹ 株式会社イーコミュニケーション調べ
<http://bizmakoto.jp/makoto/articles/1211/26/news055.html>

<参考文献>

<一次資料・教本類>

- 宮島大八 『官話輯要』 哲学書院 1897年
『支那語独習書』 善隣書院 1890年
『支那語速成 兵事会話』 善隣書院 1900年
「支那語学校講義録一～七号」 善隣書院 1901年
『官話篇』 善隣書院 1903年
『官話急就篇』 初版 善隣書院 1904年
『官話急就篇』 増訂四版 善隣書院 1906年
「支那語講義録一～十二号」 善隣書院 1915年
『支那語会話篇』 善隣書院 1921年
『急就篇』 善隣書院 1933年
『急就篇総譯』 善隣書院 1934年
大橋末彦 『官話急就篇詳譯』 (文求堂) 1917年
内田重治郎 『急就篇を基礎とせる支那語独習』 (大阪屋書店) 1924年
廣部精 『亜細亞言語集』 東京書林 1879年
呉啓太・鄭永邦 『官話指南』 1881年
鄭永邦 『生財大道』 1887年
東亜同文書院 『華語萃編 初集』 東亜同文書院 1914年
宮越健太郎 内之宮金城 『最新支那語教科書 読本篇』 外語学院出版部 1936年

<宮島大八関係>

- 魚住和晃 『宮島詠士[人と芸術]』 二玄社 1990年
書論編集室 『書論 第23号 特集 宮島詠士』 書論研究会 1984年
『中国文学第83号』 生活社 1942年

<中国語教育関係>

- 井上翠 『松濤自述』 大阪外国語大学中国語研究会 1950年
牛島徳次 『中国語、その魅力と魔力』 同学社 1996年
『回光返照一命のきらめき』 同学社 1998年
内田慶一 「中国語教育の歴史と現状」 『研究センター報』 関西大学
1990年
王順洪・名和敏光 「日本中国語教育的道路」 『山梨国際研究』 山梨県立大学
2006年

- 王順洪 〈日本明治时期的汉语教师〉《汉语学习》延边大学 2003 年
2 月第 1 期 P75 2003 年
- 何盛三 『北京官話文法』 太平洋書房 1928 年
- 金丸邦三 「東京外国語学校から東京外国語大学へ」『東京外国語大学
史』1999 年
- 倉石武四郎 『支那語教育の理論と實際』 岩波書店 1941 年
『中国語五十年』 岩波書店 1973 年
- 国際文化フォーラム 『外国語学習のめやす 2012』 公益財団法人国際文化フォー
ラム 2012 年
- 張美蘭 《明治日本時期漢語教科書彙刊》（全 26 卷）広西師範大学
出版社 2011 年
- 同学社編集部 『トンシュエ綜輯号』（同学社）2004 年
- 中嶋幹起 「唐通事の担った初期中国語教育-南京官話から北京官話
へ」『東京外国語大学史』東京外国語大学 1999 年
- 長屋順耳 『東京外国語学校沿革・第二編』東京外国語学校 1932 年
- 潘艺梅 〈宮島大八及其《急就篇》〉《对外汉语研究》上海师范大学
2009 年
- 藤井省三 『東京外語支那語部 交流と侵略のはざままで』 朝日新聞社
1992 年
- 藤本一勇 『ヒューマニティーズ 外国語学』 岩波書店 2009 年
- 鱒澤彰夫 「1930 年代の中国語教育への視点」『中国文学研究』18 号
早稲田大学 1993 年
- 李无未 〈日本明治时期北京官话教科书研究的基本问题〉《吉林师范
大学学报》2007 年 2 月第 1 期 2007 年
- 板垣友子 「官話急就篇の言語について」『外国語学研究 13 号』
大東文化大学 2012 年
「中国語教本『官話急就篇』と『急就篇』における語
彙の変化(単語)」『外国語学研究 14 号』大東文化大学
2013 年
「中国語教本『官話急就篇』の初版と増訂版の比較」
『中国言語文化研究』第 2 号 大東文化大学
2013 年
「中国語教本『官話急就篇』と『急就篇』の比較—「問
答」の語彙変化」『中国語教育第 11 号』中国語教育学
会 2013 年

<近代漢語関係>

- 内田慶一 『文化交渉学と言語接触』 関西大学出版部 2010年
太田辰夫 「近代漢語」 『中国語学新辞典』 光生館 1969年
「北京語の文法特點」 『中国語文論集』 1964年 (汲古書院 1995年復刻)
倉石武四郎 『岩波中国語辞典』 岩波書店 1963年
張美蘭 「文法と語彙から見た 19世紀の域外漢語教材の官話の様相」 『19世紀中国語の諸相』 雄松堂出版 2007年
中国語学研究会 『中国語学新辞典』 光生館 1964年
巴金 “支那語” 「病中集」 《巴金全集 12》 人民文学出版社 1935年 1989年復刻
姚偉嘉 「《官話急就篇》《急就篇》語彙比較研究」 日本中国語学会関東支部会発表 2013年
梁淑珉 〈清末民初时期的时间表现使用情况考察〉 《清代民國漢語研究》 学古房(韓国) 2011年

<近代史関係>

- アーネスト・サトー 『アーネスト・サトー公使日記』 新人物往来社 1989年
会田勉 『川島浪速翁』 復刻版 大空社 1997年
大里浩秋編 『宗方小太郎日記』 「上海歴史研究所所蔵宗方小太郎資料について」 『人文学研究報』 神奈川大学 2004年
勝海舟 『氷川清話』 江藤淳・松浦玲編 講談社学術文庫 2000年
加藤祐三 『東アジアの近代』 <ビジュアル版世界の歴史 17> 講談社 1985年
『外交』 編集委員会 「日中和解 40周年目の岐路」 『外交 15号』 外務省 2012年
河原宏・藤井昇三 『日中関係史の基礎知識--現代中国を知るために-』 有斐閣 1974年
黒木彬文 「興亜会のアジア主義」 『法政研究 71(4)』 九州大学 2005年
黒龍会 『東亜先覚志士記伝』 1936年 復刻版原書房 1966年
小林惟司 『犬養毅--党派に殉ぜず、国家に殉ず』 ミネルヴァ書房 2009年

- 佐藤茂教 「興亜会創設者曾根俊虎の基礎的研究」 『研究紀要 18』
聖徳大学 1985 年
- さねとうけいしゅう 『東洋文庫 18 大河内文書 明治日中文化人の交遊』 平凡
社 1964 年
- 鹿野政直 『近代日本思想案内』 岩波文庫別冊 14 岩波書店 1999
年
- 佐々博雄 「清仏戦争と上海東洋学館の設立」 『国士舘大学文学部
人文学会紀要第 12 号』 1980 年
「日清戦争後における大陸「志士」集団の活動について」 『国
士舘大学文学部人文学会紀要第 27 号』 国士舘大学 1994
年
- 思想の科学研究会 『共同研究/ 明治維新』 徳間書店 1967 年
- 尚友倶楽部 『岡部長景日記』 柏書房 1993 年
- 杉山晴康 「ある監獄学者の青春」 『早稲田法学』 早稲田大学 1983
年
- 大東文化大学記念誌編纂委
員会 『大東文化大学五十年史』 大東文化大学 1973 年
- 竹内実 『日中国交文献集』 蒼蒼社 2005 年
- 竹内好 『中国を知るために』 勁草書房 1967 年
『中国を知るために 第二集』 勁草書房 1970 年
『方法としてのアジア わが戦前・戦中・戦後 1935-1976』
創樹社 1978 年
- 東亜同文会 『対支回顧録』 『続対支回顧録』 1941 年 原書房 1973 年
- 中田幸久 「第一次世界大戦後における戦後構想と外交展開」 『中京大
学法学研究論集』 23 号 中京大学 2003 年
- 中島誠 『アジア主義の光芒』 現代書館 2001 年
- 中村義 『白岩龍平日記』 研文出版 1999 年
- 並木頼寿 「明治初期の興亜論と曾根俊虎について」 『中国研究月報
47』 (社)中国研究所 1993 年
- 波多野勝 『満蒙独立運動』 PHP 新書 2001 年
『新詳日本史』 浜島書店 2006 年
- 判沢弘編 『明治の群像 6 アジアへの夢』 三一書房 1970 年
- 牧野伸顕 『回顧録Ⅲ』 文芸春秋新社 1949 年
- 松浦玲 『明治の勝海舟とアジア』 岩波書店 1987 年

- 松本三之助 『近代日本の中国認識 徳川期儒学から東亜共同体まで』以
文社 2011年
- 松本健一 『竹内好「日本のアジア主義」精読』 岩波書店 2000年
- 満川亀太郎 『三国交渉以後』1935年 現代ジャーナリズム出版会 1977
年
- 輿那覇潤 『翻訳の政治学 近代東アジアの形成と日琉関係の変容』
岩波書店 2009年

<資料>

- 『興亜会假規則 附学簣規則』（発行年不明 興亜会）
- 国立公文書館 「外務省記録」 JACAR:B06151018600
- 国立公文書館 「外務省記録」 JACAR:B12081865200
- 国立公文書館 「外務省記録」 JACAR:B12081865200
- 国立公文書館 「外務省記録」 JACAR:B12081865200
- JACAR(アジア歴史資料センター) Ref. A07062166800 「文部省第十二年報」
- JACAR(アジア歴史資料センター) Ref. B12081910600 「外務省記録」
- JACAR(アジア歴史資料センター) Ref. B03030242200 「外務省記録/日清交際史提要」
- JACAR(アジア歴史資料センター) Ref. A03020392100 「勅令第百三十六号」
- JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. A10112569200、叙勲裁可書・明治三十六年・叙勲巻六
- ACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B12082040500、在本邦外国学校関係雑件
- JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B05015891500、研究助成関係雑件／出版助成関係雑件
6
- JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B05015874200、研究助成関係雑件／出版助成関係雑件
5
- JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B03030272500、支那政見雑纂 第二巻
- 「東京大学文学部の歴史」 <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/schema/history.html?page=1>
- 「宮島誠一郎関係文書（追加）目録」 国立国会図書館憲政資料館